

# 史跡 齋宮跡

平成9年度発掘調査概報



1999

齋宮歴史博物館



第 119 次調査 航空写真

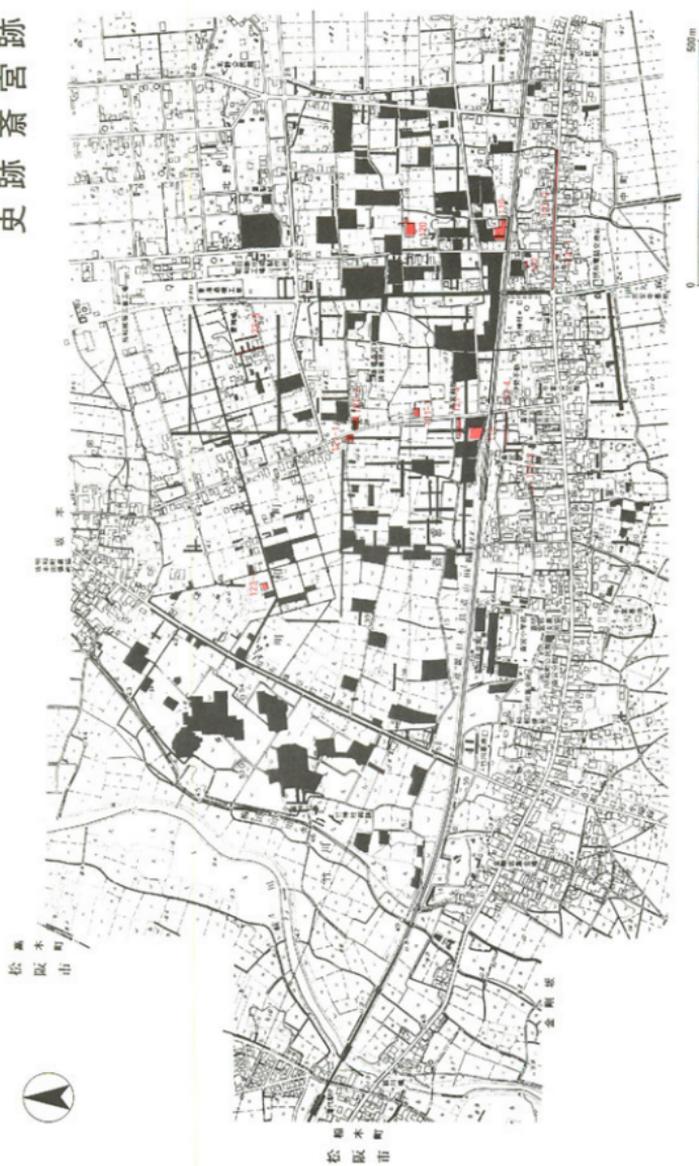


第 118 次調査 S X 7860 出土状況復元



第 118 次調査 S X 7860 出土と同開珎

# 史跡斎宮跡



第1図 平成9年度発掘調査位置図(1:10,000)

## はじめに

齋宮跡は、律令制下において太政官と並ぶ神祇官のもとに設置された齋王の宮殿及び齋宮寮の役所の跡であります。齋宮跡の保護顕彰は江戸時代に遡ります、昭和45年の団地造成計画に端を発した発掘調査により、宮殿の解明と保存対策が問題となりました。地元との協議を経て、昭和54年3月に国の史跡の指定を受け、発掘調査をはじめ、土地の公有化、整備事業等の保護活用事業を国の補助金等を受け、三重県及び明和町で積極的に取り組んでいます。

発掘調査は、既に四半世紀を過ぎ、史跡の東部において平城京、長岡京、平安京の都城制に通じる方格地割が確認されています。近年は、その中枢部の調査を精力的に実施しており、平成9年度調査を行った第119次調査は、齋宮跡の内院地区と想定される地区での調査であり、これまでの齋宮跡の調査で確認された南北に庇をもつ最大級の大型掘立柱建物を確認するとともに、奈良時代後期から平安時代前期にかけての鍵形に配置された建物群の変遷を認めることができ多大な成果をおさめました。しかし、当初予想していました、この地区を二重に取り囲む構列の内郭構列が調査区内で確認されず課題を残しております。

第120次調査は、この内院地区北側ブロック北東隅部で実施し、地割を区画する側溝、道路を確認するとともに、この方形区画内における建物配置の一部を確認することができました。

また、第118次調査は、齋宮駅北側の第95次と第99次調査区に挟まれた地区で実施し、方格地割北西隅部における遺構変遷を明らかにすることができました。

一方、整備・活用の面では、平成8年度から着手しました「遺構の活用・演出的整備ゾーン」計画地区において、文化庁の地方拠点史跡等総合整備事業に採択され、事業名も「齋宮跡古代ロマン再生事業」から「齋宮跡歴史ロマン再生事業」に変更し、事業を推進しております。今年度は、新たに設置します「齋宮跡体験学習施設（仮称）」の建築に先立ち、敷地造成及び平成8年度に実施しました西辺の区画外周道路の舗装等を行いました。

この度刊行させていただく本概報は、平成9年度に実施いたしました齋宮跡の計画調査及び整備事業に伴う事前調査の成果の概要をまとめたものであり、これまでの膨大な調査成果の蓄積と相まって齋宮跡の実態解明にとって貴重な資料となるものと信じております。

齋宮跡の保存と調査研究・整備にあたりましては、文化庁をはじめ齋宮跡調査研究指導委員会の先生方の御指導や地元明和町をはじめとする関係機関・各位の御協力の賜物と感謝申し上げます。

平成11年3月

齋宮歴史博物館

館長 大井 與生

# 例 言

- 1 本書は、斎宮歴史博物館が平成9年度に国庫補助金の交付を受けて実施した「史跡斎宮跡発掘調査」及び「地方拠点史跡等総合整備事業」に伴う事前調査の概要をまとめたものである。
- 2 明和町教育委員会が、国庫補助金の交付を受け調査主体となって実施した史跡現状変更等に伴う緊急発掘調査の報告書は、別途明和町教育委員会が刊行している。
- 3 遺構の実測にあたっては、国土調査法による第VI座標系を基準とし、方位は座標北を用いた。
- 4 遺構の時期区分は、「斎宮の土師器（三重県斎宮跡調査事務所年報1984）」による。
- 5 遺構表示記号は次のとおりである。  
SB；建物 SA；欄列 SE；井戸 SK；土坑 SD；溝 SF；道路 SS；足場 SX；その他
- 6 方格地割における各区画の名称は第33図に示した。
- 7 特に標示がない限り遺物実測図は実物の4分の1、遺物写真は約3分の1である。
- 8 用語は、「墓に関わる穴」には廣、「その他の穴」には坑を用いた。また、「わん」は碗「つき」は杯を用いた。
- 9 斎宮跡の調査全般については、次の先生方の指導を得た。

京都橘女子大学学長	門脇 禎二
千葉大学教授	北原 理雄
聖心女子大学助教授	佐々木恵介
前奈良国立文化財研究所 所長	鈴木 嘉吉
(財)大阪文化財調査研究センター理事長	坪井 清足
聖徳学園女子大学教授	所 京子
愛知県陶磁資料館総長	楢崎 彰一
三重大学教授	八賀 晋
皇学館大学教授	渡辺 寛
- 10 現地での発掘調査及び本概報の編集・執筆は斎宮歴史博物館調査研究担当(旧調査研究課)の駒田利治、上村安生、大川 操(旧姓赤岩)、角正芳浩、石瀧誠人(現美杉村教育委員会)があたり、松月浩子、八木光代がこれを補助した。また、遺物整理には島村紀久子、西村秋子、河谷和代、杉原泰子の協力を得たほか、河合正宏(立命館大学々生)、熊崎 司(京都府立大学々生)の参加を得た。

## 目 次

I	調査の経過と概要	1
II	第118次調査	3
III	第119次調査	25
IV	第120次調査	43
V	第121次調査	57
VI	第122次調査	65
付編1	第118次調査出土和銅器珠の付着物の分析	69
付編2	第119次・第120次調査 花粉・植物珪酸体分析	72
	発掘調査報告抄録	102

## 表・挿図目次

[表]	1	平成9年度発掘調査一覧	2
	2	第118次調査時期別遺構分類表	4
	3	第119次調査時期別遺構分類表	26
	4	第120次調査時期別遺構分類表	44
	5	鍛冶山西ブロック構列・建物座標一覧表	67
	6	掘立柱建物・堀列一覧表	81
	7	竪穴住居一覧表	82
	8	遺物(土器)観察表	83
	9	斎宮跡発掘調査次数一覧表	96
[図]	1	平成9年度発掘調査位置図(1:10,000)	i
	2	第118次調査 調査区位置図(1:2,000)	3
	3	◇ 遺構実測図(1:200)	5
	4	◇ SB7905東壁カマド土器出土状況図(1:20)	7
	5	◇ 遺物実測図(1:4)	15
	6	◇ 遺物実測図(1:4)	17
	7	◇ 遺物実測図(1:4)	19
	8	◇ 遺物実測図(1:4)	21
	9	◇ 宮ノ前ブロック内における平安時代前半期の掘立柱建物配置(1:1,000)	24
	10	第119次調査 調査区位置図(1:2,000)	25
	11	◇ 遺構実測図(1:200)	27
	12	◇ SB7950柱掘形土層断面図(1:50)	29
	13	◇ SE7920土層断面図(1:60)	30
	14	◇ 遺物実測図(1:4)	34
	15	◇ 遺物実測図(1:4)	36
	16	◇ 鍛冶山西ブロック建物配置変遷図 1	40
	17	◇ 鍛冶山西ブロック建物配置変遷図 2	41
	18	第120次調査 調査区位置図(1:2,000)	43
	19	◇ S D6050土層断面図(1:40)	44
	20	◇ 遺構実測図(1:200)	45
	21	◇ 遺物実測図(1:4)	50
	22	◇ 遺物実測図(1:4)	52
	23	◇ 遺物実測図(1:4)	53
	24	◇ 調査が実施された方格地割の交差点(1:4,000)	55
	25	第121次調査 調査区位置図(1:2,000)	57
	26	第121-1・2・4次調査 遺構実測図(1:200)	59
	27	第121次調査 遺物実測図(1:4)	63
	28	第121-3次調査 遺構実測図(1:200)	64
	29	第122次調査 調査区位置図(1:2,000)	65
	30	◇ 遺構実測図(1:200)	66
	31	◇ 遺構配置計画図(1:500)	67
	32	斎宮跡地区表示	100
	33	斎宮跡方格地割区画名称	101

## 写真図版

巻首1	第119次調査航空写真		
巻首2	上: 第118次調査SX7860出土状況復原		下: 第118次調査SX7860出土と同開珎
P L 1	上: 第118次調査区全景 (北から)		下: 調査区全景 (西から)
P L 2	上: SB7891 (西から)		下: SB7901 (南から)
P L 3	上: SB7881・SB7882 (東から)		下: SB7882南東隅土器出土状況 (北西から)
P L 4	上: SB7905 (西から)		下: SB7905東壁コマド土器出土状況 (北から)
P L 5	上: SB7865 (北から)		下: SB7865・7871・7872 (西から)
P L 6	上: SB7875 (西から)		下: SB7875・7895・7896 (西から)
P L 7	上: SB0250 (北から)		下: SB7880・7890 (西から)
P L 8	上: SB7870・7880・7894 (南から)		下: SB7880・7885 (北から)
P L 9	上: SB7870・7880 (東から)		下: SB7900 (北から)
P L 10	上: SB7900 (東から)		下: SB6860・6861・6874・0251 (北から)
P L 11	上: SB7885・7886 (北から)		下: SB7885・7886 (東から)
P L 12	上: SB7897・7898・7903 (南から)		下: SB7867土器出土状況 (北から)
P L 13	上: SB7887土器出土状況 (南から)		下: SK6247中畦東壁面出土状況 (東から)
P L 14	上: 第119次調査区全景 (上から)		下: 調査区全景 (西から)
P L 15	上: SB7950 (南から)		下: SB7950 (西から)
P L 16	上: SB7950 (東から)		下: SB7918・7919 (西から)
P L 17	上: SB7947・7948 (北から)		下: SB7915・7916・7917 (南から)
P L 18	上: SA6770・6790・SD6803 (北から)		下: SB7938・7939・7940 (北から)
P L 19	上: SB7920 (東から)		下: SE7920井戸枠痕跡検出状況 (東上から)
P L 20	上: 第120次調査区全景 (北から)		下: 調査区全景 (西から)
P L 21	上: SD6002・6050, SF6009 (西から)		下: SD6002 (西から)
P L 22	上: SD7965, SK7966 (南から)		下: SD7970 (南から)
P L 23	上: SD6050土層断面 (西から)		下: SD6050土層断面 (東から)
P L 24	上: SB7998・8000 (北から)		下: SB7995 (北から)
P L 25	上: SB7997・7987・7988 (北から)		下: SB7996 (北から)
P L 26	上: SB7991~7994, SK7985・7986 (北から)		下: SK7980 (西から)
P L 27	上: 第121-1次調査区全景 (北から)		下: 第121-2次調査区全景 (東から)
P L 28	上: 第121-3次調査区全景 (東から)		下: 第121-4次調査区全景 (西から)
P L 29	上: 第122次調査区全景 (西から)		下: SA7170柱穴断面検出状況 (東から)
P L 30	第118次調査出土遺物		
P L 31	第118次調査出土遺物		
P L 32	第118次調査出土遺物		
P L 33	第118次調査出土遺物		
P L 34	第119次調査出土遺物		
P L 35	第120次調査出土遺物		
P L 36	第120次調査出土遺物		
P L 37	第120次調査出土遺物		
P L 38	第121次調査出土遺物		

## 付 編 図・表・写真

第1表	第119次・第120次調査花粉・植物珪酸体分析試料一覧表	図版1	第118次調査出土と銅開珎の付着物
第2表	第119次・第120次調査植物珪酸体分析結果	図版2	第119次・第120次調査珪酸化石・珪藻分析プレパレート内の現況写真
第3表	第119次・第120次調査花粉分析結果	図版3	第119次・第120次調査花粉化石分析プレパレート内の現況写真
第1図	付着繊維と比較サンプルのFT-IRチャート		
第2図	第119次・第120次調査花粉化石組成		

# I 調査の経過と概要

## 経過

古里地区での宅地開発計画に伴い昭和45年に始まる斎宮跡の発掘調査は、文化庁の補助事業として、昭和48年から開始した範囲確認調査を経て、昭和54年3月27日に国の史跡に指定され、指定以降史跡解明の計画調査を継続して実施している。

これまでの発掘調査成果の蓄積から平安時代初期を中心に展開を想定している方格地割において、方格子画内をめぐる柵列や大型掘立柱建物の規則的な配置、祭祀を想起させる土坑の存在等から、当該期斎宮寮の中枢部の可能性が強い牛業・鍛冶山地区における構造解明に重点をおいて調査を進めている。

また、史跡指定以降、管理団体である明和町が文化庁及び県の補助を得て実施している史跡の買い上げの進捗と相まって、公有地の管理と史跡の活用が課題となり、平成5年度に『史跡斎宮跡整備基本構想検討調査報告書』刊行、平成8年3月に『史跡斎宮跡整備基本構想』策定を行うとともに、平成7年度には、文化庁等の指導を得ながら『史跡斎宮跡「遺構の活用・演出的整備ゾーン」整備基本計画』を確定した。

整備計画地は斎宮駅北側の方格地割北西隅部に想定される地区であり、公有化が最も進捗した地区であるとともに、斎宮跡及び斎宮歴史博物館への窓口の一つであり、また、近代の瓦粘土採掘によって遺構の保存状況が必ずしも良くない地区であることにより『史跡斎宮跡 整備基本構想』の「遺構の活用・演出的整備ゾーン」として、137.1haの広大な広がりをもつ斎宮跡の理解を体験的に深めるため1/10史跡全体模型を核とした体験学習を実施できる整備ゾーンとして位置づけた。

## 第118次調査

この上園・宮ノ前地区でのこれまでの調査を補完し、施設の建設予定地となる地区を第118次調査として実施した。調査の結果、これまでの調査で確認されていた平安時代後期以降の建物群以外にも、平安時代前半期の大型建物の存在が確認され、方格地割造営を解明する重要な資料となった。また、掘立柱建物の柱掘形内から、土師器の杯に収められ、高杯で蓋をした状態で銅開珎5点が出土し、建物の地鎮祭祀に関わる遺物とみられる。

## 第1回調査研究 指導委員会

調査期間中の5月22日には、斎宮跡調査研究指導委員会を開催し、第118次調査及び体験学習施設建設にかかる指導をうけるとともに、今後の整備事業について助言を得た。

今年で第15回を迎える「斎王まつり」の開催された6月8日には、現地説明会を開催し、223名の参加を得た。

## 第119次調査

方格地割の中枢部と考えられている鍛冶山ブロックでは、これまで第44・105・109次調査等で、区画内を二重に巡る板塀と考えられる柵列を確認しているが、内郭柵列の規模等については不明な点があり、その確認と中枢部の遺構配置を解明するため第119次調査区を設定した。調査の結果、内郭柵列は、当該地区まで延びておらず、東西規模が当初想定していたものより短くなることが判明した。一方、斎宮跡調査での最大規模の6間×4間で南北二面に庇をもつ大型掘立柱建物を確認し、6期にわたる規則的な配置をもつ建物群が確認されるとともに、方形の井戸を確認し、当該地区が斎宮内院地区であることを裏付ける貴重な資料を得ることができた。

**第2回調査研究 指導委員会** 大きな成果を得た第119次調査と内院構造について指導をうけるため指導委員会を11月5日に開催し、引き続き内院地区の調査を実施していくよう指導を得た。また、整備事業についても、本年度から建設事業に着手するため、施設の最終設計について承認をいただくとともに、1/10建物模型の製作についても具体的な指導・助言をいただいた。

**第120次調査** 内院の北側に位置し、方形区画が中央の道路・溝によって区画され、その西側に物忌殿あるいは神殿と考えられる遺構配置に対して、東側では遺構の確認が進んでいなかったため、当該区画の北東隅部で第120次調査区を設定した。調査の結果、方格地割の交差点及び区画施設内に空閑地を隔てて平安初期以降の建物群を確認することができた。

**第121次調査** 方格地割北西隅に位置する宮ノ前・上園ブロックの区画施設については、昨年度までの調査により解明されたが、東側の区画施設の状況については不明瞭な点が多かったため、「斎王の森」周辺をはじめとして、当該区画施設解明の調査区を4か所設けた。「斎王の森」西側の第121-1次調査区では、北西隅部の区画施設は、現道とはほぼ重なり合い、蛇行していることが確認できた。「斎王の森」南側及び北から2列目の区画施設確認調査とした第121-2・3次調査区では、近代の瓦粘土採掘により、明瞭な遺構を確認することができなかった。また、体験学習施設の浄化槽建設予定地内でのトレンチ調査である第121-4次調査でも、瓦粘土採掘により遺構は存在しなかった。

**第122次調査** 内院地区にあたる鍛冶山西ブロックの外郭柵列南部分は、柵列と掘立柱建物の関係が明瞭ではなかったが、その部分にあたる箇所でも町道の舗装工事が実施されることが判明し、急速第122次計画調査として実施した。調査の結果、南北柵列SA7150・7170は鍵形に折れる柵列ではなく、更に南に延長される柵列であることが判明した。

**第3回調査研究 指導委員会** 第120次調査結果が明らかになった3月3日には、現地指導を含めた調査研究指導委員会を開催し、第120・121・122次調査の指導を受けるとともに、1/10史跡全体模型のサンプル模型を現地に設置して、検討いただいた。

**現状変更調査** その他、史跡現状変更に伴い管理団体である地元明和町教育委員会が調査主体となり、斎宮歴史博物館が担当している事前の緊急発掘調査は、本年度は6件実施し、工事立会い調査を33件実施した。(駒田利治)

調査回数	地区名	面積	調査期間	地籍・地番	所有者	備考	区分
118	6ADN	950	H 9. 4.14~H 9. 7.23	斎宮字内山3046-14他	明和町	計画調査	1
119	6AFN-EG	697	H 9. 7.30~H 9.12.18	斎宮字鍛冶山2740-3他	個人	計画調査	2
120	6AFI-CE池	805	H10. 1.20~H10. 3.31	斎宮字西加座2711他	個人	計画調査	2
121	6ADH他	843	H 9.12. 3~H10. 2. 7	斎宮字宮ノ前・下園他	明和町	事前調査	1
122	6AFN	28	H10. 1. 5~H10. 1.14	斎宮字鍛冶山2758-8	明和町	計画調査	3
調査面積	合計	3,323					

調査回数	地区名	面積	調査期間	地籍・地番	所有者	備考	区分
123-1	6AFQ-A	45	H 9.12.16~H 9.12.25	斎宮字中西地内	個人	整地	3
123-2	6AFN他	188	H10. 1.19~H10. 2. 7	斎宮字中西・笹川他	明和町	水道改修	3
123-3	6ADP他	27	H10. 2. 2~H10. 2. 4	斎宮字牛業地内	明和町	水道改修	3
123-4	6ADQ	55	H10. 1.27~H10. 3.18	斎宮字牛業地内	明和町	水路改修	3
123-5	6AE-AHR	87	H10. 2. 2~H10. 2.18	斎宮字刈干	明和町	水路新設	3
123-6	6ACC-1	407	H10. 2.23~H10. 3.21	斎宮字塚山3337-1	個人	資材置場	3
調査面積	合計	809					

第1表 平成9年度発掘調査一覧(調査期間は遺構実測まで)

## Ⅱ 第118次調査

(6ADN 内山地区)

### 1 はじめに

#### 経過

平成9年度第1回目の計画調査は、近鉄斎宮駅北側で昨年度から実施している史跡整備の中で、建築物の設置が予定されている内山地区の畑地において実施した。

史跡東半部には一辺が約120mの方形区画が東西7列×南北4列に並んだ方格地割を構成することが想定されている。さらに昨年度の調査により、方格地割のうち北西隅4区画分の外周道路は他の区画でみられるような直線的な直交する道路及び側溝で区画されるのではなく、緩やかに蛇行する現道がその外周道路の線形そのものであったこと、そして方形区画4区画分に相当する北西部の区画を4つに分ける区画道路はなく4区画一帯として使用されていたと想定され、確認された遺構からは時期的にも平安時代後期になってから東西5列×南北4列の南西隅に4区画の張出をもつ最盛期の方格地割に北西隅の4区画を付加したものである可能性が高い。

今回の調査地は、宮ノ前南ブロックの南東隅に位置し、この場所では昭和49年度の範囲確認調査第8-8次調査(Mトレンチ)をはじめ、平成3年度の第93次調査、平成4年度の第95次調査、平成5年度の第99次調査が隣接して行われており、方格地割北西隅4区画分の中では比較的遺構の残存状況が良好な地点であることが判明している。これらの調査の結果から当該地は、平安時代後末期～鎌倉時代の遺構が最も顕著にみ



第2図 第118次調査 調査区位置図(1:2,000)

られる地点で、平安時代初期の遺構もわずかにみられるものの、主として平安時代後期～末期にかけて建物が頻繁に、繰り返し建て替えられた場所であり、鎌倉時代には方格地割隣接地でありながら墓が営まれる地点であることが確認されている。

**目的** こうした中で、平成4年度の第95次調査と平成5年度の第99次調査の間の未調査地の実態解明を目的として、平成9年4月14日～7月23日にかけて東西27m、南北約35mの約950㎡を対象に調査を実施した。

**現況** 調査地の現況は、民有地である畑と公有地で、調査区中央部が標高11.5mと最も高く、南へわずかに傾斜して標高11.45m、また北へ徐々に傾斜していき標高11.2mといった勾配をとる。基本層序としては地表から順に、表土（暗褐色土）厚さ0.1m、遺物包含層（黒褐色土）厚さ0.1m、地山（黄橙色粘質土）であるが、調査区北西隅には開墾時の整地とみられる遺物を多量に含んだ攪乱層（灰褐色土）が厚さ5cm～20cmにわたって認められた。地山面までは比較的浅く、調査区南辺で標高11.1m、北辺では標高10.7m～11.1mと北西隅のみ攪乱のため極端に下がっている他はほぼ平坦である。

## 2 遺構

### (1) 奈良時代中期の遺構

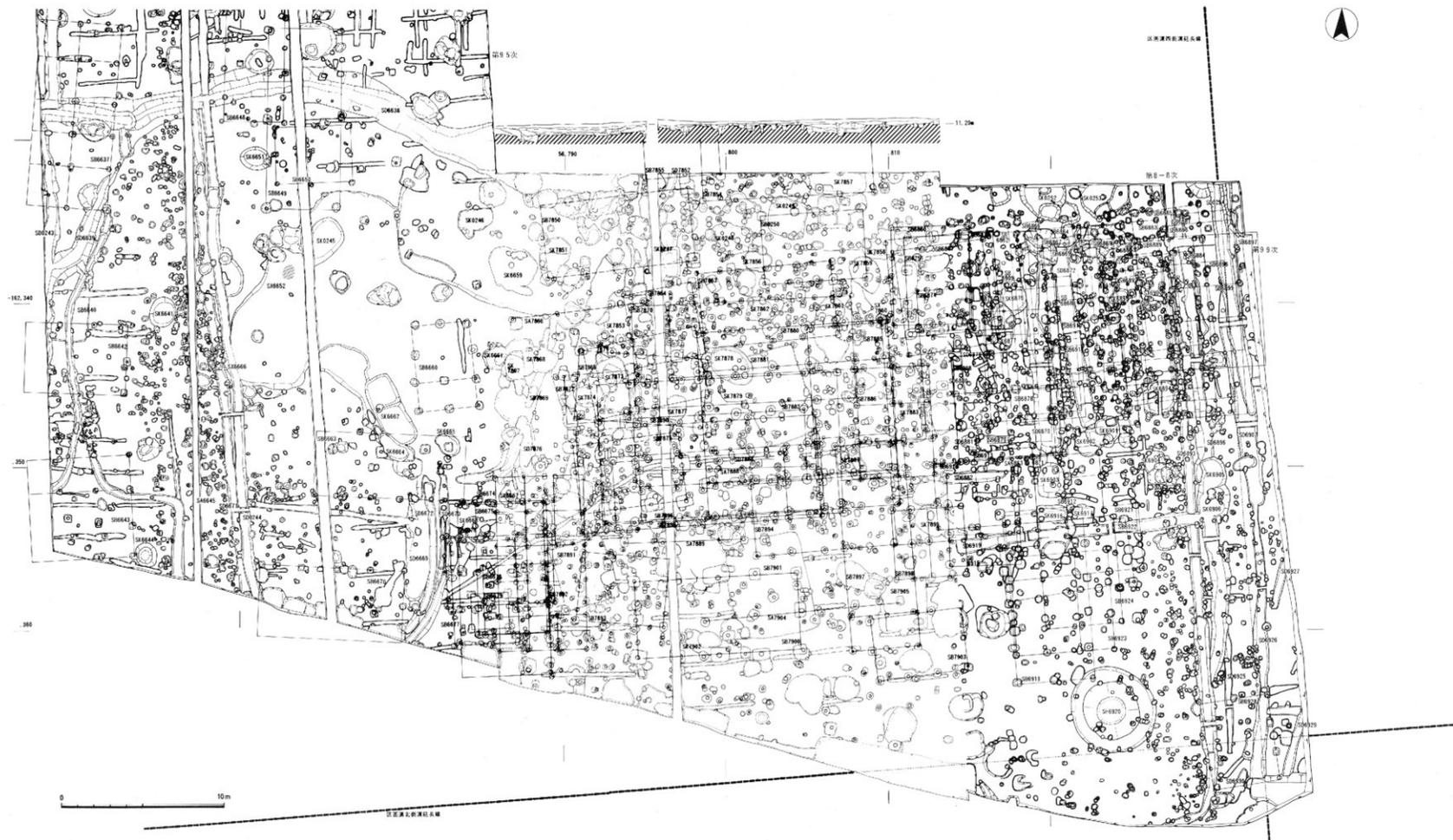
竪穴住居5棟、掘立柱建物1棟、土坑1基がある。

**S B 7891** 調査区南西部で検出した3.5m×3.9m、遺構検出面からの深さ約20cmの竪穴住居である。東辺やや南寄りに焼土がみられカマドがあったものと思われる。竪穴住居中央に貼床の痕跡が認められる。主軸方向はN17°Wで、土師器杯破片が東辺のカマド周辺から散逸的であるが出土した。

**S B 7901** 調査区南半中央で検出した4.9m×6.2m、遺構検出面からの深さ約5cmの竪穴住居で

		遺 構 の 種 別							
		S	B	SA	S	K	SD	SX	
奈良	中 期	7880	7881	7882	7891				7860
		7901	7905						
平	初 期	0250	0251	7900			7878	7887	
	前Ⅰ期	7855	7875	7885		7904	7879		
	前Ⅱ期	6679	6915	7850	7890	7866	7857	7861	
		7895	7896				7862		
	中 期	7865	7893	7903		7889			
	後Ⅰ期	7863	7864	7870	7871		7874	7899	
		7872	7897	7898					
後Ⅱ期	6914	7886	7894			7859	7867		
						7877	7883		
安	後 期				7888	7856	7858		
	末 期	6674	6675	6676	6677		0247	0248	0249
6678		6860	6861	6873	6659		6667	7851	6919
6874		6913	6908	7892	7853		7873	7876	7852
鎌 倉							7868		7884
時期不明		7854							

第2表 第118次調査 時期別遺構分類表



第3图 第118次調査 遺構実測図(1:200)

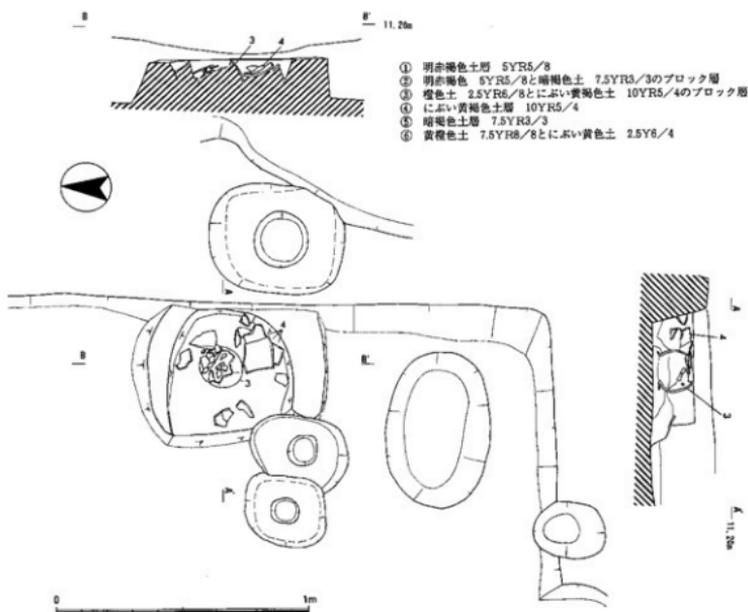
ある。平面規模はやや南北に長い長方形で、カマド・貼床の痕跡は認められなかった。主軸方向はN11°Wである。土師器杯・蓋破片等が出土した。

S B 7881・7882 調査区中央やや北寄りで検出した竪穴住居で、S B 7881は推定規模3.7m×3.2m、S B 7882は推定規模3.5m×3.4m、遺構検出面からの深さはいずれも約10cm～15cmでS B 7881がS B 7882に先行する。S B 7881は北西隅が土坑S K 7878・7879、南がS B 7882と重複しているため、カマド・貼床の状況等の詳細が不明である。S B 7882の方は、東辺中央やや北寄りにカマドを有し、南東隅で土師器長胴甕・甌が出土している。主軸方向はいずれの竪穴住居もN22°Wである。

S B 7905 調査区南東部、前述のS B 7901の東約3.5mに位置する竪穴住居で、3.0m×3.4m、遺構検出面からの深さ約25cmである。東辺中央にカマドを良好な状態で検出しており、カマド中央部から土師器甕(3)・長胴甕(4)が出土する。このカマド南側に、長径約70cm、短径約45cmの楕円形の小穴を検出しており、土師器杯等が出土する。主軸方向はN4°Wと他の3基の竪穴住居に比べて大きく向きを違える。

S X 7860 調査区北東部、S B 7880北面庇東端の柱掘形およびS B 7885の北東隅柱の柱掘形が重複する柱掘形上面の土坑で、土師器の高杯(124)と、和同開珎5枚(126～130)が土師器杯(125)の底部内面に裏向きに入れられたものが出土している。杯に高杯杯部が被さる形で埋納されたものと考えられる。

これまでの調査で、今回調査区の西隣で実施されている第95次調査のS X 6666と、



第4図 S B 7905東壁カマド土器出土状況図 (1:20 図中の数字は遺物番号)

第99次調査のS X 6900から「延喜通寶」が同形の土師器壺に埋納した形で出土したが、今回のS X 7860は土師器杯の底部内面に和同開珎が裏向きで伏せてある。

S B 7880

調査区中央やや東寄りに位置する桁行5間×東梁行3間・西梁行2間、南北両面に庇を伴う大型の東西棟建物である。柱間は桁行2.35m、東梁行で2.27m、西梁行で3.4m、南庇出2.4m、北庇出2.1m、棟方向はE 4°Nである。妻の東西で間数が異なるのは、東面では奇数間とし中央間に開口部をとったものかと考えられる。西妻については3間で構成される可能性は少なく、柱痕跡の遺構検出面からの深さを考えも身舎よりも深く埋設されていることから、2間で6.8mの妻を構成したものとみられる。

## (2) 平安時代初期の遺構

この時期の遺構には、掘立柱建物3棟、土坑2基がある。

S B 0250

調査区北辺で検出の桁行3間×梁行2間の東西棟建物である。柱間は桁行・梁行とも2.1m等間、棟方向はE 3°Nである。S B 7850と同じく北側柱を第8-8次調査で検出しているため、詳細は不明だが、今回調査で検出した南側柱でみると柱掘形は0.6m～0.7mの方形、径25cmの柱痕跡をもつ。東側に建つS B 0251の北妻とS B 0250の棟筋が直交する位置関係にあるが、両棟が約1.8mしか距離をおいていないため、L字形の配置をとるものの同時存在は考えにくい。S B 0250の南側柱の柱掘形からは、製塩土器、土錘等が出土している。

S B 0251

東隣の第99次調査で東側柱を検出した桁行3間×梁行2間の南北建物である。前述したS B 0250と北妻柱筋で直交する建物で、棟方向はN 3°Wである。柱間は桁行1.94m、梁行2.0mと異なる。柱掘形は0.6m×0.7mで、柱痕跡は径25cm～30cmである。

S B 7900

調査区南辺中央で検出した桁行4間×梁行2間の東西棟建物で、柱間は桁行2.5m×梁行2.35mである。柱掘形は1.1m×0.7mで柱痕跡は径約30cm、棟方向はS B 7896と同じくE 3°Nで、S B 7896の南約3.0mの位置に平行に建ち並ぶ建物である。

S K 7878

調査区中央部にあり、堅穴住居S B 7881の北西隅で重複し、S B 7881より後出で、S B 7870・7890に先行する土坑である。長径約3.0m、短径約2.0m、遺構検出面からの深さ約32cmである。ヘラ描き記号や墨書・墨痕を残す土師器杯・皿をはじめ、土師器杯・皿・甕・鍋が良好な状態で検出された。

S K 7887

調査区中央やや東寄りにある、1.5m×1.8mの土坑である。遺構検出面からの深さ約40cmで、上面からヘラ描き記号や墨書・墨痕のある土師器杯・皿をはじめ、土師器甕・長胴甕・鍋などが良好な状態で検出された。S B 7880より後出する。

## (3) 平安時代前I期の遺構

この時期の遺構には、掘立柱建物3棟、柵列1条、土坑1基がある。

S B 7855

調査区北辺壁際に南側妻のみを検出した建物で、梁行2間の南北棟建物になるものと考えられる。柱間は2.3m等間、棟方向はN 3°Wと思われる。

S B 7875

調査区中央やや西寄りで検出した桁行3間×梁行2間の東西棟建物で、E 4°Nの棟方向である。柱間は桁行2.2m、梁行2.1mで、柱掘形が0.8m～1.0mの方形柱痕跡が径30cmと、上面を大きく攪乱されていながらも、形状をよく留めていた。

S B 7885

調査区中央やや東寄りに位置する桁行3間×梁行2間、南面妻側に庇を伴う南北棟建物である。柱間は桁行2.27m、梁行2.3m、南庇出2.2m、棟方向はN 4°Wである。柱掘形は0.5mの方形、柱痕跡は約20cm、身舎柱掘形から須恵器甕を転用したとみら

れる硯、土錘などが出土する。

- S A 7904 調査区南端で検出した4間の東西柵列である。柱間は3.0m、E 5° Nの方向ではあるが、方格地割の区画東西道路の北辺から約10.0mに位置し、主要な大型東西建物群の南面約6.0mにあることからこれらの南面区画道路からの目隠し的な施設であろうかと考えられる。
- S K 7879 先述のS K 7878に後出する土坑である。推定規模は径約2.4mの不整形の土坑で、遺構検出面からの深さ約10cmと浅いものである。土師器杯・高杯脚部、須恵器杯・甕の破片が出土する。

#### (4) 平安時代前Ⅱ期の遺構

この時期の遺構には、掘立柱建物6棟、柵列1条、土坑3基がある。

- S B 6679 調査区西隣の第95次調査で検出し、東西×南北各々1間以上の総柱建物と想定されていた建物であるが、今回調査でその延長はみられず、方1間の建物であることが判明した。柱間は桁行2.3m、梁行2.2mで棟方向はE 2° Nである。
- S B 6915 調査区東隣の第99次調査で検出した桁行3間×梁行2間、身舎の南面に庇を付す建物と想定された。今回調査区内で延長の柱穴を検出し、桁行3間×梁行2間、南面庇を付す建物であり、柱間は桁行1.9m、梁行2.2m、庇出1.9m、棟方向はN 2° Eであることが判明した。
- S B 7850 調査区北辺で検出した桁行4間×梁行2間の東西棟建物で、棟方向はE 7° Nである。柱間は桁行2.3m、2.25mで東西妻柱と北側柱の一部を第8-8次調査で検出しており、また調査区北西隅は攪乱層により柱掘形も良好な状態では検出されていないが、今回検出した柱掘形は0.8m×1.0mと比較的大きく、柱痕跡は径約28cmで遺構検出面からの深さ約60cmである。北東隅柱の柱掘形から土錘が出土している。また、南面約2.1mに同方向の柵列S A 7866があり、S B 7850に伴ったと推測される。
- S B 7890 調査区中央で検出された、桁行7間×梁行4間で身舎の四面に2.2m等間の庇出をもつ四面庇付の東西棟建物である。身舎の柱間は桁行・梁行とも2.1mで、棟方向はE 3° Nである。柱掘形は身舎が0.6mの方形、庇が0.5mの方形、柱痕跡は身舎・庇とも径25cm～30cmとほぼ同規模である。北庇がS B 7870の南庇と重複する位置に建つもので、S B 7880がS B 7890に先行する。この周辺には位置を変えず繰り返し比較的大型の東西棟建物が建て替えられており、小規模な建物が集中するこの一帯で、主要建物の配置される地点であることがうかがえる。
- S B 7895 調査区中央で検出した桁行7間×梁行3間の身舎の東・北・西の各面に庇を伴う三面庇の東西棟建物である。身舎の柱間は桁行・梁行とも2.1m、庇出も北・東面は2.1m、西面は2.15mとやや広くとる。柱掘形は0.4m～0.6mの方形で柱痕跡は20cm～25cmである。棟方向はE 4° Nである。身舎・北面柱の柱掘形および柱痕跡から土錘、また北面庇の柱痕跡からは朱付着土器が出土している。
- S B 7896 調査区中央で検出した桁行6間×梁行2間、西妻側に庇を伴う東西棟建物である。柱間は桁行2.34m、梁行2.0m、西庇出2.3m、柱掘形は約0.4mの方形、柱痕跡は径約20cmである。棟方向はE 4° Nで柱掘形から緑釉陶器碗片が出土している。
- S A 7866 S B 7850の南約2.1mにある4間の柵列である。柱間は2.0mで、方向もS B 7850と同じくE 7° Nで、S B 7850の目隠し塀と思われる。

S K 7857 調査区北北部で検出した東西約3.5m、遺構検出面からの深さ約53cmの土坑で、北西部は調査区外へ続くため規模が不明である。多くの土師器杯・皿・甕・高杯脚部、須恵器甕の破片、緑釉陶器碗片、土錘1個、また製塩土器片が64片と特に多く出土している。

S K 7861 調査区北部にある径約1.8mの略円形の土坑で、遺構検出面からの深さが約10cmである。土師器杯・皿・甕・鍋等の破片、灰釉陶器碗・段皿・瓶口縁片のほか、緑釉陶器碗片が出土した。

S K 7862 調査区北部にある一辺1.5mの方形の土坑で、遺構検出面からの深さ約25cmである。土師器杯・甕破片、灰釉陶器碗・皿片、製塩土器片、土錘、緑釉陶器碗・段皿片が出土している。

#### (5) 平安時代中期の遺構

この時期の遺構には、掘立柱建物3棟、柵列1条がある。

S B 7865 S B 7871の北西隅柱と起点を同じくし、桁行4間×梁行2間で棟方向をE 4° Sとやや南に棟を振る東西棟建物である。柱間は桁行2.0m、梁行2.1mで、柱掘形は0.6m×0.8mの方形で、柱痕跡は径25cm～30cmである。

S B 7893 調査区南端で検出した、桁行3間×梁行2間の東西棟建物である。柱間は桁行1.8m、梁行2.1m、E 5° Sと南に棟を振る建物で、柱掘形は0.4m～0.5mの方形で、柱痕跡は径20cm前後である。

S B 7903 調査区東端で検出した桁行3間×梁行2間の東西棟建物である。柱間は桁行1.87m、梁行1.90mで、E 7° Nの棟方向で、東接する第99次調査検出の柱穴へ続くことが判明した。柱掘形は0.5mの方形、柱痕跡は径20cm～25cmである。

S A 7889 調査区中央やや南寄りにある3間の東西柵列で、柱間2.4m、E 2° Nの方向である。S A 7888の南約4.4mに並行しているが、柱筋は通しておらず、同時期の柵列ではないと考えられる。

#### (6) 平安時代後I期の遺構

この時期の遺構には、掘立柱建物7棟、土坑2基がある。

S B 7863 調査区北部で検出した桁行4間×梁行2間の東西棟建物である。柱間は桁行2.05m、梁行2.30m、棟方向はE 5° Nである。南側柱の柱掘形から土錘や緑釉陶器碗片、土師器皿・小皿が相重なって出土している。土師器皿・小皿の出土状況からみてこの建物に関わる地鎮を行ったものかと考えられる。

S B 7864 調査区北部、中程で検出した桁行3間×梁行2間の南北棟建物である。柱間は桁行1.5m、梁行2.1m、棟方向はN 12° Wと大きく西に振る建物である。北西隅の柱穴から土師器小皿を中心とした土器が遺構検出面まで相重なって出土した。完形あるいはほぼ完形の、小皿が26点以上、皿が1枚以上、ククロ土師器小皿2枚が、径22cm、深さ約24cmの柱穴に全て上向きで重ねられており、これもS B 7863同様、この建物に関わる地鎮を行ったものであろうかと考えられる。

S B 7870 調査区中央やや北寄りに位置する桁行6間×梁行3間、南・西面に庇を伴う二面庇の東西棟建物である。柱間は桁行2.24m、梁行2.25m、南庇出1.8m、西庇出2.3m、棟方向はE 3° Nである。柱掘形は0.4m×0.5mの方形で、柱痕跡は径20cm～25cmである。身舎の柱掘形から製塩土器片、土錘、南面庇柱掘形から緑釉陶器碗口縁片、柱痕跡か

ら土鍾が出土している。

S B 7871 S B 7864に重複し、棟方向を直交して建つ桁行3間×梁行2間の東西棟建物である。柱間は桁行2.37m、梁行2.20mで、E12°Nの棟方向だが、先のS B 7864とは柱掘形が0.5m～0.6mの方形をしていることから時期を隔てて建てられているものと思われる。東妻柱の柱掘形から緑釉陶器が出土している。

S B 7872 調査区西半中央で検出した桁行2間×梁行1間の東西棟建物である。E4°Nの棟方向で、柱間は桁行2.0m、梁行3.0m、柱掘形は0.5m×0.65mの方形で、柱痕跡は径20cmである。南東隅の柱掘形から土鍾が出土している。

S B 7897 調査区東端で検出した桁行6間×梁行2間の南北棟建物の北面・南面に庇を有するものである。柱間は桁行・梁行、南北の庇出も2.1m等間で、N5°Wの棟方向である。柱掘形は身舎・庇ともに0.45m方形、柱痕跡は径15cm～20cmである。

S B 7898 調査区東端中央に位置する桁行2間×梁行2間の総柱建物である。柱間は桁行2.2m、梁行2.1m、棟方向はE3°Nで、柱掘形は約0.5mの略方形、柱痕跡は径約20cmである。

S K 7874 調査区中央やや西寄りにある東西2.0m、南北1.2mの楕円形の土坑で、遺構検出面からの深さ約50cmである。土師器皿・小皿、灰釉陶器碗・瓶破片、緑釉陶器片が出土している。

S K 7899 調査区東端で検出した、径約2.0mの不整円形の土坑で、遺構検出面からの深さ約20cmである。東隣のS D 6919の西延長末端に位置する。ロクロ土師器皿、灰釉陶器碗片、製塩土器片が出土する。

#### (7) 平安時代後Ⅱ期の遺構

この時期の遺構には、掘立柱建物3棟、土坑4基がある。

S B 6914 調査区東隣の第99次調査で検出した桁行4間以上×梁行2間の東西棟建物と想定されており、今回調査で桁行5間×梁行2間で完結する建物であることが判明した。柱間は桁行2.05m、梁行2.0m、棟方向E4°Nである。

S B 7886 S B 7885に重複して建つ桁行3間×梁行2間の南北棟総柱建物である。柱間は桁行・梁行とも2.25m等間、柱掘形は0.4mの方形、柱痕跡は径約18cmで、棟方向はN3°Wである。柱掘形から灰釉陶器の三足盤の脚部が一点のみであるが出土している。

S B 7894 調査区中央やや南寄りで検出した桁行4間×梁行2間の東西棟建物である。柱間は桁行2.15m、梁行2.20m、E5°Nの棟方向である。調査区北寄りで検出のS B 7863の南約8.5mに妻柱筋を1間東へずらして並立する。

S K 7859 調査区北東部にある東西1.8m、南北2.4mの長楕円形の土坑で、遺構検出面からの深さが約10cmである。土師器小皿、ロクロ土師器小皿、灰釉陶器片、製塩土器片が出土している。

S K 7867 調査区西端で検出した東西1.2m、南北1.5mのやや南北に長い土坑で、遺構検出面からの深さ約60cmである。この土坑からもほぼ完形の土師器皿・小皿が重なって出土した。このほか緑釉陶器片も出土している。

S K 7877 調査区中央部の畦東側で検出の土坑で、南北約1.5m、遺構検出面からの深さ約28cmである。土師器皿・小皿・台杯皿、製塩土器、土鍾、緑釉陶器碗片が出土した。

S K 7883 一辺約0.8mの方形の土坑である。上面に拳大の石を用いた石組みがあり、土師器

皿・小皿、ロクロ土師器片、灰釉陶器碗片が出土した。

#### (8) 平安時代後期の遺構

後Ⅰ期・Ⅱ期の断定がしがたい遺構には、柵列1条、土坑2基がある。

S A 7888 調査区中央でS B 6674の北妻の東延長約3.0mにある5間の東西柵列である。柱間は2.10mで、E 2°Nの方向である。柱掘形は約0.4mの方形で、柱痕跡は径20cm、S B 6674・6675・6676・6678に直交する方向で延びる柵列である。

S K 7856 調査区北部にある土坑で、東西1.6m、南北1.2m、遺構検出面からの深さ約24cmである。土師器皿片のほか白磁碗の玉縁口縁破片が出土した。

S K 7858 調査区北東部にある、第8-8次調査検出の土坑の南延長を検出したものである。東西2.2m、南北1.8m、遺構検出面からの深さ約20cmで、土師器皿・小皿・甕、緑釉陶器、玉縁口縁片を含む白磁碗片が出土した。

#### (9) 平安時代末期の遺構

この時期の遺構には、掘立柱建物12棟、土坑8基、溝5条がある。

S B 6674 調査区西隣の第95次調査で柵列として検出した南北5間の柱列であったが、今回調査でこの柱列に対応する柱列を検出し、桁行5間×梁行3間の南北棟の総柱建物であることがわかった。柱間桁行2.14m、梁行1.80m、棟方向はN 2°Wである。

S B 6675 第95次調査で検出した、桁行4間×梁行1間以上の南北棟建物の梁行を今回の調査で2間であることを確認した。柱間は桁行2.03m、梁行2.10mで、棟方向はN 2°Wである。

S B 6676 第95次調査では桁行2間以上×梁行2間の東西棟建物とされたが、今回調査の対応柱穴から想定して桁行5間×梁行3間の南北棟建物であろうと考えられる。柱間は桁行2.1m、梁行1.84m、棟方向N 2°Wである。

S B 6677 第95次調査で検出した桁行3間×梁行2間以上の南北棟建物と想定されたもので、今回の調査区内でさらなる延長の柱穴は認められず、当初検出の桁行3間×梁行2間、柱間は桁行2.1m、梁行2.0m、N 3°Wの棟方向の南北棟建物であることが確認された。

S B 6678 第95次調査で桁行1間以上×梁行2間の東西棟建物と想定されたが、今回調査で延長の柱穴を検出した結果、桁行2間×梁行2間の総柱建物で、柱間は桁行2.1m、梁行2.0m、棟方向N 2°Wの南北棟建物であることが判明した。

S B 6860 調査区東隣の第99次調査で検出した桁行2間以上の南北棟建物と想定されたもので、今回の調査で桁行3間×梁行2間、柱間が桁行2.0m、梁行2.4m、棟方向がN 1°Wの南北棟建物であることが確認された。

S B 6861 第99次調査で桁行2間以上×梁行1間以上の南北棟建物であると想定されたもので、今回調査で桁行3間×梁行3間、柱間桁行2.17m、梁行1.83m、N 8°Wの棟方向をもつ南北棟建物であることが判明した。

S B 6873 第99次調査で桁行2間以上×梁行1間以上の南北棟建物であると想定されたもので、今回の調査により桁行3間×梁行3間、柱間桁行2.2m、梁行2.0m、E 5°Nの棟方向の東西棟建物と考えられる。

S B 6874 第99次調査で検出した桁行4間×梁行1間以上と想定された南北棟建物であるが、今回の調査で桁行4間×梁行2間の南北棟建物で、柱間は桁行2.15m、梁行2.05m、棟方向はN 4°Wの南北棟建物であることが確認された。

- S B 6908・6913 いずれも第99次調査で西への延長が想定された建物であるが、今回調査区内での延長柱穴は検出されず、第99次調査区内で完結する建物であると考えられる。S B 6908は北面庇を伴う桁行3間×梁行2間の東西棟建物、S B 6913は桁行3間×梁行2間の南北棟建物である。
- S B 7892 調査区南西隅で検出した桁行3間×梁行3間の東西棟建物で、西妻は第95次調査で検出されていた柱穴へ続くことが判明した。柱間は桁行2.2m、梁行2.1m、棟方向はE 3°Nである。
- S K 0247 調査区北部で検出した検出幅1.1m、南北3.5mの長楕円形の土坑である。北半部は第8-8次で検出されており、遺構検出面からの深さが約28cmで、今回調査区で検出した南半部から多くの土師器皿・小皿片のほか、青磁片、玉縁口縁部破片を含む白磁片、緑釉陶器碗片、山茶碗が出土している。
- S K 0248 調査区北部で検出した東西2.4m、南北2.0mの不整形土坑である。第8-8次調査では全体を検出しており、今回調査区内への延長は認められなかった。
- S K 0249 調査区北部で検出した東西2.4m、南北2.3mの方形土坑である。先のS K 0248同様、全体を第8-8次調査で検出している。
- S K 6659 調査区北西隅で検出した2.8m×2.3mの略方形の土坑である。第95次調査検出の東半部延長を検出したものである。調査区北西隅は攪乱を受けているため検出面からの深さ約8.0cmと浅い土坑である。土師器皿・小皿片のほか、青磁片、朱が付着した土師器皿が出土した。
- S K 6667 調査区西端で、第95次調査検出土坑の延長を検出したもので、径約1.4mの不整形土坑で、土師器皿・小皿の破片が多く出土した。
- S K 7851 調査区北西隅で検出した南北2.5m、東西2.0mの長楕円形の土坑である。第8-8次調査時に北半分を検出したもので、今回の調査で南半部延長を検出したものである。遺構検出面からの深さ約10cmで、ロクロ土師器小皿、土錘が出土している。
- S K 7853 調査区北西部で検出の土坑で、北辺及び東辺が攪乱等のため全体の規模が不明であるが、遺構検出面からの深さ約10cmの土坑である。土師器皿・小皿・甕・器台脚部、土錘、白磁片などが出土した。
- S K 7873 調査区中央やや西寄りにある約1.8m略方形の土坑で、遺構検出面からの深さは約80cmで、底部に向けてすり鉢状に深くなっているものである。土師器皿・小皿片、ロクロ土師器皿片が出土している。
- S D 7876 S D 7869に重複する幅1.2m、長さ約4.0mの南北溝である。S D 7869に先行し、山茶碗の転用硯、白磁片などが出土した。
- S D 6882 第99次調査からの延長で、S B 6915の北西隅柱の辺りで止まるものである。土師器皿破片が出土した。
- S D 6919 同じく第99次調査から延長してくる溝で土坑S K 7899と重複する辺りで止まる。土師器小皿片が出土する。
- S D 7852 調査区北端で検出した南北溝で、溝幅約0.5m、遺構検出面からの深さは約0.2mで、北下がりの勾配をとる。土師器片のほか、緑釉陶器碗高台片と土錘2個が出土した。
- S D 7869 調査区西端の第95次調査から延長してくる南北溝で、幅70cm、北から南へ向けて下がる勾配をとる。土師器皿・小皿、ロクロ土師器皿・小皿、山茶碗のほか、緑釉陶器

碗片、漆付着の山茶碗、山茶碗の転用碗、青磁・白磁片などが出土した。

#### (10) 鎌倉時代の遺構

この時期の遺構には、土坑1基、溝1条がある。

S K 7868 調査区西端で検出した東西3.3m、南北2.3mの不整形土坑で、遺構検出面からの深さ約10cmである。土師器皿・小皿片で整理箱6箱分の多くの土器が出土し、これらの土師器小皿が重なって出土する土器の間から朱が下側の土器の底部に付着する形で出土した。小皿内面に付着していた朱が剥離したものと見られる。このほか朱が付着する土師器小皿、漆が付着する山茶碗片などが出土している。

S D 7884 調査区西隣の第95次調査区東南部から延長してくる溝で、今回調査区の中央付近でほぼ真東に向きを変え、調査区西端約1.5mで直角に北へ向かい、S K 7883との重複部分で止まる。幅は約20cm、南西へ向けての勾配をとる溝である。

#### (11) 時期不明の遺構

時期不明の遺構には、掘立柱建物1棟がある。

S B 7854 調査区北辺で第8-8次調査区で南側柱のみ検出した桁行5間の東西棟建物である。柱間は2.1m等間で、棟方向はE 3°Nである。柱痕跡については不明である。

### 3 遺物

今回の調査では、全体的に平安時代後期以降の土師器を中心とした土器が、調査区北西隅から大量に出土した。主に土坑から出土した土器が多いが、調査区北部を中心に柱穴が多く、中には土師器皿を多数埋めてある柱穴もある。建物の地鎮に関わると思われるこれらの遺構が点在するものこの地区の特徴である。遺物整理箱で約229箱ある遺物のうち、土坑出土の土器を中心に概述する。

#### (1) 奈良時代中期の遺物

S B 7891土師器 (1)は東壁のカマド周辺で出土したもので、推定口径20.4cm、器高3.0cm、底部をヘラケズリ、口縁部をヨコナデ、内面をナデ調整する。

S B 7905土師器 (2)の杯のみ東壁カマド南側のピットから出土したもので、(3~5)の甕・長胴甕は東壁カマドから出土したものである。

(3)はカマド中央部で倒立しており、置台と考えられる。口径16.8cm、器高16.4cm、胴部最大径17.0cmでほぼ完形である。口縁部をヨコナデ、外面はタテハケ、内面は上半をヨコハケ、下半を底部から上方へのヘラケズリで調整する。(4)は(3)の周辺から破片で出土したもので、口径24.4cmである。口縁部をヨコナデ、外面をタテハケ、内面上半はヨコハケ、下半は縦方向のヘラケズリである。(5)も同じく(3)の周辺から破片で出土した長胴甕口縁部で、推定口径24.6cmである。口縁外面部ヨコナデ、外面はタテハケ、口縁内面ヨコハケ、内面は横方向のヘラケズリ調整である。

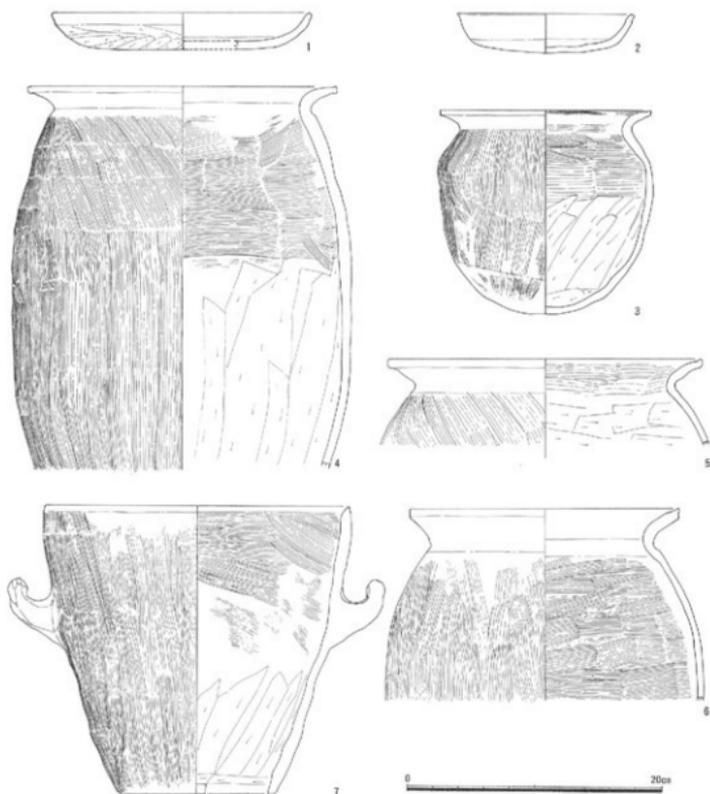
S B 7882土師器 (6・7)はS B 7882南東隅から出土したものである。

(6)は長胴甕で口径21.3cmである。口縁部をヨコナデ、外面はタテハケ、内面はヨコハケで調整する。(7)の甎は口径24.0cm、器高23.5cm、底部径11.6cm、口縁端部はヨコナデ、外面はタテハケ、内面は上半をヨコハケ、下半を縦方向のヘラケズリで調整し、底部から口縁部に向けて直線的に開く形状である。底部は残存部が少なく、半円の孔をもつものと推定される。

(2) 平安時代初期の遺物

S K 7887土師器 杯には外反する口縁をもち、口縁端部のみやや内弯する(8~12)と、底径が小さく、底部から外方にまっすぐのびる口縁をもつ(13~17)とがある。(11)は外面底部をヘラケズリ後ナデ、また(16)は底部外面をヘラケズりするほかは口縁部をヨコナデ、底部をオサエ後ナデを施すe手法で調整するものである。(11)の口縁外面立ち上がり部分には「𠄎」のヘラ描き記号、(13)の内面見込みにはヘラ描きで一本線の線刻がある。また(16)の内面には左放射暗文1段が施される。(17)の底部外面に墨痕と習書がみられるが判読はできない。

皿も杯と同様の二種類があり、平坦な底部に外反する口縁部をもち口縁端部のみ弱



第5図 第118次調査 遺物実測図 SB7891:1 SB7905:2~5 SB7882:6・7

く内湾する(18~21)と、口縁と底部の境が不明瞭で断面が弓状に立ち上がる(22~24)とがある。いずれも口縁部をヨコナデ、底部をオサエ後ナデ調整するe手法である。(20)の底部外面にはヘラ描き記号があり、1/2しか残存しないため下半を欠損するが、杯(11)のような「𠄎」記号であった可能性も考えられる。また(24)の底部外面には墨書があり、「六」と判読される。

(25)は甕で、口径16.2cmである。口縁部はヨコナデ、外面はタテハケ、内面はヨコハケで調整する。(26)は類例をみない甕で、推定口径22.2cm、推定径30.0cmの銜を口縁端部直下に有する。(27・28)は鍋で、(27)は口径20.0cm、器高9.4cm、口縁部をヨコナデし、外面はタテハケ、底部と内面は横方向のヘラケズリで調整する。丸底で底部外面に二次焼成のための赤変箇所がある。(28)は口径23.6cm、器高10.6cm、底径7.0cmと(27)よりひと回り大きく、ほぼ完形である。口縁部をヨコナデし、外面上半はタテハケ、下半から底部にかけてはヘラケズリ、内面はヨコハケを施した後ナデ調整する平底の鍋である。

### (3) 平安時代前Ⅱ期の遺物

S K 7857

(29~43)の土器のほか、緑釉陶器碗1片と土鎌1個、そして製塩土器64片が出土した土坑で、製塩土器片は比較的大きめの破片である。

土師器

外反する口縁部の端部のみ弱く内湾する(29~32)の杯と、底部と口縁の境が明瞭でなく断面が弓状になる(36~41)の杯があり、いずれも口縁部をヨコナデ、底部をオサエ後ナデ調整するe手法で調整する。杯は(29~31)の口径13.2cm~14.2cmのもの、(32)の口径16.0cmのものがある。(40)の内面には左放射暗文が1段と、底部内面に螺旋暗文が2段以上が施されているものとみられる。

皿(33~35)は底部が平坦で、口縁が外反する。いずれも口縁部はヨコナデ、底部をオサエ後ナデ調整するe手法である。口径は15.6cm~16.6cmである。

甕(43)は土坑底部で正立した状態で出土したもので、口径17.0cm、器高16.1cm、胴部最大径18.2cmである。口縁部はヨコナデ、外面は粗いタテハケメ、下半は横方向のヘラケズリ、内面はナデ調整する。底部の一部が剥離する箇所があるが完形である。

灰釉陶器

(42)の碗は口径15.2cm、器高4.5cm、高台径7.6cm、約1/2残存し灰釉は刷毛塗りともみられる。

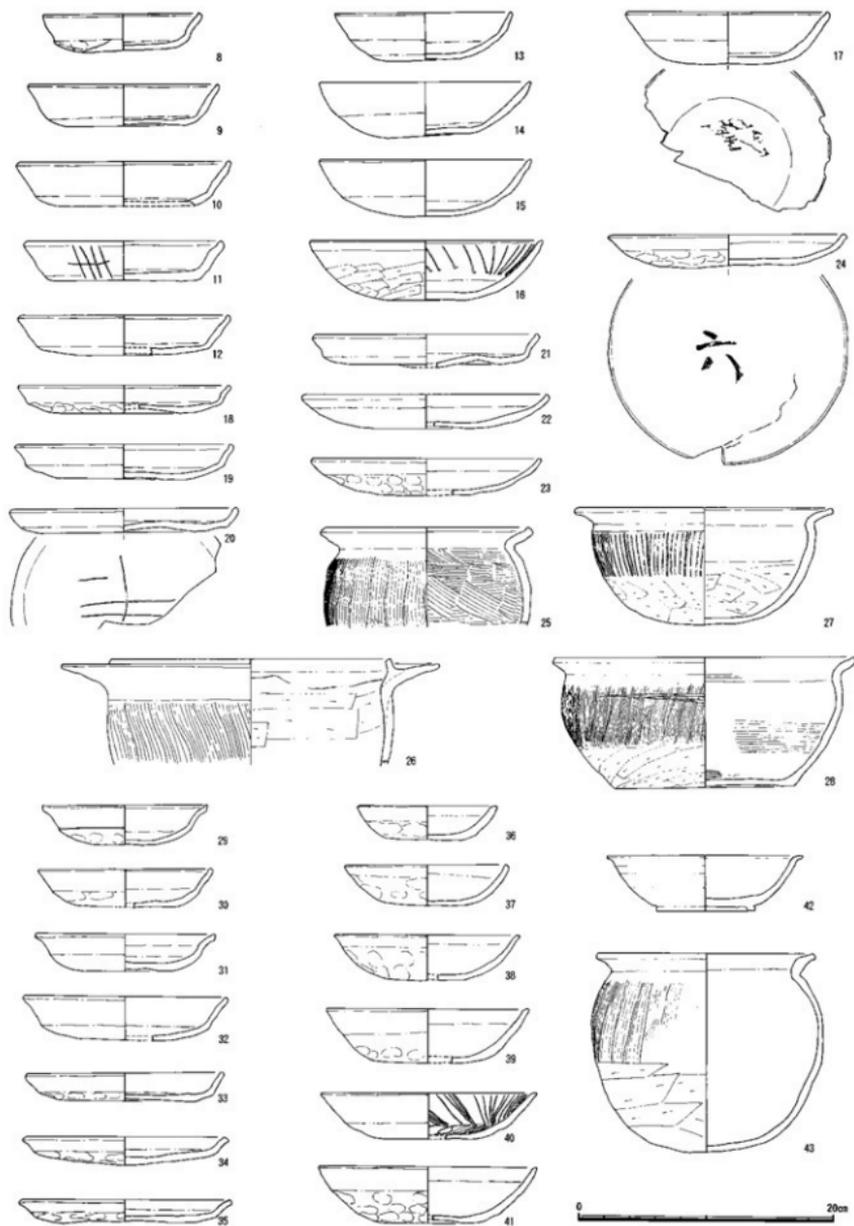
### (4) 平安時代後Ⅰ期の遺物

S B 7864土師器

S B 7864南西隅の柱穴から小皿26点以上、皿1点、ロクロ土師器小皿2点出土したものである。小皿(44~57)は口径8.2cm~9.4cm、器高1.4cm~1.9cmとほぼ同寸大で柱穴内に上向きに重なっていた。いずれも口縁端部のみヨコナデし、内外面はオサエ後ナデ調整され、断面が弓状となる。(58)の皿は口径15.6cm、器高3.3cm、口縁端部のみヨコナデ、底部はオサエ後ナデ調整する。この皿のみ小皿の脇に立てかける形で出土したものである。

S B 7863土師器

(59~64)の小皿と(65・66)の皿もS B 7863の南面庇の柱掘形から出土したものである。(59~64)の小皿は、口径8.6cm~9.5cm、器高1.6cm~2.0cmでほぼ同寸大であるが、S B 7864出土の小皿ほど丁寧に重ねられてはならず、数量的には多いものの、比較的無秩序に様々な向きで出土したものである。いずれも口縁端部のみヨコナデし、断面弓状のものである。(65・66)は口径13.6cmと14.6cm、器高は3.1cmと3.7cm、口縁端部の



第6図 第118次調査 遺物実測図 SK7887: 8~28 SK7857: 29~43

みヨコナデし、底部をオサエ後ナデ調整する。

#### (5) 平安時代後II期の遺物

- S K 7877土師器 (67~71)のほかは一部が欠損するものばかりであるが、数量的には多く出土する。(67~69)は小皿で、口径9.6cm~10.2cm、器高2.2cm~2.4cmである。口縁端部のみヨコナデし、断面弓状になる。(71)は台付小皿で口径10.1cm、器高3.2cm、高台径5.9cmである。

ロクロ土師器 (70)の小皿は口径10.0cm、器高1.6cmである。底部に糸切り痕を残す。このほか口縁部を欠損するが糸切り痕を残す底部破片が出土している。

- S K 7867土師器 (72~77)の皿は口径13.0cm~14.6cm、器高2.3cm~3.0cm、口縁端部のみヨコナデし、底部をオサエ後ナデで調整する。(78~81)の小皿は口径7.8cm~8.1cm、器高1.0cm~1.7cm、断面が弓状のものである。土坑底部にまとまって出土したもので、これらのほかに緑釉陶器椀片・青磁片が出土した。

#### (6) 平安時代末期の遺物

- S K 7853土師器 (82~84)の小皿は口径8.6cm~8.8cm、器高1.4cm~1.6cm、断面が弓状のものである。(85)の皿は口径14.8cm、器高3.3cmで口縁端部のみヨコナデし、底部は強いオサエ後荒いナデを施す。

山茶椀 (86)の椀は推定口径15.2cm、器高5.6cm、推定高台径7.2cmで底部には糸切り後荒いナデを施す。

- S K 7873土師器 (87~90)の小皿は8.0cm~8.6cm、器高1.3cm~1.5cmの断面弓状のものである。(92)はコースター形皿で口径8.6cm、器高1.4cmである。約1/2残存し、微細な雲母片を含み、比較的丁寧なオサエ後ナデで調整される。(93・94)の皿は口径13.6cm~15.8cm、器高2.7cm~3.0cmで、(94)の皿は口縁端部を斜め上方につまみ上げる。

ロクロ土師器 (91)の小皿は口径9.2cm、器高1.8cm、底部外面に糸切り痕を残す。

山茶椀類 (95)は小皿で口径9.6cm、器高2.6cm、高台径4.3cmでロクロ回転は右回りである。(96)の椀は口径16.6cm、器高5.4cm、高台径6.8cm、高台に初穀痕を残す。

- S K 0247 土師器を中心に出土し、土錘、緑釉陶器椀片、青磁・白磁片が出土する。

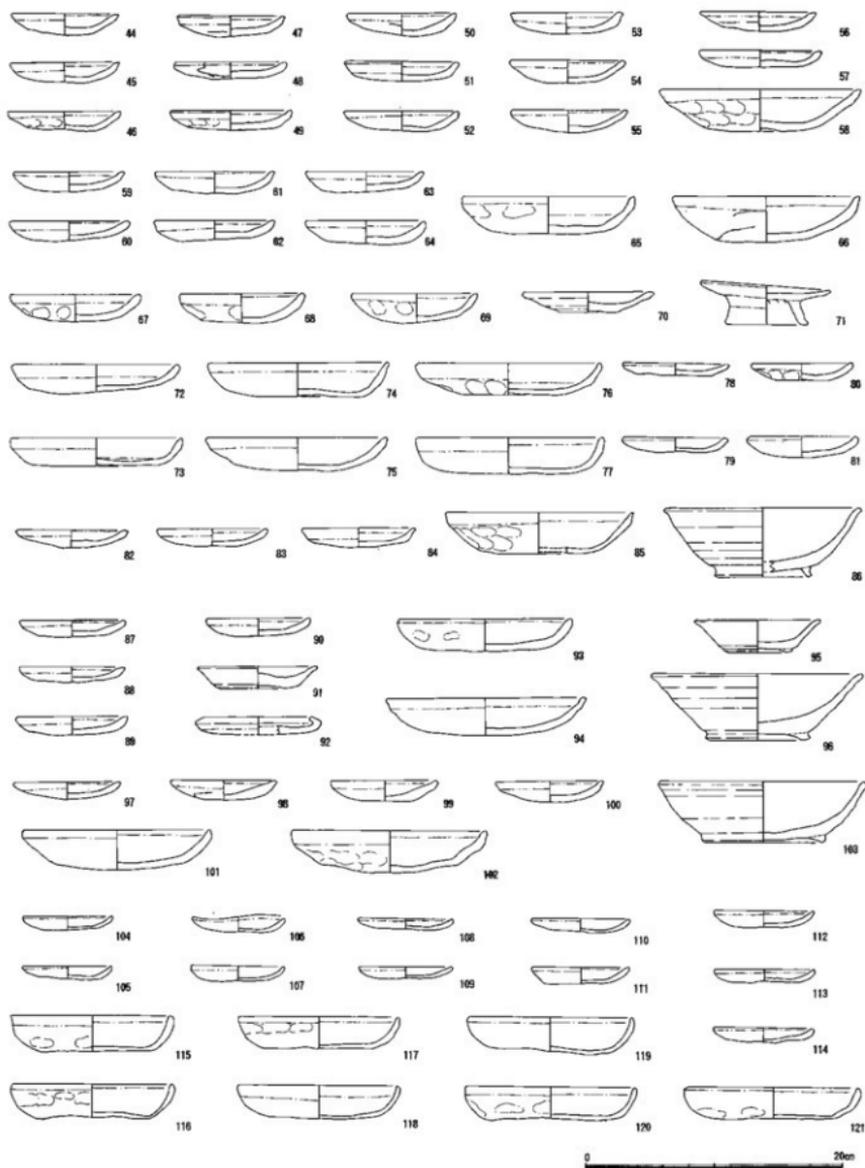
土師器 (97~100)は小皿で、口径8.2cm~8.4cm、器高1.4cm~1.8cm、口縁端部が特に肥厚する。(101・102)の皿は口縁端部のみ真直ぐ上方に引き上げ、口径14.8cm~15.2cm、器高3.2cm~3.4cmのもので(102)は指オサエの跡を明瞭に残す。

山茶椀 (103)は口径16.2cm、器高4.9cm、高台径9.2cmの椀で、底部外面はヘラ切り後未調整である。

#### (7) 鎌倉時代の遺物

- S K 7868土師器 (104~114)の小皿は口径7.0cm~7.8cm、器高1.0cm~1.4cmで断面弓状のものである。この土坑からは多くの小皿が重なって出土し、小皿と小皿の間からは朱の剥離片がみられた。(114~121)の皿は口径12.2cm~13.2cm、器高2.6cm~3.0cm、口縁端部のみヨコナデし、底部は厚みが薄くオサエ後ナデ調整する。完形で出土するものは少ないが、量的には小皿とほぼ同量出土している。

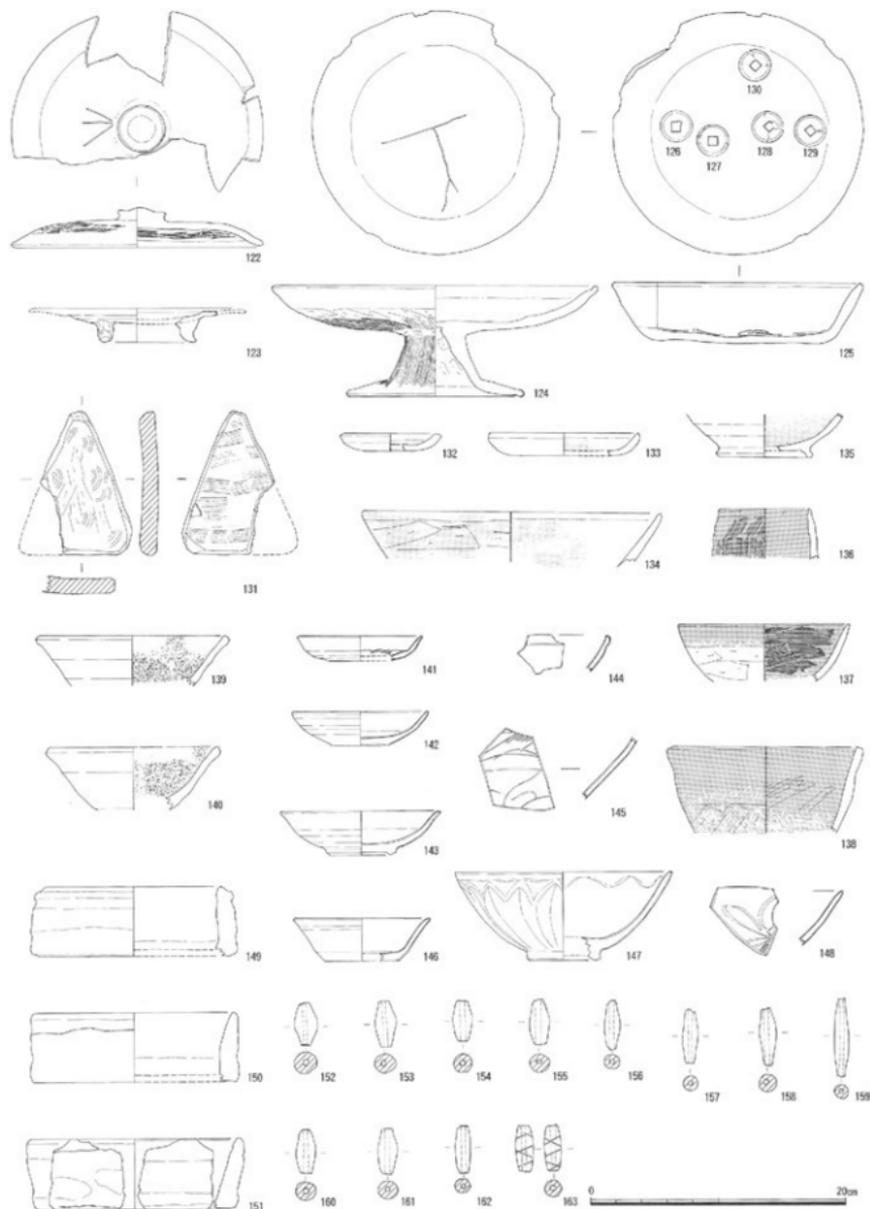
この他に、緑釉陶器、朱付着土器、漆付着土器が出土した。



第7図 第118次調査 遺物実測図 SB7864 : 44~58 SB7863 : 59~66 SK7877 : 67~71 SK7867 : 72~81  
 SK7853 : 82~86 SK7873 : 87~96 SK0247 : 97~103 SK7868 : 104~121

(8)その他の遺物

- ヘラ描き土器 (122)はS B 7900出土の土師器蓋で、推定口径20.1cm、器高3.2cm、口縁部ヨコナデ、内外面は横方向のミガキ、つまみは口径からの中心をやや右にずらした位置につけられる。天井部に三本線のヘラ描き記号「ㄱ」がある。
- 灰釉陶器三足盤 (123)はS B 7886出土の三足盤の脚部である。残存高は2.5cm、推定口径は16.0cm前後になるものと考えられる。
- S X 7860 (124)の土師器高杯は、(125)の杯に杯部を被せる状態で出土したもので、口径25.4cm、器高8.8cm、脚径13.8cmである。口縁部はヨコナデ、外面はケズリ、脚部接合部から脚部にかけてタテハケ、脚端部はヨコナデ、杯部内面はナデ調整する。口縁部は完形で、脚部は約1/2のみ残存する。
- 高杯 (125)の土師器杯は口径19.2cm、器高4.8cm、口縁部はヨコナデ、外面はオサエ後ナデ、内面はナデ調整される。底部内面に「和同開珎」5枚(126~130)がすべて背面を上にして入れられていた。「和同開珎」の大きさはすべて径2.55cm、方孔0.75cm×0.75cm、縁幅0.2cmで、(126)は中央の方孔隅部がわずかに欠損するがほぼ完存する。(127)は欠損はみられず良好な状態で残存する。(128)が最も腐食・破損がひどく半分が粉碎する。(129)も良好な形で残存するが、方孔脇に小穴がみられる。(130)は縁の一部を欠損、また方孔の脇に小穴がみられる。銅銭の重量は(126)が1.31g、(127)が1.22g、(129)は1.42g、(130)は1.49g、(128)は粉状に破損しているため計測不可能であった。銅銭背面は5枚とも無地であった。なお、この銅銭には繊維の付着痕跡がみられ、(付編1「第118次調査出土と銅開珎付着物の分析」参照)、杯に直接入れられたものではなく布を敷いて、あるいは袋状のものに入れられて杯に納められたものと考えられる。また、この杯の外面底部にはヘラ描きの記号・「ㄱ」がある。記号とも考えられるが、「丁」と判読することも可能である。
- 杯和銅開珎
- 朱付着土器 調査区中央部の遺構上面、S B 7890・7895からの出土が注目され、掲載の4点を含む11点が出土した。
- (132)はS B 7890出土の土師器皿で内面に朱が付着している。口径7.4cm、器高1.4cmの小皿である。(133)はS K 6659出土の土師器皿内面に朱付着の痕跡がみられる。(134)は土師器鉢とみられる口縁破片で、口縁内外面とも朱の付着痕跡が認められる。(135)は灰釉陶器碗の内面を朱墨の転用硯として使用したものである。高台径6.8cm、残存高3.6cm、残存する内面一面に朱墨の擦痕がみられる。
- 漆付着土器 掲載の2点のほかは調査区南半の遺構上面から出土し、掲載の2点を含む6点が出土している。遺構上面からの出土であるが、灰釉陶器あるいは山茶碗への付着例が多いが、土師器杯への付着もみられる。
- (139)はS K 7868出土の山茶碗口縁破片で、口縁内壁に漆膜が付着する。推定口径14.7cmである。(140)も同じく山茶碗口縁破片でS D 7869で出土した。推定口径13.4cmで口縁内壁に漆膜が付着する。
- 黒色土器 (136)は鉢の口縁部破片である。推定口径7.0cm、残存高3.8cmで口縁内外面ヨコナデ、外面を縦方向のヘラガキを施す。内外面とも黒化処理を施す。(137)は黒色土器A類の碗口縁破片で、推定口径13.4cm、残存高4.6cm、口縁端部はヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面は横方向のヘラミガキを施す。(138)はS K 7879出土の鉢かと思われる口縁



第8図 第118次調査遺物実測図

ヘラ描き土器：122 灰釉陶器三足盤：123 S X 7860出土遺物：124~130

須恵器転用硯：131 朱付蓋土器：132~135 黒色土器：136~138

漆付蓋土器：139・140 青磁・白磁：141~148 製塩土器：149~151 土鍾：152~163

破片で、口径14.4cm、残存高6.9cmである。口縁端部をヨコナデ、内外面をヘラケズリ調整する。内外面とも黒化処理が施される。

#### 青磁・白磁

青磁・白磁の出土は多く、青磁片68点、白磁片94点と特に白磁の出土数が目立つ。白磁片の中には玉緑口縁破片は26点含まれる。(141~145)は白磁片である。(141)は口径9.8cm、器高2.0cmの小皿で、見込みに陰刻文がみられるが底部を欠損する。内外面とも乳白色の施釉がみられ、胎土は灰白色である。(142)の小皿は口径10.8cm、器高2.7cm、底径4.4cmで約1/2残存する。底部は露胎で、ほかは内外面とも均質に施釉される。(143)の皿は口径12.6cm、器高3.5cm、高台径4.8cmで、高台内面のみ露胎で底部以外全面に均質に施釉される。(144)は玉緑口縁の破片で、内外面に均質に施釉されている。(145)は椀の体部破片であると思われる、内面に陰刻で花文が描かれる。内外面ともに均質な白色の施釉がなされる。

(146~148)は青磁の破片である。(146)は皿で口径10.6cm、器高3.4cm、底径4.0cmである。底部は露胎で、ほかは均質に灰緑色の施釉がなされる。(147)は椀で口径17.2cm、器高7.0cm、高台径4.8cmである。全面に暗灰緑色の施釉がなされる。(148)は椀口縁破片で残存高5.2cmである。内面に陰刻の花文がみられる。

#### 製塩土器

調査区北辺で破片が集中して出土しており、特にS K 7857で64点、S K 7861で29点の集中した出土が見られた。(149)は口径14.0cm、器高5.5cmのものである。胎土が粗く砂粒を多く含む。(150・151)はS K 7857出土のものである。(150)は残存状況が良好で、口径15.6cm、器高5.5cm、胎土は砂粒を多く含む。(151)は推定口径16.6cm、器高5.7cmのもので、胎土には同じく砂粒を多く含む。

#### 土錘

調査区北半に集中し、総計162点出土した。多くは柱穴からの出土であり、S B 7890の柱掘形からは4点出土する。また各々1点ずつではあるが、S B 7890周辺で頻繁に建替えが行われる大型東西棟建物の柱穴からも出土がみられる。算盤玉状のもの(152~155・160・161)、筒状のもの(156~158・162・163)、細長いもの(159)の3タイプがみられるが、算盤玉状のものが圧倒多数で、細長いものは少ない。(153・155・157~159・161・163)は磨滅した面がみられる。また(163)は包含層出土であるが外面に網目状の線刻がみられる。

#### 緑釉陶器

調査区内での緑釉陶器の出土は、実測可能な破片が少なく小破片ばかりであるが、総計74点が出土した。主として椀類の破片であるが、S K 7862では段皿口縁破片を含む12点、S B 0250の柱掘形からは瓶類の口縁破片を含む4片が出土している。

#### 円面硯・転用硯

S B 7875の柱掘形から灰釉陶器の円面硯小破片が出土したほか、S K 7876・S D 7869から山茶椀の転用硯が各1点ずつ、またS B 8900からは須恵器の転用硯が1点の総計4点の出土があった。

#### 須恵器転用硯

(131)は須恵器甕の体部破片で、甕内面を硯として転用した硯と思われる。推定底辺9.0cm、全長11.4cmの二等辺三角形形状で、端部の成形は丁寧に行っていないものの、角はかなり丸みを帯びているので、粗略な成形は行ったものとみられる。同心円状のタタキメの面に墨の擦痕がみられる。外面は平行タタキメが残るが、残存状況が悪い。

#### 習書土器

S B 7890の柱掘形から土錘、緑釉陶器片とともに底部に筆揃えの跡と習書とみられる墨書がある土器器皿の破片が1点出土する。墨書の判読は不可能である。

#### 4 まとめ

今回の調査によって、東西両側の調査からでは予想できなかった宮ノ前南ブロック南東部の奈良時代から平安時代前半期の遺構の推移がたどれるようになった。しかし平安時代後期以降の遺構の集中は今回調査区内でも顕著にみられ、さらに現況の畑表土から遺構検出面までの深さが約30cm足らずと非常に浅かったために受けた攪乱も少なくはなかった。その中で検出された建物の地鎮に関わるとみられる遺構について、また周辺調査区ではみられなかった大型の掘立柱建物と方格地割の区画道路との位置関係について若干概述しておきたい。

#### S X 7860と周辺 の地鎮遺構

これまで東西両隣の調査において、平安時代中期の地鎮遺構と思われる土坑内の土師器壺＋「延喜通寶」銭＋土師器杯のセットが出土しており、このことからこの2地点を一辺としてこれに直交する辺あるいは対辺の両端に同様の遺構が存在することなどが指摘されていた。今回のS X 7860は前2例よりもかなり廻るもので銅銭の外容器の共通性もない。しかし前2例を結ぶライン上にこのS X 7860のものも、このラインの方向が方格地割の区画道路の向きE 4° Nに揃ってくるということからも、奈良時代後期に整備されたと考えられている方格地割の区画内には入らない当該地区ではあるが、大型掘立柱建物等の遺構は区画に対応して整えられたものと考えことができ、さらに宮ノ前南ブロック南東隅、当初段階の方格地割からすれば北西(戌亥)隅のこの場所が個別の建物でなく、方格地割の地鎮に関わる区域であった可能性も考えられる。

#### 大型掘立柱建物 と方格地割

S B 7880をはじめ、S B 7890→7896→7895→7870とほぼ同じ場所でも繰り返し建て替えられる東西棟の庇をもつ大型掘立柱建物と方格地割との位置関係をみると、これらの大型の東西棟建物は区画道路の南北道路西側溝から約20m、東西道路北側溝推定延長線から約15mの距離をおいて建てられており、この距離に固執した規格性がうかがわれる。この一帯の中心的建物として建て替えが繰り返し行われたと推測される大型の東西棟建物であるが、時期別にみると、平安時代前期までは地形としては比較的高地である一帯を広く十分に活用して建物を建てている分布を示している。また、今回調査区のある宮ノ前南ブロックでは南東隅に偏りがあるが、約70m北で調査した第78次調査では同じ大型の東西棟建物でも平安時代初期には廃絶していると想定される奈良時代古道の方位に規制されており、その基準となる軸をそれぞれ最寄りの主要道路およびその遺制に求めている感がある。

一方、この様相が平安時代後期に入ると、方格地割の北西隅の外周をとりまく道路区画が整うにも関わらず、宮ノ前ブロックの南東隅、特に南北道路西側溝寄りの地点に集約して建つ傾向がみられる。

こうした区画内の建物配置には、時期的に、また方格地割の北西隅4区画という周辺をみても一辺約120mの区画内全域を統一的に規格構成していたものではなく、主要道路に対する正面感を意識していたものと思われる。

周辺の調査では希薄であった平安時代初期前後の遺構の分布を確認することができ、大きな成果を得ることができた。またS X 7860出土遺物から土師器を中心とする土器編年にも今後検討を要するとともに、周辺調査地との総合的な検討が必要となってくるものと考えられる。

(大川 操)



### Ⅲ 第119次調査

(6AFM-E・G 鍛冶山地区)

#### 1 はじめに

#### 経 過

奈良時代後期から平安時代初期にかけて史跡東部に造営された方格地割は一辺120mを基準とする東西7列、南北4列の方形区画によって構成されるが、東から3列目の西加座北、西加座南ブロックは中央に10mの道路が通るため東西幅が130mと広がる。第119次調査は平成9年度第2回目の計画調査として、近年の調査によって、欄列が二重に巡っていたことが明らかとなるなど、他のブロックと異なる様相を見せ、中枢部とみられる鍛冶山西ブロックにおいて実施した。

#### 目 的

今回の調査は、外郭欄列や規則的に配置された大型掘立柱建物、内郭欄列の存在を確認した平成4年度の第98次調査、平成6年度の第105次調査、平成7年度の第109次調査をはじめとするこれまでの調査成果をふまえ、「内院」と推定される鍛冶山西ブロック全体の構造解明と、その性格を明らかにすることを目的とした。調査は第98次調査と近鉄宇治山田線との間に調査区を設置し、面積697㎡を対象に平成9年7月30日から12月18日まで実施した。

#### 現 況

調査地の現況は畑地で標高10.0m～10.4m前後で東に向かって緩やかに傾斜する。遺構面は約0.2mの耕作土（黒色土）と約0.4mの遺物包含層（黒褐色粘質土）を除去した時点で確認した。遺構面（地山）は黄褐色粘土で、一部赤褐色粘土の部分も見られた。遺構検出面の標高は、調査区の西で10.4m、東で9.6m前後である。



第10図 第119次調査 調査区位置図(1:2,000)

## 2 遺 構

今回の調査では、弥生時代から平安時代中期までの竪穴住居1棟、掘立柱建物14棟、井戸1基、土坑11基、溝1条、方形周溝墓1基などを検出したが、そのうち10棟の掘立柱建物は鍵型に配置されている。なお、第98次調査で確認された外郭東辺柵列S A 6770、S A 6790は検出されたが、第109次調査で確認され、その延長が想定された内郭柵列北辺S A 2705の延長は検出されなかった。

### (1) 弥生時代の遺構

S B 7951

調査区南西隅で検出した方形の竪穴住居である。南半は後世の溝によって破壊されているが、東西長約4.0m、検出面からの深さは約10cm～50cmである。高杯、壺底部片が出土している。

S X 7945

調査区南東隅で検出した一辺約7.8m、周溝の幅約0.6m～0.8mの方形周溝墓である。東周溝中央やや北寄りが途切れる。西側周溝は後世の遺構によって破壊された可能性もあるが確認されなかった。南辺は調査区外へと続く。周溝埋土は黒褐色土である。周溝北東隅の埋土中から高杯の脚部2個体分が出土した。

### (2) 奈良時代後期の遺構

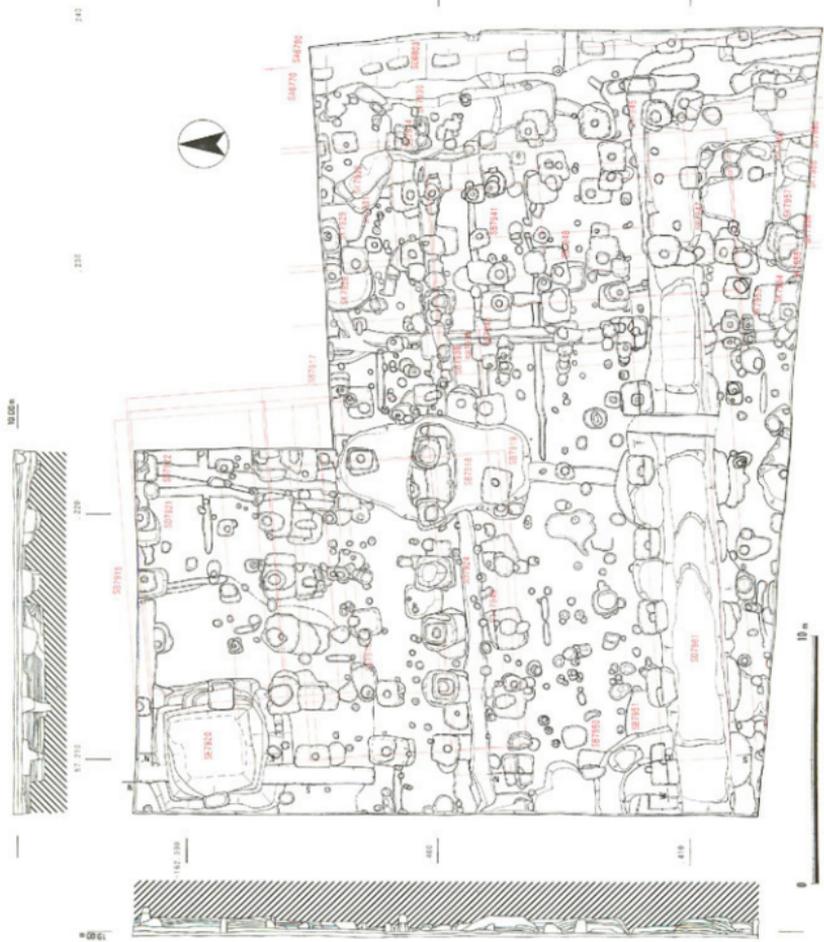
この時期の遺構として、掘立柱建物2棟、井戸1基、柵列1条がある。

S B 7941

調査区東半で検出した桁行3間×梁行2間の南北棟で、後述する同時期の掘立柱建物S B 7950の北側柱と北妻柱筋を揃える。柱間は桁行2.4m等間、梁行1.8m等間、棟方向はN4°Wである。柱掘形は一辺約0.6mの略方形で、柱痕跡は径25cm前後である。平安時代初期の掘立柱建物S B 7947との重複関係からこの時期の遺構としたが、3間×2間という建物規模やS B 7950と区画の正面と考えられる南ではなく、北側妻柱を揃えることなどからS B 7950との併存は考えにくい。奈良時代後期以前の古い時期の建物である可能性も考えられる。

		遺 構 の 種 別						
		S B	S A	S E	S K	S D	S S	S X
弥生	後 期	7951						7945
奈良	後 期	7941 7950	6770	7920			7952	
平	初 期	7918 7919 7947 7948	6790					
	前Ⅰ期	7915 7916 7917 7938 7939 7940	6790					
	前Ⅱ期	7933 7934	6790		7928 7929 7930 7931 7932			
安	中 期				7955 7956 7957 7958 7959 7960	7924		
時期 不明					7953 7954	6803 7921 7922 7923		

第3表 第119次調査 時期別遺構分類表



第11圖 第119次調査 遺構実測図 (1:200)

S B 7950

調査区西半で検出した南北に庇が付く桁行6間×梁行4間の東西棟である。柱間は桁行2.95m等間、梁行3.0m等間、庇出は北庇が2.1m、南庇で2.7mと2尺分南が広い。棟方向はE4°Nで、外郭北辺横列S A 6760と柱筋を揃える。また、身舎の北側柱筋は、第109次調査検出のS B 7385の北側柱と筋を揃える。身舎の柱掘形は、上端で一辺1.3m～1.5m、下端で0.7m～1.2mのやや東西に長い方形で深さは検出面から0.9m～1.1m（標高8.8m前後）、柱痕跡は径約45cmである。この柱掘形・柱痕跡の規模は建物の規模（桁行17.7m、梁行10.8m）と併せ、齋宮跡で最大級のものである。柱掘形の埋土は、基本的に地山を形成する黄褐色粘土・黄褐色砂質土・明赤褐色粘土と黒褐色土（黒ボク土）の互層から成り、細かく分層されるものと大きなまとまりを持つものとに分けられる。柱穴埋土には10cm前後の石が多量に含まれる。この石は、柱の据わる位置に布設した状態にはないため、直接根固めに用いられていたものとは考えにくく、地山に含まれていたものをそのまま埋め戻したものと考えられる。また、ほとんどの柱掘形に柱抜き痕が確認されている。抜き取りの方向は、建物の外に向かうものが多いが、建物の桁方向に沿ったものもある。柱痕跡の底は、若干他の箇所より固く締まっている程度で、沈下を防ぐための礎盤などの痕跡は認められなかった。柱掘形からの遺物としては土師器杯片や須恵器の破片がわずかに出土している。

庇の柱掘形は、北庇で長辺1.5m～2.0m、短辺1.0m前後の長楕円形である。南庇は北半分をS D 7961によって削平されているが、北庇と同規模であったと考えられる。したがって、南庇の規模を復元した場合に庇出は2.4m（8尺）では短すぎるため、2.7m（9尺）になると判断される。検出面からの深さは約0.3m～0.4mと浅い。埋土は身舎と異なり黒褐色土（黒ボク土）で、柱痕跡は確認できなかった。出土遺物は全くみられない。

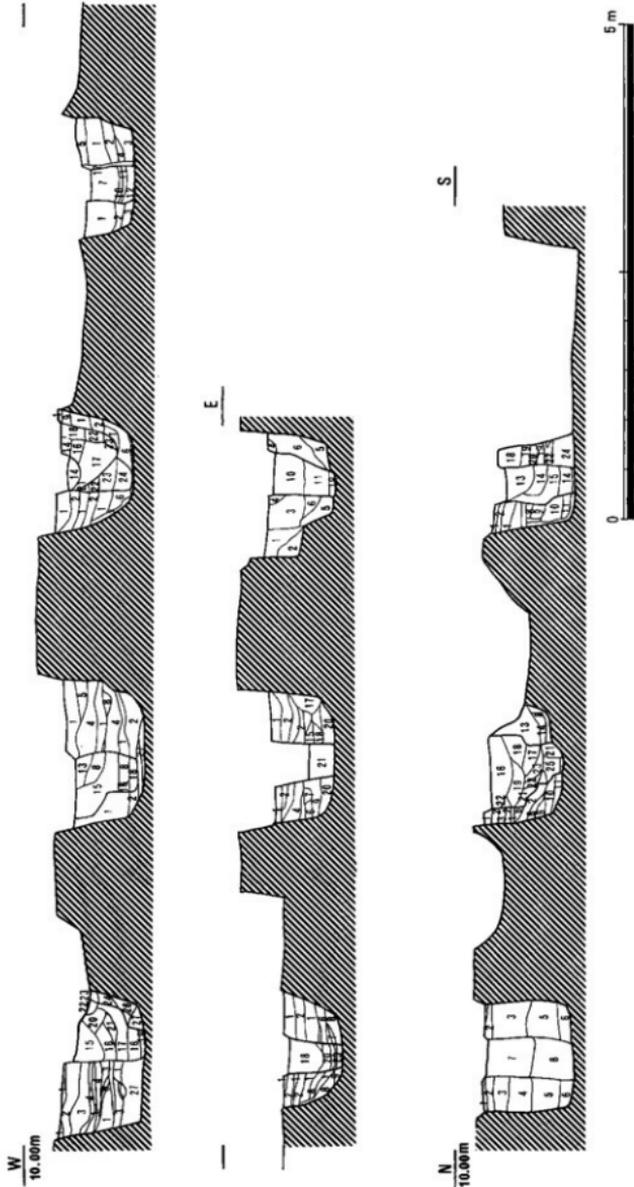
S B 7950の南庇の南に約1.0m隔てて並行する柱間3.0mの柱穴列を6間分確認しているが、性格などは不明である。

S A 6770

調査区東辺の南北溝S D 6803の埋土を取り除いた後に第98次調査で確認された外郭東辺横列の延長部分の北東角から14間目に相当する1間分を検出した。柱間は2.94m（10尺）である。柱穴はS D 6803によって東半が削平されており完全には確認できなかった。確認できた深さは15cm～25cmだが、検出面から復元すると0.6m前後になる。南延長部分については、外郭西辺横列S A 1411や後出のS A 6790が確認されていることから、さらに南へ延長することが予想されるが、S D 6803が浅くなるため途切れることも考えられる。そうした場合、S A 6770の機能は間仕切りのなものであった可能性も考えられる。

S E 7920

調査区北西隅で検出した鍛冶山西ブロックで初めて確認された方形の井戸である。検出面で一辺約5.2m、0.8m掘り下げた地点で一辺約3.6mになり、そのまま底までほぼ垂直に下がる。作業の安全上、東側2/3について約1.6m掘削した後、以下は全体の1/2を掘り下げた。検出面から約2.8mのところまで井戸枠の痕跡と考えられる一辺約2.0mの正方形の暗褐色粘土層が確認され、約3.5mの地点で暗褐色粘土層の中に一辺約1.8mの暗緑灰色粘土層を検出するとともに、その南辺から井戸枠と思われる長さ約1.2mの材木片を確認した。材木片は残存状況が悪く、両端が腐食し、加工痕なども確認できない状態である。



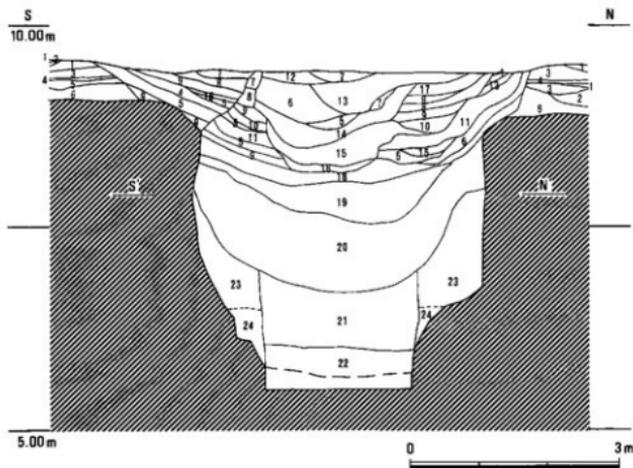
第12図 S B 7950柱標形土層断面図 (1 : 50)

- ①暗黄褐色粘質土 10YR5/6 (1~2cm水浸含む)
- ②暗赤褐色粘質土 5YR5/6に明黄褐色粘質土 10YR5/6混入 (1~2cm水浸含む)
- ③暗赤褐色粘質土 10YR5/6に明黄褐色粘質土 5YR5/6混入 (1~2cm水浸含む)
- ④暗黄褐色粘質土 10YR5/6に明黄褐色粘質土 10YR5/6混入 (1~2cm水浸含む)
- ⑤暗黄褐色粘質土 10YR5/6に明黄褐色粘質土 10YR5/6混入 (1~2cm水浸含む)
- ⑥暗黄褐色粘質土 10YR5/6に明黄褐色粘質土 10YR5/6混入 (1~2cm水浸含む)
- ⑦暗黄褐色粘質土 10YR5/6に明黄褐色粘質土 10YR5/6混入 (1~2cm水浸含む)
- ⑧暗黄褐色粘質土 10YR5/6に明黄褐色粘質土 10YR5/6混入 (1~2cm水浸含む)
- ⑨暗黄褐色粘質土 10YR5/6に明黄褐色粘質土 10YR5/6混入 (1~2cm水浸含む)
- ⑩暗黄褐色粘質土 10YR5/6に明黄褐色粘質土 10YR5/6混入 (1~2cm水浸含む)
- ⑪暗黄褐色粘質土 10YR5/6に明黄褐色粘質土 10YR5/6混入 (1~2cm水浸含む)
- ⑫暗黄褐色粘質土 10YR5/6に明黄褐色粘質土 10YR5/6混入 (1~2cm水浸含む)
- ⑬暗黄褐色粘質土 10YR5/6に明黄褐色粘質土 10YR5/6混入 (1~2cm水浸含む)
- ⑭暗黄褐色粘質土 10YR5/6に明黄褐色粘質土 10YR5/6混入 (1~2cm水浸含む)
- ⑮暗黄褐色粘質土 10YR5/6に明黄褐色粘質土 10YR5/6混入 (1~2cm水浸含む)
- ⑯暗黄褐色粘質土 10YR5/6に明黄褐色粘質土 10YR5/6混入 (1~2cm水浸含む)
- ⑰暗黄褐色粘質土 10YR5/6に明黄褐色粘質土 10YR5/6混入 (1~2cm水浸含む)
- ⑱暗黄褐色粘質土 10YR5/6に明黄褐色粘質土 10YR5/6混入 (1~2cm水浸含む)
- ⑲暗黄褐色粘質土 10YR5/6に明黄褐色粘質土 10YR5/6混入 (1~2cm水浸含む)
- ⑳暗黄褐色粘質土 10YR5/6に明黄褐色粘質土 10YR5/6混入 (1~2cm水浸含む)
- ㉑暗黄褐色粘質土 10YR5/6に明黄褐色粘質土 10YR5/6混入 (1~2cm水浸含む)
- ㉒暗黄褐色粘質土 10YR5/6に明黄褐色粘質土 10YR5/6混入 (1~2cm水浸含む)
- ㉓暗黄褐色粘質土 10YR5/6に明黄褐色粘質土 10YR5/6混入 (1~2cm水浸含む)
- ㉔暗黄褐色粘質土 10YR5/6に明黄褐色粘質土 10YR5/6混入 (1~2cm水浸含む)
- ㉕暗黄褐色粘質土 10YR5/6に明黄褐色粘質土 10YR5/6混入 (1~2cm水浸含む)
- ㉖暗黄褐色粘質土 10YR5/6に明黄褐色粘質土 10YR5/6混入 (1~2cm水浸含む)
- ㉗暗黄褐色粘質土 10YR5/6に明黄褐色粘質土 10YR5/6混入 (1~2cm水浸含む)
- ㉘暗黄褐色粘質土 10YR5/6に明黄褐色粘質土 10YR5/6混入 (1~2cm水浸含む)
- ㉙暗黄褐色粘質土 10YR5/6に明黄褐色粘質土 10YR5/6混入 (1~2cm水浸含む)
- ㉚暗黄褐色粘質土 10YR5/6に明黄褐色粘質土 10YR5/6混入 (1~2cm水浸含む)
- ㉛暗黄褐色粘質土 10YR5/6に明黄褐色粘質土 10YR5/6混入 (1~2cm水浸含む)
- ㉜暗黄褐色粘質土 10YR5/6に明黄褐色粘質土 10YR5/6混入 (1~2cm水浸含む)
- ㉝暗黄褐色粘質土 10YR5/6に明黄褐色粘質土 10YR5/6混入 (1~2cm水浸含む)
- ㉞暗黄褐色粘質土 10YR5/6に明黄褐色粘質土 10YR5/6混入 (1~2cm水浸含む)
- ㉟暗黄褐色粘質土 10YR5/6に明黄褐色粘質土 10YR5/6混入 (1~2cm水浸含む)
- ㊱暗黄褐色粘質土 10YR5/6に明黄褐色粘質土 10YR5/6混入 (1~2cm水浸含む)
- ㊲暗黄褐色粘質土 10YR5/6に明黄褐色粘質土 10YR5/6混入 (1~2cm水浸含む)
- ㊳暗黄褐色粘質土 10YR5/6に明黄褐色粘質土 10YR5/6混入 (1~2cm水浸含む)
- ㊴暗黄褐色粘質土 10YR5/6に明黄褐色粘質土 10YR5/6混入 (1~2cm水浸含む)
- ㊵暗黄褐色粘質土 10YR5/6に明黄褐色粘質土 10YR5/6混入 (1~2cm水浸含む)
- ㊶暗黄褐色粘質土 10YR5/6に明黄褐色粘質土 10YR5/6混入 (1~2cm水浸含む)
- ㊷暗黄褐色粘質土 10YR5/6に明黄褐色粘質土 10YR5/6混入 (1~2cm水浸含む)
- ㊸暗黄褐色粘質土 10YR5/6に明黄褐色粘質土 10YR5/6混入 (1~2cm水浸含む)
- ㊹暗黄褐色粘質土 10YR5/6に明黄褐色粘質土 10YR5/6混入 (1~2cm水浸含む)
- ㊺暗黄褐色粘質土 10YR5/6に明黄褐色粘質土 10YR5/6混入 (1~2cm水浸含む)
- ㊻暗黄褐色粘質土 10YR5/6に明黄褐色粘質土 10YR5/6混入 (1~2cm水浸含む)
- ㊼暗黄褐色粘質土 10YR5/6に明黄褐色粘質土 10YR5/6混入 (1~2cm水浸含む)
- ㊽暗黄褐色粘質土 10YR5/6に明黄褐色粘質土 10YR5/6混入 (1~2cm水浸含む)
- ㊾暗黄褐色粘質土 10YR5/6に明黄褐色粘質土 10YR5/6混入 (1~2cm水浸含む)
- ㊿暗黄褐色粘質土 10YR5/6に明黄褐色粘質土 10YR5/6混入 (1~2cm水浸含む)

井戸底については、湧水が激しく明確にはできなかったが、第22層の下に砂礫層が存在することを確認できたことから井戸底に到達したものと判断される。この時点での標高は約5.7mである。井戸枠以外の遺物としては、建築部材片の他、桃の種や布片が出土している。

鑿井の時期は明確には判断できないが、埋戻された時期については、埋土の上層から平安時代初期以降の掘立柱建物の柱掘形が掘りこまれており、奈良時代後期の遅い時期から平安時代の早い段階に埋戻されたものと考えられる。土層観察から、中位までは短期間に埋戻されたことがうかがわれる。埋土上層からは平安時代初期の土師器杯、須恵器蓋などが出土している。

また、S E 7920の周囲は整地が行われており、一辺9.5m～10.0mの範囲を約50cm～60cmの深さまで掘り返した後、最下層に黒色土（黒ボク土）を用い、黒褐色土と黄褐色粘質土・明赤褐色粘質土を互層にして突き固めて埋戻している。平面的に見ると、S E 7920の周囲に拳大の礫を含む黄褐色土があり、さらにその周囲を幅0.5m～1.0mの黒褐色土（黒ボク土）が取り巻いている。S E 7920はこの整地土層を掘り込み形で掘削されており、整地はS E 7920の掘削に先立って、特殊な空間をつくりだすために



- |   |  |
|---|--|
| ①明赤褐色粘質土 10Y R6/6                                   | ⑩黒褐色土 10Y R3/2に赤褐色粘質土ブロック混入              |
| ②明赤褐色粘質土 10Y R5/6に灰褐色土 7.5Y R4/2混入                  | ⑪明赤褐色砂質土 5Y R5/6に黒褐色土 10Y R3/2混入         |
| ③明赤褐色粘質土 5Y R5/6                                    | ⑫黒褐色土 2.5Y R3/2                          |
| ④明赤褐色砂礫混粘質土 5Y R5/6                                 | ⑬黒褐色やや粘質土 2.5Y R3/1                      |
| ⑤黒褐色土 10Y R3/1                                      | ⑭黒褐色やや砂質土 10Y R3/2                       |
| ⑥黒褐色土 10Y R3/2                                      | ⑮黒褐色土 10Y R3/2（炭化物含む）                    |
| ⑦黒褐色土 10Y R3/2に明赤褐色粘質土粒 5Y R5/6混入                   | ⑯暗褐色土 10Y R3/3に⑩より大きい明赤褐色粘質土粒 5Y R6/6混入  |
| ⑧黒褐色土 10Y R3/2に明赤褐色粘質土 5Y R5/6わずかに混入                | ⑰暗褐色砂礫土 10Y R3/4（1cm～3cm大礫多く含む）          |
| ⑨黒褐色土 10Y R3/2に明赤褐色粘質土 5Y R5/6と明赤褐色粘質土 10Y R6/6の互層  | ⑱暗褐色粘質土 7.5Y R3/4                        |
| ⑲暗褐色土 10Y R3/3に明赤褐色粘質土 5Y R5/6混入（炭化物含む）             | ⑳暗緑灰色粘質土 7.5GY 4/1（粘質がかなり強い）             |
| ⑳暗褐色土 10Y R3/3に⑲より細かい明赤褐色粘質土粒 5Y R6/6混入             | ㉑にぶい黄色砂礫土 2.5Y R6/3（2cm～10cm大礫を多く含む、埋山層） |
| ㉑暗褐色土 7.5Y R3/2に明赤褐色砂質土 5Y R6/6混入（炭化物、3cm～10cm大礫含む） | ㉒黒褐色土 10Y R3/2（3cm～5cm大礫含む）              |

第13図 S E 7920土層断面図(1:60)

なされたものであると考えられる。整地土層で散見される礫は、整然と並べられたといった状態ではないが、拳大の礫がかなりの数確認されており、敷石状の遺構であった可能性も考えられる。また、調査区北辺の土層の観察から黄褐色土他の上層の整地が行われる前段階の柱掘形が検出され、奈良時代後期でも古い時期かさらにそれを超える時期の建物が存在したことが確認されたが、黒色土層よりも新しいことから、整地層の造成およびS E 7920の掘削時期を考えるうえで興味深いものである。

S E 7920の周囲を取り巻く黒色土は、S B 7950の柱掘形などにもみられるが、それ以外の平安時代初期以降の遺構ではほとんど見られない。

### (3) 平安時代初期の遺構

この時期の遺構としては鍵型に配置される掘立柱建物4棟、櫓列1条がある。

S B 7918・7919 調査区西半で重複する東西棟である。柱間はともに桁行2.4m等間、梁行2.7m等間、棟方向はE4°Nである。新旧関係は古いほうからS B 7918→S B 7919となる。

S B 7918は、桁行6間×梁行3間で東西にそれぞれ1間ずつの間仕切りを設ける。南面に庇が付き、庇出は約3.0mである。身舎の柱掘形は一辺1.0m～1.2mの略方形である。柱痕跡は径約35cmで、柱掘形には拳大の礫が多数含まれる。庇の柱掘形は円形で径0.7mである。東西それぞれの1間分については、庇の可能性もあるが、柱間や柱掘形の規模が身舎の柱掘形と同じであることから間仕切りと判断した。

S B 7919は、S B 7918の建て替えと考えられる桁行5間×梁行4間で南北両面に庇が付く。身舎の柱掘形は一辺約1.0m～1.2m、柱痕跡は径約35cmである。庇の柱掘形は径約0.7cmの円形で、庇出は南北ともに約3.0mである。

S B 7947・7948 調査区東半で検出した南北棟で、S B 7918・7919とセット関係になる。

S B 7947は、桁行1間以上×梁行2間、柱間は桁行、梁行ともに3.0m等間、棟方向N4°Wである。柱掘形は一辺約1.0m～1.2mで、柱痕跡は径約30cm前後である。柱掘形の埋土は黒褐色土(黒ボク土)である。

S B 7948は、柱穴の重複関係からS B 7947を北方向に約6.0mずらして建て替えたものと考えられる。桁行4間分、梁行2間を検出した。北側の一間については間仕切りとも考えられるが、桁行柱と柱筋をわずかに違えるため東柱と判断される。柱間は桁行2.4m等間、梁行2.7m等間で、庇出は約2.1mである。身舎の柱掘形は一辺約1.2m～1.4mの長方形である。

S A 6790 第98次調査で検出した外郭東辺櫓列の南延長部分で、北東隅から14間目から19間目に相当する6間分を検出し、さらに南へ延長するものと考えられる。柱掘形は一辺約0.9mの方形で柱間は2.94mである。S A 6770を建て替えたもので、約2.0m南に移動する。柱掘形は東半がS D 6803によって削平されているが一辺約1.2m、柱痕跡は約30cmである。

P it 7949 S B 7950の北入側柱西から3番目の柱穴に重複するピットである。重複関係とS B 7950の柱痕跡の柱筋とは北にずれることから、S B 7950廃絶後に掘削されたものと判断される。埋土から須恵器杯蓋と壺の口縁部の破片が出土している。

### (4) 平安時代前I期の遺構

この時期の遺構には掘立柱建物6棟あり、前代と同様に南北棟と東西棟が鍵型に配置され、3期にわたって建て替えを行っている。

S B 7915~7917 調査区西半北隅で検出したS B 7918・7919の建て替えと考えられる重複する3棟の東西棟である。いずれも南面に庇が付く。北庇は調査区外のため確認されていないが、S B 7919のように両面庇であった可能性もある。柱間はいずれも桁行2.4m等間、梁行2.7m等間、棟方向はE4°Nである。新旧関係は柱掘形の重複からS B 7915→S B 7916→S B 7917となる。

S B 7915は、桁行4間分、梁行3間分を検出した。ただし、庇は5間分を検出しており、調査区外へさらに1間延び、桁行5間×梁行3間の建物になると考えられる。庇出は2.4mである。身舎の柱掘形は一辺約0.8m~0.9mの略方形で、庇の柱掘形は径0.6m~0.9mの楕円形である。柱痕跡はS B 7916・7917の重複によって破壊されており、確認されなかった。

S B 7916は、桁行4間分、梁行3間分を検出した。庇出は3.0mである。身舎の柱掘形は一辺約1.0m~1.2mの略方形で、庇の柱掘形は径約4.0mの円形である。柱痕跡はS B 7917の重複によって残っていない。S B 7915と同様に南庇は5間分を検出しており、桁行5間×梁行3間の建物であると考えられる。

S B 7917は、桁行4間分、梁行3間分を検出した。庇出は2.7mである。身舎の柱掘形は一辺約0.4m~0.5mの略方形で、柱痕跡は明確にはできなかったが、拳大の礫がかたまっている箇所があり、柱を抜いた痕に放り込んだものと推定される。庇の柱掘形は円形で径約35cm~40cmである。S B 7915・7916と同じ桁行5間×梁行3間になると考えられる。

S B 7938~7940 S B 7947・7948に続く掘立柱建物である。調査区東半で重複する桁行5間×梁行3間の南北棟で、いずれも西面に庇が付く。棟方向はN4°Wである。新旧は柱掘形の重複関係からS B 7938→S B 7939→S B 7940の順となる。

S B 7938は、桁行2.4m等間、梁行2.7m等間、庇出2.7mで、身舎の柱掘形は略方形で一辺約1.1m~1.2mである。柱痕跡は径約40cmの円形である。

S B 7939は、S B 7938とはほぼ同じ位置にやや規模を縮小して建替えたものである。桁行2.4m等間、梁行2.4m等間、庇出2.1mで、身舎柱掘形は一辺約0.6m~0.8mの略方形である。庇の柱掘形は径約40cmである。

S B 7940は、桁行2.4m等間、梁行2.7m等間、庇出2.7mとS B 7938と同規模である。身舎の柱掘形は一辺約0.5m~0.7mの略方形、柱痕跡は径約40cmである。

この時期の建物をみると、建物自体の規模に大きな変化はないが、次第に柱掘形の規模が縮小傾向にあることが見て取れる。

#### (5) 平安時代前Ⅱ期の遺構

S B 7933 調査区北東隅で桁行1間分、梁行2間分を検出した南北棟である。東側柱はS K 7930の底で確認した。桁行3.0m等間、梁行2.4m等間、柱掘形は一辺約1.0m~1.2mである。柱痕跡は明確に捉えることはできなかった。棟方向はN4°Wである。

S B 7934 S B 7933とはほぼ同じ位置に建て替えた建物で、桁行1間分、梁行3間分を検出した。西面に庇が付く。桁行2.4m等間、梁行2.4m等間、庇出は2.4mである。身舎の柱掘形は一辺約1.0m~1.2m、柱痕跡は径約35cmである。庇の柱掘形は一辺約0.4mの方形である。

S K 7928~7932 調査区東半北辺で検出した重複する土坑群である。重複関係はS K 7928→S K 7929

→S K 7930→S K 7931→S K 7932の順に新しくなるが、遺物を見ると大きな時期の差はないと考えられる。

S K 7928・7929は径約1.5m～2.0mの楕円形で調査区外へと続く。土師器杯等の破片が出土した。

S K 7930は東西幅約1.5m～3.1m、南北長約9.5mでさらに調査区外へと延長する。外郭欄列S A 6790と約1.0m隔てて並行する。検出面からの深さは南端で約10cm、北端で約30cm（標高約9.5m～9.7m）である。小片ながら平安時代前Ⅱ期新段階の土師器杯、皿、鉢、甕等がまとめて出土している。

S K 7931は長径約2.3m、短径約1.4mの楕円形を呈する。S K 7930と同時期の土師器片などが出土している。

S K 7932はS K 7930・7931に重複し、幅約1.0m、長さ約2.0m、検出面からの深さは約0.5mである。出土遺物には土師器杯・甕等の破片がある。

#### (6) 平安時代中期の遺構

S K 7955～7960 調査区南東端で東西に重複する土坑群である。規模と形態は径約0.5m～1.5mの楕円形で、検出面からの深さは約0.2m～0.3mである。重複関係は埋土にほとんど差がないため明確には捉えることができなかった。埋土中には5cm～10cm大の礫が含まれる。出土遺物には、土師器小片が数点みられる。

S D 7924 調査区中央部を東西に貫流する東西溝で、溝の方向はE4°Nである。西は調査区外へと続き、東は他の遺構と重複するため明確にできなかったが、S K 7930との重複は確認されなかったことからS K 7930の西際で途切れるものと考えられる。溝幅は上端で約0.5m～0.7m、下端で約0.4m～0.5m、検出面からの深さは約0.1m～0.15m前後で、西から東に向かってわずかに傾斜する。

#### (7) 時期不明の遺構

S K 7953・7954 調査区南端で重複しあう方形の土坑で、規模は一辺約1.5mである。

S D 6803 第98次調査で検出した南延長部分である。全体を確認することはできなかったが、調査区東端を南北に貫流し、さらに南へと続く。溝幅は1.5m以上、深さは深いところで0.8mを越える。上層から近世の瓦や陶器片が大量に出土したが、下層からはほとんど見られないことから一度埋没した後、再度掘削し投棄されたものと考えられる。全体を確認してはいないが、溝の規模や区画道路西側側溝と近い位置にあることから、区画道路の西側側溝を踏襲した溝であることも考えられる。

S D 7921・7922 調査区北辺中央を南北に並行する。検出した長さは約8.0mでさらに北は調査区外へと延長する。溝幅はS D 7921が約0.3m～0.4m、S D 7922は約0.4m～0.6m、検出面からの深さは約0.05m～0.1mである。

S D 7961 調査区南辺をE3°Sの方向で東西に流れる。西は調査区外へと続き、東は調査区端で南に向かって折れ曲がり、調査区外へ延びる。溝幅は上端で約2.0m～2.5m、下端で約1.2m～1.5mである。検出面からの深さは東側で約0.4m～0.5m前後、中央付近で約1.5m、西側で約1.0m前後（標高約9.1m～10.2m）と、中央部分が特に深い。溝のあり方から、近鉄線南側に明治時代初めまでこの地に建っていた蓮光寺に関連する建物を区画する機能を果たしていたように思われる。また、埋土中から近世から近代にかけての大量の瓦や陶磁器等が出土している。

### 3 遺物

今回の調査では、S K7930を中心に近世の遺物を含め整理箱128箱分の遺物が出土した。

#### (1) 弥生時代の遺物

S B7951 有段高杯の杯部(53)は、復元推定口径は21.4cmである。口縁部は大きく外反する。調整は器壁が著しく磨滅しており不明である。(54)は壺の底部片で、残存高3.8cmである。内面に黒色の付着物が残る。

S X7945 (55・56)は高杯の脚部である。(55)は2条、(56)は3条の構描による横線文が2段に施される。横線文の下部に透孔が2方向に残るが、穴の位置から本来は3方向に穿孔されていたと考えられる。

#### (2) 平安時代初期の遺物

S E7920土師器 杯には平坦な底部からやや開き気味に口縁がのびる(57)と、断面弓状で内湾気味に立ち上がり端部を内側に折り曲げる(58)がある。

高杯は2点出土している。(59)は脚部、(60)は脚柱部のみ残存する。ともに面取りを施すが、(60)は一部に面取り前に施された縦方向のハケメが残る。脚柱部径は(59)で3.5cm～4.0cm、(60)で4.0cm～4.4cmである。

須恵器 杯蓋(61・62)は、天井部が障笠状を成す。頂部は右廻りの回転ヘラケズリが施され、つまみが付くものと考えられる。口縁端部はやや内側にむかって折り曲げられる。口径はいずれも復元推定ながら、(61)で17.8cm、(62)で19.4cmである。

(63)は、口縁部をやや内湾気味に折り曲げる。口径は復元推定で13.4cmである。天井部は右廻りの回転ヘラケズリを施す。

(64)は台付杯である。口径15.5cm、高台径7.5cm、器高4.5cmである。口縁はほぼ垂直に立ち上がり、高台はやや開き気味に延びる。調整は内外面ともに回転ナデ調整でしあげる。

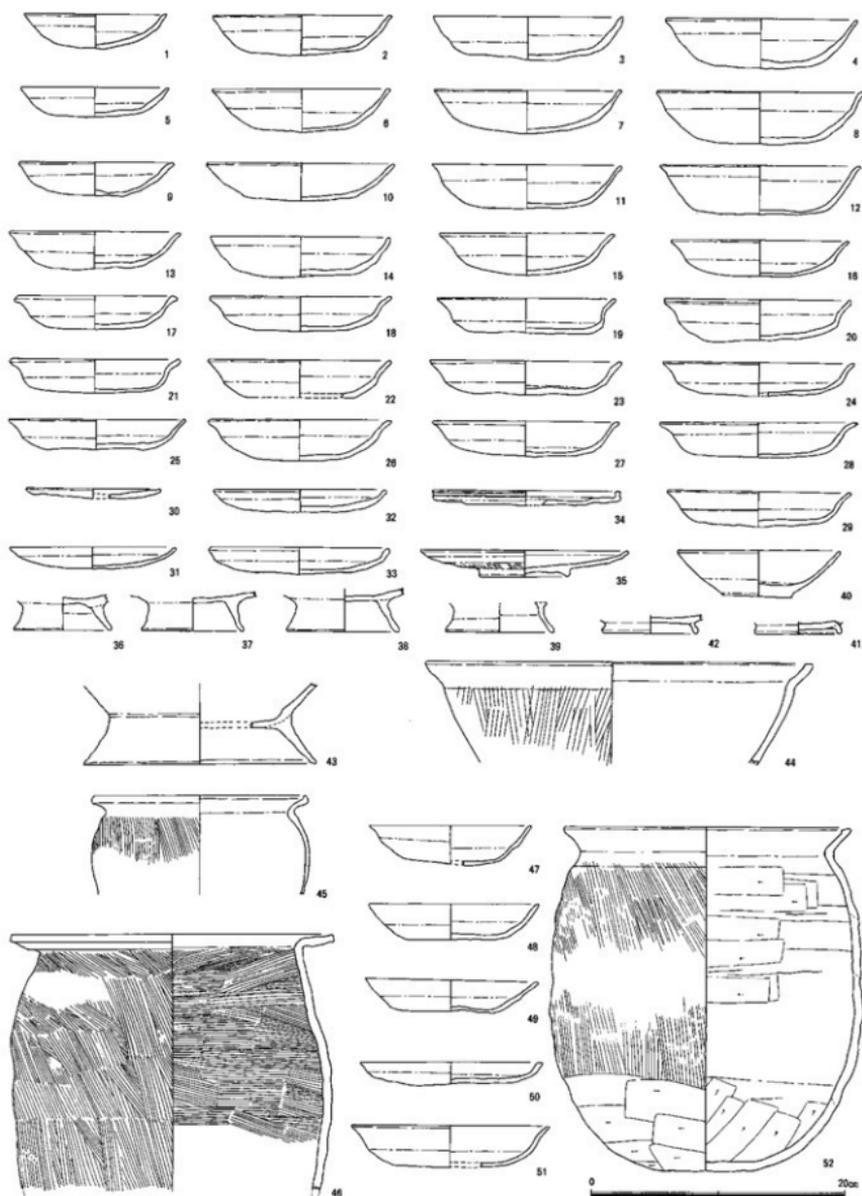
P it7949須恵器 杯蓋(77)は、復元で口径28.6cmである。回転の方向は不明だが頂部を回転ヘラケズリし、内外面は回転ナデ調整する。端部はわずかに下方へつまみ出される。

#### (3) 平安時代前Ⅱ期の遺物

S K7930土師器 杯(1～29)には、口縁部が内湾ないしは外方へまっすぐにのび、底部が口径に比べ小さい(1～14)と口縁部が強いナデによって外反し、底部が比較的広い(15～29)があり、口縁端部を内湾させるものは見られない。口径は12.0cm～13.0cmの小さいものと14.0cm～16.0cm前後の大きいものとに分けることができる。器高は前者で2.4cm～2.8cm、後者で2.9cm～4.3cmである。調整手法はすべて口縁部をヨコナデし、底部をオサエ後ナデ調整するe手法である。ヨコナデの範囲は、器高の1/2と2/3のものがある。

小皿(30)は、口径11.9cm、器高2.3cmで、口縁端部のみを上方につまみ上げて成形する。口縁端部をわずかにヨコナデし、底部はナデ調整する。皿は、断面が弓状の(31)と口縁部が外反する(32・33)、底部が平坦で口縁端部のみを上方へ引き上げる(34)がある。(32・33)は、口径14cm前後、器高2.0cm前後で、口縁端部のみヨコナデ調整する。台付皿(35)は、口径16.6cm、高台径6.8cm、器高2.3cmである。口縁端部と高台部をヨコナデし、下半に縦方向のハケメが残る。

(36～39)は、高台部のみ残存する台付杯である。端部は丸く仕上げる。(36・37)は



第14図 第119次調査 遺物実測図 S K 7930 : 1~46 S K 7932 : 47~52

灰白色である。

鉢(43)は、高台部付近のみ残存する。推定高台径で9.4cmである。台部を貼付けた後ヨコナデする。

鍋(44)は、「く」字状に曲がる口縁が付き、口縁端は内側に面をもつ。推定口径は30cmである。口縁部をヨコナデ、体部は粗いハケ調整を施す。

甕(45)は、体部球形で、体部外面は縦方向のハケ、内面はナデ調整する。外面にスス状の付着物が見られる。(46)は、長胴甕で、口径26.0cmである。胴部外面を縦方向、内面を横方向にハケ調整し、内面下半をケズリ調整をする。口縁部はほぼ水平に折り曲げられる。

**須恵器** 杯(40)は、口縁部が底部から上方にまっすぐにのびる。器壁は6mm前後、口縁部を回転ナデ調整し、底部は静止糸切りした後ナデ調整する。焼成不良のためか内外面ともにふい黄橙色である。椀(41)は高台部のみ残存し、高台径は6.8cmである。高台は真っ直ぐに延び、接地面は平坦である。

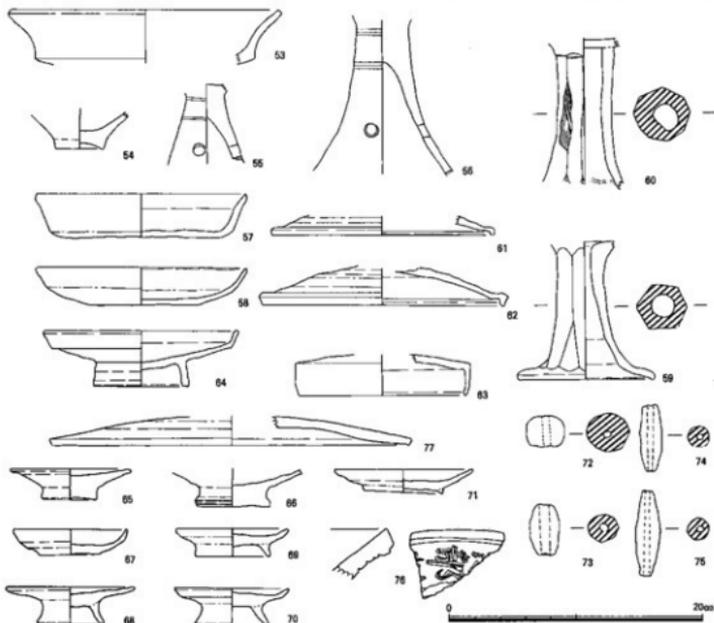
**灰釉陶器** (42)は、椀の高台部である。やや開き気味にのび、端部は丸い。

**S K 7932土師器**

杯には、口縁が平坦な底部からまっすぐにのびる(47~49)と、外反する(51)がある。口径は前者で13.5cm前後、後者は16.0cmである。

皿(50)は、口径14.6cm、器高1.8cmで、口縁部をまっすぐに引き上げる。口縁部をヨコナデ、底部をオサエ後ナデ調整するe手法で仕上げる。

甕(52)は、器高28.0cm、口径22.6cmで器壁は7.0mm前後である。口縁部をヨコナデし、



第15図 第119次調査 遺物実測図

S B 7951 : 53・54, S X 7945 : 55・56, S E 7920 : 57~64  
Pit 7949 : 77, 包含層 : 65~71, 特殊遺物 : 72~76 (76のみ 1 : 2)

体部外面はタテハケ、内面を横方向にケズリ調整する。底部は外面も横方向に、内面は下から上に向かってケズリ調整する。内面に粘土接合痕が約5.0cm幅で残る。

#### (4) 遺物包含層出土土器

口ロ土師器 包含層から(65~70)が出土している。小皿(67)は、厚い底部に口縁が内弯しながらのびる。台付小皿(65・66・68~70)は、擬高台のもの(65・66)が含まれる。

#### (5) その他の遺物

灰釉陶器 (71)は完形の皿である。断面三角形の高台が付く。口縁部は平坦な底部から外上方にまっすぐに立ち上がる。口径11.0cm、高台径6.3cm、器高1.8cmである。

刻書土器 (76)は、須惠器壺の口縁部と思われる破片の外面に「□部□」とヘラ書きされ、3文字確認できるが「部」以外は、一部が残るのみで判読できない。ヘラ書きは焼成前に刻まれたもので、齋宮寮の官司名を表すものか、あるいは須惠器の生産地に関するものか検討を要する。

土錘 この他に、土錘(72~75)が4点出土している。

### 4 まとめ

今回の調査では、奈良時代後期から平安時代前I期までの大型掘立柱建物11棟が鍵型に配置され、6小期にわたって建て替えられたことが確認された。そして6期に渡る建替えは、その状況から建物配置の変遷を大きく3期にわけることが可能であり、これまでの周辺調査の成果と併せ、鍛冶山西ブロックの近鉄線以北における建物配置の様相がさらに明らかとなった。そこで、過去幾度かにわたって示された従来の試案と今回の調査の成果を基にして、新たに第I~III期に分類して検討してみたい。

#### (1) 第I期

外郭柵列 奈良時代後期に展開されたと考えられる建物配置で、鍛冶山西ブロックにおいては柱間10尺で東西総長400尺=約117.6mの規模をもつ外郭柵列(北辺S A 6760、東辺S A 6770、西辺S A 1411、南辺未検出)が区画道路から24尺=約7.0m隔てて区画をめぐる。さらに、この外郭柵列の東側には、区画道路を越えて鍛冶山中ブロックにまで延びる総長160尺=約47.5mの外郭柵列張出(北辺・東辺S A 2800、南辺未検出)が取りつく。このため、この時期に鍛冶山西ブロックと鍛冶山中ブロックとの間の区画道路はなかったものと考えられる。また、東辺柵列S A 6770は後出のS A 6790の様に南延長部分が検出されておらず、間仕切りのものであった可能性もある。

内郭柵列 さらに、この外郭柵列内に外郭柵列と柱筋をあわせて柱間10尺の内郭柵列(北辺S A 2705、西辺S A 7150、東辺・南辺未確認)が外郭北辺柵列S A 6760から110尺、外郭西辺柵列S A 1411から80尺隔てて建てられ内郭を形成する。

内郭柵列の規模であるが、平成7年度の第109次調査試案では東西幅について外郭柵列のセンターラインで折り返した場合240尺=約71.0mになることが想定されたが、今回の第119次調査において想定位置では検出されなかったため、さらに西に寄った位置で南に折り返すものと考えられる。その場合、内郭柵列の東西幅は240尺以下の規模で、しかも内郭柵列の東西の中心は外郭北辺柵列S A 6760のセンターラインから西にずれることになる。つまり、外郭柵列と内郭柵列との間の距離が西辺が80尺であるのに対して、東辺が80尺以上と東辺の方が広いことになる。また、南北幅については、総長170尺(約50.5m)で北から17間目で東進しS B 6840に取りつく可能性も想定さ

れたが、今年度実施した第122次調査で西辺柵列 S A 7150 の南延長部分については確認できたものの、S B 6840 に向かって東に鍵の手状に折れ曲がった場合に柱穴が位置すると想定される場所に柱穴を確認し得なかった。このことから、西辺柵列 S A 7150 は S B 6840 に取りつく可能性がなくなり、さらに S B 6840 を取り囲む位置まで真っ直ぐ南へ延びるものと考えられ、内郭柵列の南北幅は210尺＝約62.4m以上の規模をもつこととなる。

#### 掘立柱建物

この区画施設内に外郭・内郭柵列と同様に柱間10尺(1尺＝29.4cm～30.0cm)等間を中心とする大型の掘立柱建物(S B 6740・6840・6841・6842・7155・7160・7375・7385・7950)が外郭・内郭柵列に柱筋を揃えて配置される。

この内、外郭柵列内において内郭柵列外に配置される建物としては S B 6740・7155・7160・7950 がある。第105次調査で検出された S B 7155・7160 は外郭西辺柵列 S A 1411 と内郭西辺柵列 S A 7150 との間に配置される。S B 7155 は、外郭西辺柵列 S A 1411 と内郭西辺柵列 S A 7150 との中心に位置する桁行4間×梁行2間で西妻柱筋の南延長に S A 7151 が取りつく東西棟である。外郭西辺柵列を東西幅と同規模の400尺と想定した場合のセンターラインに妻柱筋があたる。S B 7160 は桁行5間×梁行2間の東西棟で S B 7155 の南側柱から40尺隔てて東妻柱筋を通して配置される。この2棟の周囲には建物の性格の特殊性を示すと考えられる幅約0.7m、深さ約0.4mの四隅を接しない溝が取り囲む。

外郭東辺柵列 S A 6770 と未検出の内郭東辺柵列の間には、第98次調査で検出した S B 6740、第119次調査で検出した S B 7950 が配置される。S B 6740 は、第98次調査で北側柱3間分を検出しただけでなくさらに南へ続く。柱間は1.8mと狭いが、柱掘形は一辺約1.2mの方形で、柱痕跡は径約40cmと大きい。齋宮跡で最大規模を持つ S B 7950 は、南北庇の付く6間×4間の東西棟で、北側柱を外郭北辺柵列 S A 6760 から150尺、西妻柱を外郭東辺柵列 S A 6770 から60尺隔てて建つ。

内郭柵列内建物としては、S B 6840・6841・6842・7375・7385 の5棟がある。S B 6840・6841・6842 は第96-4次調査で一部が検出されただけで、全様が明らかにされたわけではないが、外郭・内郭柵列に柱筋を揃える大型の掘立柱建物である。S B 6840 は、内郭北辺柵列 S A 2705 から170尺隔てて位置する。内郭西辺柵列 S A 7150 に取りついて内郭柵列を形成する可能性もあったが、今年度実施された第122次調査において、内郭西辺柵列 S A 7150 から鍵の手状に折れ曲がる位置に想定された柱掘形が確認されなかったことによって、桁行4間以上、梁行1間以上の規模を持つ南北棟と考えられる。S B 6841・6842 は S B 6840 の東側柱から20尺隔てて建つ建物で、2棟の間の距離も20尺である。S B 7375 は3間×3間の総柱建物で南側柱を S B 7950 の北側柱と筋を揃え、内郭の北西隅に配置される。S B 7375 の東側柱から30尺隔てて S B 7385 が配置される。S B 7385 は、内郭北辺柵列 S A 2705 から40尺、内郭西辺柵列 S A 7150 から70尺隔てる。桁行2間以上の東西棟になると考えられ、S B 7375、S B 7950 の北側柱と柱筋を揃える。さらに、西妻柱筋は S B 6841・6842 の西妻柱と筋を揃える。

これらの内郭柵列内に配置された建物は、「内院」のなかでも齋王に直接関わる重要な機能を果たしていたものと考えられる。

外郭張出柵列 S A 2800 内には、北東隅に第46次調査で検出した桁行5間×梁行2間

のS B 2790が配置される。S B 2790は柱間が桁行2.2m、梁行2.15mと外郭柵列内の建物としては柱間が小さく、この段階の他の建物とは異なった様相を示す。

## 井戸

S E 7920は、内郭北辺柵列S A 2705の東延長線上にあって、西側の肩をS B 7950の西妻柱とほぼ筋を合わせる。平面形は一辺約3.6mの方形で、さらにその周囲約6.5m～7.0mの範囲を整地土層が取り囲む。このS E 7920から逆「L」字状に折れ曲がるS D 6810が北へ向かって延びる。S D 6810は従来、後出時期の内郭柵列S A 7400にはほぼ相対する位置にあることから、区画の北東隅を画する役割を持った区画溝であると考えられていたが、S D 6810によって囲まれた空間に特別な施設が見られないことや、S E 7920以南には延長しないことから、区画のための溝ではなく、S E 7920に付随する排水を目的としてこの時期に掘削された溝である可能性も考えられる。

## (2) 第二期

## 外郭柵列

平安時代初期に展開された建物構成である。外郭柵列張出S A 2800は廃絶され、区画東辺道路が設けられる。外郭北辺柵列S A 6760は南へ約2.0m移動し、区画道路から31尺(約9.1m)隔てた位置に、S A 6780として建て替えられる。これに伴って、東辺柵列はS A 6770からS A 6790に、西辺柵列S A 1411からS A 2675にそれぞれ建て替えられる。南辺柵列は、北辺柵列S A 6780が南に移動したのに伴い、約2.0m南に移動したか、あるいは、南辺柵列と区画道路との距離を北辺柵列と同じように31尺(約9.3m)であったと考えたと、逆に、約1.0m北へ移動したとも考えられる。ただし、南辺柵列が北へ移動したと想定した場合には、外郭柵列によって囲まれる範囲が前段階より狭くなることになる。

外郭柵列の規模については、東西幅400尺＝約117.6mと変わらない。南北幅については前段階同様、南辺未検出のため不明であるが東西幅と同規模であれば400尺＝約117.6mとなり、南辺が約1.0m北へ移動したとすれば390尺＝114.7mとなる。

区画内部の構造も外郭柵列の建て替えに伴って大きく変容する。内郭柵列は北辺柵列S A 2705が廃され、西辺柵列のみS A 7150からはほぼ平行する形で南北柵列S A 7400に建て替えられ、囲みの構造がなくなる。第109次調査で検出されたS A 7400は、外郭北辺柵列S A 6780と約2間隔てた位置から建てられ、南は近鉄線を挟んで南接する第105次調査で検出されておらず、両調査区の間で止まるものと考えられる。内郭東辺柵列の建て替え柵列でこの南北柵列S A 7400に対応する柵列は現在のところ確認されていない。このことから、S A 7400の機能としては空間を区切るものではなく、特に、区画北半において間仕切りの要素を持つものである可能性が高いといえよう。しかし、前段階で井戸の排水溝としたS D 6810は、S A 7400に対応する位置にある。

## 掘立柱建物

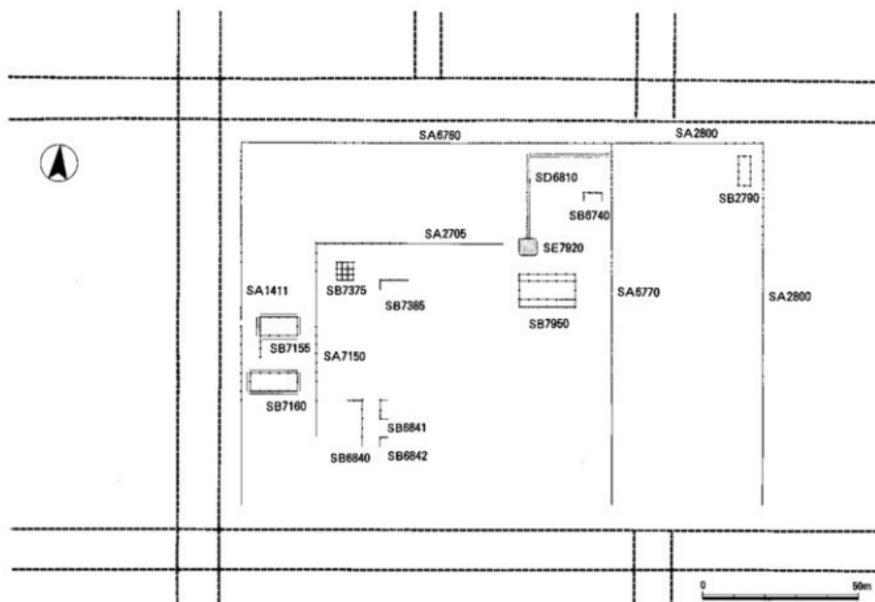
この時期の掘立柱建物を見ると、前段階より一回り規模を小さくし、柱間寸法で概ね桁行8尺、梁行9尺の規模で構成され、1回もしくは2回の建て替えを行う。

まず、外郭西辺柵列S A 2675と南北柵列S A 7400との間には、両柵列の中心上に、第44次調査検出のS B 2680が外郭北辺柵列S A 6780から60尺隔て、同じく第44次調査検出のS B 2685と、第105次調査検出で先行するS B 7155の建て替えであるS B 7190がその南に40尺ずつ間をおいて、柱筋を揃えて等間隔に配置される。S B 2680・2685・7190はいずれも5間×2間の東西棟である。南北柵列S A 7400以東では、外郭北辺柵列S A 6780から約30尺隔てた位置に南北柵列S A 7400に北側桁柱筋を揃えて東西棟で

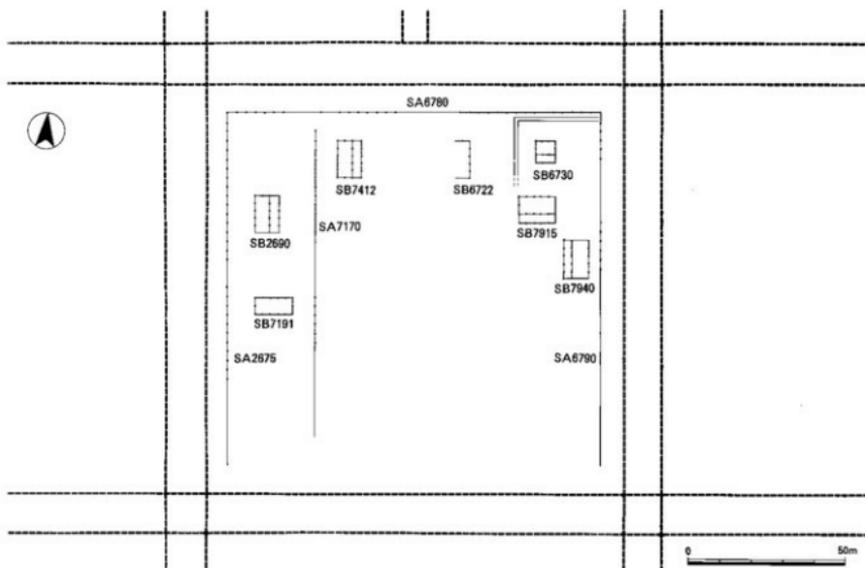
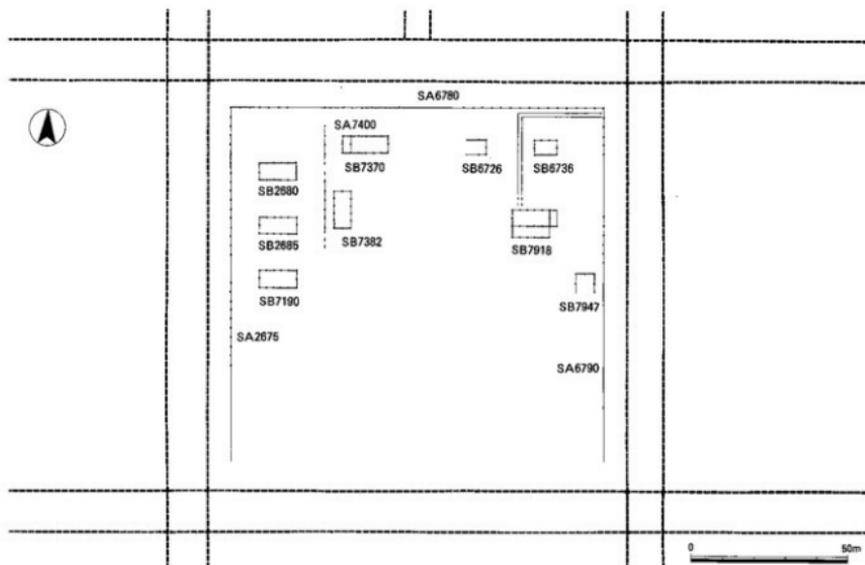
第109次調査検出のSB7370が建ち、その後、南面・西面に庇の付くSB1430に建て替えられる。また、南北楕列SA7400に南側桁柱の筋を揃える5間×2間の東西棟SB7390も、やや南に位置しているがSB1430の建て替えと考えられる。このSB7390の南側桁柱に北妻柱を、SB7370・1430の西妻柱に東側柱筋を揃えて第109次調査で検出された5間×2間の南北棟SB7382が建つ。SB7382はほぼ同じ位置で2度建て替えを行っており、SB7381、SB7380の順に建て替えられる。

区画の東側では、北辺に第98次調査で検出された東西棟SB6725とSB6736が桁柱筋を揃え、約50尺隔てて配置される。SB6725は全体像が不明だが、SB6736は桁行3間×梁行2間で柱間は桁行2.4m、梁行2.5mである。また、前段階のSB7950の建て替えである桁行6間×梁行2間で南面に庇の付くSB7918と、南北棟SB7947が鍵型に配置される。この2棟は、それぞれ建て替えを行っており、東西棟SB7918はSB7919に、南北棟SB7947はSB7948に建て替えられる。

この段階で、区画の中央部に位置し、中心的機能を果たしたと考えられる建物は現在のところ確認されていない。ただし、第105次調査で調査区の東辺で大型の柱掘形が検出されているが、いずれも建物としての全容をうかがい知るには手掛かりが少ないため、これらの建物については今後の調査の進展に合わせ再検討する必要がある。また、南北楕列SA7400が区画の南まで延長しないことも区画の構造を考えるうえで注目される。



第16図 鍛冶山西ブロック建物配置変遷図 1



第17図 鍛冶山西ブロック建物配置変遷図 2

### (3) 第Ⅲ期

#### 外郭柵列

平安時代前期と考えられる建物配置である。外郭柵列は前段階の構成を踏襲したと考えられ、北辺 S A 6780、東辺 S A 6790、西辺 S A 2675、南辺未検出と変わらない。

第105次調査・第109次調査・第122次調査で検出された S A 7170は、S A 7400からやや西に位置を変えて建て替えられ、外郭西辺柵列 S A 2675から95尺隔てて並行する。外郭北辺柵列 S A 6780から2間隔てた地点から、南はこれまで23間(約67.6m)分が確認されていたが、第122次調査によって2間分延長し総長25間(73.5m)以上となること判明し、さらに南へ延びる可能性が高い。S A 7170の機能としては、S A 7400と同様に間仕切りのなものであったと想定されるが、S A 7400に比べ総延長で規模が拡大したことから、この S A 7170によって仕切られる鍛冶山西ブロック南半における区画構造に変化が生じたとも考えられる。

#### 掘立柱建物

外郭西辺柵列 S A 2675と南北柵列 S A 7170との間の西側外郭には、第44次調査で検出された柱間8尺等間で桁行5間×梁行3間、東面に庇が付くと想定される南北棟 S B 2690が、外郭北辺柵列 S A 6780から90尺、外郭西辺柵列 S A 2675から30尺隔てて建つ。この南には外郭北辺柵列 S A 6780から200尺隔てた地点に S B 2690の西桁側柱に西妻柱筋を揃えて S B 7191が建つ。S B 7191は第105次調査で検出されており、先行する S B 7155・7190の建て替えと考えられ、桁行5間×梁行2間で柱間は桁行8尺、梁行9尺である。南北柵列 S A 7170の東側では、北辺に南北棟の S B 7412と S B 6722が約29.0m隔てて、相対する位置に桁側柱筋を揃えて並び建つ。S B 7412は、桁行5間×梁行3間、柱間8尺で東面に9尺の庇が付く。S B 6722は、全体が確認されていないが、柱間8尺で S B 7412と同じ桁行5間×梁行2間になると考えられる。この2棟は、それぞれ2回の建て替えを行う。さらに、この2棟の南妻柱と庇の柱筋を揃えて桁行3間×梁行3間で南面に庇の付く S B 6730が S B 6722の東に建つ。

前段階で鎌型に配置された S B 7918・7919、S B 7947・7948はわずかに北へ位置をずらして S B 7915、S B 7938に建て替えられる。S B 7915は、西妻柱筋を外郭北辺柵列 S A 6760に揃える桁行5間×梁行3間と想定される東西棟で、南面に庇が付く。S B 7938は、桁行5間×梁行3間の南北棟で西面に庇が付く。柱間は、いずれも桁行8尺、梁行9尺である。この東西棟、南北棟もそれぞれ2回の建て替えを行う。

### (4) まとめ

平安時代中期になると、それまで「内院」として機能していた鍛冶山西ブロックは、しだいに衰退していくために、建物配置などの状況は掴みづらいものになっている。その傾向は今回の調査でもみられ、14棟の建物を確認したが平安時代前Ⅱ期の新しい段階に位置づけられる建物が最も新しいものであった。

今後の課題は、建物の配置の計画性や柱掘形の規模、出土遺物などから再整理し、鍛冶山西ブロックの構造を復元していくことであり、同時に周辺ブロックの再検討も必要となるであろう。

(角正芳浩)

## N 第120次調査

(6AFI-C・E, 6AFG-R 西加座地区)

### 1 はじめに

経過 第120次調査は、昭和60年度に行った第63次調査の南東側で実施した。調査面積は約800㎡で、現況は休耕田で畑地である。

目的 史跡東半の地域では奈良時代後期に造営されたと考えられる一辺約120mを基本とする方格地割がみられることがこれまでの調査で明らかになっているが、今回の調査は、西加座南ブロックの北東隅の実態を解明するとともに、区画道路と区画溝の交差点の状況を把握することを目的として行った。調査は平成10年1月20日から開始し、平成10年3月31日に最終的に埋め戻しが終了した。

現況 現況の表土から遺構面までの深さは、北西隅で0.4m、南西隅で0.1m～0.2m、北東隅で深く0.6m、南東隅0.3mである。遺構面は、赤褐色土で捉えた。遺構検出面の標高は南西で9.7m、北東で9.3m前後で北東隅に向かって緩やかに傾斜し、周辺の微地形で一番高い場所を調査した。遺構検出面までの基本的層位は、第1層灰色土（耕作土）、第2層黒褐色土（遺物包含層）、第3層赤褐色土（地山）である。



第18図 第120次調査 調査区位置図 (1:2,000)

## 2 遺 構

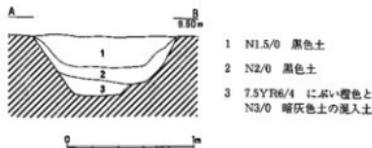
### (1) 奈良時代後期の遺構

この時期の遺構には、土坑2基、溝4条、道路1条がある。

S K 7966 調査区の北東隅にある複数の小土坑が重なるものである。最下層から完形の土師器皿が出土している他、土師器杯、須恵器甕の細片が少量出土している。

S K 7980 南北1.7m、東西2.1m、遺構検出面から深さ20cmの不整形な楕円形の土坑で埋土は黒褐色土である。出土遺物には土師器杯・碗・皿・甕、須恵器甕がある。

S D 6002・6050 S D 6002・6050・7965・7970は方格地割をなす区画溝である。S D 6002・6050は約70m西で調査を実施した第86次調査の際に検出されている溝の延長にあたり東西道路S F 6009の北側の区画溝がS D 6002、南側の区画溝がS D 6050である。道路の規模は溝の心々で約12.5mである。S D 6002は北側に拡張した調査区で延長約11mを検出した。検出面で幅1.40m、底で幅0.4m、深さ0.4mである。溝の勾配は溝底が西端で標高8.70m、東端で標高8.50mであり、東の方が低くなる。S D 6050は調査区の西端から東へ約15mまでは溝の両肩が確認できたが、それに続く部分約8mについては攪乱土坑のためわずかに痕跡を確認できただけであり、さらに東については痕跡すら確認できなかった。これは複数の溝や攪乱土坑が重複することもあるが、S D 7967の検出面は東端で標高9.25m前後であり、S D 6050の溝底の標高が9.40m前後であることから溝の延長は削平されているかあるいはもともと東西道路と南北道路の交差点までは延びていなかった可能性が考えられる。S D 6050は検出面で幅1.00m～1.20m、底で幅0.8m、深さは0.1m前後で非常に浅い。溝底の標高は前述のように全体に9.40m前後



第19図 第120次調査 S D 6050土層断面図 (1:40)

		遺 構 の 種 別								
		S B		S F	S K		S D			
奈良	後 期			6009	7980	7966	6002	6050	7965	7970
平	初 期	7998 8000	7999 8003	6009	7990		6002	6050	7965	7970
	前Ⅰ期	7995	7996							
	前Ⅱ期	7989	7992		7985	7986				
		7993	7994		7987	7988				
安	中 期	7991	7997 8001							
	後 期						7967	7968	7974	7976 7977 7978 7979 7981 7982 7983
時期不明				7984		7969	7971	7972	7973	7975

第4表 第120次調査 時期別遺構分類表



で東西方向の傾斜はみられない。ただ、調査区の中央付近では、土坑状に深くなる所が2ヶ所ある。西側の底の標高は9.30m、東側は9.00mである。東側の埋土は第19図にあるように第1層と第2層が黒色土、第3層がにぶい橙色土と暗灰色土の混入土である。断面の形はほぼ逆台形である。

S D 7965・7970 南北道路の西側の区画溝である。S D 7965は北側の調査区でS D 6002と直交する状況で検出された。幅1.2m、検出面からの深さは0.06m～0.1mと非常に浅く、南に傾斜する。標高は8.8m前後で、S D 6002とは溝底レベルで約0.3mの差がある。S D 7970は、東側に拡張した調査区で延長2.7mを検出した。幅は1.0m、検出面からの深さは約0.1mで非常に浅い。溝底の標高は9.2m前後である。北端は土坑状にやや深くなる。東西方向の区画溝S D 6050との関係は、S D 6050が交差点付近まで伸びていない可能性があり、S D 7970も北端の検出面の標高が9.25m前後であることから、交差点まで伸びず、S D 6002・7965のように接する可能性は少ないと考えられる。

S F 6009 方格地割の区画道路S F 6009は北側の区画溝S D 6002、南側の区画溝S D 6050により、道路の規模は溝の心々で約12.5mであることが確認できる。両側の区画溝以外には道路上での轍の跡などは確認できなかった。道路面の標高はS D 6002の検出面では8.9m前後、S D 6050の検出面では9.3m前後であり、北の方が0.4m前後低くなっている。

区画溝・区画道路の存続時期 なお、これらの区画溝のうちS D 6002は埋土の最上層から近世以降の遺物が出土しており、比較的長い間、溝としての機能が継続していたようである。その他の溝については最終的な埋没の時期は明確ではないが、第86次調査など周辺の調査の状況から平安時代初期までは継続するであろう。区画道路についても同様である。

## (2) 平安時代初期の遺構

この時期の遺構には、掘立柱建物4棟、土坑1基、前代から引き続く溝4条、道路1条がある。

S B 7998・7999 調査区の南東隅で重複する掘立柱建物である。柱掘形の重複関係からS B 8000よりS B 7998・7999の方が新しい。また、S B 8003はS B 8000と重複する位置にあるがその前後関係は不明である。これらの建物の棟方向はS B 7998がN 5°Wである他はすべてE 2°Nで揃っている。

S B 8000は東西棟建物で、桁行5間×梁行2間の規模で、柱間はどちらも2.4m等間である。柱掘形は桁行筋の両端は一辺1.1mの方形、その他は1.2m×0.8mの東西方向の長方形で、柱痕跡は径約30cmである。柱掘形から土師器杯・皿・甕、須恵器杯・蓋・甕が出土している。

S B 7998は南北棟建物で、桁行3間×梁行2間の規模で、柱間は桁行が1.9m、梁行が2.1mである。柱掘形は一辺0.6m～0.8mの方形であるが東側の桁行筋の方がやや大きい。柱痕跡は径約20cmである。柱掘形から土師器杯・皿・甕、須恵器甕が出土している。

S B 7999は東西棟建物で北面庇が付く。桁行は2間を確認したがさらに東へ続く。梁行は3間である。柱間は庇の出を含めすべて2.1m等間である。柱掘形は一辺0.5m前後の方形であるが、やや形がくずれている。柱痕跡は径約20cmである。柱掘形から土師器杯・皿・甕、須恵器蓋・甕が出土している。

S B 8003は東西棟建物で、桁行3間×梁行2間の規模で、柱間は桁行が1.9m、梁行が2.1mである。柱掘形は一辺約0.5mの方形である。柱痕跡は径約20cmである。柱掘形から土師器杯・皿・甕、須恵器蓋・甕が出土している。

S K 7990

調査区の南東隅にある径2.9mの半円形の土坑でさらに南へ続く。検出面からの深さは10cm前後で浅い。埋土は暗褐色土である。土師器杯・碗・皿、須恵器甕の他、土師器鍋のミニチュアが出土している。

### (3) 平安時代前I期の遺構

この時期の遺構には、掘立柱建物2棟がある。

S B 7995・7996

S B 7995の東梁行筋はS B 8000の西梁行筋とほぼ重複するが、柱掘形の重なりからS B 8000より新しい。東西棟建物で桁行3間×梁行2間の規模である。柱間は桁行、梁行ともに1.9m等間である。建物の棟方向はE 2°Nで前代の建物の方向と同じである。柱掘形は一辺約0.6mの方形である。柱痕跡は径約30cmである。柱掘形から土師器杯・皿・蓋・甕、須恵器杯・蓋・甕が出土している。

S B 7996はS B 7995の北側に位置し、区画溝S D 6050から約6mほど離れている。桁行2間×梁行2間の規模であるが桁行の柱間は2.1m、梁行の柱間は1.3mであるため東西棟建物とした。棟方向はE 0°Wである。柱掘形は一辺0.5m～0.7mの方形である。柱痕跡は不明瞭で抜き取り痕跡が一部にみられる。柱掘形から土師器杯・甕が出土している。

### (4) 平安時代前II期の遺構

この時期の遺構には、掘立柱建物5棟、土坑5基がある。

S B 7989

S B 7989の西梁行筋はS B 7996の西梁行筋とほぼ重複するが、柱掘形の重なりからS B 7996より新しい。東西棟建物で桁行5間×梁行2間の規模である。柱間は桁行が1.9m、梁行が1.95mである。建物の棟方向はE 0°WでS B 7996と同じである。柱掘形は径0.3m前後の円形である。前代までの方形から円形に変わる。柱掘形から土師器杯・皿・甕、須恵器蓋、灰釉陶器碗が出土している。

S B 8002

S B 8002はS B 7995・8000と重複する位置にある桁行5間×梁行2間の東西棟建物で、棟方向はS B 7989と同じE 0°Wである。柱間は桁行が1.8m、梁行が1.9mである。柱掘形は約30cmの円形である。柱掘形から土師器杯・皿・甕、須恵器杯・蓋・甕、灰釉陶器碗が出土している。

S B 7992・7993

7994

調査区南西隅に位置する南北棟の掘立柱建物群である。柱掘形の重複から新しい順にS B 7992・7993・7994である。いずれも梁行は2間で、桁行は2間分を確認しており、さらに南へ続く。柱掘形は0.4m～0.7mの円形あるいは楕円形である。柱間は梁行はいずれも2.1mであるが、桁行はS B 7992が2.1m、S B 7993が1.9m、S B 7994が2.0mである。いずれも柱掘形から土師器杯・皿・甕、須恵器蓋・甕が出土しているがS B 7992には灰釉陶器碗も含まれる。建物の棟方向はS B 7992が北に位置する東西棟建物S B 7989と揃いN 0°Sで、S B 7993・7994はいずれもN 5°Eである。

S K 7985・7986

7987・7988

S K 7985・7986は前述の南北棟建物群のすぐ北に位置し、一部が重複する土坑である。埋土はいずれも暗褐色土で、遺構の前後関係は不明である。出土した遺物からも前後関係は判断できない。S K 7985は短軸1.9m、長軸2.1mの不整形な楕円形で検出面からの深さは0.3m前後、S K 7986は短軸1.6m、長軸1.7mの不整形な楕円形で検出

面からの深さは0.1m前後である。S K 7986からの出土遺物は少ないが、S K 7985からはまとまった遺物が出土しており、土師器杯・皿・蓋・台付杯・甕・鍋、須恵器杯・蓋、灰軸陶器椀・皿・段皿、製塩土器、土錘がある。

S K 7987・7988は前述の南北棟建物群のすぐ東に位置し、一部が重複する土坑である。埋土はいずれも暗褐色土で、遺構の前後関係は不明である。S K 7985・7986と同じ時期と思われる、やはり遺物からも前後関係を判断できない。S K 7988はさらに南へ続き規模は確定しないが、S K 7987は短軸1.6m、長軸2.1mの楕円形をしており、ほぼ同じ規模の土坑と思われる。検出面からの深さは、どちらも0.1m前後と浅い。

S K 8004 調査区南端中央のS B 8002と重複する位置にあり、短軸1.4m、長軸1.6mの楕円形の土坑である。検出面からの深さは0.1m前後、他の土坑と同じく埋土は暗褐色土である。土師器杯・皿・甕、須恵器杯・蓋・甕、灰軸陶器椀が出土している。

#### (5) 平安時代中期の遺構

この時期の遺構には、掘立柱建物3棟がある。

S B 7991・7997 いずれも前代の南北棟建物群と重複する南北棟建物である。柱掘形はともに0.4m～0.5mの円形あるいは楕円形で柱掘形痕跡は径20cm前後である。柱掘形から土師器杯・皿・甕、須恵器杯・蓋・甕、灰軸陶器椀が出土している。S B 7991は桁行3間×梁行2間の規模であるが、S B 7997はさらに南へ続くため規模は確定しない。前代のS B 7992・7993・7994も含めて同規模の建物の建て替えが繰り返し行われたようである。建物の棟方向はS B 7991がN 0° S、S B 7997がN 2° Wである。

S B 8001 南北棟建物群のやや東に位置する桁行3間×梁行2間の東西棟建物である。柱間は桁行2.0m、梁行1.8mである。建物の棟方向はE 5° Nである。柱掘形は約0.4mの円形である。柱掘形から土師器杯・甕が出土している。

#### (6) 平安時代後期の遺構

この時期の遺構には、溝10条がある。いずれも土師器杯・甕などが出土しているがその量は少なく、細片が多い。よって、後I期、後II期の区別はできなかった。

S D 7967・7976 調査区の東端に位置する南北方向の溝である。溝の幅は0.7m～1.1mで深さは現存で0.1mから0.3mである。いずれも溝底の標高は南端で9.4m前後、北端で8.9m前後で北に傾斜する。調査区の北端ではS D 7967・7976・7977が重複するが、埋土の重なりから一番新しい溝はS D 7976、古い溝はS D 7967である。また、調査区の東端中央付近では攪乱が激しく、溝の繋がりが分かりにくいので、遺構番号では別の番号で示したが、S D 7976の延長にあたるのがS D 7983、S D 7977の延長にあたるのがS D 7982と思われる。また、S D 7967は東西方向の溝が分れ7mほど東へ延びている。それぞれの溝の振れはS D 7976がN 3° W、S D 7977がN 6° E、S D 7967がN 0° Wで東西方向に延びる箇所についてはE 6° Sである。

S D 7974・7978 調査区の中央付近に位置する南北方向の溝で、溝の肩で1m前後しか離れない。埋土はどちらも淡灰褐色土であり、溝の振れもほぼN 2° Wで同じである。あまりにも近接するため、同時期に存在したものか掘り直しによるものかは判断しがたい。溝の幅はS D 7974が0.8m～1.3m、S D 7978が0.8m前後である。溝の深さはどちらも0.1m～0.3mであり、勾配は南が高く、北が低い。

S D 7968 調査区の西端に位置する南北方向の溝である。東西方向の溝S D 7979と交差するが

埋土の重なりから南北溝の方が古い。他の溝と同様に溝の勾配は南から北へと低くなる。あまり真っ直ぐな溝ではないが溝の振れはほぼN3°Eである。溝の埋土は灰褐色土である。

S D 7979・7981 調査区の西端中央から東西方向に延び、調査区の中央で鍵の手に南へ折れ、調査区の南端まで続く溝がS D 7979である。また、南北方向の溝に平行し、東西方向の溝に繋がる溝をS D 7981とした。両者は溝の心々間で約7m離れている。区画溝としての意識があるのだろうが、今回の調査区内では他に同時期の遺構は確認されていない。

#### (7) その他の遺構

その他時期不明の遺構として土坑1基、溝5条がある。

S K 7984 調査区の南東隅に位置する土坑で、現在の耕作面から1.5mほど掘削されている。土取りによる攪乱土坑である。

S D 7969・7971 いずれも南北方向の溝で、埋土はしまりのない黒色土で耕作に伴う溝である。区画  
7972・7973 溝S D 6050と重複することからその溝の遺物を含んでいる。溝の振れはN9°Eです  
7975 べてきれいに揃っている。

### 3 遺物

今回の調査では、奈良時代後期から平安時代後期にかけての土器が出土しており、遺物整理箱で69箱分ある。比較的まとまった遺物は奈良時代後期の遺物がS D 6050から、平安時代前Ⅱ期の遺物がS K 7985から出土している。

#### (1) 奈良時代後期の遺物

S D 6050 大半の遺物は土坑状に深くなった箇所から出土している。埋土は3層に分れるが須  
恵器杯(12)は第1層と第3層の破片が接合し、短期間で埋没したものと思われる。

土師器 杯には器高の深い椀タイプの(2)と浅いタイプ(3)、粗製椀の系譜にある(4・5)がある。(2)は歪んでおり、口径17.6cm～18.5cm、器高5.8cmである。器壁の残りが悪く、調整が不明瞭であるが、底部外面と口縁部1/2ほどにヘラケズリを施し、内面は放射暗文を施す。また、底部内面には螺旋暗文がみられるがほとんど残っていない。(3)も底部外面はヘラケズリを施す。(4)は粘土接合の痕跡を残している。

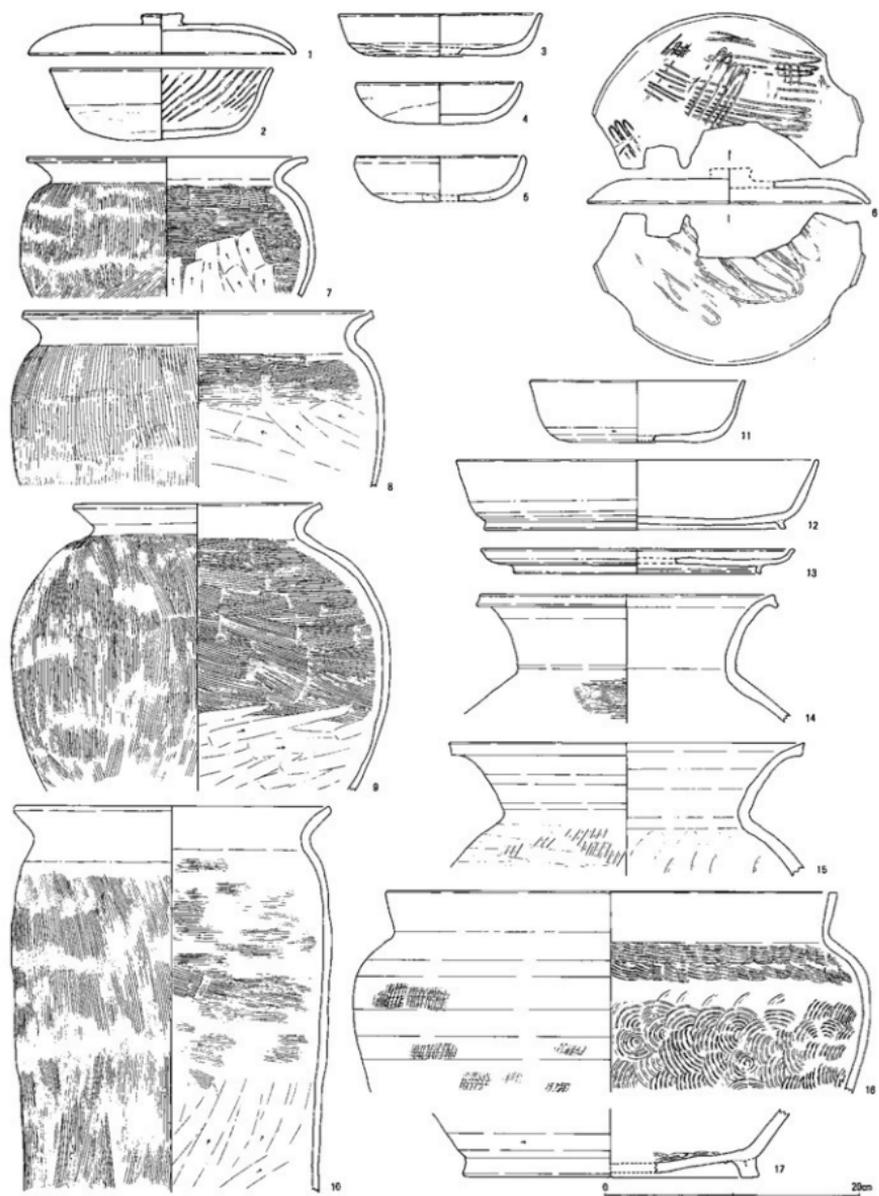
蓋(1)は器壁の残りが悪く、外面のヘラミガキ、内面の螺旋暗文もほとんど残らないがわずかに確認できる。(6)は内外面ともヘラケズリの後ヘラミガキを施す。(1)は口径21.2cm、器高3.3cmであるが、(6)は口径22.2cm、器高2.1cmで、やや扁平である。高杯や皿の可能性も考えたが、ヘラミガキの手法から蓋と判断した。

鍋(7・8)はともに口径と体部最大径がほぼ同じである。(7)は体部にやや丸みがある。破片のため把手が付くかどうか不明であるが、丸底になると思われる。

甕(9)は体部最大径が口径の1.5倍になる球胴の甕である。(10)は口径と体部最大径がほぼ同じで肩部の張りもあまりなく胴部がまっすぐのびる長胴甕である。体部外面のタテハケは4段確認できるので、あと1段で底部になると思われる。鍋、甕ともに外面はタテハケ、内面上部はヨコハケ、下半はヘラケズリで調整する。

須恵器 須恵器には高台の付かない杯A(11)と高台の付く杯B(12)、有台盤(13)、頸部が長く、口縁部が外方に開く甕A(14・15)、口縁部が短く広口の甕B(16)がある。

杯A(11)は口径17cm前後で器高は5cm前後である。底部外面には回転ヘラケズリが施される。杯B(12)は口径28.6cm、器高5.7cm、底径23.8cmと大型のもので、底部外面



第21図 第120次調査 遺物実測図 S D 6050 : 1~17

には墨痕と判読不明の墨書がある。回転ヘラケズリが不定方向のナデのような痕跡で消されているので、転用視として使用した可能性もある。

有台盤(13)は口径24.8cm、器高2.0cm、底径19.6cmで、口縁端部は上方へ挽き上げられるだけである。高台は外端で接地する。

甕A(14・15)のうち(14)は口縁端部に内傾する面をもち、(15)は外傾する面をもつ。甕B(16)は口径35.8cmと大型で外面は格子状のタタキをナデ消している。高台径23.5cmの底部(17)は同一個体と思われる。

その他、S D 6050と重複する溝から出土した遺物の中には、S D 7971出土の土師器杯(96)・台付杯(97)、S D 7973出土の須恵器蓋(98)、S D 7968出土の須恵器蓋(99)など本来はS D 6050の埋土に含まれていたと考えられるものがある。

S D 7970須恵器 (100)は底径11.0cmの鉢である。底部のみの破片で外面には暗オリーブ色の自然釉がかかっている。

S K 7980土師器 杯には器高の浅いタイプ(87)と深い碗タイプ(88)がある。(87)は口径16.0cm、器高3.5cmで底部外面と口縁部1/3ほどにヘラケズリを施す。(88)は外面をヘラケズリの後粗いヘラミガキで調整し、内面には放射暗文を施す。甕(89)は口縁部のみの破片で内面にはヨコハケを施す。

S K 7966土師器 土坑群の最下層で地山に接する状況で出土した皿(90)は、口径17.0cm、器高2.3cmで底部はユビオサエ後ナデで調整される。

## (2) 平安時代初期の遺物

この時期の遺物は今回の調査では比較的少なく、掘立柱建物の柱掘形から図示できる遺物が出土している。

S B 8000土師器 杯(78)は口径12.7cm、器高2.9cmで底部はユビオサエ後ナデで調整されるが、外端を強くナデ、口縁部の立ち上がりとの境が明瞭となる。口縁部はヨコナデし、端部は丸く内弯する。

須恵器 高台の付く杯B(79)と付かない杯A(80)は同じ柱掘形から出土している。(80)は口径16.5cm、器高6.2cmで非常に深いものである。底部外面は回転ヘラケズリされ、口縁部の立ち上がりは明瞭な線をなす。

S B 7998土師器 杯(81・82)はともに口縁部ヨコナデ、底部はユビオサエ後ナデで調整される。

須恵器 蓋(83)は口径15.8cmの偏平なもので、外面は全体に灰オリーブ色の自然釉をおびている。土師器、須恵器とも別々の柱掘形から出土している。

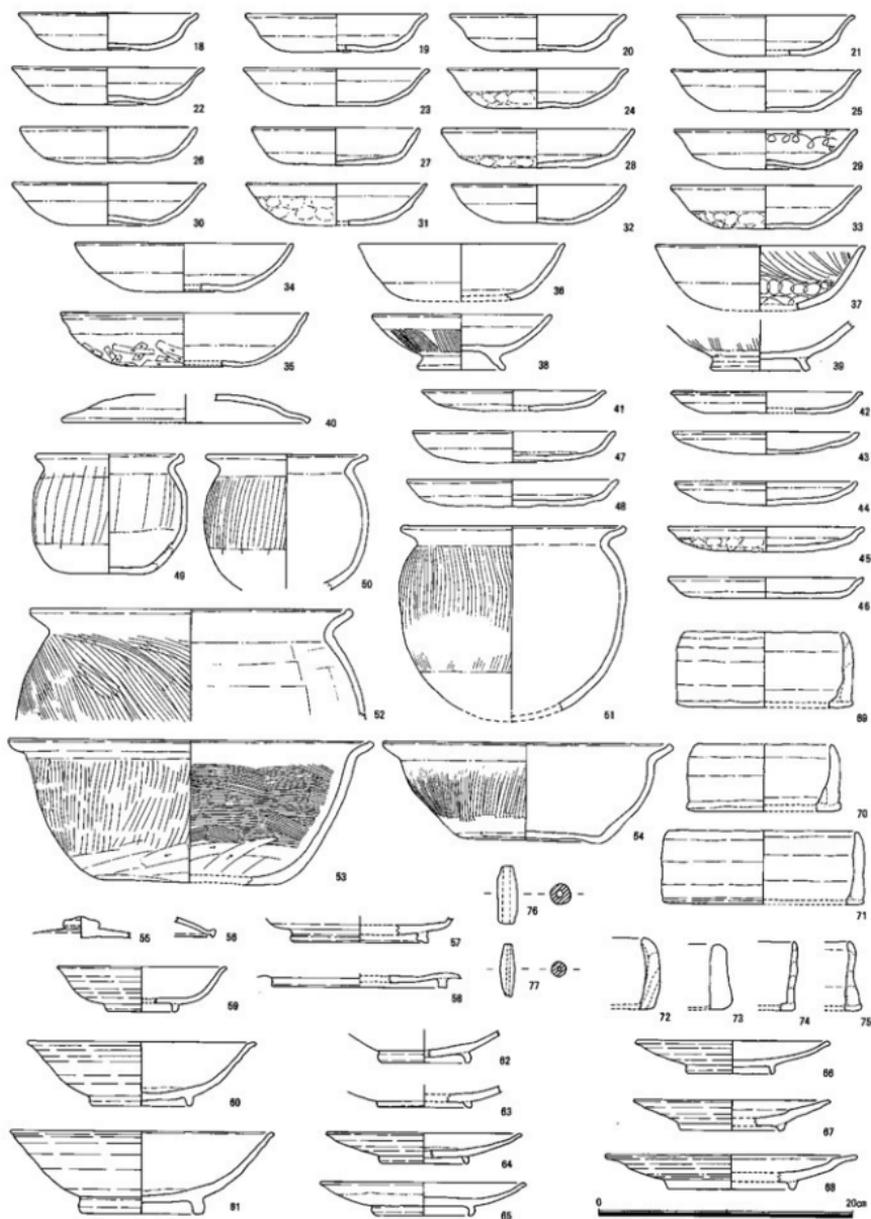
S B 8003土師器 皿(84)は口径16.9cm、器高3.0cmで、底部外面はユビオサエの後粗いヘラケズリを施し、口縁部はヨコナデを施すが、外面の一部には粗いヘラミガキがみられる。内面は放射暗文と螺旋暗文が施される。胎土は密で雲母片を多く含んでおり、他の土師器とは異なり、斎宮周辺地域以外の製品の可能性がある。

## (3) 平安時代前Ⅰ期の遺物

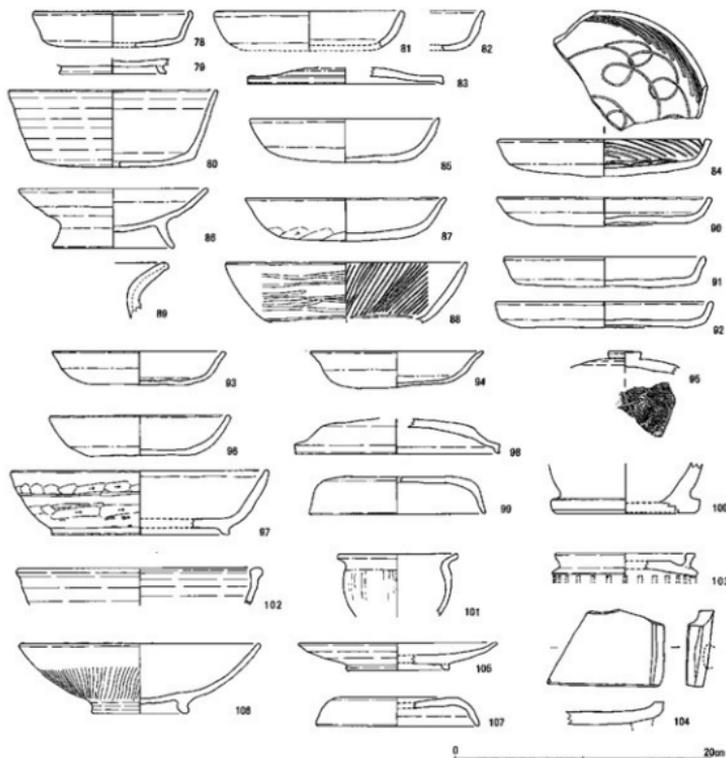
この時期は掘立柱建物が2棟あるだけで遺構が少ないためほとんど遺物は出土していない。

S B 7996土師器 杯(85)はほぼ完形である。口径は15.0cm～15.7cmで歪みがあり、器高は3.5cmである。底部外面はユビオサエ後ナデ、口縁部は1/2以上ヨコナデする。

## (4) 平安時代前Ⅱ期の遺物



第22図 第120次調査 遺物美濃図 S K 7985 : 18~77



第23図 第120次調査 遺物実測図 S D 8000 : 78~80、S B 7998 : 81~83、S B 8003 : 84、S B 7996 : 85、  
S B 7997 : 86、S K 7980 : 87~89、S K 7966 : 90、S K 7990 : 91・92、S K 7987 : 93~95、  
S D 7971 : 96・97、S D 7973 : 98、S D 7968 : 99、S D 7970 : 100、遺物包含層出土 : 101~107

S K 7985土師器 杯は前代までのものに比べて器壁が薄くなる。口縁部の形態により、外反するが端部はやや内弯する前I期までの様相を残すもの(18・19)、外反するもの(20~25)、ほぼ平坦な底部からまっすぐのび、断面が弓状のもの(26~35)、器高が深く椀に近いもの(36・37)がある。(35)を除けば、すべて口縁部をヨコナデし、底部はオサエ後ナデを施すe手法で調整する。(35)は底部外面から口縁部の約1/2にかけてヘラケズリを施す。また、(29)の内面には螺旋暗文が、(37)の内面には放射暗文と螺旋暗文が施される。法量は(34)が口径17.2cm、器高3.9cm、(35)が口径19.6cm、器高4.3cmと大きい。他は口径13cmから15cm前後、器高3.0cm~3.4cmである。なお、口縁部のヨコナデの範囲は器高の1/2のもの1/3のものがあるが前者が主体をなす。椀に近い(36)の器高は4.7cm前後、(37)の器高は5.8cm前後である。杯には高台のつくもの(38・39)がある。高台の接合部から口縁部の約1/2にかけてタテハケを施す。

蓋(40)は口径19.8cmで残存高2.3cmのものである。口縁部はヨコナデ、天井部はユビ

オサエ後ナデ、内面はナデで調整する。内面に煤が付着する。

皿は杯と同様、口縁部と底部の境が明瞭でなく断面弓状のもの(41~45)はほぼ平坦な底部から口縁部が外反気味にまっすぐのびるもの(46~48)がある。法量は、口径15cm前後、器高1.6cm~2.0cmのもの(41~46)と、口径16cm~17cm、器高2.0cmを越えるもの(47・48)がある。

甕は口径11.8cm、器高9.5cmで平底の小型の甕(49)、口径12.8cmとやや大きくなるが小型の甕(50)、口径18.8cmの球胴の甕(51)、口径25.5cmの長胴甕(52)がある。いずれも口縁部はヨコナデ、胴部の外面はタテハケ、下方はナデ、内面は板状工具によるナデで調整される。

鍋は口径の方が体部最大径より大きくて扁平で平底になる(53・54)がある。体部外面はタテハケ、下方を横方向のヘラケズリで調整する。内面は(53)がヨコハケと下方をヘラケズリ、(54)はナデで調整する。

須恵器 蓋のつまみの部分(55)と口縁端部(56)、杯の底部(57・58)がある。

灰釉陶器 椀は腰の張りが比較的弱く、ゆるやかに立ち上がり口縁端部がやや外反する(59~61)がある。(59)は口径13.4cmで器高も3.6cmと浅いものである。(62)も椀である。

皿は腰部から横に開くように口縁部へひきあげ、内面底部は扁平に近い(64~66)がある。(63)も皿であろう。

段皿には広縁段皿(67)と狭縁段皿(68)がある。

これらの灰釉陶器の高台は低く内側が内弯し、外側は直線に近い逆台形状のものが多いが、(62・65)のように内側が内弯が顕著で外側も弧状になり弱い稜をなす所謂「三日月高台」もみられる。いずれも猿投窯の編年の黒笹90号窯式の時期に相当するものである。

黒笹90号窯式

製塩土器 口径の復元できたものは(69)が12.2cm、(70)が10.6cm、(71)が14.6cmである。器高は5.2cm~6.0cmである。胎土は密で砂粒をほとんど含まないものと粗で2mm~10mm前後の砂粒を多く含むものがある。すべて所謂「志摩式製塩土器」である。

土錘 やや中膨らみで細身の管状土錘(76・77)が出土している。

S K 7987土師器 杯には口縁部の外反の弱い(93)と強く外反する(94)がある。いずれも底部外面はユビオサエ後ナデ、口縁部はヨコナデを施す。

須恵器 (95)は須恵器蓋であるが内面中央に「×」のヘラ記号がみられる。

#### (5) 平安時代中期の遺物

中期の遺物も掘立柱建物が3棟あるだけで遺構が少ないため、ほとんど出土していない。

S B 7997土師器 柱掘形から台付杯(86)が出土している。口径15.0cm、器高4.8cm、高台形9.6cmである。断面弓状の杯部にやや高い高台が付くものである。

#### (6) 遺物包含層出土土器

須恵器 (102)は玉縁口縁の鉢で、細片のため口径・傾きに若干のズレがあるかもしれないが、斎宮跡での出土例は少ないものである。(107)の杯は調査区の東端に位置する掘立柱建物 S B 7999の西側梁行の庇の付近にみられる焼土痕跡直上から出土したものである。削平された堅穴住居に伴う遺物の可能性もある。

灰釉陶器 皿(105)は内面全面にオリブ黄の釉がかかるもので、口径15.8cm、器高2.2cm、高



第24図 調査が実施された方格地割の交差点 (1 : 4,000)

台径8.2cmである。S K7985に伴う可能性がある。

**土師器** 台付杯(106)は高台の接合部から口縁部の約1/2にかけてタテハケを施し、S K7985に伴う可能性がある。

#### (7) その他の遺物

今回の調査で出土したその他の遺物には、緑釉陶器35点、黒色土器6点、製塩土器10個体以上、風字硯1点、円面硯2点、青磁椀4点、青磁壺1点、土錘8点、ミニチュアの土師器鍋2点、墨書土器5点、墨痕のみられる土器6点、朱の痕跡のみられる土器2点、漆の付着する土器3点、釘などの鉄製品15点がある。

(101)はミニチュアの土師器鍋、(103)は円面硯、(104)は風字硯でいずれも遺物包含層から出土している。

#### 4 まとめ

今回の調査では区画道路と区画溝の交差点の状況を一部ではあるが、明らかにすることができた。東西方向の区画道路S F6009の北側の区画溝S D6002は交差点で途切れることなく西から東へと続く。しかし、南側の区画溝S D6050は交差点の手前で途切れている。交差点付近は攪乱土坑と平安時代後期の溝が重複しており、溝の痕跡すら確認しにくい状況であるため、本来はS D6002同様に南北道路を横切っていた可能性は残る。一方、この道路と交差する南北道路の区画溝については北側、南側とも西側の区画溝を検出したが、北側ではS D7965がS D6002と繋がるのに対し、南側ではS D7970が交差点の手前で途切れている。よって、西加座南ブロックの北東の隅は東西方向の区画溝と南北方向の区画溝が繋がらない可能性も考えられるが、交差点付近の状況が良くないため断定はしがたい。

これまで方格地割の交差点を調査した例は第24図にあるようにA～H地点まで8ヶ所がある。A地点では、東西方向の区画道路を南北方向の区画道路の東側の区画溝が横切っている。ただし、西側については調査区外のため不明である。このような例はトレンチ調査のため不確定ではあるもののG地点でもみられる。また、東西方向の区画溝が南北方向の区画道路を横切る例はH地点以外の各調査地点で確認されており、基本的には東西方向の区画溝は西から東へと繋がると考えてよさそうである。ただ、その要因については、自然地形の傾斜を反映するものか、区画をするという行為の際の意識の問題なのか、さらに他の要因によるものか定かではない。

また、今回のように南北道路の区画溝と東西道路の区画溝が接しない調査例はB地点とD地点でもみられるが、検出面と溝底のレベル差が10cm前後と浅いため本来は繋がっていたものが削平された可能性も考えられる。

なお、今回の調査では平安時代初期の4棟を含め14棟の掘立柱建物を検出したが、調査区内において建物配置などの規格性はみられない。(上村安生)

#### 参考文献

- ①齊藤孝正・後藤健一「須恵器集成図録」第3巻東日本編I 雄山閣出版 1995  
猿投窯編年の年代観は本書による。

## 第121次調査

(6ADH 篠林, 6ADJ-D 宮ノ前北, 6AEK-A・C 下園,  
6AEM 御館, 6ADN 内山地区)

### 1 はじめに

#### 経 過

方格地割北西隅は、他の区画と異なり、平安時代後期に設置され、4区画が大きな1区画をなし、区画道路は緩やかに蛇行し、線形・幅等は現在の農道とほぼ一致する。

#### 目 的

第121-1次調査は、宮ノ前北ブロックの北東隅に位置する。第121-2次調査は下園西ブロックの北西隅で、「斎王の森」の南側にあたり、第42-2次調査区（昭和157年度）の南辺に接する。第121-3次調査区は下園西・御館ブロック西辺の字界に位置する。上記3か所の調査区は、方格地割区画施設の確認を目的として設定した。

第121-4次調査区は、第118次調査区の北側の低地に位置し、第111-3次調査区と直交する。現況は、南側より一段低くなっており、遺構状況の確認を目的とした。

調査面積は、4箇所の調査区を合わせて約840㎡である。



第25図 第121次調査区位置図 (1:2,000)

## 2 第121-1次調査

### (1) 遺構

調査区は、東西の農道を境に北側の高い面と南側の低い面とに明確に分かれる。低地部分では、旧耕作土による削平により攪乱を受けたと考えられ、遺構は認められない。北側の一段高い調査区で、平安時代末期から鎌倉時代の井戸1基、溝5条、道路1条等が確認された。

S D 8011 調査区中央よりやや北側に位置し、東西に延びる溝である。上幅約0.8m・底幅約0.6m、深さ約0.2mで、中央部から東側では2段の落ち込み状をなしている。西半の溝底の標高は約9.8mではほぼ平坦である。

S D 8012 調査区中央部に位置し、約0.5m低くなった段の下をS D 8011に平行して、東に流れる溝である。上幅約0.4m、下幅約0.3m、深さは南の一段低い面から約0.05mを残すのみである。S D 8011とは、溝底の心々距離が約4.2mほどであり、この両溝を側溝として、道路S F 8014が存在したと考えられる。

S D 8016 S D 8012より新しく、S D 8012が削平を受け底部を残すのみという状態に対し、検出面から約0.4m～0.6mの深さまで更に掘り込んでいる。埋土は、上層では淡灰褐色粘質土、下層では暗黄灰色含礫砂層（径5cm程の小円礫を多量に含む）であった。陶器鉢の底部が1点出土した。

S D 8017 S D 8012よりも新しくその両端東壁面と西壁面で一部を検出した。埋土は淡灰褐色粘質土であった。西壁面近くから山茶碗の底部が1点出土した。

S E 8010 調査区の北西で検出した円形の素掘り井戸である。確認面での直径は約2.1mで、壁面は検出面から約0.3mで、淡黄灰色の砂礫層と脆くなり、作業の安全上から深さ約1.6mで調査を止めた。埋土は、小石を多く含む黒褐色土である。平安時代後期～鎌倉時代にかけての土師器杯・鉢・鍋、山茶碗が一括出土した。

S D 8013 調査区のはほぼ中央に位置し、S D 8011とS D 8012に挟まれた真中に位置し、現道の北側側溝とほぼ一致する。時期は、不明である。

### (4) 遺物

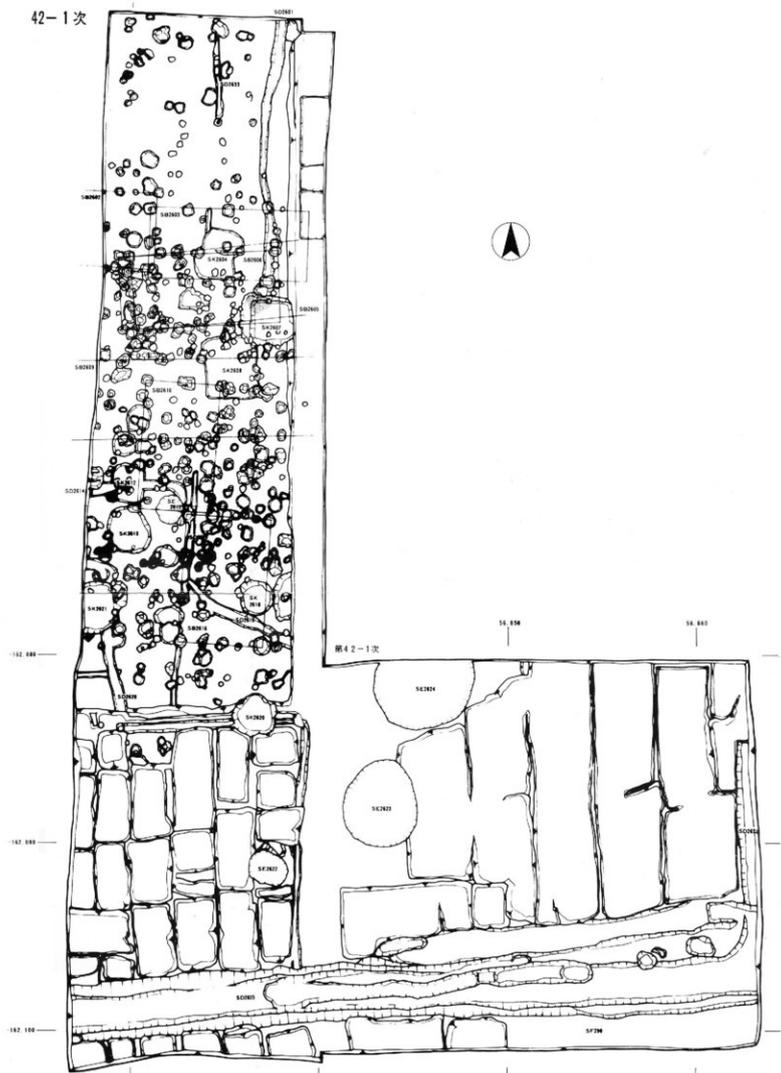
S E 8010 土師器 土師器杯・小皿・鉢・壺と山茶碗が出土した。土師器杯(1～20)は、杯から皿への変化を示しており、大別して口径に対して器高が高く、やや丸みをもつ底部から口縁部がわずかに内弯気味に立ち上がるA類(1～5)と口径に対して器高が低くなり、口縁部の立ち上がりが緩く皿状に近い器形を示すようになるB類(6～20)がある。さらに、B類は口縁部が肥厚し、口縁外面に面をつくるB<sub>1</sub>類(12～14)、底部と口縁部の境が不明瞭で断面が弧状に近くなるB<sub>2</sub>類(15～18)に細分できる。また、底部中央部に焼成前に外面から直径8mmほどの穿孔を施した杯が2点ある。

杯の法量は、A類で口径14.2cm～17.1cm・器高3.0cm～3.6cm、B<sub>1</sub>類で口径14.4cm～15.6cm・器高2.5cm～3.3cm、B<sub>2</sub>類で口径14.4cm～16.1cm・器高2.5cm～2.7cm、B<sub>3</sub>類で口径15.3cm～16.8cm・器高3.2cm～3.6cmである。

A類・B類ともに口縁部をユビオサエで成形したのち、ヨコナデ調整する。底部外面は不調整のままであり、底部内面を不定方向にナデ調整する。

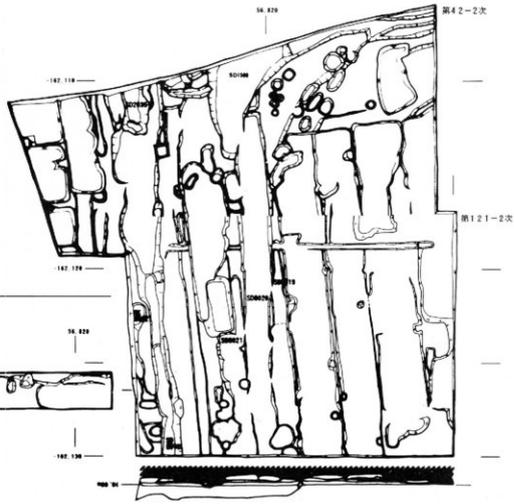
小皿(21・22)は、口径8.7cm～8.9cm・器高1.3cm～1.5cmで、断面弧状をなし、ヨコナデ調整する。

42-1次

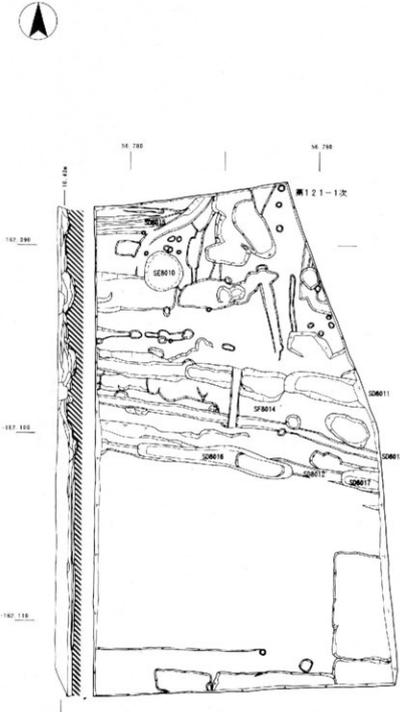


第42-1次

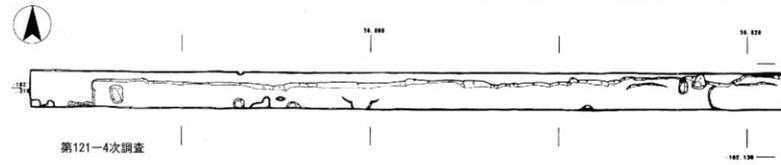
第42-2次



第121-2次



第121-1次



第121-4次調査

鉢(23)は、口径20.8cm・器高6.2cm・底径13.6cmで、底部に貼り付けられた口縁部がユビオサエで成形され、口縁上部が屈曲気味にヨコナアされ外反して開く。口縁端部は、わずかに内傾する面をもつ。

数個体が出土しており、ともに口縁部が大きく「く」字形に屈曲して開くものである。口縁部の屈曲が緩く外反気味に開く(25)と大きく屈曲して開く(24・26・27)がある。体部外面はユビオサエの圧痕を残す(24~26)とヨコハケ調整する(27)があり、体部内面は、上半部をヨコハケ調整し、下半部を横方向にヘラケズリする。

**山茶碗** 口縁部がわずかに内弯して開き、端部が外反し、断面方形のやや高い高台が貼り付けられる(28)と、口縁部が直線的に開き、高台は低く押し潰れたようなものとなる(29~31)の2種がある。

**白磁碗** (32)は、口縁部の小片であり、口径は不測。口縁端部の断面形は、玉縁状を呈する。灰釉陶器碗(34)、山茶碗(35~38)等が出土しているが、量的には山茶碗が多い。

S D 8011

**灰釉陶器** 高台径6.8cmの灰釉陶器碗(34)の高台部分のみの出土である。高台断面は、やや丸みをもった逆三角形形状をなす。

**山茶碗** 山茶碗(35~37)は、底部と高台のみの破片で、高台断面は逆台形状をなし、低く外方に踏ん張る。

**陶器鉢** 山茶碗系の鉢(38)は、高台径14.8cm。高台断面が逆台形をなし、ほぼ直立する。

S D 8012

**山茶碗** 山茶碗(39)は、高台径8.4cm。高台は、断面が逆三角形をなし、低い。高台外面にはモミガラ圧痕が残る。

S D 8015

**陶器壺** 壺(40)は、底径6.4cmの蛇の目高台をもつ小型の壺の底部と考えられる。外面は浅黄色である。

S D 8016

**土師器** 羽釜(41)は、推定口径21cmで、口縁部は直立し、鐙は水平に引き出される。口縁部内面を板ナデし、体部外面にはユビオサエの成形痕を残す。鐙を貼り付けた後ヨコナデ調整する。

その他の遺物

**墨書山茶碗**

山茶碗(33)は、調査区北東隅の小穴から出土した。高台内側に墨書が見られ、一部が欠けているものの「上」とも判読できる。

### 3 第121-2次調査

現況は、町道から「齋王の森」へと通じる低地部分に盛土を行い、道路跡と溝跡が整備されている。調査は、整備の盛土を重機によって除去することから始めた。遺構検出面は、低地部分の地表面から約0.3m下であり、そのほとんどは、近代の粘土採掘及び水田の開墾等によって削平を受けており、遺構の保存状況は極めて悪い。

#### (1) 遺構

確認できた遺構についても検出面から浅い部分では、数cmを残すのみであった。平安時代末期から鎌倉時代の南北溝を4条検出し、方位はいずれも約N4°Wとなる。

S D 2635

調査区の北西隅に位置する。幅約1.5m、深さ約0.3mである。第42-2次調査区から南への続きであり、埋土は暗灰色粘質土で粘性が非常に強い。

S D 8018

S D 2635の南に位置し、方位もほぼ同じでN4°Wの南北溝である。幅約0.9m、深さ約0.3mで一部掘り下げられる箇所が見られる。埋土は暗褐色粘質土である。

S D 8019

調査区中央で検出した。幅0.3m、深さ約0.5mほどでわずかに南に傾斜する。山茶碗の底部が1点出土した。埋土は暗灰褐色粘質土であった。

S D 8020 S D 1580の南に位置し、この溝の延長と考えられる溝であるが、北端は粘土採掘による削平を受ける。幅約1.3m、深さは約0.05mでその上面のほとんどが削平を受けたものと思われる。溝はわずかに南に傾斜し、埋土は暗褐色粘質土である。土師器杯、須恵器壺、山茶椀が出土している。

S D 8021 調査区の中央よりやや西側で検出した。S D 8020と平行する南北溝である。上幅約0.6m、深さは約0.1mである。時期は不明である。

### (3) 遺物

S D 8018 山茶椀 (56・57)は、高台の断面形が逆台形をなすもので、直立する(56)とやや外開する(57)があるが、比較的高い。

S D 8020 土師器 土師器杯(51)、須恵器壺(55)、山茶椀(58)が出土している。杯(51)は、平坦な底部から大きく内弯した口縁部が開き、端部が大きく外反する。器壁は薄い。口縁部下半部から底部をユビオサエで成形し、口縁部上半部をヨコナデする。

須恵器 杯(55)は、高台径7.0cmで、高台部は底部端からやや内側に貼り付けられ、断面方形で直立する。

山茶椀 (58)は、高台径6.7cmで、高台断面が逆台形で直立する。高台外面にモミガラ圧痕が残る。体部は、丸味をもち、大きく内弯して開くものと思われる。

S D 8019 山茶椀 (59)は、高台径9.0cmの低く、小さな高台が貼り付けられる。

S K 8022 土師器 杯(50)は、推定口径14cm、器高2.8cmで、口縁部と底部の境が不明瞭となり器形全体が丸味をもつ。口縁部が肥厚し、端部外面はヨコナデによりわずかに凹む。

包含層 粘土採掘坑から土師器杯(52~54)等が出土した。口径14.0cm~14.4cm・器高2.7~3.2cmで、緩く内弯する口縁部が端部で外反して開く。底部は、平らなもの(52)と凹むもの(53・54)がある。口縁部の下半にはユビオサエの成形痕が残りに、上半はヨコナデ調整される。

表土層直下から、緑軸陶器陰刻花文椀(60)が出土。高台径8.1cmで、断面方形の直立する高台が貼り付けられる。4葉の花弁と間弁が陰刻され、浅黄色を呈する。

## 4 第121-3次調査

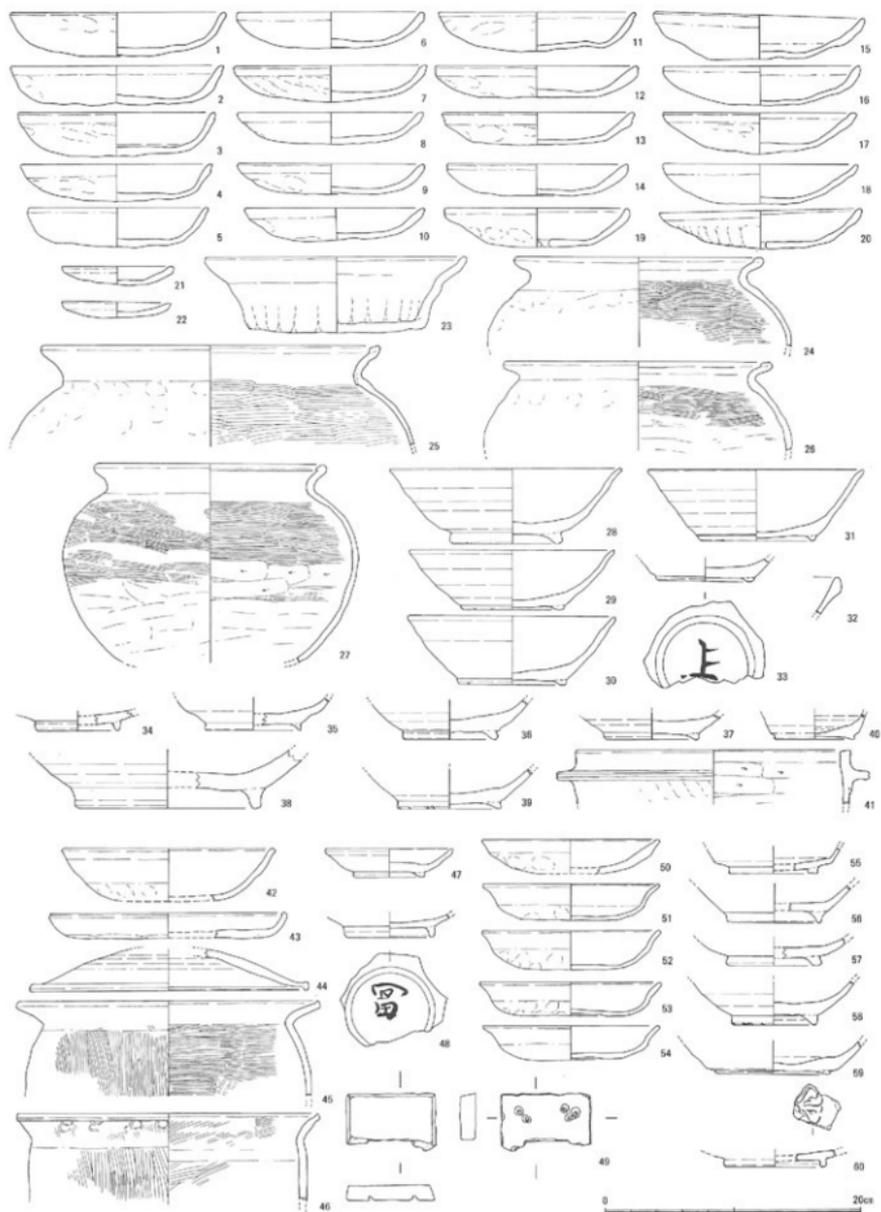
### (1) 遺構

「斎王の森」から南に延びる南北区画道路と方格地割北から2列目の東西区画道路との交差点を確認する目的で設定した調査区ではあったが、近代の瓦粘土採掘のため、遺構面が攪乱され、区画施設の遺構は確認できなかった。調査面は、現表土上面から約0.9mで、遺構面は標高9.0m~9.3mである。

### (2) 出土遺物

粘土採掘の攪乱坑から、平安時代前期の土師器杯・皿・甕、須恵器蓋、平安時代後期の灰軸陶器椀、山皿のほか石帯が出土している。

土師器 杯(42)は、口径17.0cm・器高4.2cmのやや深目の椀に近い器形をなす。底部から口縁部下部にユビオサエの成形痕を残し、口縁部を広くヨコナデ調整する。皿(43)は、口径18.9cm・器高2.1cmで、口縁部は内弯して外開し、端部は内側に巻き込まれる。甕(45・46)は、長胴甕であり口縁部が大きく「く」字形に屈曲する(45)、屈曲の少ない(46)がある。ともに体部内面をヨコナデ、外面をタテハケ調整し、口縁部をヨコナデ調整する。ヨコナデ調整が弱い(46)では、ハケ目痕が残りに、口縁部外面には竹



第27図 第121次調査 出土遺物

管文が施される。

須恵器

蓋(44)は口径22.0cmで、陣笠状の天井部をなし、口縁端部は水平に引き出され、下方に丸く引き出される。

灰軸陶器椀

(48)は、高台径7.2cmの三日月高台をもつもので、底部外面に「富」の墨書が薄く認められる。

小椀(47)は、口径10.3cm・器高2.3cmで低い高台が貼り付けられる。

石帯

(49)は、長辺3.55cm・厚0.6cmの巡方で、長方形の透かしをもつ。裏側には、帯への止め孔が対角線上に2孔1対で4か所ある。

#### 5 第121-4次調査

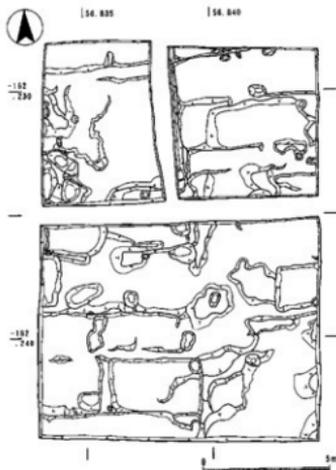
第99次及び第118次調査区の北に位置するこの調査区は、開き取り調査及び周辺地形から、かつては第99次及び第118次調査区から農道へ続いていたものである。調査の結果、遺構・遺物とも削平されていた。

#### 6 まとめ

第121次調査は、斎宮跡方格地割の北西隅部における区画施設である道路・溝の確認を目的とした調査であり、当該地区の方格地割北辺の区画施設の埋没時期は、平安時代後期から鎌倉時代であることが確認されるとともに、その区画は、史跡東部における直線的な地割りではなく、緩く蛇行していることも平成8年度の調査結果と同様である。区画外周が、史跡東部の方格地割と繋がる「斎王の森」付近での状況は、「斎王の森」と町道坂本・牛業線下にあり不明である。「斎王の森」から南に延びる南北道路は、第121-2次調査区で東西の側溝を確認し、道路幅約4.0mと判断される。

下図西ブロックと御館ブロックの境を東西に区画する道路と、交差点については近代の粘土探掘により確認できなかった。しかし、攪乱坑から出土した遺物は、当該区画内が平安時代には機能していたことを裏付けていると思われる。

(石沢誠人・駒田利治)



第28図

第121-3次調査区 遺構実測図(1:200)

# 第122次調査

(6AFN)

## 1 はじめに

### 経過

第122次調査は、第119次調査と同じく齋宮跡の「内院」と推定される鍛冶山西ブロック内に位置し、調査予定地内には第44次・第105次・第109調査で検出されている内郭柵列SA7150・7170が存在することが想定されている。SA7150はこの地点から更に南へ直進するのか、或いは一度東に折れ、第96-4次調査で確認されているSB6840に繋がり、鍵型の内郭を形成するかについては当該地区の調査に委ねられていた。

### 目的

この間、地元住民の要望を受け町建設課で町道舗装計画が予定されていたため、舗装工事に先立ち、内郭柵列SA7150の状況を確認するため計画調査として実施したものである。調査は、町道舗装工事のうち齋宮字鍛冶山2758-8番地で28㎡を対象として、平成10年1月5日から同年1月14日まで行った。

### 現況

調査の結果、調査区の北部分を中心に既存の水道工事による攪乱が認められ、遺構面は損なわれていた。調査区の南部分は遺構の保存状況も良く、道路整地層約0.2mの下層に黒褐色粘質土の遺物包含層約0.25mが堆積し、その下層で黄褐色粘土層の地山を確認し、遺構はこの面で検出された。遺構検出面の標高は9.5m～9.9mである。



第29図 第122次調査区位置図 (1:1,000)

## 2 遺構

内郭柵列 S A 7150 及び後出する南北柵列 S A 7170 の柵列柱穴をそれぞれ 1 穴確認するとともに、小さな柱穴を確認した。しかし、遺物は、遺物包含層及び柱穴からも出土量が少なく、かつ細片であり時期判断の資料とはならない。従って、確認された柱穴については、これまでの時期判断に従い報告する。

### (1) 奈良時代後期

S A 7150

第44次調査区南東隅部で、西側柱 3 間が確認されて建物と想定した S B 2705 は、第105次調査で確認された南北方向の柵列 S A 7150 の 6 間分の延長線上に位置することが確認され、第109次調査で S B 2705 の北妻柱筋で東に延びる柵列 S A 2705 が 9 間確認されたことにより、内郭を構成する柵列であることが判明した。しかし、柵列の南及び東方面での状況は、調査が行われておらず不明であった。ただ、南では第105次調査区と道路を隔てた南東部で現状変更による第96-4次調査が行われており、10尺等間的大型建物の柱列を確認していた。S B 6840 は、南北方向に 3 間の東側柱列と北妻柱 1 間を確認していたが、鍛冶山西ブロック内における建物配置を検討するため行った10尺方眼の検討結果から、S A 7150 は第105次調査区で検出した南端から 2 間南で東に折れ、S B 6840 に繋がることも考えられ、試算として提示した。しかし、詳細な検討は、当該地区の発掘調査を待たねばならなかった。

今回の調査で東に折れると想定された地点で、保存状況は必ずしも良くはないが一辺約100cm・深さ約12cmの略方形の柱穴を確認したが、東側には柱穴の存在が認められず、S A 7150 は東に折れず、更に南に延びるものと判断した。従って S B 6840 は、桁行 4 間以上、梁行 3 間以下の南北棟の掘立柱建物であると判断される。柱穴の標高は、9.5m である。出土遺物は、土師器細片のみである。

S A 7170

第105次調査で内郭柵列として、S A 7150 の東約4.5mの位置で、ほぼ平行して南北方向に延び、調査区内では 6 間分検出した。その後、第109次調査で北への延長が確認され、総長23間(67.6m)が確認できている。北辺では、外郭柵列 S A 6780 の手前 2 間で途切れる。南へは、今回の確認により更に直進するものと推定される。検出した柱穴は、一辺約120cmの方形、深さ約40cmで、比較的保存状況は良い。柱穴底の標高は、9.5m である。遺物は、土師器細片のみである。

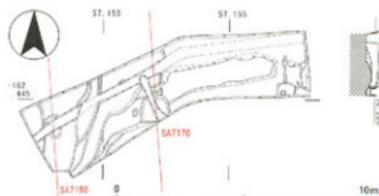
### 3 まとめ

S A 7150

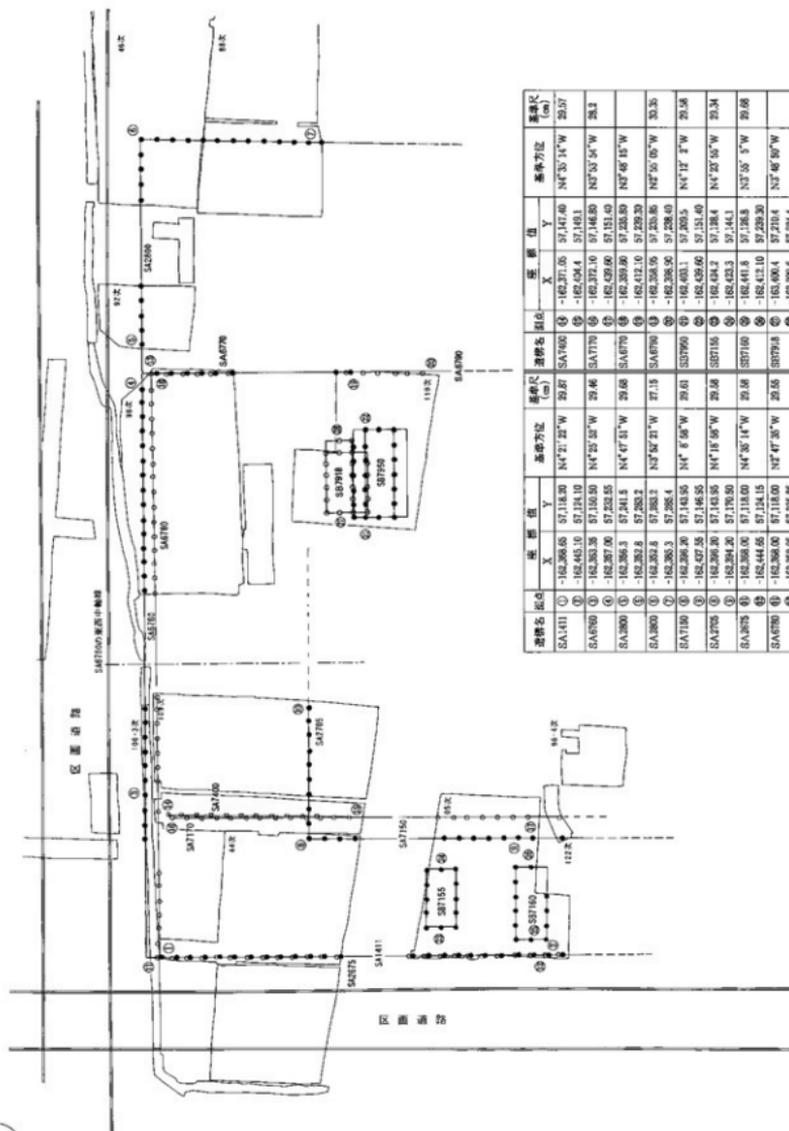
S A 7150 は、外郭西辺柵列 S A 1411 の東約23.6m(80尺)で柱筋を描き、第122次調査で確認した柱穴から北へ17間の地点で直角に東に折れ、外郭北辺柵列 S A 6760 の南約32.6m(110尺)で柱筋を描く S A 2705 となり、内郭柵列を構成する。また、調査地点から、東の S B 6840 に繋がることなく、更に南に延びる柵列と考えられる。

S A 7170

S A 7170 は、外郭柵列の S A 1411 に後出する S A 2675 に柱筋を描く南北柵列であり、S A 7150・7400 に後出する柵列と考えられる。



第30図 第122次調査 遺構実測図 (1:200)



第31回 鍛冶山西ブロック主要遺構・座標測定位置図 (1 : 1,000)

遺構名	記号	座 標 値		座 標 値		座標方位	距離 (m)
		X	Y	X	Y		
SA1431	①	-162,268.65	57,118.30	-162,271.05	57,147.40	N4°35'14"W	29.57
SA6780	①	-162,445.10	57,124.10	-162,434.4	57,149.1		
SA6780	②	-162,383.35	57,116.50	-162,372.10	57,146.80	N2°35'54"W	28.3
SA1300	①	-162,287.00	57,232.55	-162,439.60	57,151.45		
SA1300	②	-162,286.13	57,241.5	-162,269.00	57,233.80	N2°45'15"W	
SA1800	①	-162,282.5	57,282.2	-162,422.10	57,229.20		
SA1800	②	-162,282.5	57,282.2	-162,268.90	57,233.85	N4°25'05"W	33.35
SA1130	①	-162,282.5	57,143.65	-162,268.90	57,233.85		
SA1130	②	-162,282.5	57,143.65	-162,268.90	57,233.85	N4°17'4"W	29.58
SA2725	①	-162,268.20	57,178.50	-162,404.2	57,128.4	N4°29'55"W	29.24
SA2675	①	-162,268.00	57,118.00	-162,411.5	57,126.5	N2°55'7"W	29.68
SA2675	②	-162,444.55	57,124.15	-162,422.10	57,229.20		
SA6780	④	-162,268.00	57,118.00	-165,400.4	57,210.4	N2°49'50"W	
SA6780	⑤	-162,268.95	57,232.85	-162,269.5	57,224.4		

図 3 表 鍛冶山西ブロック 遺構・建物基準方位・基準尺一覽表

欄列 S A 7150・7170は、ともに10尺等間を基準として計画されたものであり、1間は29.4～29.5cmを基準としている。

次に、斎宮跡方格地割の施行に伴う基準方位並びに基準尺の設定にかかわる課題について、中心殿舎が確認されていない段階で課題も多いが、この鍛冶山西ブロックの欄列を中心に検討を加えてみる。

## 基準方位

斎宮跡の遺構の方位については、これまでの調査でも建物の方位を中心に検討が加えられ、史跡東部の方格地割における奈良時代後期から平安時代前期では北に対して4°ほど西に振っており、時代が降るとともに西に振る角度を減じ、平安時代中期には北に対して東に偏り、後期になると再び北に対して西に振る傾向が認められてきた。一方、方格地割側溝も幾度となく掘り返しが認められるが、側溝の検出事例から北から4°西に振ることが確認されている。この4°の数値は、概数であり、分或いは秒の単位での数値ではない。今回、鍛冶山西ブロックにおける方格地割施行と相前後して設けられたと考えられる欄列を中心に国土調査法による第VI座標系の数値によりこれまでの事実関係を検証してみる。

奈良時代後期後葉に設置されたと考えられる外郭欄列 S A 1411, 6760, 2800は、北から西に4°21'22"～4°47'51"振り、この時期に区画内を区画した内郭欄列 S A 7150・2705は、10'の誤差をもつが、西に4°08'58"～4°18'58"振る。また、この時期に造営された S B 7950・7155の棟方向は、北から西に4°12'02"・4°23'55"振るが、同時期と考えられる S B 7160は3°55'05"とわずかに振りが小さい。

一方、欄列の第Ⅱ期にあたる S A 2675・6780・7170・6770は、北から西に4°35'14"～2°47'35"とばらつきが大きい<sup>(1)</sup>が、4°未満の角度を示すものが多くなる。建物においても S B 7950・7155に後出する S B 7918では、3°48'05"と同じく4°未満の値を示しており、方格地割創設時は基準方位を北から西に4°21'22"～4°47'51"に求めて計画されたと考えられる。その後、方格地割の再編成或いは変遷を通じて遺構配置は、次第に西方位に振る度合いが小さくなったと考えられる。基準方位の確定は、中心殿舎が確認されていないこと、座標数値の読みとりと正確さを求めることが課題となっており、方格地割の基準方位の検討と合わせて今後の大きな課題となる。<sup>(註1)</sup>

## 基準尺

奈良時代後期における建物配置並びにその建築にあたっての基準単位は、検出遺構柱痕跡から29.4～30.0cmの数値が得られているが、実際の建築状況からは個々の柱穴では、ばらつきが多く基準尺を特定することは困難な状況にある。しかし、方格地割施行時の奈良時代後半から平安時代初期では、基準尺を29.6cm前後において計画されたと推定することが可能である。  
(駒田利治)

(註)

- (1) 座標数値は、1/20の遺構実測図を概報作成のため縮小編集した1/100遺構図から読みとった数値であり、±10cm程度の誤差があると考えられる。座標数値の正確さを期するため、或いは調査基準点間の誤差修正のため、平成10年度から図面管理も兼ねて、既存実測図(1/100)のデジタル化によるコンピューターへの入力作業を行っており、近い将来正確な検討が可能となる。

## 付編 1 第118次調査出土と同開珎付着物の分析

### 1 はじめに

平成9年度の第118次調査において、地鎮に関連する遺構とみられる S X 7860が見つかり、土師器杯内部に和同開珎5枚が裏向きに置かれ、土師器高杯で蓋をするようにして埋納されていた。これらの和同開珎は劣化がすすみ、銭貨の形状を保つことも困難な状態であったために、平成10年度事業として、これらの保存処理を行い、あわせて銭貨表面の付着物を分析調査する事とした。保存処理と分析は、(財)元興寺文化財研究所に委託した。今回はこの分析調査の結果について報告する。

### 2 試料の分析

#### (1) 使用機器及び分析条件

銭貨の付着物は、顕微鏡などの観察で布の一部と見られたため、下記の機器及び条件で分析を行なった。

#### 使用機器

・フーリエ変換型赤外分光光度計 (FT-IR) (日本電子(株)製 JIR-6000)

試料に赤外線を照射し、そこから得られる分子の構造に応じた固有の周波数の吸収を解析し、化合物の種類を同定する。

測定条件: K B r 錠剤法 \* 分解能  $4^{-1}$  cm, 検出器 T G S

(\* K B r (臭化カリウム) 錠剤法 試料を K B r と混合、圧縮し、錠剤を作成して行なう分析法)

・生物顕微鏡 (株)オリンパス B X-50)

・実体顕微鏡 (株)オリンパス S Z H-I I L D)

#### 分析の方法

#### (2) 付着物の分析

布の残存が僅かであり、経糸と緯糸を区別する事ができなかったため、分析は表出した繊維を採取して行なった。

#### 組織観察

組織観察では、和同開珎5枚のうち、2枚に僅かに布が観察された(図版1)。実体顕微鏡下では、比較的採取が容易な(130)から繊維を数本採取し、生物顕微鏡で繊維の側面観察を行った。繊維種同定に重要な繊維断面の観察は、試料が少なく不可能であった。

#### FT-IR分析

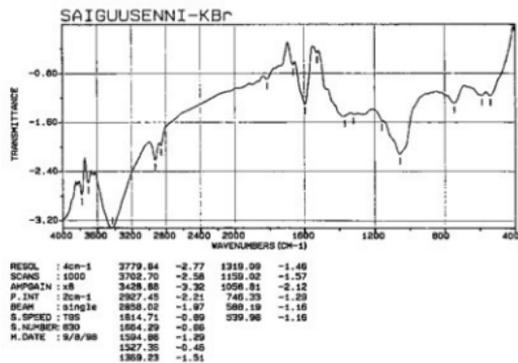
(130)から繊維を微量採取し、K B r 錠剤法で分析を行なった。比較として、大麻、苧麻も同様に分析を行った。

### 3 分析の結果

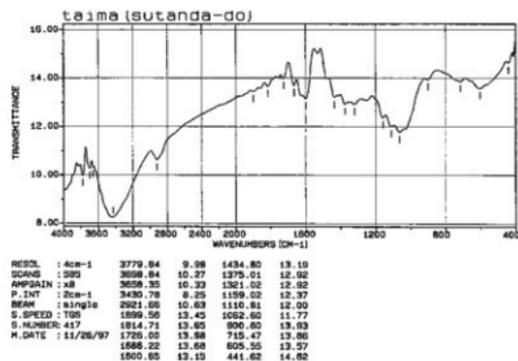
生物顕微鏡による組織観察の結果、繊維の幅は20~25 $\mu$ mで、繊維側面に縦の条線、所々に横の条線が見られた(図版1下)。以上により、布の繊維は麻系(大麻か苧麻)のじん皮組織である。

また、FT-IR分析をあわせて行なった結果、繊維は苧麻ではなく、大麻の可能性が高い(第1図)。

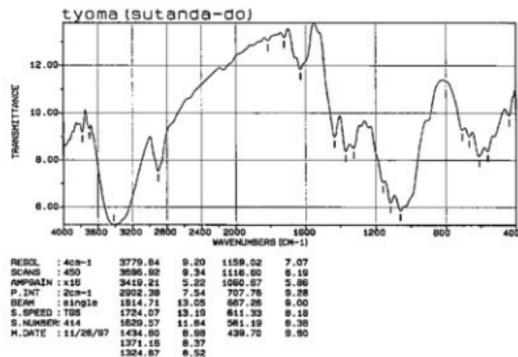
付着繊維の  
FT-IRチャート



大麻の  
FT-IRチャート



苧麻の  
FT-IRチャート

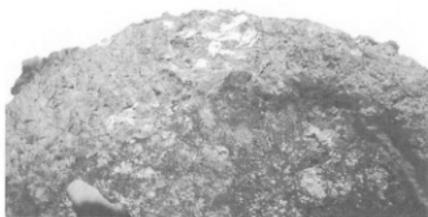


第1図 付着繊維と比較サンプルのFT-IRチャート

図版 1 第118次調査出土和銅開珠の付着物



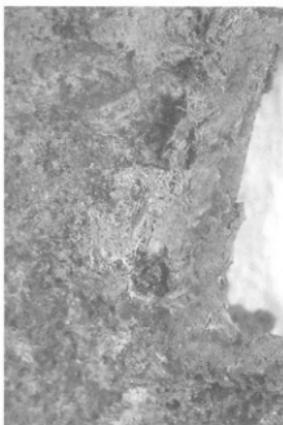
(129)



(X5)



(130)



(X10)



(130) より採取した繊維

(X150)

## 付編2 第119次・第120次調査花粉・植物珪酸体分析

### 1 はじめに

今回は、平成9年度実施した発掘調査のうち、第119次調査および第120次調査で採取した土壌サンプルの花粉・植物珪酸体分析をバリノ・サーヴェイ株式会社に委託して実施した。以下にその結果について報告する。

### 2 試料

#### 試料採取地点

第119次調査・第120次調査で珪藻分析・花粉分析を行った試料は、それぞれ掘立柱建物跡・方形周溝墓S X7945周溝部・井戸SE7920・方格地割の区画道路側溝SD6050の遺構埋土の計12点である。分析試料の詳細は第1表に示す。

### 3 分析の方法

#### 植物珪酸体分析

試料で湿重で5g秤量し、過酸化水素水、塩酸の順に化学処理し、試料の泥化と有機物の分解・漂白を行う。自然沈降法で粘土分、傾斜法で砂分を除去した後、適量計り取りカバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、ブリュウラックスで封入する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1000倍で行い、メカニカルステージで任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に、200個体以上同定・計数する。(珪藻化石の少ない試料はこの限りではない)。種の同定は、K.Krammer and Lange-Bertalot (1986・1988・1991a・1991b)、K.Krammer (1992)、Reichardt, E.(1995)、Lange-Bertalot, H.&D.Metzeltin(1996)、Lange-Bertalot, H.K.Kulbs, T.L. auser, M.Noerpel-Schempp&M.Willmann(1996)、Metzeltin, D.&A.Witkowski(1996)などを用いる。同定結果は、産出種を、アルファベット順に並べた一覧表で示す。堆積環境の解析にあたり、塩分濃度に対する適応性から産出種を海水生種、海水～汽水生種、汽水生種、淡水生種に分類し、淡水生種については更に塩分・水素イオン濃度(pH)・流水に対する適応性に基づいて生態区分する。そして、主要な分類群について、主要珪藻化石の層位分布図を作成する。図中の海水～淡水生種の比率と各種産出率は全体基数、淡水生種の生態性の比率は淡水性種の合計を基数とした相対頻度で算出する。

#### 花粉分析

試料約10gについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液(臭化亜鉛:比重2:2)による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス処理の順に物理・化学的処理を施し、花粉化石を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製し、光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類(Taxa)について同定・計数する。

結果は、木本花粉は木本花粉総数、草本花粉・シダ類胞子数から不明花粉を除いたものを基数とした百分率を算出し、図示する。図表中で複数の種類をハイフォンで結んだものは、種類間の区別が困難なものである。

### 4 分析の結果

#### 珪藻分析の結果

珪藻分析については、結果を第2表に示す。珪藻化石は第119次調査・第120次調査のいずれの試料からもほとんど産出せず、珪藻殻の破片も無かった。

#### 花粉分析の結果

花粉分析の結果は第3表、第2図に示す。各試料とも検出される花粉化石は保存状

態が悪く、外膜が溶けて薄くなっていたり、壊れていたりする。また、第119次調査試料番号8 (SE7920)を除く11試料では、花粉化石の検出個体数も少ない。第119次調査の試料番号8における木本花粉の出現傾向は比較的単調であり、マキ属・ツガ属・マツ属が多産し、次いでモミ属・スギ属・コナラ亜属・アカガシ亜属などが検出される。草本花粉は、イネ科・カヤツリグサ科・オミナエシ属・ヨモギ属・キク亜科などが検出されるが、全体的に出現は低率である。

## 5 分析結果の考察

今回の試料では、概して花粉化石の保存が悪く、一部の試料を除いてほとんど検出されなかった。花粉化石は、水成層など嫌氣的な状況下では分解されにくいですが、好氣的な状況下では分解されやすい。このことから、今回対象とした堆積物の大部分は、好氣的な状況下で堆積が進んだ可能性がある。なお、これまで行った調査成果をみると、平成8年度の第116次調査区では、比較的花粉化石が多く検出されたが、第114次調査区・第115次調査区では花粉化石の保存が悪い。

今回唯一花粉化石の多産が見られたのは、奈良時代後期の井戸SE7920から採取された試料(試料番号8)である。検出された花粉化石は、マキ属・モミ属・ツガ属・マツ属・スギ属など温帯性針葉樹を主体とする。おそらく、これらの種類は後背の山地を中心に生育していたものと考えられる。これまで行った成果をみると、第116次調査に見られるように、草本類主体の組成や、湿地・河野などを中心に生育するような木本類が主体の組成であった。これらは、主として沖積地の植生を反映していると考えられる。今回の調査では、これまでと違い、後背山地の植生を反映していると考えられるが、おそらく堆積環境等の違いによるものと考えられる。一方、珪藻化石に関しても、保存状況が悪かった。生体内に珪酸質を作る植物は珪藻以外にイネ科植物などにみられる植物珪酸体がある。土壤中に堆積した珪酸体の挙動に関しては不明な点も多いが、比較的早い段階で溶解し、植物に再吸収されたり、粘土の生成に関与したりしていることが指摘されている(近藤, 1998)。今回の場合も、何らかの理由で珪藻化石が堆積後に溶解したと思われる。

## 引用文献

- Asai, K. and Watanabe, T. (1995) Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groupes relating to Organic Water Pollution (2) Saprophilous and saproxenous taxa. *Diatom*, 10, 35-47.
- 伊藤良永・堀内誠示 (1991) 陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用。珪藻学会誌 6, p.23-45.
- 近藤鍊三 (1988) 植物珪酸体 (Opal Phytolith) からみた土壌と年代。ペドロジスト, 32, p.189-91.
- Krammer, K. and Lange-Beratalot, H. (1986) Bacillariophyceae, Teil 1, Naviculaceae. Band 2/1 von: Die Sueswasserflora von Mitteleuropa, 876p., Gustav Fischer Verlag.
- Krammer, K. and Lange-Beratalot, H. (1988) Bacillariophyceae, Teil 2, Epithemia-ceae, Bacillariaceae, Surirellaceae. Band 2/2 von: Die Sueswasserflora von

- Mitteleuropa, 536p., Gustav Fischer Verlag.
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H. (1991a) Bacillariophyceae, Teil 3, Centrales, Fragilariaceae, Eunotiaceae. Band 2/3 von: Die Süßwasserflora von Mitteleuropa, 230p., Gustav Fischer Verlag.
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H. (1991b) Bacillariophyceae, Teil 4, Achnantheaceae, Kritische Ergänzungen zu Navicula (Lineolatae) und Gomphonema. Band 2/4 von: Die Süßwasserflora von Mitteleuropa, 248p., Gustav Fischer Verlag.
- Krammer, K. (1992) PINNULARIA, eine Monographie der europäischen Taxa. BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA BAND 26. p.1–353., BERLIN · STUTTGART.
- Reichardt, E. (1995) Die Diatomeen (Bacillariophyceae) in Ehrenbergs Material von Cayenne, Guyana Gallica (1843). Iconographia Diatomologica 1., 107p., Koeltz.-Koenigstein.
- Lange-Bertalot, H. & D. Metzeltin (1996) Oligotrophie-Indikatoren. 800 Taxa repräsentativ für drei diverse Seen-Typen. Iconographia Diatomologica 2., 390p., Koeltz.-Koenigstein.
- Lange-Bertalot, H. K. Kulbs, T. Lauser, M. Noerpel-Schempp & M. Willmann (1996) Dokumentation und Revision der von G. Krasske beschriebenen Taxa., 358p., Iconographia Diatomologica 3., Koeltz.-Koenigstein.
- Metzeltin, D. & A. Witkowski (1996) Diatomeen der Baren-Insel. Süßwasser- und marine Arten., 287p., Iconographia Diatomologica 4., Koeltz.-Koenigstein.

第1表 第119次・第120次調査 花粉・植物珪酸体分析試料一覧表

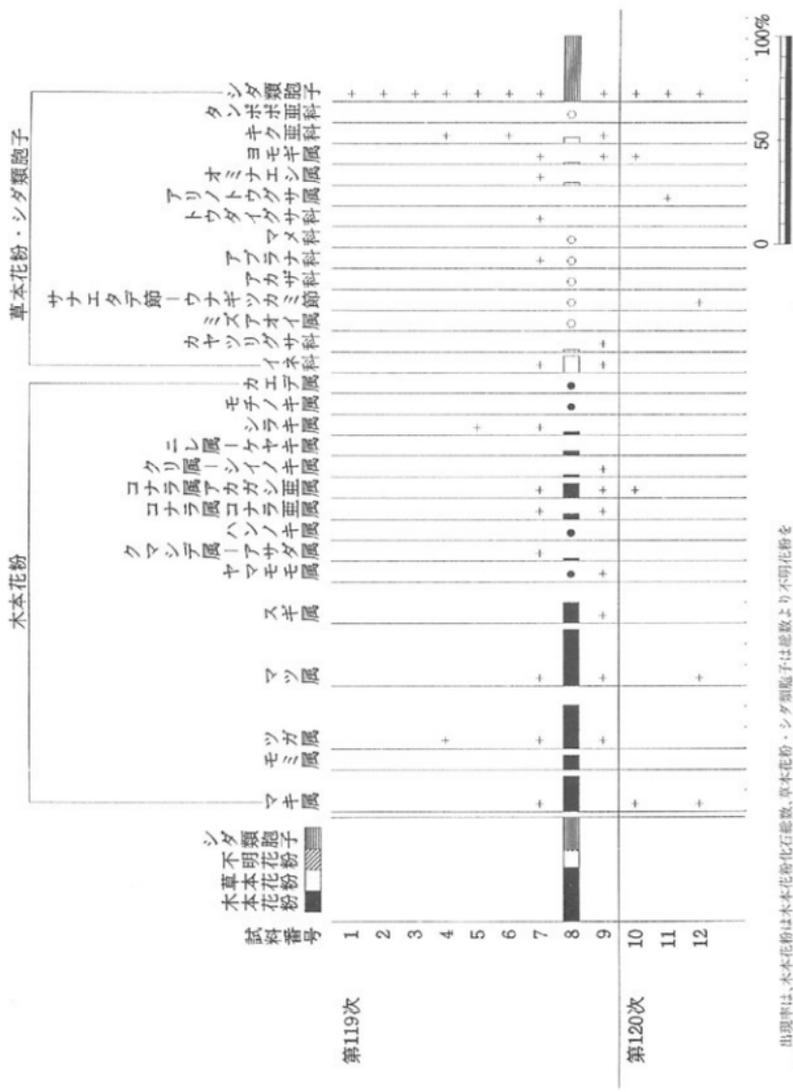
試料No.	調査回数	遺構名	時期	備考
1	第119次	SB7950 R-12 P2	奈良時代末 ～平安時代初期	南庇
2	第119次	SB7950 Q-15 P11	奈良時代末 ～平安時代初期	身舎
3	第119次	SB7947 R-17 P2,4,5	平安時代初期 ～平安時代前I期	
4	第119次	SX7945	弥生時代後期	
5	第119次	SB7938 P-17 P20	平安時代前I期	身舎
6	第119次	SB7938 P-17 P17	平安時代前I期	身舎
7	第119次	SE7920 周囲整地土	奈良時代後期	
8	第119次	SE7920 L = 5.750m	奈良時代後期	
9	第119次	Q-17 P33	不明	
10	第120次	SD6050 第1層	奈良時代後期	
11	第120次	SD6050 第2層	奈良時代後期	
12	第120次	SD6050 第3層	奈良時代後期	

第2表 第119次・第120次調査 植物珪酸体分析結果

種	類	環境指標種	遺構番号 試料 No.													
			SB7950 1	SB7950 2	SB7947 3	SX7945 4	SB7938 5	SB7938 6	SE7920 7	SE7920 8	P33 9	SD6050 10	SD6050 11	SD6050 12		
<i>Nitzschia palea</i> (Kuetz.) W.Smith		好汚濁性種	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Hantzschia amphioxys</i> (Ehr.) Grunow		陸生珪藻・広域適応性種	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
<i>Navicula contenta</i> Grunow		陸生珪藻・好清水性種	-	-	-	-	-	-	1	-	-	1	-	-	-	-
<i>Navicula mutica</i> Kuetzing		陸生珪藻・好汚濁性種	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
<i>Caloneis aerophila</i> Bock		陸生珪藻	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
<i>Nitzschia</i> spp.		不明	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Navicula</i> spp.		不明	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Pinnularia</i> spp.		不明	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
珪藻化石総数			1	0	0	1	0	0	4	0	1	2	0	0	0	0

第3表 第119次・第120次調査 花粉分析結果

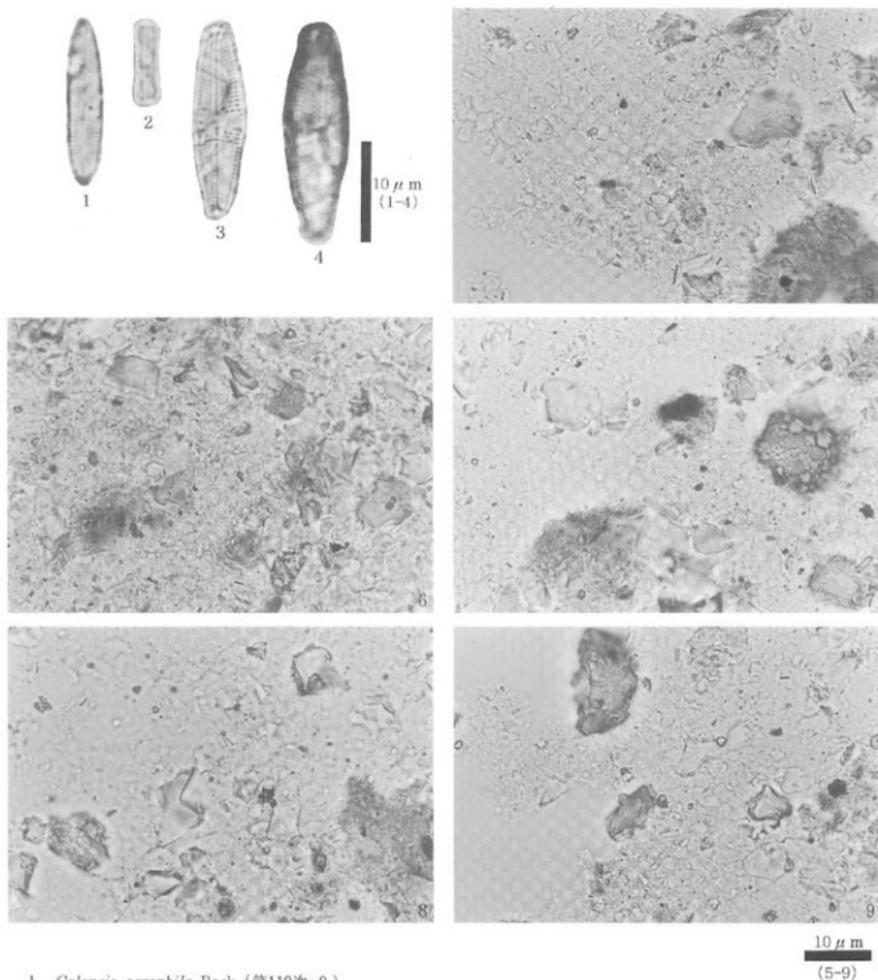
種 類	遺構名 試料No.	SB7950		SB7947	SX7945	SB7938		SE7920		P33	SD6050		
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
木本花粉													
マキ属		-	-	-	-	-	-	5	42	-	1	-	1
モミ属		-	-	-	-	-	-	-	17	-	-	-	-
ツガ属		-	-	-	1	-	-	2	52	3	-	-	-
マツ属		-	-	-	-	-	-	3	67	3	-	-	1
スギ属		-	-	-	-	-	-	-	25	1	-	-	-
ヤマモモ属		-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-
クマシデ属-アサダ属		-	-	-	-	-	-	1	4	-	-	-	-
ハンノキ属		-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
コナラ属コナラ亜属		-	-	-	-	-	-	1	7	2	-	-	-
コナラ属アカガシ亜属		-	-	-	-	-	-	3	17	1	1	-	-
クリ属-シイノキ属		-	-	-	-	-	-	-	3	1	-	-	-
ニレ属-ケヤキ属		-	-	-	-	-	-	-	6	-	-	-	-
シラキ属		-	-	-	-	1	-	1	4	-	-	-	-
モチノキ属		-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
カエデ属		-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
草本花粉													
イネ科		-	-	-	-	-	-	4	38	6	-	-	-
カヤツリグサ科		-	-	-	-	-	-	-	5	1	-	-	-
ミズアオイ属		-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-
サナエタデ節-ウナギツカミ節		-	-	-	-	-	-	-	3	-	-	-	1
アカザ科		-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
アブラナ科		-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-
マメ科		-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
トウダイグサ科		-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
アリノトウグサ属		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
オミナエシ属		-	-	-	-	-	-	1	7	-	-	-	-
ヨモギ属		-	-	-	-	-	-	9	5	22	1	-	-
キク亜科		-	-	-	1	-	1	-	14	1	-	-	-
タンポポ亜科		-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-
不明花粉													
シダ類胞子													
シダ類胞子		4	3	4	8	2	7	14	151	26	10	3	21
合 計													
木本花粉		0	0	0	1	1	0	16	248	12	2	0	2
草本花粉		0	0	0	1	0	1	16	79	30	1	1	1
不明花粉		0	0	0	0	0	0	0	4	0	0	0	0
シダ類胞子		4	3	4	8	2	7	14	151	26	10	3	21
総計(不明花粉のぞく)		4	3	4	10	3	8	46	478	68	13	4	24
その他													
鞭虫卵		-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-



出現率は、木本花粉は木本花粉化石総数、草本花粉・シダ類孢子は総数より不明花粉を除く数を基数として百分率で算出した。なお、●は1%未満、○は木本花粉100個体未満の試料について検出した種類を示す。

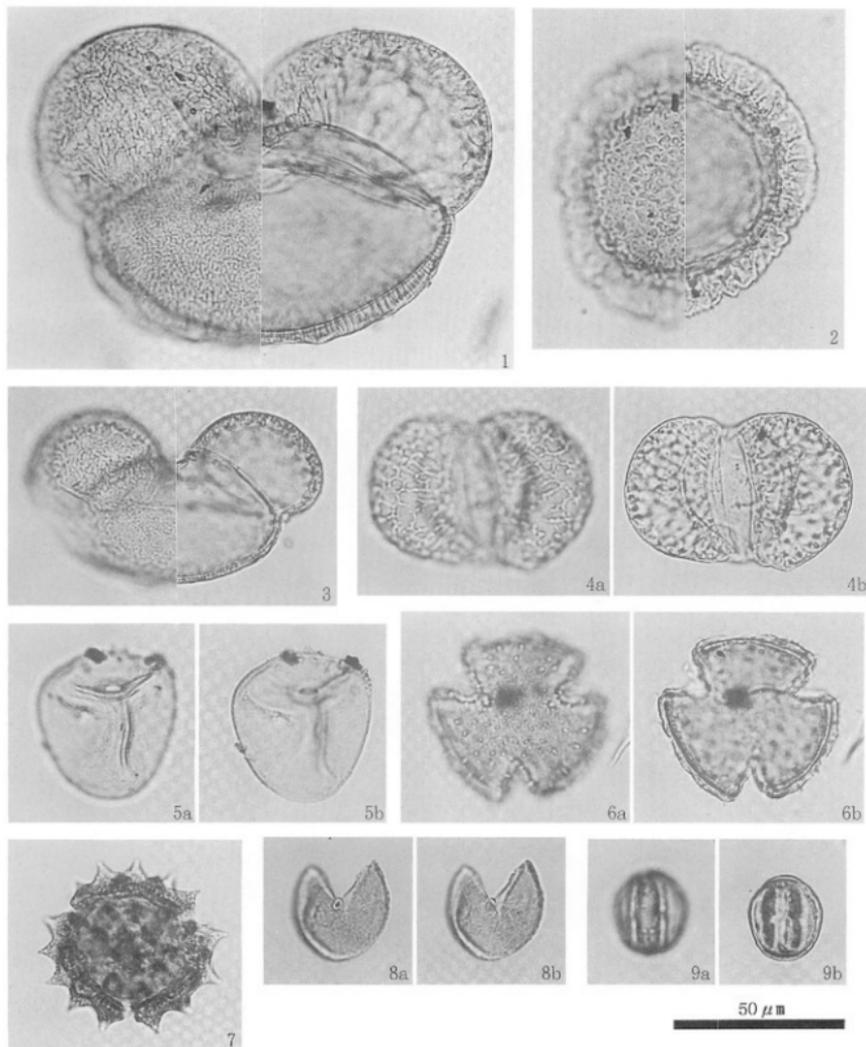
第2図 第119次・第120次調査花粉化石組成

図版2 第119次・第120次調査珪藻化石・珪藻分析プレパラート内の現況写真



1. *Caloneis aerophila* Bock (第119次; 9)
2. *Navicula contenta* Grunow (第119次; 7)
3. *Navicula mutica* Kuetzing (第119次; 7)
4. *Stauroneis obtusa* Lagerst (第119次; 7)
5. 状況写真 (第119次; 2)
6. 状況写真 (第119次; 5)
7. 状況写真 (第119次; 5)
8. 状況写真 (第119次; 6)
9. 状況写真 (第119次; 8)

図版3 第119次・第120次調査花粉化石分析プレパラート内の現況写真



- |                          |                      |
|--------------------------|----------------------|
| 1. モミ属 (第119次; 8)        | 2. ツガ属 (第119次; 8)    |
| 3. マツ属 (第119次; 8)        | 4. マキ属 (第119次; 8)    |
| 5. イネ科 (第119次; 8)        | 6. オミナエシ属 (第119次; 8) |
| 7. キク亜属 (第119次; 8)       | 8. スギ属 (第119次; 8)    |
| 9. コナラ属アカガシ亜属 (第119次; 8) |                      |

第6表 掘立柱建物・柵列一覧表

遺構番号	規模	棟方向	桁行 (m)	梁行 (m)	柱間寸法 (m)		時期	備 考
					桁行	梁行		
第118次調査 (6ADN)								
SB7880	5×5	E4°N	11.75	11.31	2.35	2.27	奈良中期	北庇出2.1m、南庇出2.4m 西梁行柱間寸法3.4m
SB0251	3×2	E3°N	5.82	4.00	1.94	2.00	平安初期	
SB0250	3×2	E3°N	6.30	4.20	2.10	2.10	◇	
SB7900	4×2	E3°N	10.00	4.70	2.50	2.35	◇	
SB7855	-×2	N3°W	-	4.60	-	2.30	平安前I期	南庇出2.2m
SB7875	3×2	E4°N	6.60	4.20	2.20	2.10	◇	
SB7885	3×2	N4°W	6.80	4.60	2.27	2.30	◇	
SA7904	4	E5°N	12.00		3.00		◇	
SB6679	1×1	E2°N	2.30	2.20	2.30	2.20	平安前II期	
SB6915	3×2	N2°E	5.70	4.40	1.90	2.20	◇	南庇出1.9m
SB7850	4×2	E7°N	9.20	4.50	2.30	2.25	◇	北庇出2.2m・南庇出2.2m・東庇出2.2m・西庇出2.2m 北庇出2.1m、東庇出2.1m、西庇出2.15m 西庇出2.3m
SA7866	4	E7°N	8.20		2.05		◇	
SB7890	7×4	E3°N	14.90	8.60	2.10	2.10	◇	
SB7895	7×3	E4°N	14.75	6.30	2.10	2.10	◇	
SB7896	6×2	E4°N	13.50	4.00	2.24	2.00	◇	
SB7865	4×2	E4°S	8.00	4.20	2.00	2.10	平安中期	
SA7889	3	E2°N	7.20		2.40		◇	
SB7893	3×2	E5°S	5.40	4.20	1.80	2.10	◇	
SB7903	3×2	E7°N	5.61	3.80	1.87	1.90	◇	
SB7863	4×2	E5°N	8.20	4.60	2.05	2.30	平安後I期	南庇出1.8m、西庇出2.3m
SB7864	3×2	N12°W	4.50	4.20	1.50	2.10	◇	
SB7870	6×3	E3°N	13.50	6.30	2.24	2.25	◇	
SB7871	3×2	E12°N	7.11	4.40	2.37	2.20	◇	
SB7872	2×1	E4°N	4.00	3.00	2.00	3.00	◇	
SB7897	6×2	N5°W	12.60	4.20	2.10	2.10	◇	
SB7898	2×2	E3°N	4.40	4.20	2.20	2.10	◇	
SB6914	5×2	E4°N	10.25	4.00	2.05	2.00	平安後II期	
SB7886	3×2	N3°W	6.75	4.50	2.25	2.25	◇	総柱建物
SB7894	4×2	E5°N	8.60	4.40	2.15	2.20	◇	
SA7888	5	E2°N	10.50		2.10		平安後期	
SB6674	5×3	N2°W	10.70	5.40	2.14	1.80	平安末期	総柱建物
SB6675	4×2	N2°W	8.10	4.20	2.03	2.10	◇	
SB6676	5×3	N2°W	10.50	5.52	2.10	1.84	◇	
SB6677	3×2	N3°W	6.30	4.00	2.10	2.00	◇	
SB6678	2×2	N2°W	4.20	4.00	2.10	2.00	◇	
SB6860	3×2	N1°W	6.00	4.80	2.00	2.40	◇	
SB6861	3×3	N8°W	6.51	5.49	2.17	1.83	◇	
SB6873	3×3	E5°N	6.60	6.00	2.20	2.00	◇	
SB6874	4×2	N4°W	8.60	4.10	2.15	2.05	◇	
SB6908	3×2	E5°N	6.00	4.20	2.00	2.10	◇	
SB6913	3×2	E5°N	6.00	3.60	2.00	1.80	◇	
SB7892	3×2	E3°N	6.60	4.20	2.20	2.10	◇	
SB7854	5×-	E3°N	10.50	-	2.10	-	時期不明	

独立柱建物・櫛列一覧表

遺構番号	規模	棟方向	桁行 (m)	梁行 (m)	柱間寸法 (m)		時 期	備 考
					桁行	梁行		

第119次調査 (6AFM-E・G)

SB7941	3×2	N4°W	7.2	3.6	2.4	1.8	奈良後期 ◇ ◇	北庇出2.1m 南庇出2.7m 98次調査検出の延長
SB7950	6×4	E4°N	17.7	10.8	2.95	3.0		
SA6770	(1)	N4°W	(3.0)		3.0			
SB7918	6×3	E4°N	14.4	8.4	2.4	2.7	平安初期 ◇ ◇ ◇ ◇ ◇	南庇出3.0m 南北庇出3.0m SB7918より新  SB7947より新 98次調査検出の延長
SB7919	5×4	E4°N	12.0	11.4	2.4	2.7		
SB7947	(1)×2	N4°W	(3.0)	6.0	3.0	3.0		
SB7948	(4)×2	N4°W	(9.6)	5.4	2.4	2.7		
SA6790	(6)	N4°W	17.6		2.94			
SB7915	(4)×3	E4°N	(9.6)	8.1	2.4	2.7		
SB7916	(4)×3	E4°N	(9.6)	8.4	2.4	2.7	平安前I期 ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇	南庇出2.4m SB7919より新 南庇出3.0m SB7915より新 南庇出2.7m SB7916より新 西庇出2.7m SB7948より新 西庇出2.1m SB7938より新 西庇出2.7m SB7939より新
SB7917	(4)×3	E4°N	(9.6)	8.1	2.4	2.7		
SB7938	5×3	N4°W	12.0	8.1	2.4	2.7		
SB7939	5×3	N4°W	12.0	6.9	2.4	2.4		
SB7940	5×3	N4°W	12.0	8.1	2.4	2.7		
SB7933	(1)×2	N4°W	(3.0)	4.8	3.0	2.4		
SB7934	(1)×3	N4°W	2.4	7.2	2.4	2.4		

第120次調査 (6AFI-C・E, 6AFG-R)

SB7996	3×2	N5°W	5.7	4.2	1.9	2.1	平安初期 ◇ ◇ ◇	SB8000より新 北庇出2.1m SB8000より新
SB7999	(2)×2	E2°N	(4.2)	4.2	2.1	2.1		
SB8000	5×2	E2°N	12.0	4.8	2.4	2.4		
SB8003	3×2	E2°N	5.7	4.2	1.9	2.1		
SB7995	3×2	E2°N	5.7	3.8	1.9	1.9	平安前I期 ◇	
SB7996	2×2	E0°W	4.2	2.6	2.1	1.3		
SB7989	5×2	E0°W	9.5	3.9	1.9	1.95	平安前II期 ◇ ◇ ◇ ◇ 平安中期 ◇ ◇	SB7993・7994より新 SB7994より新
SB7992	(2)×2	N0°S	(4.2)	4.2	2.1	2.1		
SB7993	(2)×2	N5°E	(3.8)	4.2	1.9	2.1		
SB7994	(2)×2	N5°E	(4.0)	4.2	2.0	2.1		
SB8002	5×2	E0°W	9.0	3.8	1.8	1.9		
SB7991	3×2	N0°S	5.7	4.4	1.9	2.2		
SB7997	(2)×2	N2°W	(4.2)	4.2	2.1	2.1		
SB8001	3×2	E5°N	6.0	3.6	2.0	1.8		

(注) 桁行・梁行はそれぞれの柱筋の全長を示し、柱間寸法は建物の身舎部分での計測値を示す。

第7表 竪穴住居一覧表

遺構番号	規模 (m)	長軸方向	深さ (cm)	柱 穴	カマド	時 期	備 考
------	--------	------	---------	-----	-----	-----	-----

第118次調査 (6ADN)

SB7881	3.7 × -	N22°W	10~15	-	-	奈良中期	
SB7882	3.5 × -	N22°W	10~15	-	東?	奈良中期	
SB7891	3.5 × 3.9	N17°W	20	-	東	奈良中期	
SB7901	4.9 × 6.2	N11°W	5	-	東?	奈良中期	
SB7905	3.0 × 3.4	N4°W	25	-	東	奈良中	

第119次調査 (6AFM-E・G)

SB7951	- × 4.0	N4°E	10	—	—	弥生後期	
--------	---------	------	----	---	---	------	--

# 第 8 表 遺物 (土器) 観察表

## 第 118 次調査

No.	出土遺物	器 名	出 産	調査・技法の種類	胎 土	産 地	色 質	残 存 度	備 考	記録番号	
1	S B7891	土 師 器	(口徑) 20.4cm (底径) 3.0cm	口縁部ヨコナゲ、外蓋ケズリ、内蓋ナシ	焼成	良好	内: 土に近い 外: 黄褐色	5YR7/4 7.5YR8/8	25%	R 1	
2	S B7905	土 師 器	(口徑) 18.0cm (底径) 3.5cm	口縁部ヨコナゲ、外蓋ケズリ、内蓋不定方向のナシ	焼成 タマリ産・黒色の 粒子含む	やや不良	内: 黄褐色 10YR6/6~黄褐色 7.5YR7/3 外: 明黄褐色 10YR7/6~黄褐色 7.5YR7/6		25%	R 2	
3	S B7905	土 師 器	(口徑) 16.8cm (底径) 3.6cm (高さ) 17.0cm	口縁部ヨコナゲ、外蓋ケズリ、内蓋ヨコハゲ、縦方向のケズリ	焼成 微細なクワンモ片 含む	良好	内: 土に近い黄褐色 7.5YR6/4~7.5YR7/4 外: 土に近い黄褐色 7.5YR7/4 底面 1.5YR6/2		ほぼ完全	R 3	
4	S B7905	土 師 器	(口徑) 24.4cm (底径) 3.5cm	口縁部ヨコナゲ、外蓋ケズリ、内蓋ヨコハゲ、縦方向のケズリ	焼成 タマリ産・クワン モ片含む	良好	内: 明黄褐色 10YR7/6 外: 黄褐色 10YR7/4 底面 1.5YR6/2		25%	R 4	
5	S B7905	土 師 器	(口徑) 24.6cm (底径) 7.0cm	口縁部ヨコナゲ、外蓋ケズリ、内蓋ヨコハゲ、縦方向のケズリ	焼成 タマリ産・1mm 大砂粒含む	良好	内: 土に近い黄褐色 10YR7/4~10YR6/6 外: 黄褐色 7.5YR6/6 土に近い黄褐色 10YR7/4		口縁部のみ 1/3残存	R 5	
6	S B7882	土 師 器	(口徑) 21.3cm (底径) 13.5cm	口縁部ヨコナゲ、外蓋ケズリ、内蓋ヨコハゲ	やや粗い タマリ産	良好	内: 黄褐色 5YR7/6 外: 黄褐色 7.5YR7/6		40%	外側にスス付	R 6
7	S B7882	土 師 器	(口徑) 24.0cm (底径) 23.5cm (高さ) 11.5cm	口縁部ヨコナゲ、外蓋ケズリ、内蓋ヨコハゲ、縦方向のケズリ	焼成 黒色粒子・タマリ 産含む	良好	内: 明黄褐色 10YR7/6 外: 黄褐色 7.5YR7/6		70%	底部は取片を一部残すのみではほとんど欠損	R 7
8	S K7887	土 師 器	(口徑) 12.7cm (底径) 3.3cm	口縁部ヨコナゲ、外蓋ケズリ、内蓋ナシ	焼成	良好	内: 明黄褐色 2.5YR6/8 外: *		90%	裏面に粘土層仕上げあり	R 44
9	S K7887	土 師 器	(口徑) 13.5cm (底径) 3.4cm	口縁部ヨコナゲ、外蓋ケズリ、内蓋ナシ	焼成 タマリ産・金ウ ンモ片含む	やや不良	内: 明黄褐色 2.5YR6/8 外: 明黄褐色 5YR6/8		ほぼ完全	R 45	
10	S K7887	土 師 器	(口徑) 17.2cm (底径) 3.5cm	口縁部ヨコナゲ、外蓋ケズリ、内蓋ナシ	焼成 微細なクワンモ片 含む	良好	内: 明黄褐色 2.5YR6/8 外: *		20%	R 46	
11	S K7887	土 師 器	(口徑) 13.6cm (底径) 3.3cm	口縁部ヨコナゲ、外蓋不定方向のケズリ、内蓋不定方向のケズリ	焼成 タマリ産・クワン モ片含む	良好	内: 黄褐色 2.5YR6/8 外: 黄褐色 5YR6/8		40%	口縁部外側にヘラ書き記号あり[7]	R 138
12	S K7887	土 師 器	(口徑) 17.0cm (底径) 3.5cm	口縁部ヨコナゲ、外蓋ケズリ、内蓋ナシ	焼成	良好	内: 黄褐色 5YR6/8 外: *		25%	R 39	
13	S K7887	土 師 器	(口徑) 14.2cm (底径) 3.5cm	口縁部ヨコナゲ、外蓋ケズリ、内蓋ナシ	焼成	良好	内: 明黄褐色 2.5YR6/8 外: 明黄褐色 10YR4/8		30%	内面に一本線へのラ書きあり	R 45
14	S K7887	土 師 器	(口徑) 16.6cm (底径) 4.3cm	口縁部ヨコナゲ、外蓋ケズリ、内蓋ナシ	焼成	良好	内: 明黄褐色 2.5YR6/8 外: 黄褐色 7.5YR6/8		70%	器形ややびびり	R 43
15	S K7887	土 師 器	(口徑) 16.6cm (底径) 4.6cm	口縁部ヨコナゲ、外蓋ケズリ、内蓋不定方向のケズリ	焼成	やや不良	内: 黄褐色 7.5YR6/8 外: *		60%	R 42	
16	S K7887	土 師 器	(口徑) 18.6cm (底径) 4.8cm	口縁部ヨコナゲ、外蓋ケズリ、内蓋ナシ、左向き取付文	焼成	良好	内: 黄褐色 7.5YR7/6 外: 明黄褐色 5YR5/8		40%	R 41	
17	S K7887	土 師 器	(口徑) 16.0cm (底径) 4.3cm	口縁部ヨコナゲ、外蓋ケズリ、内蓋不定方向のケズリ	焼成 タマリ産多く含む	良好	内: 黄褐色 2.5YR6/8 外: 黄褐色 2.5YR6/8		60%	底部外側に曇帯 (取説不明) と曇帯あり	R 137
18	S K7887	土 師 器	(口徑) 16.7cm (底径) 2.3cm	口縁部ヨコナゲ、外蓋ケズリ、内蓋ナシ	焼成	良好	内: 黄褐色 5YR7/8 外: 黄褐色 5YR6/8		50%	R 35	
19	S K7887	土 師 器	(口徑) 16.6cm (底径) 2.8cm	口縁部ヨコナゲ、外蓋ケズリ、内蓋不定方向のケズリ、内蓋一定方向のケズリ	焼成 タマリ産・金ウ ンモ片含む	良好	内: 明黄褐色 2.5YR5/8 外: *		70%	R 40	
20	S K7887	土 師 器	(口徑) 18.2cm (底径) 1.9cm	口縁部ヨコナゲ、外蓋ケズリ、内蓋ナシ	焼成	良好	内: 明黄褐色 2.5YR5/8 外: *		50%	外蓋底部にヘラ書き記号あり[7]	R 139
21	S K7887	土 師 器	(口徑) 17.6cm (底径) 2.6cm	口縁部ヨコナゲ、外蓋ケズリ、内蓋ナシ	焼成	良好	内: 明黄褐色 2.5YR5/8 外: *		40%	R 38	
22	S K7887	土 師 器	(口徑) 19.2cm (底径) 2.7cm	口縁部ヨコナゲ、外蓋ケズリ、内蓋ナシ	焼成	良好	内: 黄褐色 2.5YR6/8 外: 黄褐色 2.5YR6/8		40%	R 34	
23	S K7887	土 師 器	(口徑) 18.4cm (底径) 3.0cm	口縁部ヨコナゲ、外蓋ケズリ、内蓋一定方向のケズリ	焼成 タマリ産・金ウ ンモ片含む	良好	内: 明黄褐色 2.5YR5/8 外: 明黄褐色 2.5YR5/6		30%	R 37	
24	S K7887	土 師 器	(口徑) 18.2cm (底径) 2.7cm	口縁部ヨコナゲ、外蓋ケズリ、内蓋一定方向のケズリ	焼成 タマリ産・微細な ウロンモ片含む	良好	内: 黄褐色 2.5YR6/8 外: 黄褐色 10YR6/8		ほぼ完全	外蓋底部に曇帯「六」	R 136
25	S K7887	土 師 器	(口徑) 16.2cm (底径) 8.0cm	口縁部ヨコナゲ、外蓋ケズリ、内蓋ヨコハゲ	焼成 微細なクワンモ片 含む	良好	内: 黄褐色 7.5YR6/2 外: 土に近い黄褐色 10YR7/2		40%	R 47	
26	S K7887	土 師 器	(口徑) 21.3cm (底径) 3.5cm (高さ) 30.5cm	口縁部ヨコナゲ、外蓋ケズリ、内蓋縦方向のケズリ	焼成	良好	内: 黄褐色 7.5YR6/2 外: 土に近い黄褐色 10YR7/2		口縁部のみ 1/3残存	内面に黒色の付着物あり	R 48
27	S K7887	土 師 器	(口徑) 20.2cm (底径) 9.4cm	口縁部ヨコナゲ、外蓋ケズリ、内蓋縦方向のケズリ、内蓋ナシ、ケズリ	焼成 タマリ産・微細な クワンモ片含む	良好	内: 黄褐色 7.5YR6/3 外: *		60%	外蓋底部に二次焼成のために赤帯を施す箇所あり	R 49
28	S K7887	土 師 器	(口徑) 23.5cm (底径) 16.6cm	口縁部ヨコナゲ、外蓋ケズリ、ケズリ、内蓋ヨコハゲケズリ	焼成 ウロンモ片含む	良好	内: 黄褐色 2.5YR7/8 外: *		50%	R 50	
29	S K7887	土 師 器	(口徑) 13.3cm (底径) 3.2cm	口縁部ヨコナゲ、外蓋ケズリ、内蓋一定方向のケズリ	焼成	良好	内: 土に近い黄褐色 7.5YR6/4 外: 黄褐色 2.5YR5/1~ 土に近い黄褐色 10YR6/3		30%	R 102	

No.	出土地名	器 種	法 量	調整・技法の特徴	胎 土	装 成	色 調	発 見 度	備 考	登録番号
30	S K 7807	土 師 器 土 師 杯	(口径) 13.6cm (器高) 3.1cm	口縁部コナガ、外面オサエ土ナゲ、内面一定方向のナゲ	焼成 タマリ産・金ウソ片を含む	良好	内：浅黄緑7.5YR6/4～ 外： 外： 外：濃い黄7.5YR7/4	50%		R00
31	S K 7807	土 師 器 土 師 杯	(口径) 14.3cm (器高) 3.0cm	口縁部コナガ、外面オサエ土ナゲ、内面一定方向のナゲ	焼成 タマリ産・金ウソ片を含む	良好	内：黄 5YR7/8 外：黄 7.5YR7/8	40%		R06
32	S K 7807	土 師 器 土 師 杯	(口径) 16.0cm (器高) 3.3cm	口縁部コナガ、外面オサエ土ナゲ、内面ナゲ	焼成 タマリ産・黒ウソ片を含む	良好	内：黄7YR7/8～ 外：黄7.5YR7/8～	40%	黒灰5YR7/1 赤灰2.5YR7/1	R07
33	S K 7807	土 師 器 土 師 皿	(口径) 15.9cm (器高) 2.3cm	口縁部コナガ、外面オサエ土ナゲ、内面ナゲ	やや粗	良好	内：黄 5YR6/6 外：*	75%		R04
34	S K 7807	土 師 器 土 師 皿	(口径) 15.8cm (器高) 2.3cm	口縁部コナガ、外面オサエ土ナゲ、内面不定方向のナゲ	焼成 タマリ産・黒ウソ片を含む	良好	内：黄 2.5YR7/8 外：黄 7.5YR6/6	50%		R02
35	S K 7807	土 師 器 土 師 皿	(口径) 16.6cm (器高) 1.9cm	口縁部コナガ、外面オサエ土ナゲ、内面一定方向のナゲ	焼成 タマリ産多く含む	良好	内：黄 5YR7/8 外：黄 5YR7/8	80%		R03
36	S K 7807	土 師 器 土 師 杯	(口径) 10.8cm (器高) 2.8cm	口縁部コナガ、外面オサエ土ナゲ、内面一定方向のナゲ	やや粗	やや不良	内：浅黄緑10YR6/3～ 外：浅黄緑10YR7/2	30%		R08
37	S K 7807	土 師 器 土 師 杯	(口径) 12.8cm (器高) 3.6cm	口縁部コナガ、外面オサエ土ナゲ、内面一定方向のナゲ	タマリ産・黒灰 タマリ産・1cm 大粒を含む	良好	内：浅黄緑7.5YR6/4～ 外：浅黄緑 外：黄7.5YR6/4	90%		R09
38	S K 7807	土 師 器 土 師 杯	(口径) 14.8cm (器高) 3.7cm	口縁部コナガ、外面オサエ土ナゲ、内面ナゲ	焼成	良好	内：にぶい黄緑 10YR7/3 外：にぶい黄 7.5YR7/4	40%		R03
39	S K 7807	土 師 器 土 師 杯	(口径) 16.1cm (器高) 4.4cm	口縁部コナガ、外面オサエ土ナゲ、内面ナゲ	やや粗 1cm大粒を含む	良好	内：黄 5YR6/6 ～ 外：黄 5YR6/6 ～ 外：にぶい黄緑10YR7/3	30%	器底部分の不透明	R01
40	S K 7807	土 師 器 土 師 杯	(口径) 17.3cm (器高) 4.8cm	口縁部コナガ、外面オサエ土ナゲ、内面ナゲ、左取射文、黒線刺文	焼成 タマリ産・黒灰 タマリ産	良好	内：黄 5YR7/8 ～ 外： 外：浅黄緑10YR6/4	60%	放射線文1段 黒線刺文2段以上	R05
41	S K 7807	土 師 器 土 師 杯	(口径) 17.4cm (器高) 4.6cm	口縁部コナガ、外面オサエ土ナゲ、内面不定方向のナゲ	やや粗 タマリ産多く含む	やや不良	内：黄 2.5Y7/8 外：黄 2.5YR7/8	50%		R01
42	S K 7807	灰特陶器 瓶	(口径) 16.5cm (器高) 4.5cm (台径) 7.6cm	唇部クロコナガ、高台輪付	焼成	良好	内：灰 7.5Y6/4 外：*	40%		R05
43	S K 7807	土 師 器 土 師 小皿	(口径) 17.6cm (器高) 16.1cm (口縁径) 13.0cm	口縁部コナガ、外面タナハ、下縁部方向のナゲの内面ナゲ	やや粗 1cm大粒を含む	やや不良	内：浅黄緑10YR6/4～ 外： 外：赤黄緑2.5YR7/4	40%	ほぼ定形	R04
44	S B 7864	土 師 器 土 師 小皿	(口径) 8.3cm (器高) 1.8cm	口縁部コナガ、外面オサエ土ナゲ、内面ナゲ	やや粗	不良	内：浅黄緑 10YR6/4 外：にぶい黄緑 10YR7/4	30%		R12
45	S B 7864	土 師 器 土 師 小皿	(口径) 8.5cm (器高) 1.7cm	口縁部コナガ、外面オサエ土ナゲ、内面ナゲ	黒色粒子を含む	良好	内：浅黄緑10YR6/4～黒灰10YR6/1 外：浅黄緑10YR6/4～黒灰10YR6/1	定形	器底にひずみあり	R01
46	S B 7864	土 師 器 土 師 小皿	(口径) 8.8cm (器高) 1.6cm	口縁部コナガ、外面オサエ土ナゲ、内面ナゲ	焼成	良好	内：浅黄緑 10YR6/4 外：*	95%		R13
47	S B 7864	土 師 器 土 師 小皿	(口径) 8.4cm (器高) 1.7cm	口縁部コナガ、外面オサエ土ナゲ、内面ナゲ	焼成	良好	内：黄 7.5YR7/6 外：*	ほぼ定形		R17
48	S B 7864	土 師 器 土 師 小皿	(口径) 8.6cm (器高) 1.6cm	口縁部コナガ、外面オサエ土ナゲ、内面ナゲ	粗い	不良	内：黄 7.5YR7/8 外：*	定形	器底にひずみあり	R18
49	S B 7864	土 師 器 土 師 小皿	(口径) 9.2cm (器高) 1.6cm	口縁部コナガ、外面オサエ土ナゲ、内面ナゲ	やや粗	やや不良	内：浅黄緑 10YR6/4 外：にぶい黄緑 10YR7/4	定形		R19
50	S B 7864	土 師 器 土 師 小皿	(口径) 8.4cm (器高) 1.8cm	口縁部コナガ、外面オサエ土ナゲ、内面ナゲ	やや粗 タマリ産を含む	やや不良	内：黄7.5YR6/6～浅黄緑 10YR6/4 外：*	ほぼ定形		R10
51	S B 7864	土 師 器 土 師 小皿	(口径) 8.6cm (器高) 1.6cm	口縁部コナガ、外面オサエ土ナゲ、内面ナゲ	やや粗 タマリ産を含む	良好	内：浅黄緑 10YR6/3 外：浅黄緑7.5YR6/4～ 外：浅黄緑10YR6/3	定形		R9
52	S B 7864	土 師 器 土 師 小皿	(口径) 9.0cm (器高) 1.7cm	口縁部コナガ、外面オサエ土ナゲ、内面ナゲ	黒色粒子・タマリ産を含む	良好	内：黄 7.5YR7/6 外：にぶい黄 7.5YR7/4	95%		R15
53	S B 7864	土 師 器 土 師 小皿	(口径) 8.4cm (器高) 1.7cm	口縁部コナガ、外面オサエ土ナゲ、内面ナゲ	やや粗 タマリ産多く含む	不良	内：黄5YR6/6～ 浅黄緑7.5YR7/4 外：*	定形		R11
54	S B 7864	土 師 器 土 師 小皿	(口径) 8.8cm (器高) 1.9cm	口縁部コナガ、外面オサエ土ナゲ、内面ナゲ	やや粗 タマリ産を含む	やや不良	内：浅黄緑 7.5YR6/4 外：浅黄緑 10YR6/4	定形	器底にひずみあり	R08
55	S B 7864	土 師 器 土 師 小皿	(口径) 9.2cm (器高) 1.9cm	口縁部コナガ、外面オサエ土ナゲ、内面ナゲ	やや粗 黒色粒子少し含む	やや不良	内：にぶい黄緑10YR7/2～ 外：にぶい黄緑 10YR7/4 外：にぶい黄緑 10YR7/3	95%		R14
56	S B 7864	土 師 器 土 師 小皿	(口径) 9.0cm (器高) 1.6cm	口縁部コナガ、外面オサエ土ナゲ、内面ナゲ	焼成 黒線刺ウソ片を含む	良好	内：浅黄緑10YR6/4～黒灰10YR6/1 外：*	定形	口縁部1/3 欠損のみ	R09
57	S B 7864	土 師 器 土 師 小皿	(口径) 9.4cm (器高) 1.4cm	口縁部コナガ、外面オサエ土ナゲ、内面ナゲ	黒線刺ウソ片 タマリ産を含む	良好	内：浅黄緑7.5YR6/4～ 外：にぶい黄7.5YR7/4 外：灰緑7.5YR6/2～ 外：浅黄緑10YR6/4	70%		R16
58	S B 7864	土 師 器 土 師 皿	(口径) 15.6cm (器高) 3.3cm	口縁部コナガ、外面オサエ土ナゲ、内面ナゲ	焼成	やや不良	内：黄緑 7.5YR7/6 外：黄 7.5YR7/8～黄灰 7.5YR6/1	35%		R22
59	S B 7863	土 師 器 土 師 小皿	(口径) 8.6cm (器高) 1.9cm	口縁部コナガ、外面オサエ土ナゲ、内面ナゲ	焼成	不良	内：浅黄緑7.5YR6/6～黄 7.5YR7/6 外：*	口縁部の1/4 欠損のみ		R03
60	S B 7863	土 師 器 土 師 小皿	(口径) 9.2cm (器高) 1.6cm	口縁部コナガ、外面オサエ土ナゲ、内面ナゲ	やや粗	やや不良	内：黄緑10YR6/6～黄灰緑10YR7/6 外：*	定形	口縁部のひずみあり	R27

No.	出土遺物	群 種	品 名	図形・技術の特徴	胎 土	焼 成 色	調	残存度	備 考	登録番号
81	S B7803	土 師 器 小皿	(口径) 9.5cm (器高) 1.6cm	口縁部ヨコナテ、外周オサ ニ後ナテ、内面ナテ	精緻 タマリ漆喰心	やや不良 内：橙 外：橙	5YR7/8 5YR7/6	ほぼ定存	口縁部のひずみあり	R28
82	S B7803	土 師 器 小皿	(口径) 9.3cm (器高) 1.7cm	口縁部ヨコナテ、外周オサ ニ後ナテ、内面ナテ	ウツモ片、タマ リ漆喰心	やや不良 内：浅黄緑 外：浅黄緑	10YR8/4 7.5YR8/6	ほぼ定存		R29
83	S B7803	土 師 器 小皿	(口径) 9.5cm (器高) 1.8cm	口縁部ヨコナテ、外周オサ ニ後ナテ、内面ナテ	精緻 タマリ漆・ウツ モ片含む	不良 内：浅黄緑7.5YR8/6 外：*	浅黄緑10YR8/4	定形	器形のひずみあり	R26
84	S B7803	土 師 器 小皿	(口径) 9.4cm (器高) 2.0cm	口縁部ヨコナテ、外周オサ ニ後ナテ、内面ナテ	無釉 ウツモ片含む	やや不良 内：橙7.5YR7/6 外：橙10YR8/4	10YR8/6	ほぼ定存		R31
85	S B7803	土 師 器 小皿	(口径) 13.6cm (器高) 3.1cm	口縁部ヨコナテ、外周オサ ニ後ナテ、内面ナテ	無釉 黒色粒心・金ウ ツモ片含む	やや不良 内：灰緑7.5YR6/3 外：灰緑7.5YR6/2	～ 靑 靑7.5YR6/3 浅黄緑7.5YR8/4	70%		R33
86	S B7803	土 師 器 皿	(口径) 14.6cm (器高) 3.1cm	口縁部ヨコナテ、外周オサ ニ後ナテ、内面ナテ	精緻 タマリ漆多く含む	やや不良 内：橙 外：橙2.5YR7/8	2.5YR7/8 ～ 靑 5YR7/8	70%	外周に輪状垂上げ痕あり	R32
87	S K7877	土 師 器 小皿	(口径) 10.3cm (器高) 2.3cm	口縁部ヨコナテ、外周オサ ニ後ナテ、内面ナテ	無釉	良好 内：黄緑 外：黄緑	10YR8/6 7.5YR8/6	ほぼ定存		R102
88	S K7877	土 師 器 小皿	(口径) 9.6cm (器高) 2.4cm	口縁部ヨコナテ、外周オサ ニ後ナテ、内面ナテ	無釉 1mm大砂粒含む	良好 内：浅黄緑 外：浅黄緑	7.5YR8/6 7.5YR8/4	定形		R105
89	S K7877	土 師 器 小皿	(口径) 9.9cm (器高) 2.3cm	口縁部ヨコナテ、外周オサ ニ後ナテ、内面ナテ	無釉	良好 内：浅黄緑 外：*	10YR8/3	定形		R104
90	S K7877	ロケット型 小皿	(口径) 10.0cm (器高) 1.6cm	口縁部ロケット型、内面ナ テ、底部外周糸切痕	無釉	良好 内：浅黄緑 外：*	10YR8/3	70%		R103
91	S K7877	土 師 器 台付小皿	(口径) 10.1cm (器高) 3.3cm (台径) 8.3cm	口縁部ヨコナテ、内外周オ サ、高台輪付跡のナテ	無釉	良好 内：黄緑 外：黄緑	7.5YR7/8 7.5YR8/6	ほぼ定存		R101
92	S K7807	土 師 器 皿	(口径) 13.9cm (器高) 2.5cm	口縁部ヨコナテ、内面ナテ 外周オサニ後ナテ	やや粗 1mm大砂粒含む	良好 内：橙 外：*	5YR7/6	90%		R89
93	S K7807	土 師 器 皿	(口径) 13.5cm (器高) 2.3cm	口縁部ヨコナテ、内面ナテ 外周オサニ後ナテ	無釉 1mm大砂粒含む	良好 内：浅黄緑 外：*	7.5YR8/6	60%		R90
94	S K7807	土 師 器 皿	(口径) 14.0cm (器高) 2.7cm	口縁部ヨコナテ、内面ナテ 外周オサニ後ナテ	やや粗	やや不良 内：浅黄緑 外：*	10YR8/4	90%		R88
95	S K7807	土 師 器 皿	(口径) 14.1cm (器高) 2.7cm	口縁部ヨコナテ、内面ナテ 外周オサニ後ナテ	やや粗	やや不良 内：浅黄緑 外：浅黄緑	10YR8/4 7.5YR8/6	ほぼ定存		R93
96	S K7807	土 師 器 皿	(口径) 14.4cm (器高) 2.8cm	口縁部ヨコナテ、内面ナテ 外周オサニ後ナテ	無釉	良好 内：浅黄緑 外：*	10YR8/4	90%		R94
97	S K7807	土 師 器 小皿	(口径) 14.6cm (器高) 3.3cm	口縁部ヨコナテ、内面ナテ 外周オサニ後ナテ	無釉	良好 内：浅黄緑 外：*	10YR8/4	70%		R92
98	S K7807	土 師 器 小皿	(口径) 8.1cm (器高) 1.0cm	口縁部ヨコナテ、内面ナテ 外周オサニ後ナテ	精緻 無釉ウツモ片 ・タマリ漆喰心	やや不良 内：黄緑 外：浅黄緑	7.5YR8/6 7.5YR8/6	ほぼ定存		R90
99	S K7807	土 師 器 小皿	(口径) 8.9cm (器高) 1.3cm	口縁部ヨコナテ、内面不安 定方向のナテ、外周オサニ後 不定方向のナテ	良好 無釉ウツモ片 ・黒色粒心含む	良好 内：浅黄緑 外：にぶい靑	7.5YR8/6 7.5YR7/4	90%		R100
100	S K7807	土 師 器 小皿	(口径) 7.6cm (器高) 1.4cm	口縁部ヨコナテ、内面ナテ 外周オサニ後ナテ	やや粗 1mm大砂粒含む	やや不良 内：浅黄緑 外：浅黄緑	10YR8/4 10YR8/6	90%		R97
101	S K7807	土 師 器 小皿	(口径) 8.2cm (器高) 1.7cm	口縁部ヨコナテ、内面ナテ 外周オサニ後ナテ	無釉 無釉ウツモ片 含む	良好 内：浅黄緑 外：*	7.5YR8/6	定形		R98
102	S K7803	土 師 器 小皿	(口径) 8.6cm (器高) 1.4cm	口縁部ヨコナテ、内面ナテ 外周オサニ後ナテ	1.5mm大砂粒 含む	不良 内：浅黄緑10YR8/4 外：*	7.5YR7/6	50%	底部に横成線の穿孔あり	R106
103	S K7803	土 師 器 小皿	(口径) 8.6cm (器高) 1.4cm	口縁部ヨコナテ、内面ナテ 外周オサニ後ナテ	精緻 無釉ウツモ片 含む	良好 内：浅黄緑7.5YR8/6 外：橙 5YR7/6 5YR7/8	5YR7/6	定形		R107
104	S K7803	土 師 器 小皿	(口径) 8.8cm (器高) 1.6cm	口縁部ヨコナテ、内面ナテ 外周オサニ後ナテ	無釉	良好 内：橙 外：*	5YR7/6	70%		R108
105	S K7803	土 師 器 小皿	(口径) 14.9cm (器高) 3.3cm	口縁部ヨコナテ、内面ナテ 外周オサニ後ナテ	やや粗	良好 内：にぶい黄緑10YR7/3 外：にぶい黄緑10YR8/3 ～ 10YR7/4	10YR7/4	70%		R109
106	S K7803	灰釉陶器 小皿	(口径) 15.2cm (器高) 8.6cm (台径) 7.2cm	口縁部の外周ロケット型、 底面ハタ切り跡ありナテ	無釉 黒色粒心含む	良好 内：灰白 外：灰白	2.5Y8/7 5Y8/1	40%		R110
107	S K7873	土 師 器 小皿	(口径) 8.5cm (器高) 1.4cm	口縁部ヨコナテ、内面ナテ 外周オサニ後ナテ	無釉	良好 内：にぶい靑 外：*	7.5YR7/4	50%		R112
108	S K7873	土 師 器 小皿	(口径) 8.2cm (器高) 1.3cm	口縁部ヨコナテ、内面ナテ 外周オサニ後ナテ	粗い	不良 内：黄緑 外：*	10YR8/6	50%		R115
109	S K7873	土 師 器 小皿	(口径) 8.6cm (器高) 1.5cm	口縁部ヨコナテ、内面ナテ 外周オサニ後ナテ	無釉	やや不良 内：にぶい黄緑 外：*	10YR7/4	60%		R113
110	S K7873	土 師 器 小皿	(口径) 8.9cm (器高) 1.5cm	口縁部ヨコナテ、内面ナテ 外周オサニ後ナテ	やや粗 1mm大砂粒含む	不良 内：橙7.5YR7/6 外：*	橙7.5YR8/6	70%		R114
111	S K7873	ロケット型 小皿	(口径) 9.2cm (器高) 1.8cm	口縁部ロケット型、内面ナ テ、底部外周糸切り跡未調 整	良好 1mm大砂粒・ク サリ漆喰多く含む	良好 内：橙 外：*	7.5YR7/6	80%		R116
112	S K7873	土 師 器 小皿	(口径) 8.6cm (器高) 1.4cm	口縁部ヨコナテ、内面ナテ 外周オサニ後ナテ	精緻 無釉ウツモ片 含む	良好 内：橙 外：*	7.5YR7/6	50%	コースター彫刻	R117
113	S K7873	土 師 器 皿	(口径) 13.6cm (器高) 2.7cm	口縁部ヨコナテ、内面ナテ 外周オサニ後ナテ	無釉 黒色粒心含む	良好 内：浅黄緑 外：明黄緑	10YR8/4 10YR7/6	60%		R119

No.	出土遺物	器種	法量	調整・技法の特徴	胎土	産地	色	調	飛存度	備考	登録番号
94	S K 7873	土師器 土師 小皿 (山草)	(口径) 15.5cm (器高) 3.0cm	口縁部ヨコナテ、内面ナテ 外歪オヤセ後ナテ	精緻なウツモ片含む	やや不貞	内：黄緑 外：黄	7.5YR/8 7.5YR/6	80%		R118
95	S K 7873	土師器 土師 小皿 (山草)	(口径) 9.6cm (器高) 2.5cm (台径) 4.3cm	口縁部内外両口ロナテ、 底部外歪へつ傾斜見イナテ	精緻 黒色粘土含む	良好	内：黄緑 外：灰白	2.5Y/7.3 5Y/2	70%	ロクロ右回り	R120
96	S K 7873	土師器 土師 小皿 (山草)	(口径) 16.6cm (器高) 5.4cm (台径) 6.8cm	口縁部内外両口ロナテ、 底部外歪へつ傾斜見調整	やや粗 精緻なウツモ片 1mm大砂粒含む	良好	内：にぶい黄 外：灰白	2.5Y6/4 8Y/1	80%	高台に傾斜後脚あり	R121
97	S K 0247	土師器 土師 小皿	(口径) 8.6cm (器高) 1.4cm	口縁部ヨコナテ、内面ナテ 外歪オヤセ後不定方向のナテ	精緻 精緻なウツモ片 ・タマリ籬含む	良好	内：橙2.5YR/7.6 外：橙2.5YR/8 ～赤灰2.5YR/1	7.5YR/6 7.5YR/4	75%		R124
98	S K 0247	土師器 土師 小皿	(口径) 8.3cm (器高) 1.6cm	口縁部ヨコナテ、内面ナテ 外歪オヤセ後ナテ	精緻	良好	内：橙 外：*	5YR/6 *			R125
99	S K 0247	土師器 土師 小皿	(口径) 8.4cm (器高) 1.3cm	口縁部ヨコナテ、内面ナテ 外歪オヤセ後ナテ	精緻 精緻なウツモ片 ・タマリ籬含む	良好	内：橙 外：*	5YR/6 *	80%		R122
100	S K 0247	土師器 土師 小皿	(口径) 8.4cm (器高) 1.7cm	口縁部ヨコナテ、内面ナテ 外歪オヤセ後ナテ	やや粗	やや不貞	内：透黄橙 外：透黄橙	10YR6/4 10YR3/3			R123
101	S K 0247	土師器 土師 杯	(口径) 14.8cm (器高) 3.3cm	口縁部ヨコナテ、内面ナテ 外歪オヤセ後ナテ	粗い タマリ籬含む	不貞	内：にぶい橙7.5YR/7.4 ～ 透黄橙10YR3/3			器口にびみあり	R126
102	S K 0247	土師器 土師 杯	(口径) 15.3cm (器高) 3.4cm	口縁部ヨコナテ、内面ナテ 外歪オヤセ後傾イナテ	精緻 タマリ籬・精緻 なウツモ片含む	良好	内：橙 外：橙	5YR/6 5YR/8	50%		R127
103	S K 0247	土師器 土師 杯 (山草)	(口径) 16.5cm (器高) 4.9cm (台径) 5.3cm	口縁部内外両口ロナテ、 底部外歪へつ傾斜調整	精緻	良好	内：灰オリーブ5Y6/7.1 外：灰白	5Y6/1 5Y/1	70%		R128
104	S K 7868	土師器 土師 小皿	(口径) 7.2cm (器高) 1.1cm	口縁部ヨコナテ、内面ナテ 外歪オヤセ後ナテ	精緻 タマリ籬多く含む	良好	内：橙 外：橙2.5YR6/6～淡橙	2.5YR6/8 5YR6/4		ほぼ完存	R76
105	S K 7868	土師器 土師 小皿	(口径) 7.0cm (器高) 1.1cm	口縁部ヨコナテ、内面ナテ 外歪オヤセ後ナテ	やや粗 1.3mm大砂粒含む	良好	内：透黄橙10YR6/4 外：橙2.5YR/6～淡橙	5YR6/6 5YR6/4			R77
106	S K 7868	土師器 土師 小皿	(口径) 7.2cm (器高) 1.2cm	口縁部ヨコナテ、内面ナテ 外歪オヤセ後ナテ	精緻 ウツモ片含む	良好	内：橙 外：*	5YR/6 *	90%		R84
107	S K 7868	土師器 土師 小皿	(口径) 7.4cm (器高) 1.3cm	口縁部ヨコナテ、内面ナテ 外歪オヤセ後ナテ	精緻	良好	内：にぶい赤褐 外：にぶい橙	5YR6/4 5YR6/4	90%		R85
108	S K 7868	土師器 土師 小皿	(口径) 7.4cm (器高) 1.3cm	口縁部ヨコナテ、内面ナテ 外歪オヤセ後ナテ	精緻 タマリ籬多く含む	良好	内：橙 外：橙	5YR/6 5YR/6		ほぼ完存	R83
109	S K 7868	土師器 土師 小皿	(口径) 7.4cm (器高) 1.3cm	口縁部ヨコナテ、内面ナテ 外歪オヤセ後ナテ	精緻 黒色粘土・タマリ籬含む	良好	内：橙5YR/6 外：橙2.5YR/6～透黄橙	2.5YR6/4 10YR6/4		完形	R81
110	S K 7868	土師器 土師 小皿	(口径) 7.6cm (器高) 1.2cm	口縁部ヨコナテ、内面ナテ 外歪オヤセ後ナテ	精緻 精緻なウツモ片含む	良好	内：橙 外：*	5YR/6 *			R78
111	S K 7868	土師器 土師 小皿	(口径) 7.6cm (器高) 1.4cm	口縁部ヨコナテ、内面ナテ 外歪オヤセ後ナテ	精緻 タマリ籬含む	良好	内：橙 外：*	5YR/6 *		ほぼ完存	R82
112	S K 7868	土師器 土師 小皿	(口径) 7.8cm (器高) 1.4cm	口縁部ヨコナテ、内面ナテ 外歪オヤセ後ナテ	精緻 タマリ籬・精緻 なウツモ片含む	良好	内：橙2.5YR/6～透黄橙 外：橙2.5YR6/6～淡橙	2.5YR6/4 5YR6/4		ほぼ完存	R79
113	S K 7868	土師器 土師 小皿	(口径) 7.8cm (器高) 1.3cm	口縁部ヨコナテ、内面ナテ 外歪オヤセ後ナテ	精緻 精緻なウツモ片含む	良好	内：橙 外：黄緑	5YR/6 7.5YR6/8		ほぼ完存	R75
114	S K 7868	土師器 土師 小皿	(口径) 7.8cm (器高) 1.3cm	口縁部ヨコナテ、内面ナテ 外歪オヤセ後ナテ	精緻 精緻なウツモ片含む	良好	内：橙 外：*	2.5YR6/8 *		完形	R80
115	S K 7868	土師器 土師 皿	(口径) 12.2cm (器高) 3.2cm	口縁部ヨコナテ、内面不定 方向のナテ、外歪オヤセ後 ナテ	やや粗 1.6mm大砂粒・ タマリ籬含む	不貞	内：黄緑 外：透黄橙	10YR6/6 10YR6/4		ほぼ完存	R73
116	S K 7868	土師器 土師 皿	(口径) 12.6cm (器高) 2.8cm	口縁部ヨコナテ、内面ナテ 外歪オヤセ後ナテ	精緻 タマリ籬・精緻 なウツモ片含む	良好	内：黄緑 外：黄緑	7.5YR/8 7.5YR/8		ほぼ完存	R80
117	S K 7868	土師器 土師 皿	(口径) 12.6cm (器高) 2.6cm	口縁部ヨコナテ、内面ナテ 外歪オヤセ後ナテ	精緻 精緻なウツモ片含む	良好	内：にぶい黄緑10YR/4 外：黄緑	10YR/4 10YR6/6		ほぼ完存	R74
118	S K 7868	土師器 土師 皿	(口径) 12.6cm (器高) 2.8cm	口縁部ヨコナテ、内面ナテ 外歪オヤセ後ナテ	精緻	良好	内：橙 外：橙	7.5YR/6 8YR/6	90%		R89
119	S K 7868	土師器 土師 皿	(口径) 12.8cm (器高) 3.0cm	口縁部ヨコナテ、内面ナテ 外歪オヤセ後ナテ	精緻 タマリ籬・精緻 なウツモ片含む	良好	内：橙・5YR/8 外：透黄橙7.5YR/4	5YR6/4 透黄橙7.5YR/4		ほぼ完存	R73
120	S K 7868	土師器 土師 皿	(口径) 13.0cm (器高) 2.7cm	口縁部ヨコナテ、内面ナテ 外歪オヤセ後ナテ	やや粗 タマリ籬・精緻 なウツモ片含む	やや不貞	内：黄緑 外：透黄橙	10YR/8 7.5YR6/6		完形	R72
121	S K 7868	土師器 土師 皿	(口径) 13.4cm (器高) 2.7cm	口縁部ヨコナテ、内面ナテ 外歪オヤセ後ナテ	精緻 タマリ籬含む	不貞	内：黄緑 外：*	10YR/6 *	90%		R88
122	S B 7900	土師器 土師 鉢	(口径) 20.1cm (器高) 3.2cm	口縁部ヨコナテ、内面不定 方向のナテ、ミダキ、外歪ナ テ、灰いガキ、アケミ筋 付等のナテ	精緻 黒色粘土・精緻 なウツモ片含む	良好	内：明赤褐 外：橙	2.5YR6/8 2.5YR6/8	80%	天目線外歪へつ縁に びみあり	R141
123	S B 7866	灰釉陶器 三足 甗	(口径) 16.6cm (器高) 2.3cm	内外両口ロナテ、脚部粘 付等のナテ	精緻 黒色粘土含む	良好	内：オリーブ黄 外：灰白	7.5Y6/3 5Y/1	20%		R143

No.	出土地名	産 種	法 量	産物・産物の特徴	産 土	産 成	色 調	残 存 度	備 考	登録番号		
124	S X 7860	土 師 器 高 杯	(口径) 5.6cm (径高) 5.8cm (底径) 3.8cm	杯縁口縁ヨコナデ、外周ナデ ズリ、放射状にハタメ、内 底ナデナデ、脚部ナデナ デ、脚部口縁ヨコナデ、脚 部内周ナデ	黒緑 黒色粘土・クキ リ層を含む	良好	内：黄 外：*	2.5YR7/8	80%	杯縁にはハタメ。底部口 縁の1/3を欠け、 1.5×(7.0x3.0)の断面あり 入り杯の上端より大地産 物として出土	R 129	
125	S X 7861	土 師 器 杯	(口径) 19.2cm (径高) 4.8cm	口縁部ヨコナデ、外周ナデ ニ底ナデナデ、内周ナデ	クキリ層・黒緑 なウンモ片を含む	良好	内：黄 外：*	2.5YR7/8	4/4は定形	内周は込み部に裏面のみ の断面あり、5枚 (R131~ R135) あり、内周縁部は 入り杯の上端より大地産 物としてあり	R 130	
131	S B 7865	陶 瓦 用 瓦 規 矩 形	(縦径) 11.4cm (横径) 6.0cm	縦横四方同心タテナデ、首背 平打タテナデ	1.2cm~1.5cm 大の砂粒・黒緑 なウンモ片を含む	やや不良	縦面：灰 背面：灰	10Y8/1 5Y5/1	90%	縦横等長片の規矩形の上 を裏、縦定長15cmの二 等辺三角形形呈す	R 142	
132	S B 7890	土 師 器 小皿	(口径) 7.6cm (径高) 1.6cm	口縁部ヨコナデ、外周ナデ ニ底ナデ、内周ナデ	粗い 1mm大の砂粒多 く含む	やや不良	内：浅黄緑 外：*	10YR7/3	20%	半付者土器、小皿内面に 朱赤褐色2.5YR5/7着色	R 145	
133	S K 7859	土 師 器 鉢	(口径) 11.6cm (径高) 1.8cm	口縁部ヨコナデ、外周ナデ ニ底ナデ、内周ナデ	クキリ層・黒緑 なウンモ片少量 含む	やや不良	内：黄 外：黄緑	7.5YR7/8 7.5YR7/8	20%	半付者土器、皿内面に 朱赤褐色2.5YR5/7着色	R 147	
134	M37 遺構上層	土 師 器 小皿	(口径) 7.6cm (径高) 4.3cm	口縁部ヨコナデ、外周ナデ 内のクズリ、内底ナデ?	黒緑	やや不良	内：黄 外：*	2.5YR6/5	30%	半付者土器、鉢内面に 朱赤褐色2.5YR4/7着色	R 149	
135	N32 包含層	灰地層 陶 片	(台径) 6.8cm (底径) 3.6cm	ロケナデ、高台付筒形 ナデ、ホウリ貝末混入	黒緑 黒色粘土を含む	良好	内：灰黄 外：灰白	2.5Y7/1 2.5Y7/1	30%	赤褐色陶片、灰地層層 内に朱赤10Y4/8の 底面あり	R 150	
136	L30 遺構上層	黒色土 師 器	(口径) 7.8cm (径高) 3.8cm	口縁部ヨコナデ、外周ナ デ、内底ヨコナデ	黒緑 黒色ウンモ片 含む	やや不良	内：黒灰 外：*	N2/	10%		R 145	
137	N32 包含層	黒色土 師 器	(口径) 13.6cm (径高) 4.6cm	口縁部ヨコナデ、外周ナ デ、内底ニギキ	黒緑 黒色ウンモ片 を含む	良好	内：黒灰 外：黄	N2/ 7.5YR6/6	12%		R 144	
138	S K 7879	黒色土 師 器	(口径) 14.6cm (径高) 6.8cm	口縁部ヨコナデ、外周ナ デ、内底ナデ	黒緑のウンモ片 ・0.8mm大の砂 粒を含む	やや不良	内：灰 外：黒灰	N4/ N5/	15%		R 146	
139	S K 7868	陶 器 (山系土)	(口径) 14.7cm (径高) 4.6cm	口縁部ロケナデ	やや粗 黒色粘土を含む	良好	内：灰黄 外：灰白	2.5Y7/3 5Y7/1	30%	漆付者土器、内面に 漆・オリーブ黒・3Y5/1 着色	R 161	
140	S D 7869	陶 器 (山系土)	(口径) 12.4cm (径高) 8.0cm	口縁部ロケナデ	やや粗 黒色粘土を含む	良好	内：灰黄 外：灰白	2.5Y7/2 2.5Y7/1	15%	漆付者土器、内面に 漆黒2.5Y7/1着色	R 152	
141	S B 7880	白 磁 小皿	(口径) 9.8cm (径高) 2.0cm	口縁部ヨコナデ、内周 ナデに均質に施釉	黒緑	良好	胎土：灰白 釉：*	7.5Y7/1	25%		R 169	
142	表土	白 磁 小皿	(口径) 10.8cm (径高) 2.7cm (底径) 4.6cm	口縁部・内外周ロケナデ 成面施釉、底部以外に均 質に施釉	黒緑	良好	胎土：灰白 釉：灰白	5Y8/1 10Y7/2	30%		R 171	
143	M38 内層	白 磁 鉢	(口径) 12.6cm (径高) 3.5cm (台径) 4.8cm	口縁部・内外周ロケナデ 内周出輪あり、底面内底 部、底部以外に均質に施 釉	黒緑	良好	胎土：灰白 釉：オリーブ灰	2.5Y8/3 2.5G7/1	35%		R 168	
144	L30 Pit17	白 磁 鉢	(口径) 21.8cm (径高) 6.3cm	口縁部ロケナデ、内外周 に均質に施釉	黒緑	良好	胎土：灰白 釉：灰白	2.5Y8/2 5Y8/2	口縁の一部 玉置口縁		R 170	
145	K35 遺構上層	白 磁 鉢	(口径) 10.6cm (径高) 3.4cm (底径) 4.9cm	口縁部ロケナデ、内外周 に均質に施釉	黒緑	良好	胎土：灰白 釉：灰白	2.5Y7/1 2.5GY8/1	体壁底部一 部のみ残存		R 172	
146	K30 包含層	青 磁 鉢	(口径) 10.6cm (径高) 3.4cm (底径) 4.9cm	口縁部・内外周ロケナデ 底部以外に均質に施釉	黒緑	良好	胎土：灰白 釉：オリーブ灰	10Y7/1 2.5GY7/1	15%		R 174	
147	S D 7869	青 磁 陶 器	(口径) 17.2cm (径高) 7.5cm (台径) 4.5cm	口縁部・内外周ロケナデ 残存部全面に均質に施釉	黒緑	良好	胎土：灰白5Y7/1~浅黄緑 釉：緑灰	10Y7R/4 7.5GY6/1	12%		R 175	
148	L30 遺構上層	青 磁 陶 器	(口径) 8.2cm (径高) 1.5cm	口縁部・内外周ロケナデ 残存部全面に均質に施釉	黒緑	良好	胎土：灰 釉：オリーブ灰	N6/ 10Y6/2	口縁の一部 のみ残存		R 173	
149	K37 遺構上層	黒色土 師 器	(口径) 14.0cm (径高) 5.5cm	口縁部・内外周ナデ	1.8cm~1.5cm 大の砂粒を含む 粗い	不良	内：黄 外：灰白・黄	7.5YR7/6 7.5YR7/4	口縁部のみ 1/6残存		R 156	
150	S K 7857	黒色土 師 器	(口径) 15.6cm (径高) 5.5cm	口縁部・内外周ナデ	1.8cm~1.3cm 大の砂粒・クキ リ層を含む、粗い	やや不良	内：黄 外：L・灰白・黄	7.5YR7/4~ 黄7.5YR7/6	40%		R 154	
151	S K 7857	黒色土 師 器	(口径) 16.6cm (径高) 5.7cm	口縁部・内外周ナデ	1.2cm大の砂粒 多く含む、粗い	やや不良	内：黄 外：黄	5Y7R/6 3YR6/8	口縁部のみ 1/3残存		R 153	
No.	出土地名	産 種	法 量	産物・産物の特徴	産 土	産 成	色 調	残 存 度	備 考	登録番号		
152	S X 7853	土 師 器 土 師 器	(長) 3.4cm (径) 1.8cm	(孔径) (径高)	0.5cm 0.47cm	やや不良	内：灰黄 外：*	10Y7/4	13は定形	管状土師 器土師	R 156	
153	S B 2050	土 師 器 土 師 器	(長) 3.7cm (径) 1.7cm	(孔径) (径高)	0.4cm 0.72cm	やや不良	暗灰黄	2.5Y7/2	定形	管状土師、土師器 使用による磨滅面あり	R 157	
154	S B 7881	土 師 器 土 師 器	(長) 3.2cm (径) 1.6cm	(孔径) (径高)	0.4cm 0.21cm	やや不良	黄2.5Y7/2~	内：灰黄 外：*	5Y7/4	定形	管状土師 器土師	R 156
155	M36 内層	土 師 器 土 師 器	(長) 3.7cm (径) 1.5cm	(孔径) (径高)	0.4cm 0.29cm	やや不良	明赤褐色 灰白	10YR6/8~ 10YR6/2	定形	管状土師、土師器 使用による磨滅し・磨滅	R 167	
156	S X 7882	土 師 器 土 師 器	(長) 3.8cm (径) 1.5cm	(孔径) (径高)	0.3cm 0.75cm	良好	内：灰黄 外：*	10Y7/2~3 10YR6/1	13は定形	管状土師 器土師	R 168	
157	S A 7888	土 師 器 土 師 器	(長) 4.3cm (径) 1.5cm	(孔径) (径高)	0.3cm 0.18cm	良好	内：灰黄 外：*	5YR6/3~ 5YR6/1	13は定形	管状土師、土師器 使用による磨滅面あり	R 159	
158	N34 Pit8	土 師 器 土 師 器	(長) 4.6cm (径) 1.6cm	(孔径) (径高)	0.4cm 0.29cm	やや不良	黒灰 灰白	7.5YR6/1~ 7.5YR6/3	13は定形	管状土師、土師器 使用による磨滅面あり	R 160	

No.	出土遺構	器種	法	量	胎土	焼成	色	調	残存度	備考	登録番号
189	K36 F4d3	土製品 土 器	(長) 8.3cm (幅) 1.2cm	(孔径) (残量)	0.3cm 7.5g	陶製なウレタ片 含む	やや不良	緑黄7.5YR5/1～ 緑黄7.5YR4/1	完形	管状土罐、土師質 使用による磨損箇所あり	R189
190	S K1877	土製品 土 器	(長) 3.6cm (幅) 1.6cm	(孔径) (残量)	0.6cm 7.5g	クマリ練多く含 む	不良	にぶい黄緑10YR7/2～ 明黄7.5YR5/8	完形	管状土罐 土師質	R190
191	S K1878	土製品 土 器	(長) 3.7cm (幅) 1.6cm	(孔径) (残量)	0.6cm 7.5g	クマリ練含む	やや不良	明黄7.5YR5/8 黄緑10YR6/3	完形	管状土罐、土師質 使用による磨損箇所あり	R191
192	S D1974	土製品 土 器	(長) 3.9cm (幅) 1.3cm	(孔径) (残量)	0.3cm 5.1g	クマリ練含む	不良	黄緑10YR6/4	欠形	管状土罐 土師質	R192
193	J25 包含層	土製品 土 器	(長) 3.7cm (幅) 1.4cm	(孔径) (残量)	0.6cm 7.7g	クマリ練含む	やや不良	にぶい黄緑10YR7/4～ にぶい黄緑10YR5/3	完形	管状土罐、土師質、使用 による磨損箇所あり 外面に開口部へのウレタ	R193

### 第119次調査

No.	出土遺構	器種	法	量	顕著・注記の特徴	胎土	焼成	色	調	残存度	備考	登録番号
1	S K7900	土器 杯	(口徑) (器高)	13.4cm 2.8cm	口縁部ヨコナゲ、外面オサ エ後ナゲ、内面ナゲ	密 クマリ練含む	良好	内：にぶい黄 外：黄緑	7.5YR7/4 7.5YR6/4	95%		R18
2	S K7900	土器 杯	(口徑) (器高)	14.2cm 3.2cm	口縁部ヨコナゲ、外面オサ エ後ナゲ、内面ナゲ	密 クマリ練含む	良好	内：黄 外：黄	5YR6/6 +	90%		R7
3	S K7900	土器 杯	(口徑) (器高)	15.2cm 3.5cm	口縁部ヨコナゲ、外面オサ エ後ナゲ、内面ナゲ	密	良好	内：黄緑	10YR7/4 +	98%		R10
4	S K7900	土器 杯	(口徑) (器高)	15.2cm 4.3cm	口縁部ヨコナゲ、外面オサ エ後ナゲ、内面ナゲ	密 クマリ練含む	良好	内：黄 外：黄	5YR6/6 7.5YR6/6	85%		R2
5	S K7900	土器 杯	(口徑) (器高)	11.9cm 2.5cm	口縁部ヨコナゲ、外面オサ エ後ナゲ、内面ナゲ	密 クマリ練含む	良好	内：黄 外：黄	5YR7/6 +	完形		R11
6	S K7900	土器 杯	(口徑) (器高)	14.2cm 3.6cm	口縁部ヨコナゲ、外面オサ エ後ナゲ、内面ナゲ	密 クマリ練含む	良好	内：にぶい黄 外：黄	7.5YR7/4 +	口縁部40%		R6
7	S K7900	土器 杯	(口徑) (器高)	15.0cm 3.6cm	口縁部ヨコナゲ、外面オサ エ後ナゲ、内面ナゲ	密 クマリ練含む	良好	内：にぶい黄 外：黄緑	10YR7/4 7.5YR6/6	46%		R23
8	S K7900	土器 杯	(口徑) (器高)	16.4cm 4.3cm	口縁部ヨコナゲ、外面オサ エ後ナゲ、内面ナゲ	密 クマリ練含む	良好	内：黄 外：黄	7.5YR6/6 +	86%		R3
9	S K7900	土器 杯	(口徑) (器高)	12.2cm 2.7cm	口縁部ヨコナゲ、外面オサ エ、内面ナゲ	密 クマリ練含む	良好	内：にぶい黄 外：にぶい黄	10YR7/4 7.5YR6/4	90%		R1
10	S K7900	土器 杯	(口徑) (器高)	15.2cm 3.1cm	内外面とも磨耗し調整 不明	密 クマリ練含む	やや不良	内：黄緑 外：黄	10YR7/4 +	30%		R37
11	S K7900	土器 杯	(口徑) (器高)	15.2cm 3.7cm	口縁部ヨコナゲ、外面オサ エ後ナゲ、内面ナゲ	密 クマリ練含む	やや不良	内：黄 外：黄	7.5YR6/6 7.5YR7/6	88%		R26
12	S K7900	土器 杯	(口徑) (器高)	16.0cm 3.8cm	口縁部ヨコナゲ、外面オサ エ後ナゲ、内面ナゲ	密 クマリ練含む	良好	内：黄緑 外：黄緑	7.5YR6/6 7.5YR6/6	25%		R34
13	S K7900	土器 杯	(口徑) (器高)	13.9cm 3.0cm	口縁部ヨコナゲ、外面オサ エ後ナゲ、内面ナゲ	密 クマリ練含む	やや不良	内：黄緑 外：黄	7.5YR6/4 10YR7/4	86%		R14
14	S K7900	土器 杯	(口徑) (器高)	14.2cm 3.1cm	口縁部ヨコナゲ、外面オサ エ後ナゲ、内面ナゲ	密 クマリ練含む	良好	内：黄 外：明黄	2.5YR6/8 10YR7/6	95%		R4
15	S K7900	土器 杯	(口徑) (器高)	14.0cm 3.4cm	口縁部ヨコナゲ、外面オサ エ後ナゲ、内面ナゲ	密 クマリ練含む	良好	内：黄 外：黄	5YR7/6 7.5YR7/6	35%		R15
16	S K7900	土器 杯	(口徑) (器高)	14.2cm 2.8cm	口縁部ヨコナゲ、外面オサ エ後ナゲ、内面ナゲ	密 クマリ練含む	良好	内：黄緑 外：黄	7.5YR6/6 7.5YR7/6	30%		R18
17	S K7900	土器 杯	(口徑) (器高)	13.1cm 2.7cm	口縁部ヨコナゲ、外面オサ エ後ナゲ、内面ナゲ	密 クマリ練含む	良好	内：黄 外：にぶい黄	7.5YR7/6 7.5YR7/4	46%		R24
18	S K7900	土器 杯	(口徑) (器高)	14.6cm 2.9cm	口縁部ヨコナゲ、外面オサ エ後ナゲ、内面ナゲ	密 クマリ練含む	良好	内：にぶい黄 外：灰黄	10YR6/4 10YR5/2	43%		R33
19	S K7900	土器 杯	(口徑) (器高)	14.2cm 2.8cm	口縁部ヨコナゲ、外面オサ エ後ナゲ、内面ナゲ	密 クマリ練含む	良好	内：黄 外：にぶい黄	7.5YR7/6 10YR7/4	86%		R13
20	S K7900	土器 杯	(口徑) (器高)	15.4cm 3.3cm	口縁部細いヨコナゲ、外面 オサエ後ナゲ、内面ナゲ	密 クマリ練含む	良好	内：にぶい黄 外：黄	7.5YR6/4 +	85%		R9
21	S K7900	土器 杯	(口徑) (器高)	13.8cm 2.8cm	口縁部ヨコナゲ、外面オサ エ後ナゲ、内面ナゲ	密 クマリ練含む	良好	内：黄 外：黄	5YR6/6 +	45%		R29
22	S K7900	土器 杯	(口徑) (器高)	14.6cm 3.0cm	口縁部ヨコナゲ、外面オサ エ後ナゲ、内面ナゲ	密 クマリ練含む	やや不良	内：明黄 外：黄緑	10YR7/6 7.5YR6/6	90%		R30
23	S K7900	土器 杯	(口徑) (器高)	15.9cm 2.9cm	口縁部ヨコナゲ、外面オサ エ後ナゲ、内面ナゲ	密 クマリ練含む	良好	内：黄 外：にぶい黄	2.5YR6/8 7.5YR6/6	口縁部80%		R8
24	S K7900	土器 杯	(口徑) (器高)	15.2cm 2.7cm	口縁部ヨコナゲ、外面オサ エ後ナゲ、内面ナゲ	密 クマリ練含む	良好	内：黄 外：黄	5YR6/8 5YR7/8	46%		R17
25	S K7900	土器 杯	(口徑) (器高)	12.2cm 2.4cm	口縁部ヨコナゲ、外面オサエ 後ナゲ、内面ナゲ	密 クマリ練含む	良好	内：黄緑10YR8/4～ 外：黄	7.5YR7/6 7.5YR7/6	36%		R22
26	S K7900	土器 杯	(口徑) (器高)	14.0cm 3.3cm	口縁部ヨコナゲ、外面オサエ 後ナゲ、内面ナゲ	密 クマリ練含む	良好	内：黄 外：黄	7.5YR6/6 +	90%		R31
27	S K7900	土器 杯	(口徑) (器高)	14.9cm 2.9cm	口縁部ヨコナゲ、外面オサエ 後ナゲ、内面ナゲ	密 クマリ練含む	良好	内：黄 外：にぶい黄	7.5YR7/6 7.5YR7/4	98%		R5
28	S K7900	土器 杯	(口徑) (器高)	15.6cm 2.4cm	口縁部ヨコナゲ、外面オサエ 後ナゲ、内面ナゲ	密 クマリ練含む	良好	内：黄 外：黄	5YR6/6 +	30%		R26
29	S K7900	土器 杯	(口徑) (器高)	14.6cm 2.9cm	口縁部ヨコナゲ、外面オサエ 後ナゲ、内面ナゲ	密 クマリ練含む	やや不良	内：にぶい黄 外：黄	10YR7/4 +	35%		R20
30	S K7900	土器 皿	(口徑) (器高)	11.9cm 0.8cm	口縁部ヨコナゲ、外面オサエ 後ナゲ、内面ナゲ	密 クマリ練含む	良好	内：黄緑 外：黄	7.5YR6/6 +	口縁部完形		R36

No.	出土遺物	種類	産量	調査・産出の特徴	胎土	産成	色	調	残存率	備考	登録番号		
31	S K 7900	土師器 (口縁) (器高)	13.6cm 1.8cm	口縁ヨコナテ、外面オサエ 後ナテ、内面ナテ	密 クマリ摩合	良好	内：橙 外：*	7.5YR7/6	40%		R19		
32	S K 7900	土師器 (口縁) (器高)	13.6cm 1.8cm	口縁ヨコナテ、外面オサエ 後ナテ、内面ナテ	密 クマリ摩合	良好	内：橙 外：橙	7.5YR7/6 7.5YR7/6	30%		R20		
33	S K 7900	土師器 (口縁) (器高)	14.4cm 2.1cm	口縁ヨコナテ、外面オサエ 後ナテ、内面ナテ	密 クマリ摩合	良好	内：橙 外：*	5YR7/6	80%		R21		
34	S K 7900	土師器 (口縁) (器高)	17.1cm 1.3cm	口縁ヨコナテ、外面オサエ 後ナテ、内面ナテ	密 クマリ摩合	良好	内：橙 外：橙	5YR7/6 7.5YR7/6	30%		R25		
35	S K 7900	土師器 台付皿	(口縁) (高台径) (器高)	16.6cm 7.2cm 3.3cm	口縁ヨコナテ、外面オサエ ハテ、高台部ナテ	密 クマリ摩合	良好	内：橙 外：橙	5YR7/6 5YR7/6	30%		R20	
36	S K 7900	土師器 台付杯	(口縁) (高台径) (器高)	— cm 9.0cm 2.8cm	高台部ヨコナテ、底部ナテ	密	やや不貞	内：浅黄橙 外：*	7.5YR7/4		高台部定存	R20	
37	S K 7900	土師器 台付杯	(口縁) (高台径) (器高)	— cm 8.2cm 3.2cm	外面ナテ、高台部ヨコナテ 底部ナテ	密	やや不貞	内：浅黄橙 外：*	7.5YR7/4		高台部60%	R40	
38	S K 7900	土師器 台付杯	(口縁) (高台径) (器高)	— cm 9.0cm 2.5cm	高台部ヨコナテ、底部ナテ	密	不貞	内：浅黄橙 外：浅黄	7.5YR7/6 2.5YR7/3		高台部定存	R20	
39	S K 7900	土師器 台付杯	(口縁) (高台径) (器高)	— cm 9.8cm 2.4cm	高台部ヨコナテ	密 クマリ摩合	良好	内：浅黄橙 外：*	7.5YR7/6		高台部定存	R27	
40	S K 7900	須恵器 罎	(口縁) (高台径) (器高)	13.0cm 0.3cm 3.7cm	内外面上部縮頸ナテ、下部 ナテ、底部静止糸切リ	密	不貞	内：に灰+黄橙 外：*	10YR7/4 10YR7/1		劣形	R12	
41	S K 7900	灰釉陶器 罎	(口縁) (高台径) (器高)	— cm 7.6cm 1.6cm	高台部貼付ヨコナテ、底部 静止糸切リ	密 1mmの砂粒 含む	良好	内：灰白 外：灰白	2.5Y7/1 2.5Y7/1		高台部90%	裏面あり	R44
42	S K 7900	須恵器 罎	(口縁) (高台径) (器高)	— cm 0.8cm 1.3cm	高台部ヨコナテ、底部糸切 り後ナテ	密	良好	内：灰白 外：灰白	7.5Y7/1 5Y7/1		55%	裏面あり	R43
43	S K 7900	土師器 台付杯	(口縁) (高台径) (器高)	— cm 9.4cm 0.5cm	外面ナテ、高台部ヨコナテ 底部ナテ	密 クマリ摩合	良好	内：(杯底) 浅黄橙 (高台) 橙	7.5YR7/6 7.5YR7/6 7.5YR7/6		高台部20%	R41	
44	S K 7900	土師器 罎	(口縁) (器高)	30.0cm 3.5cm	口縁ヨコナテ、外面ハテ、 内面ナテ	密	良好	内：浅黄橙 外：に灰+黄橙	7.5YR7/4 10YR7/4		30%	R45	
45	S K 7900	土師器 罎	(口縁) (器高)	17.0cm 3.1cm	口縁ヨコナテ、外面ハテ、 内面ナテ	密 1mmの砂粒 含む	良好	内：黄橙 外：浅黄橙	7.5YR7/6 7.5YR7/6		30%	R42	
46	S K 7900	土師器 鉢	(口縁) (器高)	20.0cm 3.0cm	口縁ヨコナテ、外面オサエハ テ、内面上部ヨコナテ	密 クマリ摩合	良好	内：橙 外：*	7.5YR7/6		70%	R02	
47	S K 7902	土師器 罎	(口縁) (器高)	13.0cm 3.1cm	口縁ヨコナテ、外面オサエ 後ナテ、内面ナテ	密 クマリ摩合	やや不貞	内：橙 外：*	7.5YR7/6		80%	R47	
48	S K 7902	土師器 罎	(口縁) (器高)	13.6cm 2.5cm	口縁ヨコナテ、外面オサエ 後ナテ、内面ナテ	密	良好	内：橙 外：橙	5YR7/6 5YR7/6		口縁部25%	R48	
49	S K 7902	土師器 罎	(口縁) (器高)	13.8cm 2.5cm	口縁ヨコナテ、外面オサエ 後ナテ、内面ナテ	密 クマリ摩合	良好	内：橙 外：*	5YR7/6		30%	R46	
50	S K 7902	土師器 罎	(口縁) (器高)	14.6cm 1.6cm	口縁ヨコナテ、外面オサエ 後ナテ、内面ナテ	密	良好	内：橙 外：*	5YR7/6		口縁部50%	R49	
51	S K 7902	土師器 (器高)	(口縁) (器高)	16.0cm 3.4cm	口縁ヨコナテ、外面オサエ 後ナテ、内面ナテ	密 クマリ摩合	やや不貞	内：に灰+橙 外：*	7.5YR7/4		口縁部40%	R50	
52	S K 7902	土師器 罎	(口縁) (器高)	22.6cm 20.0cm	口縁ヨコナテ、外面オサエハ テ、内面飯杓工具ナテ、内 外面底部ケズリ	やや粗	良好	内：浅黄橙 外：(口縁) 浅黄橙 (底部) 黒	7.5YR7/4 7.5YR7/4 10YR2/1		口縁部50% 体部50%	R51	
53	S B 7961	須恵土師 罎	(口縁) (器高)	21.4cm 4.3cm	縮頸の為、不明瞭	密 1mmの砂粒 含む	良好	内：明赤橙 外：橙	5YR7/6 5YR7/6		杯部20%	R54	
54	S B 7961	須恵土師 罎	(口縁) (器高)	2.8cm 3.3cm	縮頸の為、不明瞭	やや粗 1mmの 砂粒含む	良好	内：に灰+黄橙 外：*	10YR7/4		底部のみ	内面に黒色付着物	R55
55	S X 7945	須恵土師 罎	(最大径) (器高)	6.0cm 6.4cm	縮頸の為、不明瞭	やや粗 1mmの 砂粒含む	良好	内：橙 外：橙	7.5YR7/6 5YR7/6		杯部のみ	三方形趾孔 横断文2条2段	R59
56	S X 7945	須恵土師 罎	(最大径) (器高)	9.2cm 12.5cm	縮頸の為、不明瞭	やや粗 1~3mm の砂粒含む	良好	内：に灰+黄橙 外：浅黄橙	10YR7/4 10YR7/4		杯部のみ	三方形趾孔 横断文3条2段	R53
57	S E 7900	土師器 罎	(口縁) (器高)	16.6cm 3.5cm	口縁ヨコナテ、外面底部部 縮頸の為不明瞭、内面ナテ	密 クマリ摩合	良好	内：橙 外：橙	5YR7/6 5YR7/6		40%	R56	
58	S E 7900	土師器 罎	(口縁) (器高)	16.8cm 3.0cm	口縁ヨコナテ、外面オサエ 内面ナテ	密 クマリ摩合	やや不貞	内：橙 外：*	7.5YR7/6		65%	R57	
59	S E 7900	土師器 罎	(口縁) (器高)	10.8cm 11.1cm	縮頸ヨコナテ、脚柱部ケズ リにより面取り	密 クマリ摩合	良好	内：橙 外：*	5YR7/6		脚部定存	R70	
60	S E 7900	土師器 罎	(最大径) (器高)	8.4cm 12.2cm	外面ハテ後面取りケズリ、 内面ナテ(ハテメ残る)	密 クマリ摩合	良好	内：橙 外：*	5YR7/6		柱状部のみ	R71	
61	S E 7900	須恵器 罎	(口縁) (器高)	17.8cm 1.6cm	内外面頸縮ナテ	密	良好	内：灰黄 外：灰白	2.5Y7/2 3Y7/2		20%	R59	
62	S K 7900	須恵器 罎	(口縁) (器高)	19.4cm 3.1cm	内外面頸縮ナテ、外面上部 縮頸ケズリ	密 1mmの砂粒 含む	良好	内：黄赤 外：灰白	2.5Y7/1 7.5Y7/1		30%	口クラ右面縮 頸+浅黄あり	R58
63	S K 7900	須恵器 罎	(口縁) (器高)	13.4cm 3.3cm	内外面頸縮ナテ、外面上部 ヘタケナテ	密	良好	内：灰 外：*	NS/		30%	口クラ右面縮 頸	R60
64	S E 7900	須恵器 台付杯	(口縁) (高台径) (器高)	16.3cm 7.3cm 4.3cm	内外面頸縮ナテ、高台貼付 後ナテ	密	良好	内：灰白 外：灰白	10Y7/1 5Y7/1		杯部 40% 高台部30%	R61	

No.	出土遺物	器 種	法 量	調整・技法の特徴	胎 土	焼 成	色 調	調	残 存 度	備 考	登録番号		
65	包含層	ワラビ型器 台付小皿	(口径) (高さ) (器高)	9.6cm 4.4cm 2.5cm	内外裏面削ナゲ、底部本切	密	1mmの砂粒含む	良好	内：浅黄 外：黄	7.5YR6/6 7.5YR7/6	変形	糸割痕あり	R68
66	包含層	ワラビ型器 台付小皿	(口径) (高さ) (器高)	— 6.0cm 3.1cm	内外裏面削ナゲ、底部本切	密	やや粗1-3mm 大の砂粒含む	良好	内：ぶい黄 外：灰黄褐	10YD6/4 10YR6/3	高台部定形		R69
67	包含層	ワラビ型器 小皿	(口径) (高さ) (器高)	5.0cm 0.9cm 2.5cm	内外裏面削ナゲ、底部本切	密	1mmの砂粒含む	良好	内：黄 外：*	5YR6/*	変形	糸割痕あり	R66
68	包含層	ワラビ型器 台付小皿	(口径) (高さ) (器高)	10.2cm 5.2cm 3.1cm	内外裏面削ナゲ、高台部付時のナゲ	密	クサリ層含む	良好	内：黄 外：*	5YR6/*	口縁部30% 高台部定形		R65
69	包含層	ワラビ型器 台付小皿	(口径) (高さ) (器高)	9.2cm 6.0cm 3.0cm	口縁コナナゲ、内外裏面削ナゲ、高台部付時のナゲ	密	1mmの砂粒多く含む	やや不良	内：黄 外：*	7.5YR7/6	口縁部20% 高台部40%		R63
70	包含層	ワラビ型器 台付小皿	(口径) (高さ) (器高)	9.0cm 5.8cm 3.3cm	口縁コナナゲ、内外裏面削ナゲ、高台部付時のナゲ	密	1-2mmの砂粒多く含む	良好	内：黄 外：黄緑	7.5YR6/6 7.5YR7/8	口縁部5% 高台部10%		R64
71	包含層	灰釉陶器 皿	(口径) (高さ) (器高)	11.0cm 6.3cm 1.8cm	内外裏面削ナゲ、底部本切	密		良好	内：灰黄 外：灰白	2.5Y7/2 2.5Y7/1	変形		R67
76	P-13 P13-18	陶 器 器	(口径)	— cm	内外裏面削ナゲ	密		良好	内：灰 外：灰	5Y6/1 7.5Y6/1	長さ33cm 幅23.5cm	外側にヘラ傷りあり 【口縁部】	R76
77	P-13 P13-18	陶 器 器	(口径) (器高)	28.6cm 2.3cm	内外裏面削ナゲ、外面頂部削ヘラケツリ	密	細砂多く含む	良好	内：ぶい黄 外：灰	10YR6/3 7.5YR6/4	30%		R77
No.	出土遺物	器 種	法 量	調整・技法の特徴	胎 土	焼 成	色 調	調	残 存 度	備 考	登録番号		
72	S K 7630	土 製 土 器	(総長) (口径)	2.5cm 0.6cm	(総大径) (蓋高)	3.1cm 24.2g	密	良好	ぶい黄	7.5YR7/4	変形		R72
73	P-1 8 包含層	土 製 土 器	(総長) (口径)	4.2cm 0.8cm	(総大径) (蓋高)	2.4cm 17.2g	密	良好	黄	7.5YR7/6	変形		R73
74	S K 7638	土 製 土 器	(総長) (口径)	5.5cm 0.5cm	(総大径) (蓋高)	1.8cm 13.8g	密	やや不良	灰黄緑	10YR6/2	変形		R75
75	Q-1 7 包含層	土 製 土 器	(総長) (口径)	6.9cm 0.4cm	(総大径) (蓋高)	1.9cm 19.2g	密	良好	黄緑	10YR6/6	変形		R74

### 第120次調査

No.	出土遺物	器 種	法 量	調整・技法の特徴	胎 土	焼 成	色 調	調	残 存 度	備 考	登録番号			
1	S D6050	土 製 土 器	(口径) (器高)	21.2cm 3.3cm	口縁部コナナゲ、外面ヘラケツリ、内面ナゲ	密		良好	内：ぶい黄 外：黄	5YR6/4 5YR6/8	25%	器底の残存状況悪くミ ズガ残り難い	R82	
2	S D6050	土 製 土 器	(口径) (器高)	17.6cm 5.8cm	口縁部コナナゲ、外面ヘラケツリ、内面ナゲ後継射・ 幅狭	密		良好	内：黄 外：黄	5YR6/6 5YR6/8 2.5Y6/1	70%	器底の残存状況悪くミ ズガ残り難い	S88	
3	S D6050	土 製 土 器	(口径) (器高)	16.4cm 2.4cm	口縁部コナナゲ、外面ヘラケツリ、内面ナゲ	密		良好	内：ぶい黄 外：ぶい黄	5YR6/4 7.5YR6/4	20%		R81	
4	S D6050	土 製 土 器	(口径) (器高)	13.4cm 3.1cm	口縁部コナナゲ、外面ヘラケツリ、内面ナゲ	やや粗		良好	内：黄 外：黄	7.5YR7/6 7.5YR7/6	ほぼ変形		R80	
5	S D6050	土 製 土 器	(口径) (器高)	13.6cm 3.7cm	口縁部コナナゲ、外面ヘラケツリ、内面ナゲ	やや粗		良好	内：ぶい黄 外：ぶい黄	10YR7/4 10YR7/3	40%		R85	
6	S D6050	土 製 土 器	(口径) (器高)	22.2cm 3.1cm	口縁部コナナゲ、外面ヘラケツリ後ヘラミズガ、内面ヘラケツリ後ヘラミズガ	密		良好	内：ぶい黄 外：ぶい黄	7.5YR6/4 7.5YR6/4	40%		R81	
7	S D6050	土 製 土 器	(口径) (器高)	22.2cm 11.3cm	口縁部コナナゲ、外面ヘラケツリ、内面コナナゲ、下平ケツリ	やや粗 2mm大の砂粒含む	密		内：ぶい黄 外：ぶい黄	5YR7/4 5YR6/4	40%	外面ハケミ6本/cm 内面ハケミ9本/cm	R82	
8	S D6050	土 製 土 器	(口径) (器高)	27.7cm 14.2cm	口縁部コナナゲ、外面ヘラケツリ、内面コナナゲ、下平ケツリ	密		良好	内：黄 外：黄	5YR6/6 5YR6/4	40%	外面ハケミ4本/cm 内面ハケミ7本/cm	R79	
9	S D6050	土 製 土 器	(口径) (器高)	19.7cm 12.1cm	口縁部コナナゲ、外面ヘラケツリ、内面コナナゲ、下平ケツリ	やや粗 1mm大の砂粒含む	密		内：ぶい黄 外：ぶい黄	10YR6/3 7.5YR6/4	30%	外面ハケミ8本/cm 内面ハケミ8本/cm	R84	
10	S D6050	土 製 土 器	(口径) (器高)	25.0cm 11.3cm	口縁部コナナゲ、外面ヘラケツリ、内面コナナゲ、下平ケツリ	密		良好	内：ぶい黄 外：ぶい黄	10YR7/4 10YR7/4	70%	外面ハケミ8本/cm 内面ハケミ8本/cm	R78	
11	S D6050	灰 釉 陶 器	(口径) (器高)	17.0cm 5.7cm	底部削ヘラケツリ、口縁部内外裏面削ナゲ	不良		不良	内：灰黄 外：灰	2.5Y6/2 N6/0-2.5Y6/2	30%	器底方向右向き	R83	
12	S D6050	灰 釉 陶 器	(口径) (器高)	28.6cm 5.7cm 23.8cm	高部削ヘラケツリ、口縁部内外裏面削ナゲ	密		良好	内：灰黄 外：灰	2.5Y6/2 2.5Y6/1	60%	器底方向左向き 底部削ヘラケツリ不明	R84	
13	S D6050	灰 釉 陶 器	(口径) (器高)	24.8cm 2.0cm 13.6cm	底部削ヘラケツリ、口縁部内外裏面削ナゲ	密		良好	内：灰黄 外：灰	2.5Y7/2 2.5Y7/2	30%	器底方向左向き	R83	
14	S D6050	灰 釉 陶 器	(口径) (器高)	23.8cm 10.3cm	口縁部内外裏面削ナゲ、外面削ナゲ	やや粗		良好	内：灰 外：灰黄	N4/0-2.5Y6/2	N4/0	つまみ定形 口縁部10%	器底方向内向き 口縁部8本/cm	R87
15	S D6050	灰 釉 陶 器	(口径) (器高)	28.0cm 10.7cm	口縁部内外裏面削ナゲ、外面削ナゲ後ケツリ	やや粗		良好	内：灰 外：灰黄	5Y6/1-2.5Y6/2 5Y6/1-2.5Y6/2	口縁部30%	器底方向内向き	R88	
16	S D6050	灰 釉 陶 器	(口径) (器高)	35.8cm 16.2cm	口縁部内外裏面削ナゲ、外面削ナゲ後ケツリ、内面用心付状で具痕	やや粗 1mm大の砂粒含む	密		内：黄 外：灰	2.5Y6/1 2.5Y6/2	口縁部10%	器底方向内向き	R89	

No.	土名・産地	形状	法	量	調整・注記の概要	粘土	堆積	色	調	残存度	備考	登録番号
17	S D600	土 質 類 (口標) (底標) (高台標)	— 195.6m 23.6m	内外溝田輪ナテ、外周下部 窪地ナテ、底部内周同心 円状で長直線型	中々硬 1m大の砂粒含 む	良好	内：灰黄 外：灰黄	2.5Y7/2 2.5Y7/2	成層30%	磁器方向石取り 法と同一層位と思われ る		R 90
18	S K 795	土 質 類 (口標) (底標)	14.2m 2.8m	口線部コナテ、外周オサ エ後ナテ、内周ナテ	密	良好	内：黄 外：黄	5Y7/6 5Y7/6	口線部40%	口線部指し油懸付者		R 10
19	S K 795	土 質 類 (口標) (底標)	14.4m 3.0m	口線部コナテ、外周オサ エ後ナテ、内周ナテ	密	良好	内：黄 外：黄	5Y7/6 5Y7/6	口線部45%			R 15
20	S K 795	土 質 類 (口標) (底標)	14.0m 2.8m	口線部コナテ、外周オサ エ後ナテ、内周ナテ	密	良好	内：黄 外：黄	5Y7/6 5Y7/6	口線部40%			R 21
21	S K 795	土 質 類 (口標) (底標)	14.0m 3.8m	口線部コナテ、外周オサ エ後ナテ、内周ナテ	密	良好	内：黄 外：黄	5Y7/6 5Y7/6	口線部50%			R 26
22	S K 795	土 質 類 (口標) (底標)	15.2m 3.0m	口線部コナテ、外周オサ エ後ナテ、内周ナテ	密	良好	内：黄 外：黄	5Y7/6 5Y7/6	口線部60%			R 13
23	S K 795	土 質 類 (口標) (底標)	14.8m 3.0m	口線部コナテ、外周オサ エ後ナテ、内周ナテ	密	良好	内：黄 外：黄	5Y7/6 5Y7/6	口線部50%			R 18
24	S K 795	土 質 類 (口標) (底標)	14.4m 3.2m	口線部コナテ、外周オサ エ後ナテ、内周ナテ	密	良好	内：黄 外：浅黄緑	5Y7/6 7.5Y7/6/3	ほぼ定形			R 11
25	S K 795	土 質 類 (口標) (底標)	15.0m 3.5m	口線部コナテ、外周オサ エ後ナテ、内周ナテ	密	良好	内：黄 外：黄	2.5Y7/2 2.5Y7/2	口線部70%			R 53
26	S K 795	土 質 類 (口標) (底標)	14.0m 2.6m	口線部コナテ、外周オサ エ後ナテ、内周ナテ	密	良好	内：黄 外：黄	5Y7/6 5Y7/6	口線部30%			R 33
27	S K 795	土 質 類 (口標) (底標)	13.4m 3.0m	口線部コナテ、外周オサ エ後ナテ、内周ナテ	密	良好	内：浅黄緑 外：浅黄緑	10Y7/6/4 7.5Y7/6/6	口線部15% 底部 80%			R 19
28	S K 795	土 質 類 (口標) (底標)	15.4m 3.1m	口線部コナテ、外周オサ エ後ナテ、内周ナテ	密	良好	内：黄 外：黄	5Y7/6 5Y7/6	口線部40%	口線部底みあり 口径15.4m-16.6m		R 32
29	S K 795	土 質 類 (口標) (底標)	14.4m 3.1m	口線部コナテ、外周オサ エ後ナテ、内周ナテ浅線型 積文	密	良好	内：黄 外：黄	2.5Y7/6 2.5Y7/6	口線部40%			R 20
30	S K 795	土 質 類 (口標) (底標)	15.4m 3.4m	口線部コナテ、外周オサ エ後ナテ、内周ナテ	密	良好	内：黄 外：黄	5Y7/6 5Y7/6	口線部50%			R 17
31	S K 795	土 質 類 (口標) (底標)	14.4m 3.4m	口線部コナテ、外周オサ エ後ナテ、内周ナテ	密	良好	内：黄 外：黄	5Y7/6 5Y7/6	口線部40%			R 16
32	S K 795	土 質 類 (口標) (底標)	13.9m 3.1m	口線部コナテ、外周オサ エ後ナテ、内周ナテ	密だが2-4mm 大の砂粒含む	良好	内：黄 外：黄	5Y7/6 5Y7/6	定形			R 12
33	S K 795	土 質 類 (口標) (底標)	15.0m 3.4m	口線部コナテ、外周オサ エ後ナテ、内周ナテ	密	良好	内：黄 外：黄	2.5Y7/6 2.5Y7/6	口線部90%			R 14
34	S K 795	土 質 類 (口標) (底標)	17.2m 3.8m	口線部コナテ、外周オサ エ後ナテ、内周ナテ	密	良好	内：黄 外：浅黄緑	5Y7/6 7.5Y7/6/6	口線部40%			R 34
35	S K 795	土 質 類 (口標) (底標)	13.6m 4.3m	口線部コナテ、外周ヘラ ズリ、内周ナテ	密	良好	内：黄 外：黄	2.5Y7/6 2.5Y7/6	口線部30%			R 32
36	S K 795	土 質 類 (口標) (底標)	15.4m 4.7m	口線部コナテ、外周オサ エ後ナテ、内周ナテ	密	良好	内：黄 外：黄	5Y7/6 5Y7/6	口線部50%			R 37
37	S K 795	土 質 類 (口標) (底標)	16.6m 5.3m	口線部コナテ、外周オサ エ後ナテ、内周ナテ浅線型 ・短線型積文	密	良好	内：浅黄緑 外：浅黄緑	7.5Y7/6/6 7.5Y7/6/6	口線部25%			R 39
38	S K 795	土 質 類 (口標) (底標) (高台標)	14.4m 4.4m 7.1m	口線部コナテ、外周ナテ 後タテハテ、内周ナテ	密	良好	内：黄 外：黄	2.5Y7/6 2.5Y7/6	口線部50% 底部底存			R 31
39	S K 795	土 質 類 (口標) (底標) (高台標)	— 4.6m 7.1m	口線部コナテ、外周ナテ 後タテハテ、内周ナテ	密	良好	内：にぶい黄 外：にぶい黄	7.5Y7/4 7.5Y7/3	底部70%			R 24
40	S K 795	土 質 類 (口標) (底標)	19.8m 4.2m	口線部コナテ、外周オサ エ後ナテ、内周ナテ	密	良好	内：黄 外：黄	2.5Y7/6 2.5Y7/6	口線部50%	内周の金面に集付者		R 35
41	S K 795	土 質 類 (口標) (底標)	14.6m 1.6m	口線部コナテ、外周オサ エ後ナテ、内周ナテ	密	良好	内：黄 外：黄	5Y7/6 5Y7/6	口線部60%			R 29
42	S K 795	土 質 類 (口標) (底標)	15.4m 1.7m	口線部コナテ、外周オサ エ後ナテ、内周ナテ	密	良好	内：黄 外：黄	5Y7/6 5Y7/6	口線部40%			R 28
43	S K 795	土 質 類 (口標) (底標)	14.8m 1.8m	口線部コナテ、外周オサ エ後ナテ、内周ナテ	密	良好	内：にぶい黄 外：黄	7.5Y7/4 5Y7/6	口線部20%			R 36
44	S K 795	土 質 類 (口標) (底標)	14.4m 1.9m	口線部コナテ、外周オサ エ後ナテ、内周ナテ	密	良好	内：黄 外：黄	2.5Y7/6 2.5Y7/6	口線部50%			R 76
45	S K 795	土 質 類 (口標) (底標)	15.4m 2.0m	口線部コナテ、外周オサ エ後ナテ、内周ナテ	密	良好	内：黄 外：黄	5Y7/6 5Y7/6	口線部55%	底部にほつりしな い層にハテ底等あり		R 27
46	S K 795	土 質 類 (口標) (底標)	15.4m 1.7m	口線部コナテ、外周オサ エ後ナテ、内周ナテ	密	良好	内：黄 外：黄	2.5Y7/6 2.5Y7/6	口線部20%			R 26
47	S K 795	土 質 類 (口標) (底標)	16.1m 2.6m	口線部コナテ、外周オサ エ後ナテ、内周ナテ	密	良好	内：黄 外：黄	7.5Y7/6 7.5Y7/6	ほぼ定形			R 25
48	S K 795	土 質 類 (口標) (底標)	16.8m 2.1m	口線部コナテ、外周オサ エ後ナテ、内周ナテ	密	良好	内：黄 外：黄	5Y7/6 5Y7/6	口線部30%			R 75
49	S K 795	土 質 類 (口標) (底標)	11.8m 9.5m	口線部コナテ、外周外周 タテハテ、内周板ナテ、下 半内周底ともナテ	密	良好	内：浅黄緑 外：黄	7.5Y7/6/6 7.5Y7/6/6	口線部90%	外周ハテ米 2本/cm		R 31
50	S K 795	土 質 類 (口標) (底標)	12.8m 10.7m	口線部コナテ、外周外周 タテハテ、内周ナテ、内周	密	良好	内：にぶい黄 外：にぶい黄	10Y7/3 10Y7/3	口線部90%	外周ハテ米 3本/cm		R 30
51	S K 795	土 質 類 (口標) (底標)	18.0m 12.6m	口線部コナテ、外周外周 タテハテ後ナテ、下半ナテ 内周ナテ	密	良好	内：浅黄緑 外：にぶい黄	10Y7/3 10Y7/4	口線部90%	外周ハテ米 3本/cm		R 32

No.	出土地名	品名	法	寸法	調整・技法の特徴	粘土	構成	色	調	残存度	備考	登録番号
52	S K 7956	土器 土器 土器	(口径) (器高)	25.3cm 18.6cm	口縁部コナナ、外部外周 ナメケ、内面ナナ	密	良好	内：にぶい黄緑～灰黄 外：黄	TSYR6/4～10YR5/2 TSYR1/6	口縁部25%	外周ハケム3本/cm	R104
53	S K 7955	土器 土器	(口径) (器高)	28.9cm 11.4cm	口縁部コナナ、外部外周 ナメケ、内面コナナ、 下半内周ともナメケ	密	良好	内：にぶい黄緑 外：にぶい黄緑	10YR7/4 10YR1/4	口縁部80%	外周ハケム3本/cm 内面ハケム2本/cm	R77
54	S K 7958	土器 土器	(口径) (器高)	23.3cm 8.0cm	口縁部コナナ、外部外周 ナメケ、下半ナメケ 内面ナナ、底ユビオキ	密	良好	内：黄 外：黄	5YR7/6 5YR1/6	口縁部70%	外周ハケム縁部 6本/cm×2	R103
55	S K 7955	須恵器 須恵器	(口径) (器高)	— —	外周天井部凹線ナメ、内 面凹線ナメ	密	良好	内：灰白 外：灰白	N7/0 N7/0	10%	つまみ欠片	R54
56	S K 7955	須恵器 須恵器	(口径) (器高)	— —	内外面とも凹線ナメ	密	良好	内：灰白 外：灰白	N8/0 N8/0	5%		R9
57	S K 7955	須恵器 須恵器	(口径) (器高) (高台径)	— — 11.0cm	内外面とも凹線ナメ 高台足付時ナメ	密	良好	内：黄灰 外：黄灰	5B6/1 5B6/1	10%		R8
58	S K 7955	須恵器 須恵器	(口径) (器高) (高台径)	— — 14.0cm	内外面とも凹線ナメ 高台足付時ナメ	密	良好	内：灰白 外：灰白	N7/0 N7/0	15%		R55
59	S K 7955	灰陶器 灰陶器	(口径) (器高) (高台径)	13.4cm 3.6cm 5.4cm	内外面とも凹線ナメ 高台足付時ナメ	密	良好	内：灰白 外：灰白	N8/0 N8/0	口縁部70% 高台部40%	凹部方向左向き	R56
60	S K 7955	灰陶器 灰陶器	(口径) (器高) (高台径)	18.3cm 5.5cm 8.3cm	内外面とも凹線ナメ 高台足付時ナメ	密	良好	内：灰白 外：灰白 輪：オリーブ黄	5Y6/1 5Y6/1 5Y6/4	口縁部50% 高台部完全	凹部方向左向き	R3
61	S K 7955	灰陶器 灰陶器	(口径) (器高) (高台径)	21.8cm 4.7cm 10.0cm	内外面とも凹線ナメ 外縁の傷面付近凹線ナメ 高台足付時ナメ	密	良好	内：灰白 外：灰白 輪：オリーブ黄	5Y6/1 5Y6/1 7.5Y6/3	口縁部60% 高台部完全	凹部方向右向き	R4
62	S K 7955	灰陶器 灰陶器	(口径) (器高) (高台径)	— — 7.5cm	内外面とも凹線ナメ 高台足付時ナメ	密	良好	内：灰白 外：灰白	5Y6/1 5Y6/1	高台部40%	凹部方向右向き	R2
63	S K 7955	灰陶器 灰陶器	(口径) (器高) (高台径)	— — 7.6cm	内外面とも凹線ナメ 高台足付時ナメ	密	良好	内：灰白 外：灰白	7.5Y7/1 7.5Y7/1	高台部30%	凹部方向右向き	R7
64	S K 7955	灰陶器 灰陶器	(口径) (器高) (高台径)	15.6cm 2.3cm 7.3cm	内外面とも凹線ナメ 高台足付時ナメ	密	良好	内：灰白 外：灰白	2.5Y6/1 5Y6/1	口縁部50% 高台部50%	凹部方向右向き 外周・底部外面に磨き あり程度不明	R40
65	S K 7955	灰陶器 灰陶器	(口径) (器高) (高台径)	16.3cm 2.1cm —	内外面とも凹線ナメ 高台足付時ナメ	密	良好	内：灰白 外：灰白 輪：オリーブ	2.5Y6/3 2.5Y6/2 7.5Y6/2	口縁部35% 高台部完全	凹部方向右向き	R1
66	S K 7955	灰陶器 灰陶器	(口径) (器高) (高台径)	15.4cm 1.8cm 6.3cm	内外面とも凹線ナメ 高台足付時ナメ	密	良好	内：灰白 外：灰白 輪：オリーブ	7.5Y6/1 7.5Y6/1 7.5Y6/2	口縁部30% 高台部完全	凹部方向左向き 底部外面に磨きあり 程度不明	R41
67	S K 7955	灰陶器 灰陶器	(口径) (器高) (高台径)	15.6cm 2.4cm 8.4cm	内外面とも凹線ナメ 高台足付時ナメ	密	良好	内：灰白 外：灰白 輪：オリーブ黄	5Y7/1 5Y7/1 7.5Y6/3	口縁部10% 高台部25%	凹部方向不明	R5
68	S K 7955	灰陶器 灰陶器	(口径) (器高) (高台径)	20.0cm 8.9cm 10.3cm	内外面とも凹線ナメ 外周下半凹線ナメ 高台足付時ナメ	密	良好	内：灰白 外：灰白 輪：オリーブ灰	5Y7/1 5Y7/1 10Y6/2	口縁部10% 高台部10%	凹部方向右向き	R6
69	S K 7955	製造土器 製造土器	(口径) (器高) (高台径)	12.3cm 4.0cm 14.0cm	口縁部コナナ、外周オキ エ線ナメ、内面ナナ	密	良好	内：黄 外：黄	7.5YR7/6 7.5YR1/6	口縁部10%		R42
70	S K 7955	製造土器 製造土器	(口径) (器高) (高台径)	10.6cm 5.3cm 12.3cm	口縁部コナナ、外周オキ エ線ナメ、内面ナナ	密	良好	内：黄 外：黄	7.5YR7/6 7.5YR7/6	口縁部15%		R43
71	S K 7955	製造土器 製造土器	(口径) (器高) (高台径)	14.6cm 5.9cm 15.8cm	口縁部コナナ、外周オキ エ線ナメ、内面ナナ	密	良好	内：黄 外：黄	5YR6/8 5YR6/8	口縁部40%		R46
72	S K 7955	製造土器 製造土器	(口径) (器高) (高台径)	— — —	口縁部コナナ、外周オキ エ線ナメ、内面ナナ	密	良好	内：黄 外：黄	10YR6/6 7.5YR6/6	口縁部10% 以下		R44
73	S K 7955	製造土器 製造土器	(口径) (器高) (高台径)	— — —	口縁部コナナ、外周オキ エ線ナメ、内面ナナ	密	良好	内：黄 外：黄	2.5Y6/3 10YR6/4	口縁部10% 以下	外周付着	R45
74	S K 7955	製造土器 製造土器	(口径) (器高) (高台径)	— — —	口縁部コナナ、外周オキ エ線ナメ、内面ナナ	密	良好	内：黄 外：黄	5YR6/8 7.5YR6/6	口縁部10% 以下		R48
75	S K 7955	製造土器 製造土器	(口径) (器高) (高台径)	— — —	口縁部コナナ、外周オキ エ線ナメ、内面ナナ	密	良好	内：黄 外：黄	7.5YR7/6 7.5YR6/6	口縁部10% 以下		R47
76	S B 8000	土器 土器	(口径) (器高)	12.7cm 2.9cm	口縁部コナナ、外周オキ エ線ナメ、内面ナナ	密	良好	内：黄 外：黄	5YR6/8 5YR6/8	口縁部20%		R60
79	S B 8000	須恵器 須恵器	(口径) (器高)	— —	内外面とも凹線ナメ 高台足付時ナメ	密	良好	内：灰 外：灰	5Y5/1 5Y5/1	高台部30%	凹部方向左向き	R59
80	S B 8000	須恵器 須恵器	(口径) (器高) (高台径)	16.5cm 8.5cm —	内外面とも凹線ナメ 底部外周凹線ナメ	密	良好	内：灰 外：灰～にぶい黄	7.5YR2/5 7.5YR6/1～2.5YR3/4	口縁部10% 高台部30%	凹部方向右向き	R57
81	S B 7958	土器 土器	(口径) (器高)	15.3cm 13.0cm	口縁部コナナ、内外面 ともナメ	密	良好	内：黄 外：黄	5YR6/8 5YR6/8	口縁部20%		R62
82	S B 7958	土器 土器	(口径) (器高)	— —	口縁部コナナ、外周オキ エ線ナメ、内面ナナ	密	良好	内：黄 外：黄	10YR6/4 5YR7/8	口縁部10%		R61
83	S B 7958	須恵器 須恵器	(口径) (器高)	15.8cm 11.3cm	内外面とも凹線ナメ 天井部1/2凹線ナメ	密	良好	内：灰 外：灰	5Y6/1 7.5Y6/3	口縁部40%	凹部方向右向き	R58

No.	出土地柄	器種	法 量	調査・技法の特徴	胎 土	焼 成	色 調	残 存 度	備 考	登録番号	
84	S 3803	土師器 豆	(口径) 16.9cm (器高) 3.0cm	口縁部ヨコナデ、一部横い しぎり、内面ナヤエ焼成し 、黒炭焼文	密	良好	内：黄 外：黄	5YR6/6 2.5YR7/8	口縁部30%	R63	
85	S B799	土師器 杯	(口径) 15.1cm (器高) 2.5cm	口縁部ヨコナデ、外面ナヤ エ後ナデ、内面ナヤ	やや粗1~2cm 大の砂粒含む	良好	内：黄褐色 外：黄褐色	7.5YR6/6 7.5YR6/6	変形 口縁部50%	R64	
86	S B797	土師器 台付杯	(口径) 15.0cm (器高) 4.8cm (高台径) 9.5cm	口縁部ヨコナデ、外面ナヤ エ後ナデ、内面ナヤ、高台 輪付特ナデ		良好	内：黄褐色 外：黄褐色	7.5YR6/4 7.5YR6/4	口縁部50% 高台完全	R69	
87	S K790	土師器 杯	(口径) 16.0cm (器高) 3.5cm	口縁部ヨコナデ、外面ヘラ ケズリ、内面ナヤ		良好	内：黄 外：にぶい黄	5YR6/6 5YR6/4	口縁部40%	R105	
88	S K790	土師器 杯	(口径) 19.8cm (器高) 4.8cm	口縁部ヨコナデ、外面ヘラ ケズリ後部1/2ナヤ、内面 ナヤ後部斜紋文		良好	内：黄 外：黄	5YR6/6 5YR6/6	口縁部10%	R106	
89	S K790	土師器 壺	— cm — cm	口縁部ヨコナデ、外面ナヤ ハケ、内面ヨコナデ		良好	内：にぶい黄 外：にぶい黄	10YR7/3 10YR7/3	口縁部10%	R107	
90	S K796	土師器 杯	(口径) 17.0cm (器高) 2.3cm	口縁部ヨコナデ、外面ニビ オヤエ後ナデ、内面ナヤ		良好	内：明赤褐色 外：明赤褐色	7.5YR5/8 7.5YR5/8	変形	R108	
91	S K790	土師器 杯	(口径) 16.0cm (器高) 2.6cm	口縁部ヨコナデ、外面ニビ オヤエ後ナデ、内面ナヤ		良好	内：黄 外：黄	7.5YR6/6 7.5YR6/6	口縁部50%	R113	
92	S K790	土師器 杯	(口径) 17.2cm (器高) 2.1cm	口縁部ヨコナデ、外面ニビ オヤエ後ナデ、内面ナヤ	やや粗	良好	内：黄 外：黄	7.5YR6/6 7.5YR6/6	口縁部40%	R112	
93	S K797	土師器 杯	(口径) 13.7cm (器高) 2.7cm	口縁部ヨコナデ、外面ナヤ エ後ナデ、内面ナヤ		良好	内：黄 外：黄	7.5YR7/6 7.5YR7/6	変形	R114	
94	S K797	土師器 杯	(口径) 13.8cm (器高) 3.0cm	口縁部ヨコナデ、外面ナヤ エ後ナデ、内面ナヤ	やや粗	良好	内：黄褐色 外：黄褐色	7.5YR6/6 7.5YR6/6	口縁部80%	R115	
95	S K797	須恵器 壺	(口径) — cm (器高) — cm	内外面斜紋ナデ、内面斜紋 ナデ、つまみ取り付特ナ デ	密	良好	内：にぶい黄褐色 外：灰黄褐色	10YR6/3 10YR6/2	つまみ50% 内型×内底のヘラ記 号あり腫れ方向不明	R99	
96	S D796	土師器 杯	(口径) 14.2cm (器高) 3.3cm	口縁部ヨコナデ、内外面ナ ヤエ後ナデ	やや粗	良好	内：黄褐色 外：黄褐色	7.5YR6/4 7.5YR6/4	口縁部50%	R70	
97	S D791	土師器 台付杯	(口径) 20.4cm (器高) 5.2cm (高台径) 14.1cm	口縁部ヨコナデ、外面上部 ヘラケズリ後ナデ、下部 ハケメ後ナデ、内面ナヤ		良好	内：黄褐色 外：黄	7.5YR6/6 2.5YR7/8	口縁部50% 高台約50%	R68	
98	S D793	須恵器 壺	(口径) 16.4cm (器高) 2.8cm	外面天部斜紋ナデ、1/2 斜紋ナデ、内面斜紋ナデ	密	良好	内：灰白 外：灰白	10Y7/1 10Y7/1	口縁部20%	R66	
99	S D798	須恵器 壺	(口径) 16.4cm (器高) 2.8cm	外面天部斜紋ナデ、口 縁部、内面斜紋ナデ		良好	内：灰白 外：灰白	5Y7/1 5Y7/1	口縁部20% 杯の可能性もあり 腫れ方向右向き	R65	
100	S D797	須恵器 壺	(口径) — cm (器高) — cm (底径) 11.0cm	内外面斜紋ナデ	密	良好	内：にぶい黄褐色 外：灰白 外面自然焼 暗オリーブ	5Y7/1 5Y7/1 5Y4/3	裏面 25% 胎元方向不明	R67	
101	N - 6 包金器	土師器 壺	(口径) 9.5cm (器高) 9.5cm	口縁部ヨコナデ、外面ナヤ ハケ、内面ナヤ	密	良	内：にぶい黄褐色 外：黄	10YR7/4 5YR7/6	口縁部20% ミニチュア製品	R98	
102	J - 8 包金器	須恵器 壺	(口径) 19.6cm — cm	内外面斜紋ナデ	密	良好	内：灰白 外：灰	10Y7/1 N6/0	口縁部10% 玉縁口縁	R74	
103	H - 1 包金器	須恵器 内面	(口径) 11.0cm (器高) 2.0cm	内外面斜紋ナデ	密	良好	内：灰黄 外：灰黄褐色 10YR6/2~10YR5/1	2.5Y6/2 2.5Y6/2	口縁部10% 胎元方向不明 胎元方向不明	R102	
104	M - 8 包金器	須恵器 壺	(口径) — cm (器高) — cm	内外面工具ナデ	密	良好	内：灰黄~黄灰 外：にぶい黄~黄褐色 2.5Y6/3~2.5Y3/1	2.5Y7/2~5B6/1 2.5Y6/3~2.5Y3/1	全体の20% 程度 使用痕跡不明	R101	
105	L - 6 包金器	須恵器 壺	(口径) 15.8cm (器高) 2.5cm (高台径) 8.5cm	内外面とも斜紋ナデ 高台輪付特ナデ	密	良好	内：灰白 外：灰 内：オリーブ黄	5Y8/1 5Y8/1 7.5Y6/3	口縁部20% 高台完全	R72	
106	L - 6 包金器	土師器 台付杯	(口径) 10.2cm (器高) 5.7cm (高台径) 7.6cm	口縁部ヨコナデ、外面ナヤ ハケ後ナデ、内面ナヤ、高 台輪付特ナデ	密	良好	内：黄 外：黄	5YR7/6 5YR7/6	口縁部20% 高台完全	R73	
107	S D798	須恵器 壺	(口径) 13.0cm (器高) 2.8cm	口縁部ナデ、外面斜紋 斜紋ナデ、一部斜紋ナデ、 内面ナヤ	密	良好	内：黄灰 外：黄灰	5B6/1 5B6/1	口縁部30% 杯の可能性もあり 腫れ方向不明	R71	
No.	出土地柄	器種	法 量	調査・技法の特徴	胎 土	焼 成	色 調	残 存 度	備 考	登録番号	
76	S K795	土師器 土	(径) 4.2cm (高) 1.1cm	(孔径) (孔径) (孔径)	0.3cm 4.9g	密	良好	灰	5Y6/1	ほぼ完全 管状土師 土師質	R49
77	S K795	土師器 土	(径) 4.6cm (高) 1.5cm	(孔径) (孔径) (孔径)	0.3cm 10.6g	密	良好	黄 黒	5YR7/6 5Y2/1	ほぼ完全 管状土師 土師質	R50

## 第121次調査

No.	出土遺物	器種	法量	図形・技法の特徴	胎土	灰成色	調査	残存度	備考	登録番号
1	S E 8010	土師 鉢	(口径) 17.4cm (器高) 3.6cm	口縁部コナテ、外蓋オキエ後ナテ、内蓋不定方向のナテ	赤	良好	内: におい煙 外: におい煙 7.5YR6/4 7.5YR7/4	50%		R 1
2	S E 8010	土師 鉢	(口径) 17.0cm (器高) 3.0cm	口縁部コナテ、外蓋オキエ、内蓋オキエ後ナテ	赤	良好	内: 浅黄煙 外: 浅黄煙 7.5YR6/3 7.5YR6/3	50%		R 2
3	S E 8010	土師 鉢	(口径) 15.2cm (器高) 3.6cm	口縁部コナテ、外蓋オキエ、内蓋ナテ	赤	良好	内: 浅黄煙 外: 浅黄煙 10YR6/4 7.5YR6/4	1/2形状		R 3
4	S E 8010	土師 鉢	(口径) 15.4cm (器高) 3.1cm	口縁部コナテ、外蓋オキエ、内蓋ナテ	やや粗	良好	内: 浅黄煙 外: 浅黄煙 10YR6/3 10YR6/3	90%		R 4
5	S E 8010	土師 鉢	(口径) 14.6cm (器高) 3.3cm	口縁部コナテ、外蓋オキエ、内蓋ナテ	やや粗 径1cm以下の白点を多く含む	良好	内: 煙 外: 煙 8YR7/6 8YR7/6	80%		R 5
6	S E 8010	土師 鉢	(口径) 15.0cm (器高) 3.0cm	口縁部コナテ、外蓋オキエ後ナテ、内蓋ナテ	赤	良好	内: におい煙 外: におい煙 7.5YR6/4 10YR6/3	50%		R 6
7	S E 8010	土師 鉢	(口径) 15.3cm (器高) 3.0cm	口縁部コナテ、外蓋オキエ、内蓋ナテ	赤	良好	内: 煙 外: 煙 5YR7/6 8YR7/6	50%		R 7
8	S E 8010	土師 鉢	(口径) 14.8cm (器高) 2.5cm	口縁部コナテ、外蓋オキエ後ナテ、内蓋ナテ	赤	良好	内: 灰青 外: 灰青 2.5YR6/2 2.5YR6/2	40%		R 8
9	S E 8010	土師 鉢	(口径) 14.8cm (器高) 2.5cm	口縁部コナテ、外蓋オキエ、内蓋ナテ	赤	良好	内: におい煙 外: におい煙 10YR7/4 7.5YR7/4	60%		R 9
10	S E 8010	土師 鉢	(口径) 14.6cm (器高) 2.6cm	口縁部コナテ、外蓋オキエ、内蓋オキエ後ナテ	赤	良好	内: 浅黄煙 外: 浅黄煙 7.5YR6/4 7.5YR6/3	80%		R 10
11	S E 8010	土師 鉢	(口径) 15.6cm (器高) 3.2cm	口縁部コナテ、外蓋オキエ後ナテ、内蓋ナテ	赤	良好	内: 黄煙 外: 黄煙 7.5YR7/8 7.5YR7/6	80%		R 11
12	S E 8010	土師 鉢	(口径) 16.1cm (器高) 2.5cm	口縁部コナテ、外蓋オキエ、内蓋ナテ	赤	良好	内: 浅黄煙 外: 浅黄煙 10YR6/3 10YR6/3	40%		R 12
13	S E 8010	土師 鉢	(口径) 15.4cm (器高) 2.7cm	口縁部コナテ、外蓋オキエ後ナテ、内蓋ナテ	赤	良好	内: 煙 外: 煙 8YR7/6 8YR7/6	60%		R 13
14	S E 8010	土師 鉢	(口径) 14.2cm (器高) 2.5cm	口縁部コナテ、外蓋オキエ後ナテ、内蓋ナテ	赤	良好	内: 龍灰 外: 龍灰 7.5YR6/1 7.5YR6/1 (口縁の一部 2.5YR7/6)	80%		R 14
15	S E 8010	土師 鉢	(口径) 16.6cm (器高) 3.6cm	口縁部コナテ、外蓋オキエ後ナテ、内蓋ナテ	赤	良好	内: 浅黄煙 外: 浅黄煙 10YR6/3 10YR6/3	1/2形状		R 15
16	S E 8010	土師 鉢	(口径) 15.7cm (器高) 3.2cm	口縁部コナテ、外蓋オキエ、内蓋オキエ後ナテ	赤	良好	内: 煙 外: 煙 7.5YR7/6 7.5YR7/6	欠形		R 16
17	S E 8010	土師 鉢	(口径) 15.3cm (器高) 3.3cm	口縁部コナテ、外蓋オキエ、内蓋ナテ	赤	良好	内: におい煙 外: におい煙 7.5YR7/4 10YR6/2	60%		R 17
18	S E 8010	土師 鉢	(口径) 15.6cm (器高) 3.3cm	口縁部コナテ、内蓋ナテ	赤	良好	内蓋: 口縁、煙 外: 浅黄煙 5YR6/8 7.5YR6/3	欠形		R 18
19	S E 8010	土師 鉢	(口径) 14.2cm (器高) 3.4cm	口縁部コナテ、外蓋オキエ後ナテ、内蓋ナテ	やや粗	良好	内: 浅黄 8YR6/4 ~ 浅黄煙 10YR6/3 外: におい煙 7.5YR7/4	1/2形状	蓋部に焼成後の穿孔あり	R 19
20	S E 8010	土師 鉢	(口径) 16.0cm (器高) 3.3cm	口縁部いれコナテ、外蓋オキエ後ナテ、内蓋オキエ後ナテ	緑砂を含む	良好	内: 浅黄煙 外: 灰白 7.5YR6/3 10YR6/1	1/2形状	蓋部に焼成後の穿孔からの穿孔あり(径0.8-1.2cm)	R 20
21	S E 8010	土師 鉢	(口径) 8.8cm (器高) 1.3cm	口縁部コナテ、内外面オキエ後ナテ	赤	良好	内: 浅黄煙 外: 煙 10YR6/4 7.5YR7/6	欠形		R 21
22	S E 8010	土師 鉢	(口径) 8.7cm (器高) 1.3cm	口縁部コナテ、内外面オキエ後ナテ	赤	良好	内: 浅黄煙 外: 煙 10YR6/4 7.5YR7/6	欠形		R 22
23	S E 8010	土師 鉢	(口径) 30.8cm (器高) 9.3cm	口縁部コナテ、外面部上半コビオキエ後ナテ、下半コビオキエ、内蓋部コナテ	赤	良好	内: 浅黄煙 外: (上半): 浅黄煙 (下半): 灰白 7.5YR6/2 8YR6/2	口縁部50%	口縁部外面に腐付付	R 23
24	S E 8010	土師 鉢	(口径) 19.6cm (器高) 3.5cm	口縁部コナテ、外蓋オキエ後ナテ、内蓋コナテ	やや粗 径1cm以下の砂粒を多く含む	良好	内: におい煙 外: におい煙 10YR7/2 10YR7/3	15% 口縁部40%	口縁部外面に腐付付 ハケム6本/cm	R 24
25	S E 8010	土師 鉢	(口径) 26.7cm (器高) 8.1cm	口縁部コナテ、外面オキエ後ナテ、内蓋コナテ	砂粒を多く含む	良好	内: 灰白 外: におい煙 10YR7/2 ~ 龍灰 7.5YR6/1	30%	口縁部 ~ 外面に腐付付 ハケム5本単位	R 25
26	S E 8010	土師 鉢	(口径) 21.0cm (器高) 7.3cm	口縁部コナテ、外面オキエ後ナテ、内蓋コナテ	やや粗 径1-2mmの砂粒を多く含む	良好	内: 灰青煙 10YR6/2 ~ 黄灰 2.5YV/1 外: 灰青煙 10YR6/2 ~ 龍灰 7.5YR6/1	15% 口縁部30%	ハケム10本/cm	R 26
27	S E 8010	土師 鉢	(口径) 18.0cm (器高) 16.1cm	口縁部コナテ、内外外面部上半コナテ、下半コナテ	やや粗 径1mm以下の砂粒を含む	良好	内: 灰白 7.5YR6/2 ~ 黄灰 2.5YR4/1 外: 灰青煙 10YR6/2 ~ 灰白 7.5YR6/1	口縁部70% 全体60%	ハケム8本/cm	R 27
28	S E 8010	陶 鉢 (山茶碗)	(口径) 18.4cm (器高) 6.1cm (底径) 16.8cm	口縁部 - 外部内蓋口コナテ、内蓋部コナテ、胎付高台	赤	良好	内: 灰白 外: 灰白 N7/0 N7/0	80%	内面に自然釉 モミダツ灰あり	R 28
29	S E 8010	陶 鉢 (山茶碗)	(口径) 15.3cm (器高) 4.9cm (底径) 17.4cm	口縁部 - 外部内蓋口コナテ、胎付高台	赤	良好	内: 灰白 外: 灰白 N7/0 N7/0	80%	モミダツ灰あり	R 29
30	S E 8010	陶 鉢 (山茶碗)	(口径) 18.5cm (器高) 3.5cm (底径) 17.5cm	口縁部 - 外部内蓋口コナテ、内蓋部コナテ、胎付高台	赤	良好	内: 灰白 外: 灰白 7.5YR/1 10YR/1	60%	モミダツ灰あり	R 30
31	S E 8010	陶 鉢 (山茶碗)	(口径) 17.3cm (器高) 6.7cm (底径) 16.8cm	口縁部 - 外部内蓋口コナテ、胎付高台	赤	良好	内: 灰白 外: 灰白 10YR/1 10YR/1	1/2形状	口縁部のみ滑しい 口径16.5cm - 17.3cm 釉不明確 モミダツ灰あり	R 31
32	S E 8010	白 陶	(器高) 3.3cm	全部焼物	やや青	良好	断面: 灰白 胎: 灰白 8YR/1 7.5Y7/1	口縁の一部のみ	内外面に施釉	R 32

No.	出土遺物	形状	出 土 量	調査・技法の特徴	胎 土	焼 成	色	割	残 存 度	備 考	登録番号
33	V22 P4 1	陶 器 碗 (山形碗)	(高台径)17.8cm (底径) 13cm	外側体部刻ナナ、底部糸切痕、貼付高台	やや粗	良好	内：灰白 外：灰白2.5Y7/1	2.5Y6/1 2.5Y6/1	25% 高台径70%	底部内面に磨存、底部内面に磨痕あり 高台部に磨痕あり	R32
34	S D801	灰釉陶器	(高台径)17.8cm (底径) 13cm	内外面口ロナナ、貼付高台	やや粗	良好	内：浅黄緑 外：灰白	10YR8/3 2.5Y6/1	15% 高台径30%		R34
35	S D801	灰釉陶器	(高台径)17.8cm (底径) 13cm	内外面口ロナナ、底部糸切痕、貼付高台	やや粗	良好	内：灰白 外：灰白 釉：オリーブ灰	2.5Y7/1 2.5Y7/1 10Y6/2	15% 高台径30%	体部内面に灰釉付着	R35
36	S D801	陶 器 (山形碗)	(高台径)17.8cm (底径) 13cm	内外面刻ナナ、貼付高台	やや粗	良好	内：灰黄 外：灰黄	2.5Y7/2 2.5Y7/2	25% 高台径30%	外側に自然釉付着	R36
37	S D801	陶 器 (山形碗)	(高台径)17.8cm (底径) 13cm	内外面刻ナナ、底部糸切痕、貼付高台	やや粗	良好	内：灰黄 外：灰白	2.5Y7/2 2.5Y7/1	25% 高台径50%	体部内面に自然釉付着	R38
38	S D801	陶 器 (山形碗)	(高台径)17.8cm (底径) 13cm	内面刻ナナ、外側面刻ナナ、貼付高台	やや粗	良好	内：灰白 外：灰白	2.5Y7/1 2.5Y6/1	高台径30%		R40
39	S D802	陶 器 (山形碗)	(高台径)17.8cm (底径) 13cm	内外面刻ナナ、貼付高台	やや粗	良好	内：灰白 外：黄灰	5Y7/1 2.5Y6/1	25% 高台部ほぼ磨存	モミガラ痕あり	R37
40	S D805	灰釉陶器	(底径) 6.4cm (底径) 2.1cm	外周口ロナナ、底部糸切痕、タズリ出し高台	密	良好	内：灰黄 外：灰白	2.5Y7/2 2.5Y7/3	高台径50%	底部内面に自然釉付着	R39
41	S D806	土 師 器 鉢	(口径)19.0cm (底径) 4.5cm	口縁部一部刻ナナ、外周口ロナナ、内面タズリ	やや粗	良好	内：こぶい黄緑 外：こぶい黄緑 灰釉	10YR7/3 10YR7/3 7.5Y7/3	小片	口縁部付着部不明瞭 外周部より下半部付着	R41
42	I 12 粘土師器	土 師 器 鉢	(口径) 17.0cm (底径) 4.3cm	口縁部～内面口ロナナ、外周口ロナナ	密	良好	内：黄 外：こぶい黄	5YR6/6 5YR6/4	25% 口縁部25%		R62
43	I 10 粘土師器	土 師 器 鉢	(口径) 18.8cm (底径) 2.1cm	口縁部口ロナナ、外周口ロナナ	やや密	良好	内：黄 外：黄	5YR6/6 7.5YR7/6	20% 口縁部30%		R61
44	I 9 粘土師器	土 師 器 鉢	(口径) 22.0cm (底径) 3.4cm	口縁部～内面刻ナナ、外周刻ナナ	やや粗	良好	内：灰白 外：灰白	2.5Y7/1 10YR7/1	25% 口縁部30%	口ロナナ面	R66
45	I 9 粘土師器	土 師 器 鉢	(口径) 24.2cm (底径) 7.8cm	口縁部口ロナナ、外周タズリ、内面口ロナナ	やや粗	良好	内：こぶい黄緑 外：こぶい黄緑	10YR7/3 10YR7/3	口縁部30%	内外ハケム6本/cm 内面ハケム7本/cm	R64
46	I 9 粘土師器	土 師 器 鉢	(口径) 24.1cm (底径) 7.8cm	口縁部口ロナナ、外周タズリ	やや粗	良好	内：こぶい黄緑 外：浅黄緑	10YR7/3 10YR8/4	口縁部10%	ハケム4本/cm	R63
47	I 12 粘土師器	陶 器 小 碗 (山形碗)	(口径) 10.3cm (高台径) 5.8cm (底径) 2.3cm	内外面刻ナナ、外周刻ナナ、底部糸切痕、貼付高台	やや密	良好	内：灰白 外：灰白	2.5Y7/1 2.5Y7/1	45%	口縁部内外面口ロナナ、底部糸切痕、貼付高台	R65
48	K 9 粘土師器	灰釉陶器	(高台径)17.2cm (底径) 13cm	内外面口ロナナ、貼付高台	やや粗	良好	内：灰白 外：灰白 釉：オリーブ	10YR8/1 2.5Y8/1 7.5Y5/2	30% 高台径75%	底部内面に磨存あり 「足」に 内面に自然釉付着	R67
50	S K802	土 師 器 鉢	(口径)14.0cm (底径) 2.8cm	口縁部口ロナナ	やや粗	辻	内：こぶい黄 外：黄	7.5YR7/4 7.5YR7/6	25%	磨滅著しい	R66
51	S D802	土 師 器 鉢	(口径) 14.0cm (底径) 3.0cm	口縁部口ロナナ、外周口ロナナ、内面タズリ	やや密	良好	内：こぶい黄 外：こぶい黄	7.5YR7/4 7.5YR6/4	14は欠存		R60
52	F 5 粘土師器	土 師 器 鉢	(口径)14.0cm (底径) 3.3cm	口縁部口ロナナ、外周口ロナナ	良	辻	内：黄 外：黄	5YR6/6 5YR6/6	38%	内面磨滅著しい	R65
53	E 5 粘土師器	土 師 器 鉢	(口径) 14.4cm (底径) 2.7cm	口縁部口ロナナ、外周口ロナナ、内面タズリ	やや密	辻	内：浅黄緑 外：浅黄緑	10YR8/3 7.5YR8/4	45% 口縁部30%		R67
54	F 6 粘土師器	土 師 器 鉢	(口径) 14.0cm (底径) 2.8cm	口縁部口ロナナ、外周口ロナナ、内面タズリ	やや粗	辻	内：黄5YR8/6～こぶい黄7.5YR7/3 外：黄	5YR6/6 5YR6/6	90% 口縁部90%	磨滅の状況状態悪い	R69
55	S D800	灰釉陶器	(高台径)17.0cm (底径) 2.8cm	内外面刻ナナ、貼付高台	やや粗	良好	内：灰白 外：灰白	NT/0 2.5Y7/1	高台径30%		R48
56	S D801	陶 器 (山形碗)	(高台径)17.4cm (底径) 3.3cm	内外面刻ナナ、底部糸切痕、貼付高台	やや粗	良好	内：NR/0 外：灰白	NR/0 7.5Y7/1	15%	体部内面に自然釉付着	R47
57	S D800	陶 器 (山形碗)	(高台径)17.6cm (底径) 2.3cm	内外面刻ナナ、底部糸切痕、貼付高台	やや粗	良好	内：灰白 外：灰白	NT/0 NT/0	10% 高台径30%		R49
58	S D800	陶 器 (山形碗)	(高台径)17.7cm (底径) 3.3cm	内外面刻ナナ、底部糸切痕、貼付高台	やや粗	良好	内：灰白 外：灰白	5Y7/1 NT/0	20% 高台部欠存	モミガラ痕あり	R45
59	S D800	陶 器 (山形碗)	(高台径)18.3cm (底径) 2.8cm	内外面刻ナナ、底部糸切痕、貼付高台	やや粗	良好	内：灰白 外：灰白	NT/0 NT/0	20% 高台径30%		R46
60	C 5 緑釉陶器 武士下履	緑釉陶器 膝指在文	(高台径)18.1cm (底径) 1.6cm	タズリ出し高台	密	良好	黄緑、灰白 釉：オリーブ黄	5Y7/1 5Y6/6	高台径30%		R60

第9表 斎宮跡発掘調査回数一覧表

次	年度	調 査 地 区	次	年度	調 査 地 区
1	S 45	試掘	13-6	51	中垣内375-1 (南)
2	46	古里A地区	13-7		東 裏328 (小川)
3		◇ B地区	13-8		西加座2771-1 (細井)
4	47	◇ C地区	13-9		◇ 2773 (細井)
5	48	◇ D地区	13-10		東 裏362-1 (児高)
6-1		Aトレンチ	13-11		西加座2681-1 (浮田)
6-2		Bトレンチ	13-12		◇ 2721-3, 2724-2 (森川)
6-3		Cトレンチ	13-13		東前沖2506-2 (宮下)
6-4		Dトレンチ	14-1	52	2 Eトレンチ
6-5		Eトレンチ	14-2		2 Fトレンチ
7	49	古里E地区	14-3		2 Gトレンチ
8-1		Fトレンチ	14-4		2 Hトレンチ
8-2		Gトレンチ	14-5		2 Iトレンチ
8-3		Hトレンチ	15		斎宮小学校
8-4		Iトレンチ	16-1		竹川町道A
8-5		Jトレンチ	16-2		◇ B
8-6		Kトレンチ	16-3		◇ C
8-7		Lトレンチ	16-4		◇ D
8-8		Mトレンチ	16-5		◇ E
8-9		Nトレンチ	16-6		◇ F
8-10		Oトレンチ	17-1		竹神社社務所
8-11		Pトレンチ	17-2		竹神社防火用水
9-1	50	Qトレンチ	17-3		西加座2721-6 (西沢)
9-2		Rトレンチ	17-4		楽 殿2894-1 (中川)
9-3		Sトレンチ	17-5		◇ 2895-1 (西口)
9-4		Tトレンチ	17-6		出在家3237-3 (吉川)
9-5		Uトレンチ	17-7		◇ 3237-1 (里中)
9-6		Vトレンチ	17-8		楽 殿2894-1 (西村)
9-7		Wトレンチ	17-9		東海造機
9-8		Xトレンチ	18	53	6 A E L-E・I (下園)
9-9		Yトレンチ	19		6 A E N-M・N・O (御館)
9-10		Zトレンチ	20		6 A E O-I・J (柳原)
10		広城園道路	21-1		6 A G N-B (鏡泊山、北山)
11-1		西加座2661-1 (山中)	21-2		6 A E I-D (西加座2711-2, 2717-4他、山路)
11-2		◇ 2681-1 (山名)	21-3		6 A F D-D (西前沖2649-1、大西)
11-3		東前沖2483-2 (前田)	21-4		6 A F H-F (西加座2678, 2679-3、森下)
11-4		下 園2926-9 (吉木)	21-5		6 A G D-K (東前沖、渡部)
12-1	51	2 Aトレンチ	21-6		6 A C A-T (古里3269-2、中西)
12-2		2 Bトレンチ	21-7		6 A F E-F (東前沖2631-1、鈴木)
12-3		2 Cトレンチ	21-8		6 A E G-A (楽殿2909-3、大西)
12-4		2 Dトレンチ	21-9		6 A E D-R (篠林3218-3、宇田)
13-1		東加座2436-7 (浜口)	22-1		6 A G U
13-2		◇ 2436-4 (中村)	22-2		6 A G U
13-3		古 里3283 (村上)	22-3		6 A G W
13-4		楽 殿2916~2917 (松井)	23	54	6 A E L-B (下園)
13-5		佛 館2974-1 (川本)	24		6 A G F-D (西加座)

次	年度	調 査 地 区	次	年度	調 査 地 区			
25-1	54	6ADP-K(牛糞3029-1、三重土地ホ-ム)	37-12	56	6AFH-J(西加座2681-1・3・4、渋谷)			
25-2		6ACA-Y(古里3270、臨田)	37-13		6AGK-F(西加座2385-3、2386-3、竹内)			
25-3		6ADD-F(篠林3139-3、池田)	38		6ACD-S(塚山)			
25-4		6AER-H(牛糞3014、牛糞公民館)	39		6ABD-R・S・T(古里)			
25-5		6AGN-H(鍛冶山2392、丸山)	40		6AGH-L・M(東加座)			
25-6		6AFH-A(西加座2675-5、谷口)	41		6AGJ-J他(齋宮地内)			
25-7		6AEK-V(下園2926-10、奥田)	42-1		57	6AEI-D・F(桑殿)		
25-8		6AFC-D(西前沖2064-5、山本)	42-2			6AEK-A・B(桑殿)		
25-9		6ACN-C(広頭3387-1、北出)	43-1			6ADC-C(出在家3235-2、水田)		
25-10		6AEV-A(鈴池339-1、水鳥)	43-2			6ADT-B(木葉山308-1、山本)		
25-11		6ACF-B(東裏364-1、沢)	43-3			6ACP-T(南裏241-1、辻)		
25-12		6AEE-Y(桑殿2892-3、山本)	43-4			6ADS-D(牛糞123-3、西山)		
25-13		6AEJ-E(西加座2766-1、山内)	43-5			6ADE-D(篠林3220-3、澄野)		
26-1		6AFR(中西)	43-6			6AGE(東前沖、町道側溝)		
26-2		6AEX-6ACQ(鈴池、木葉山、南裏)	43-7			6ABD-F(古里588-6、今西)		
26-3		6AEV-W・X(鈴池)	43-8			6ADQ-H(牛糞3025-2、大西)		
26-4		6ACR(木葉山、南裏)	44			6AFL-A・B(鍛冶山2759-1、他)		
27		6ACG-S・T(東裏)	45			6AEG-P・Q(桑殿2904-2、他)		
28		6AEO-D(柳原)	46			6AGN-C・D(鍛冶山2737-1、他)		
29		6AFI、6AFL、6AFK、6AFM、6AGJ	47			6ADJ-D・G他(西加座、彌能、宮ノ前、上園)		
30		55	6ABJ-M・X・W(中垣内)			48-1	58	6AGM-M(広頭3385、齋宮小)
31-1			6ADO-M(内山3038-13、岩見)			48-2		6ADP-Q(牛糞3033-1・2、吉田)
31-2			6ACP-I(南裏227-2、鈴木)			48-3		6ABL-M(中垣内434-6、西川)
31-3			6ABD-A(古里588-4、北蔵)			48-4		6AGL-B(東前沖2480、倉田)
31-4			6ADQ-T(牛糞3018-2、百五銀行)			48-5		6AGD-6AFE(東前沖、町道側溝)
31-5			6ACC-G(塚山3338-3、水谷)			48-6		6AGC-A(西前沖3550-1、今西)
31-6			6ABO-X(古里576-1、池田)			48-7		6ADT-H(木葉山307、森西)
31-7			6AGI-L(東加座2427-1、竹内)			48-8		6ACL-E・F・G(東裏334-15、他)
31-8			6ACN-G(広頭3388-1・5・8・9、森)			48-9		6AEV-J(鈴池341-1、乾)
31-8	6AGD-L(北野2487-1、中川)		48-10	6AGT(牛糞、町道側溝)				
31-10	6ADM-O(内山3043-3、齋宮駅)		48-11	6ADP-E(鍛冶山2351-1、2352-1、糠原)				
31-11	6ADT-I(木葉山304-2、澄野)		48-12	6AFC-H(西前沖2604-8・9、清水)				
31-12	6ADT-J(木葉山304-7、宇田)		48-13	6ACM-O(東裏、齋宮小)				
32	6ACE-D・E・F(塚山)		48-14	6AET(牛糞、町道側溝)				
33	6ADE-C・D他(篠林)		49	6ADI-D・U・V・W・X(上園3083、他)				
34	6ADE-F・G・H(西加座)		50	6ACH-H(東裏294、297、山本)				
35	6APE他(西前沖)		51	6AFF-D(西加座2663-1・4、2664、轟下)				
36	6ABI-F(中垣内)		52	6AGF-D(西加座2703、他)				
37-1	56		6AFC-M(西前沖2064、日本経木)	53-1	59	6ACM-P(東裏284、体育館)		
37-2			6ADQ-R(牛糞3021-2、野田)	53-2		6ACA-M(古里3280-2、中西)		
37-3			6AFC-F(西前沖2604-6、神田)	53-3		6ABE(古里573-2、永納)		
37-4			6AFC-M(西前沖2604、日本経木)	53-4		6ACL-S(東裏271-1、田所)		
37-5			6AFC-G(西前沖2064-7、中村)	53-5		6ACR(木葉山97-5、田中)		
37-6			6ABD-A(古里588-2、北蔵)	53-6		6AGO(鍛冶山、町道側溝)		
37-7			6AEC-M(刈干2861-2、斎王公民館)	53-7		6ADD-U(篠林3147-3、野呂)		
37-8			6ADR-P(木葉山128-8・13・14、富山)	53-8		6AGE-O(東前沖2470-2、上田)		
37-8			6AGK-E(東加座2355-1、竹内)	53-9		6ACS-O(木葉山95-2、浅尾)		
37-10			6AED-O(桑殿3217-1、渡部)	53-10		6ACA-R(古里3267-1、西川)		
37-11			6ADN-O(内山3043-3、齋宮駅)	53-11		6ADR-W(木葉山131-7、西村)		

次	年度	調査地区	次	年度	調査地区
53-12	59	6ABL-K(中垣内464-2、沢)	70-10	62	6AFD-B・D(西前沖2649-4、大西)
53-13		6ADQ-L(牛糞3022、辻)	70-11		6AGO-H(鍛冶山2363-2、川合)
53-14		6ACM-O(東裏287-3、体育庫)	70-12		6ADD-F・G(篠林3158、長谷川)
53-15		6AFK-C・D(西加座2721-1、鈴木)	70-13		6AEC-N・G(丹平、佐藤)
54		6AFEN(西前沖2630、他)	70-14		6ABL-R(中垣内459、北岡)
55		6AEN-P(柳原、御館2785-1、他)	70-15		6AFD-A(西前沖2644-1、山本)
56		6ACH-S(東裏289-1、他)	70-16		6ACB-A他(町道塚山線拡幅)
57		6AGF-H・I(東加座2441、他)	71		6ABE(古里501、他)
58-1	60	6AFK-C・D(西加座2721-1、鈴木)	72-1		6ABE(古里500、他)
58-2		6AFH-N(西加座2681-8、三村)	72-2		6ABF(古里523、他)
58-3		6ACM-N(東裏3385-2、斎宮小)	72-3		6ABF(古里551-2、他)
58-4		6ABL-A(中垣内4731-1、小家)	72-4		6ABF(古里528-1、他)
58-5		6ADQ-Q(牛糞、町道側溝)	73		6AFF-B・C・E・G(西加座2693-5、他)
58-6		6ADR-V(木葉山131-3、西山)	74-1		6ABF(古里523、他)
58-7		6AGS-G(中西611、山路)	74-2		6ABF(古里522、他)
58-8		6ABM-A(中垣内430-3他、近鉄)	74-3		6ABE・F(古里524、他)
59		6ACJ-I(広頭3379-1、他)	74-4		6ABE(古里548-1、他)
60		6AGJ-B・D・G(東加座2450-1、他)	74-5		6ABE(古里543、他)
61		6AFF-H・I・D(西加座2663-1、他)	75		6AGF-C(西加座2702、他)
62		6AGI-J・K(東加座2425、他)	76-1	63	6ADB-A~D(町道塚山線拡幅)
63		6AFG-M・N(西加座2659-1、他)	76-2		6ADE-F・G(篠林3158、長谷川)
64-1	61	6ACO-H(牛糞3395-1、トウカイ)	76-3		6ABE(古里554、明和町)
64-2		6AGL-F(東加座2435-1、大和谷)	76-4		6ACK(東裏354-13、山崎)
64-3		6ADD-A(篠林3136-1、山路)	76-5		6AEE-W(楽殿577、岡田)
64-4		6AGR-N(笛川2340、丸山)	76-6		6ACB-A(塚山3276-1、今西)
64-5		6ACM-R・Q・P(東裏3385-2、斎宮小)	76-7		6ACM-M(広頭3385-2、斎宮小)
64-6		6ACK(東裏361-2、竹川自治会)	76-8		6AFM-G(鍛冶山2736-3、近鉄)
64-7		6AGI-G(東加座2435-2、大和谷)	76-9		6ACQ(南裏144-1、田所)
64-8		6AGR-J(笛川2341-6、山下)	76-10		6ABD-U(古里579、池田建設)
64-9		6ADQ-M(牛糞、町道側溝)	76-11		6ABE(古里554、明和町)
64-10		6ACF-A(東裏365-1、樋口)	76-12		6AEE(楽殿、町道下水管)
64-11		6ACM-O(東裏3385-2、斎宮小)	76-13		6ADD-K(篠林3143、中西)
64-12		6ADE-B(篠林3162-3、江崎)	76-14		6AEE-S(楽殿2878-3、山路)
65-1		6ACC-M(塚山3331-1)	76-15		6ABF~6ABH(中垣内、県道拡幅)
65-2		6AEG-S(楽殿2908-2、他)	76-16		6AEK-B(下園2936-2、明和町)
65-3		6AEI-L・M(楽殿2917-4、他)	76-17		6AEV-A(鈴池339-5、永島)
66		6AGG-C(東加座2437-1、他)	77		6AGJ-D(東加座2453、他)
67		6ABF(古里523、他)	78		6ADL(宮ノ前3054、他)
68		6ABF(古里502、他)	79		6AGG-A・B(東加座2440、他)
69		6AGM-E~H(東加座2373、他)	80		6AFG-F~I(西加座2696、他)
70-1	62	6ACC-X(塚山3325-1、江崎)	81-1	H1	6AEC~F(町道塚山線拡幅)
70-2		6AEE-W(楽殿2875-2、岡田)	81-2		6ABJ、6ABK(古里、県道拡幅)
70-3		6ADR-I(木葉山129-5、大西)	81-3		6ADS-M(木葉山137、中川)
70-4		6ACN-A・B・E・L(広瀬3389-8、林)	81-4		6AED-L(楽殿2881-2、山本)
70-5		6AEW-A(鈴池333-1、八田)	81-5		6AFQ-C(中西597-2、水戸口)
70-6		6ABL-S(中垣内430-6、奥山)	81-6		6ADD-F(篠林313、池田)
70-7		6AEE-T(楽殿577、浅尾)	81-7		6ABL-U(中垣内430-7、川本)
70-8		6AEU・6AEX-A(牛糞、鈴池、三重県)	81-8		6ABJ(古里、明和町)
70-9		6AEP-C・D(御館、柳原、近鉄)	81-9		6ACF(中垣内、三重県)

次	年度	調査地区	次	年度	調査地区
81-10	1	6ADR-V(木葉山297、明和町)	102-6		6AG(鍛冶山内地 明和町)
81-11		6ACM-N(広頭3385-2、明和町)	102-7		6ACG-E(東裏318-1 川本)
81-12		6AED-A(篠林3225、中川)	102-8		6AE(楽殿地内 明和町)
81-13		6ACB(塚山3276-19他、明和町)	103		6AEQ-A(柳原2779-3)
81-14		6AED-F(楽殿2844-2、澄野)	104		6AGT(笹川1048-1、他)
81-15		6AED-U(楽殿2885-2、西山)	105	6	6AFN(鍛冶山2758-1、他)
81-16		6AG(北野3655-1、他)	106-1		6AEW-J(鈴池338-1 森西)
82-1		6ADI-F~J(上園3095、他)	106-2		6AEE-W(楽殿2891-3 向井)
82-2		6ADI-K・L(上園3100、他)	106-3		6AFL他(鍛冶山地内 明和町)
83		6AFJ-C~F(西加座2770-3、他)	106-4		6AEC-L(苜干2861 坂本)
84-1		6AFJ-G(西加座2764-3)	106-5		6AGO(鍛冶山2362 青山)
84-2		6AFH-G・H(西加座2679-1、他)	106-6		6ACC-B(塚山3340-4 田畑)
85-1	2	6ABD~6ACD(古里、三重県)	107		6ABIO(中垣内414-1、他)
85-2		6ACA-P(古里3279、松本)	108		6AEQ-C(柳原2779-2、他)
85-3		6ACJ-B・D(東裏、明和町)	109	7	6AFL-D・E(鍛冶山2763-1、他)
85-4		6ABE(竹川573-1、永納)	110-1		6ACM-J(東裏262-3 斎宮土地改良区)
85-5		6AED-U(楽殿2885-2、西山)	110-2		6AGRO(笹川2345-3 竹内)
85-6		6AFH-B(西加座、明和町)	111-1		6ADM(内山地内)
85-7		6ACB-C(塚山3276-3他、加藤)	111-2		6ADK(上園地内)
85-8		6ABI-N(中垣内427-1、小林)	111-3		6ADL他(宮ノ前地内)
86		6AFH-F・G・H(西加座2679-1他)	112		6ACB-B(塚山3276-15、他)
87		6ACE-N・Q・R(塚山3356他)	113-1	8	6ACI(広頭地内)
88		6AGN-C・D(鍛冶山2411-1他)	113-2		6ACI(広頭地内)
89-1	3	6ADM-O(内山3043-5、近鉄斎宮駅)	114		6AEQ-E・F(柳原地内)
89-2		6AGI-M(東加座2432-2他、北村)	115-1		6ADK・6ADL(上園・宮ノ前地内)
89-3		6ADM-N・O(内山3060-4、近鉄斎宮駅)	115-2		6ADK(上園地内)
90		6AFH-A・B(西加座2680他)	116-1		6ADG(篠林地内他)
91		6ABH-F(中垣内393、他)	116-2		6ADM-A(内山)
92		6AGN-A(鍛冶山2734-3)	116-3		6ADI-Q(宮ノ前地内)
93		6ADN(内山3045-12、他)	116-4		6ADI-M・N(上園地内)
94		6AEM(御館2942)	116-5		6ADI(上園・篠林地内)
95	4	6ADN(内山3046-17、他)	117-1		6AEF(楽殿2894-4)
96-1		6AGM(東加座2374 丸山)	117-2		6ADF-A・B(篠林3155他)
96-2		6ADO(内山3068-3、他 明和町)	117-3		6ABJ(中垣内地内)
96-3		6ACA-D(古里3260 清水)	117-4		6ADP(牛糞地内)
96-4		6AFN(中西2749-1 本山)	117-5		6AFC-M(北野3553-1他)
96-5		6ADR-T(木葉山28-3 加藤)	117-6		6ACM-B(東裏266-6)
96-6		6ADD-D(篠林3138-1 藤井)	118	9	6ADN(内山地内)
97		6AEM(中垣内482、他)	119		6AFM-E・G(鍛冶山西地内)
98		6AFM-C・E(鍛冶山2745、他)	120		6AFI-CE、6AFGR(西加座地内)
99	5	6ADN(内山3046-11、他)	121		6AJB他(宮ノ前地区他)
100		6ABI-T(中垣内423)	122		6AFN(鍛冶山地内)
101		6ADG(篠林3194)	123-1		6AFQ-A(中西地内)
102-1		6ADS(木葉山119-5 澄野)	123-2		6AFN他(中西・笹川地内)
102-2		6AED-J(楽殿2882-5 杉本)	123-3		6ADP-F~H・L(牛糞地内)
102-3		6AAQ(花園663-1 中川)	123-4		6ADQ-A~C(牛糞地内)
102-4		6ACF-A(東裏365-1 樋口)	123-5		6A(刈干地内)
102-5		6ABJ-D(中垣内493-6 川口)	123-6		6ACC-I(塚山地内)



第32图 斎宮跡地区表示



第33図 斎宮跡方格地制区画名称

# 報告書抄録

ふりがな	しせきさいくうあと へいせい9ねんどはくつちようさがいほう							
書名	史跡斎宮跡 平成9年度発掘調査概報							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	駒田利治・上村安生・大川 操 (旧姓 赤岩)・角正芳浩・石沢誠人							
編集機関	斎宮歴史博物館							
所在地	〒515-0325 三重県多気郡明和町竹川503番地 TEL 0596-52-3800							
発行年月日	1999年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
斎宮跡	多気郡明和町斎宮他	2442	210	34° 31' 55" 34° 32' 30"	136° 36' 16" 136° 37' 37"	19970414 19970723	950	計画調査
第118次 調査	斎宮字内山					19970730 19971218	697	◇
第119次 調査	斎宮字鍛冶山					19980120 19980331	805	◇
第120次 調査	斎宮字西加座					19971203 19970207	843	整備事前 調査
第121次 調査	斎宮字宮ノ前					19980105 19980114	28	計画調査
第122次 調査	斎宮字鍛冶山							
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
斎宮跡	官衙							
第118次 調査		奈良後期 平安後期	竪穴住居・掘立柱建物・ 土坑・溝	土師器・須恵器・山茶碗 和銅開珎		平安時代前期の大型建物 配置		
第119次 調査		奈良後期 ～平安中 期	大型掘立柱建物・櫛列・ 井戸	土師器・須恵器・刺青須 恵器・灰軸陶器・緑釉陶 器		斎宮跡方格地割の中核部 を区画する櫛列・大型掘 立柱建物・井戸		
第120次 調査		平安前期	方格地割区画溝・道路・ 掘立柱建物・溝	土師器・須恵器・灰軸陶 器・緑釉陶器		方格地割の区画施設・交 差点		
第121次 調査		平安後期	溝・井戸	土師器・須恵器・山茶碗 灰軸陶器		方格地割北西隅部の区画 施設		
第122次 調査		奈良後期	櫛列	土師器・須恵器・山茶碗 灰軸陶器・陶器		内院地区の櫛列		

圖 版



調査区全景（北から）



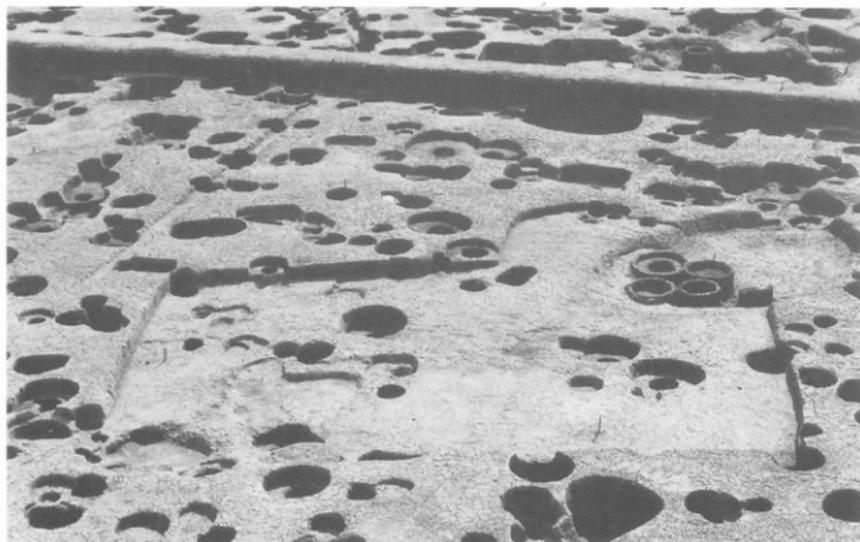
調査区全景（西から）



SB 7891 (西から)



SB 7901 (南から)



S B 7881・7882 (東から)



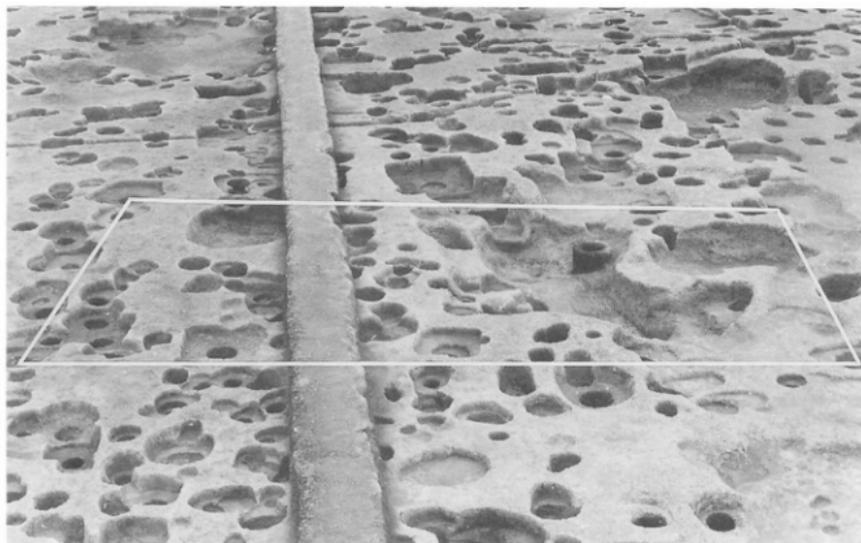
S B 7882 南東隅土器出土状況 (北西から)



SB 7905 (西から)



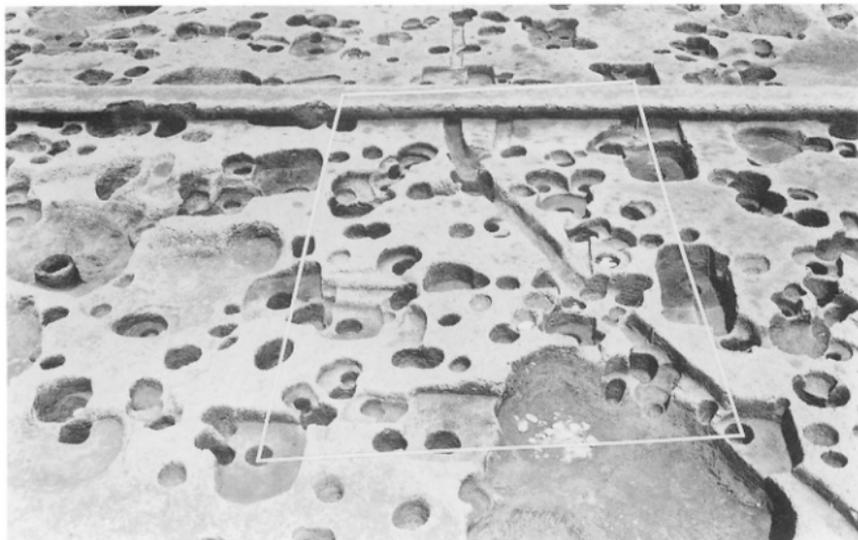
SB 7905 東壁カマド土器出土状況 (北から)



S B 7865 (北から)



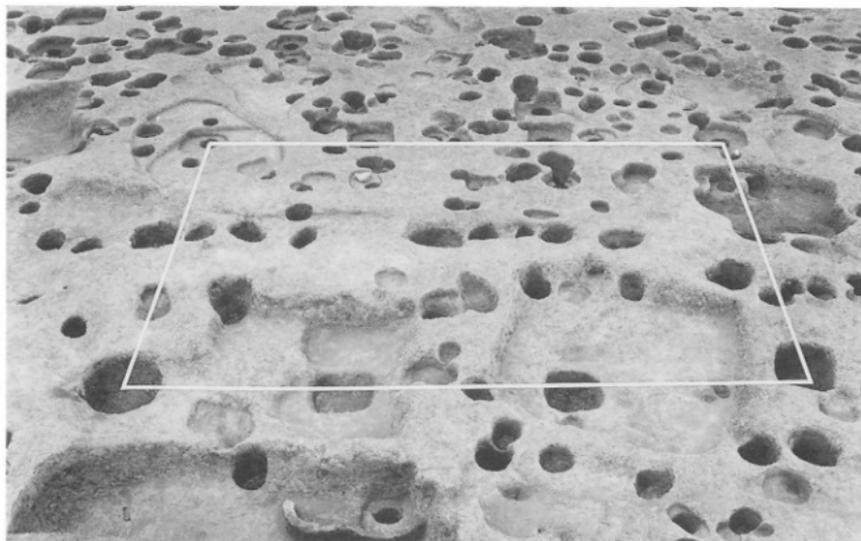
S B 7865・7871・7872 (西から)



SB 7875 (西から)



SB 7875・7895・7896 (西から)



S B 0250 (北から)



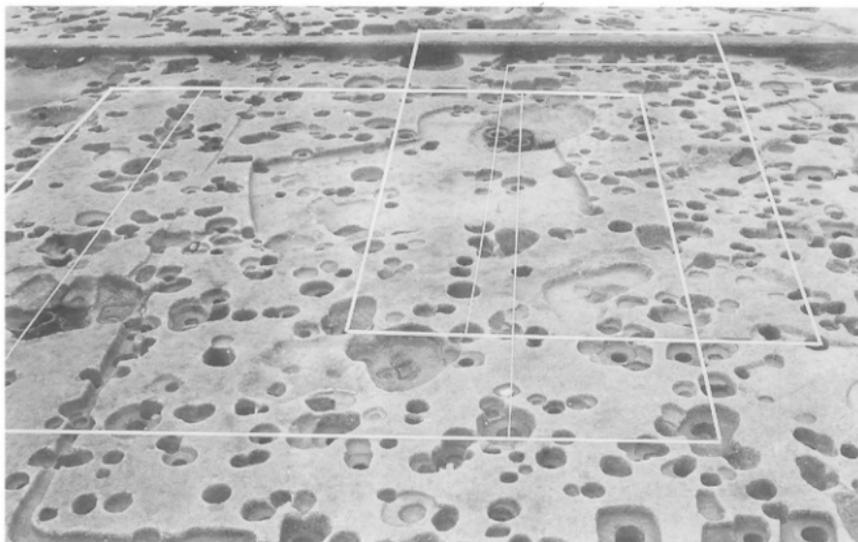
S B 7880・7890 (西から)



S B 7870・7880・7894 (南から)



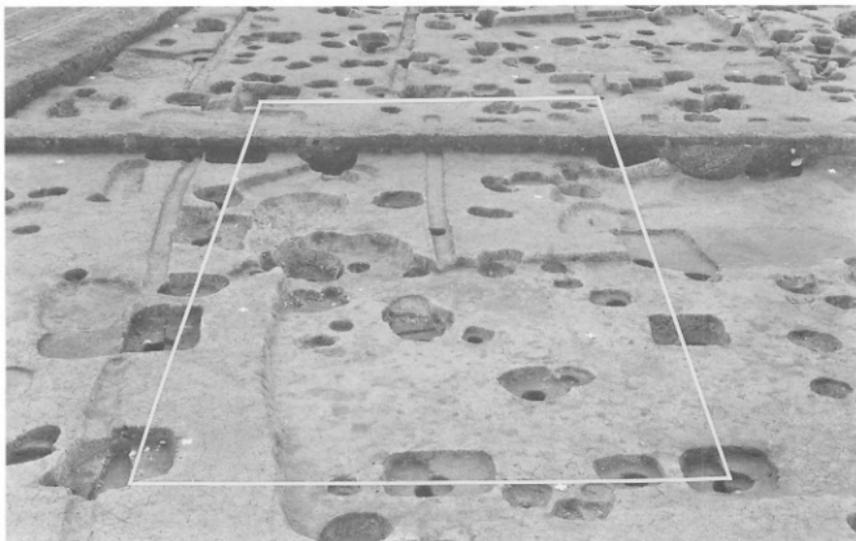
S B 7880・7885 (北から)



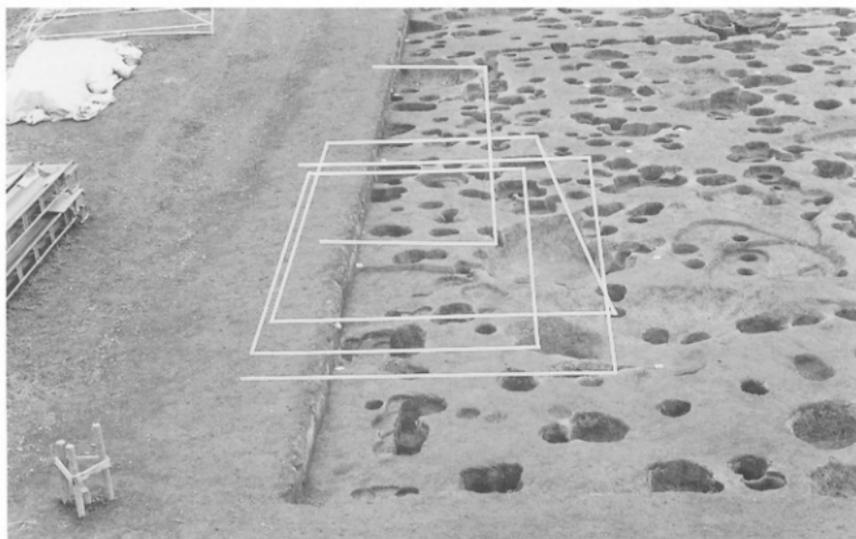
SB 7870・7880 (東から)



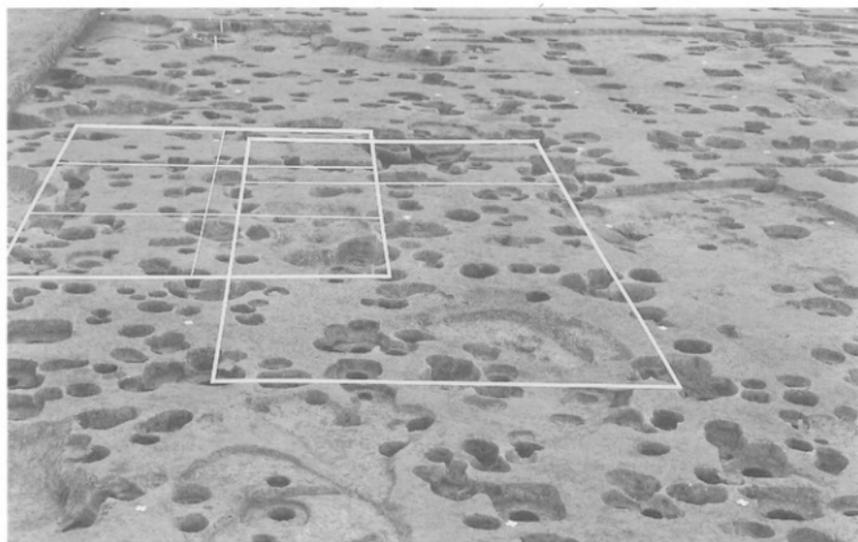
SB 7900 (北から)



SB 7900 (東から)



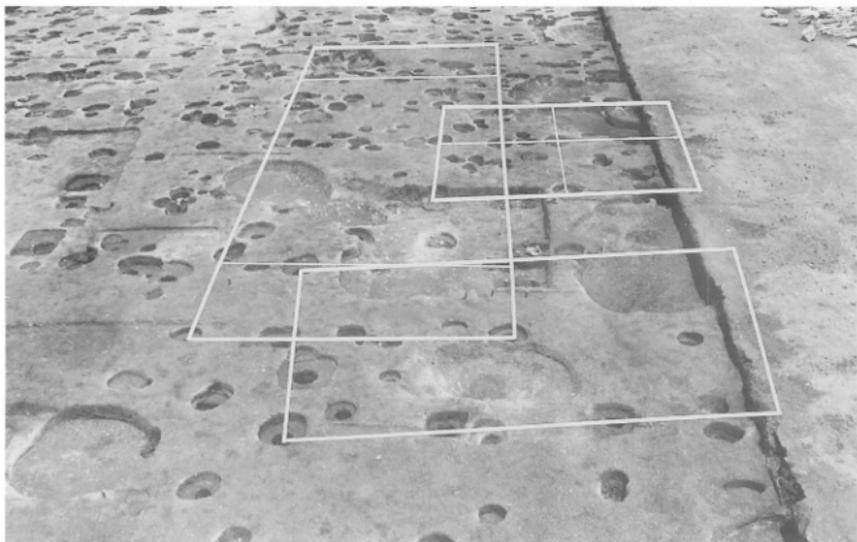
SB 6860・6861・6874・0251 (北から)



SB 7885・7886 (北から)



SB 7885・7886 (東から)



S B 7897・7898・7903 (南から)



S K 7867 土器出土状況 (北から)



S K 7887 土器出土状況（南から）



S K 6247 中群東壁面出土状況（東から）



調査区全景（上から）



調査区全景（西から）



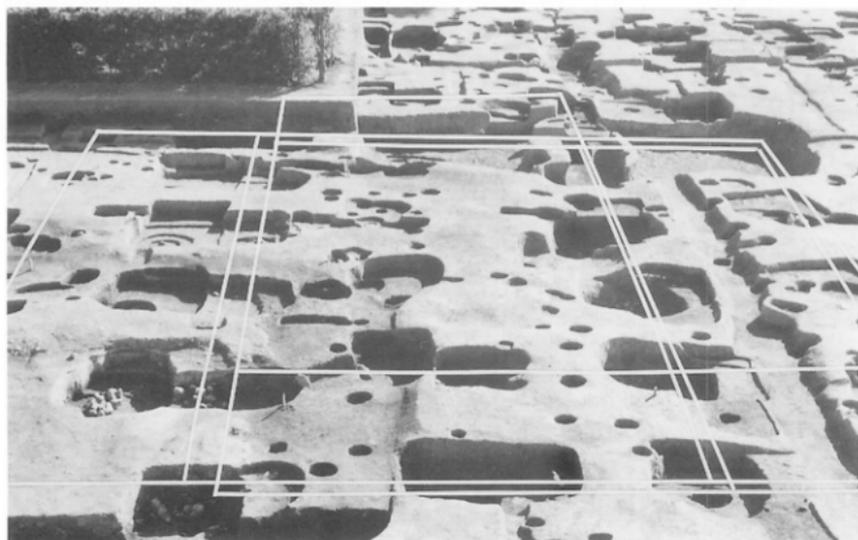
SB 7950 (南から)



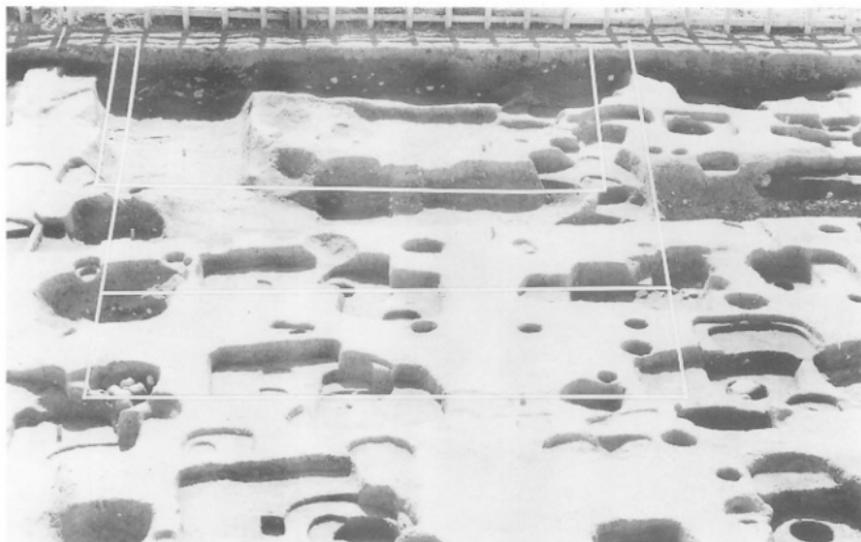
SB 7950 (西から)



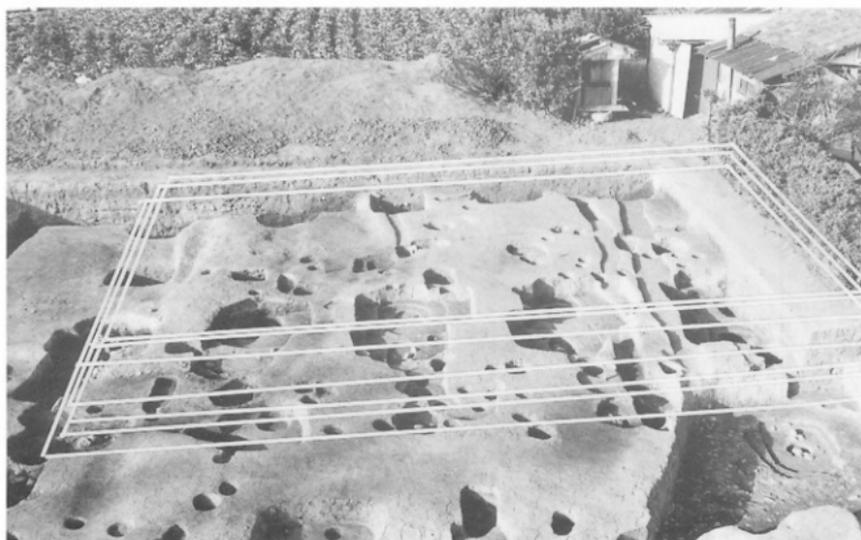
SB 7950 (東から)



SB 7918・7919 (西から)



S B 7947・7948 (北から)



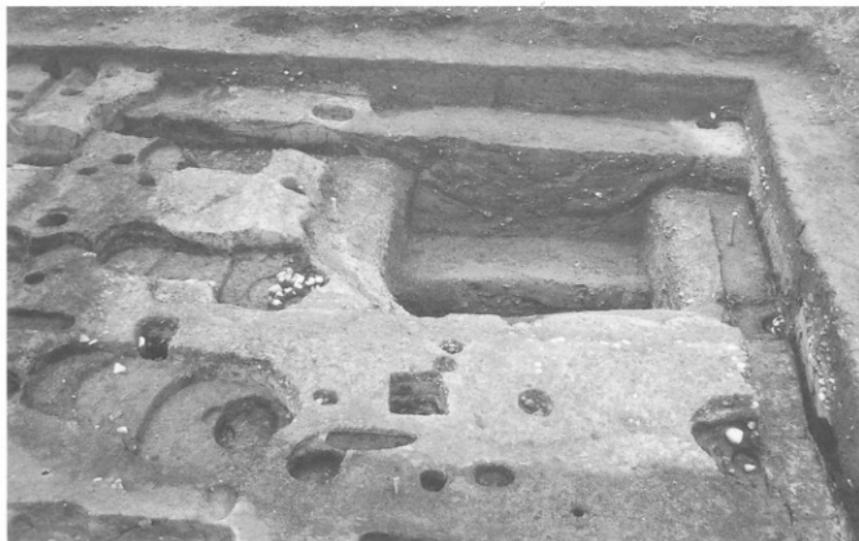
S B 7915・7916・7917 (南から)



SA 6770・6790 SD 6803 (北から)



SB 7938・7939・7940 (北から)



SE 7920 (東から)



SE 7920 井戸杵痕跡検出状況 (東上から)



調査区全景（北から）



調査区全景（西から）



SD 6002・6050, SF 6009 (西から)



SD 6002 (西から)



SD 7965, SK 7966 (南から)



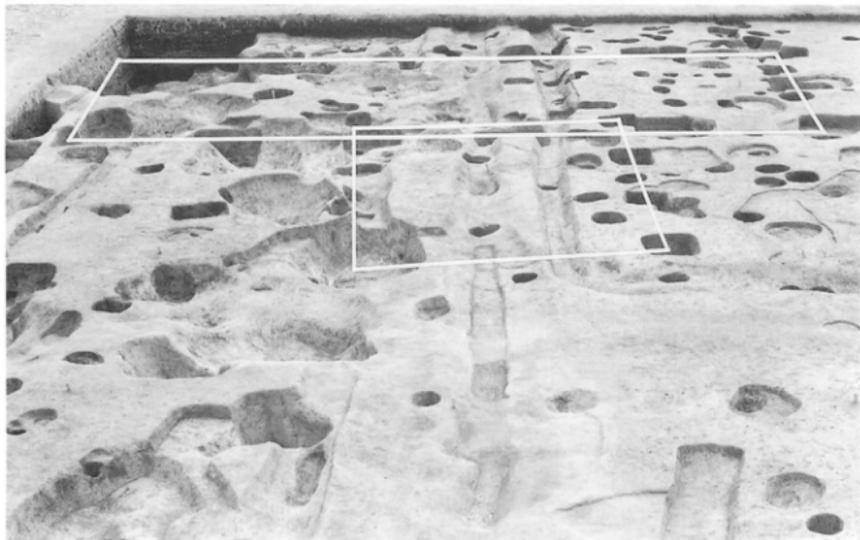
SD 7970 (南から)



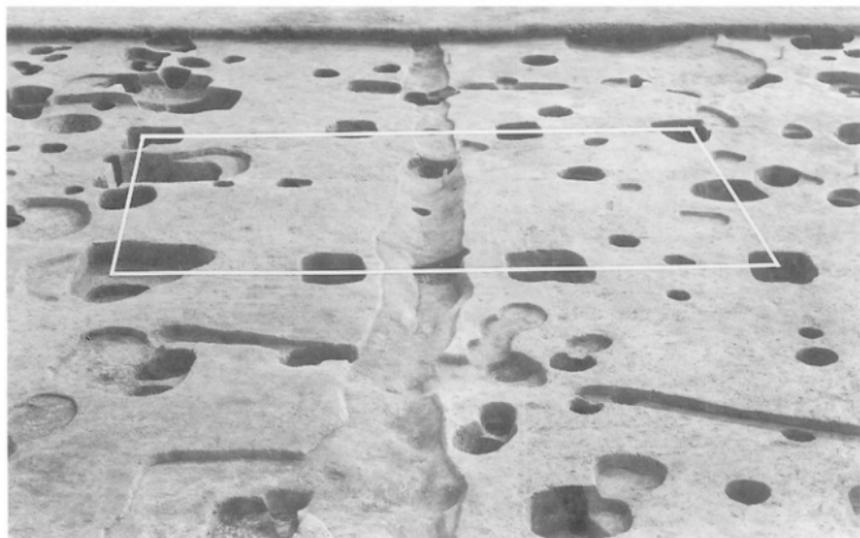
SD 6050 土層断面（西から）



SD 6050 土層断面（東から）



SB 7998・8000 (北から)



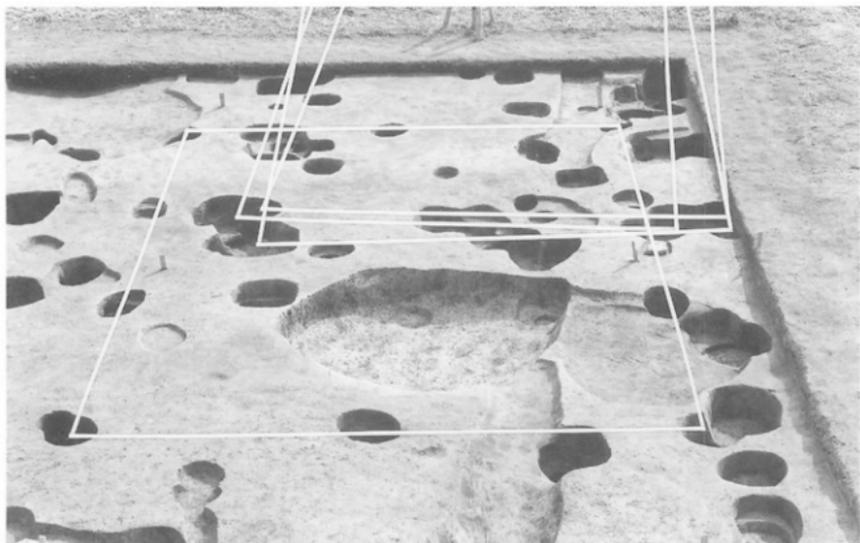
SB 7995 (北から)



SB 7997・7987・7988 (北から)



SB 7996 (北から)



S B 7991 ~ 7994, S K 7985・7986 (北から)



S K 7980 (西から)



第121-1次調査区全景（北から）



第121-2次調査区全景（東から）



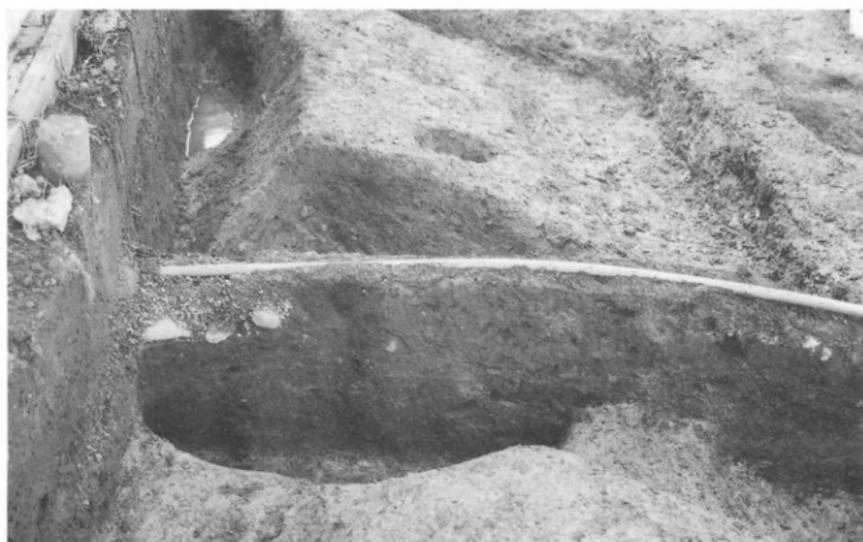
第121-3次調査区全景（東から）



第121-4次調査区全景（西から）



調査区全景（西から）



SA 7170 柱穴断面検出状況（東から）



2



3



7



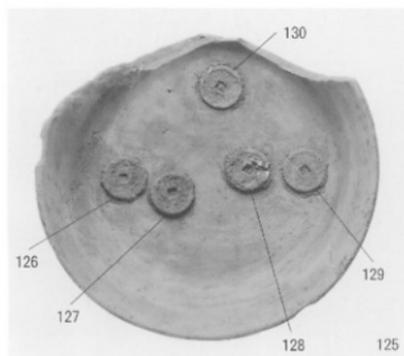
131 硯面



131 背面



6



130  
126  
127  
128  
129  
125



124



8



23



22



9



21



15



10



18



14



12



19



16



27



28



25



26





50



58



66



54



61



65



51



62



72



67



71



74



83



95



101



92



97



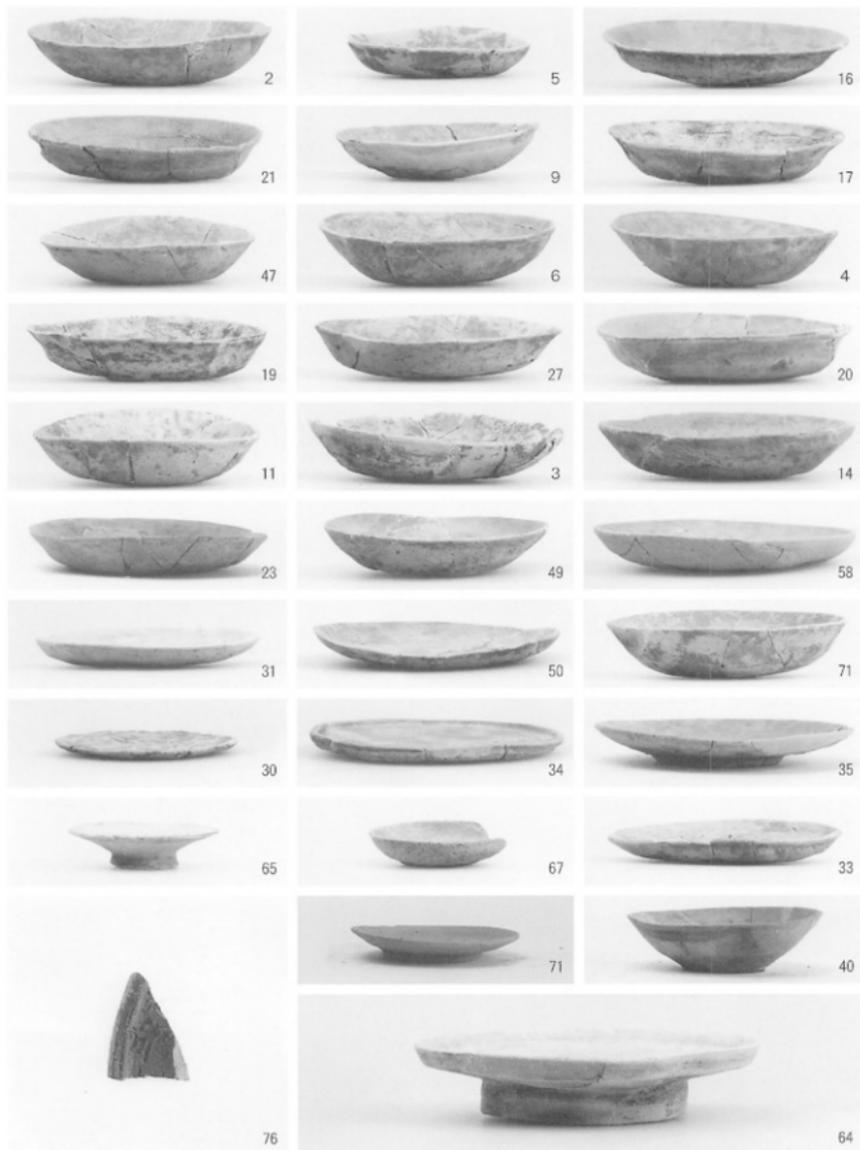
98



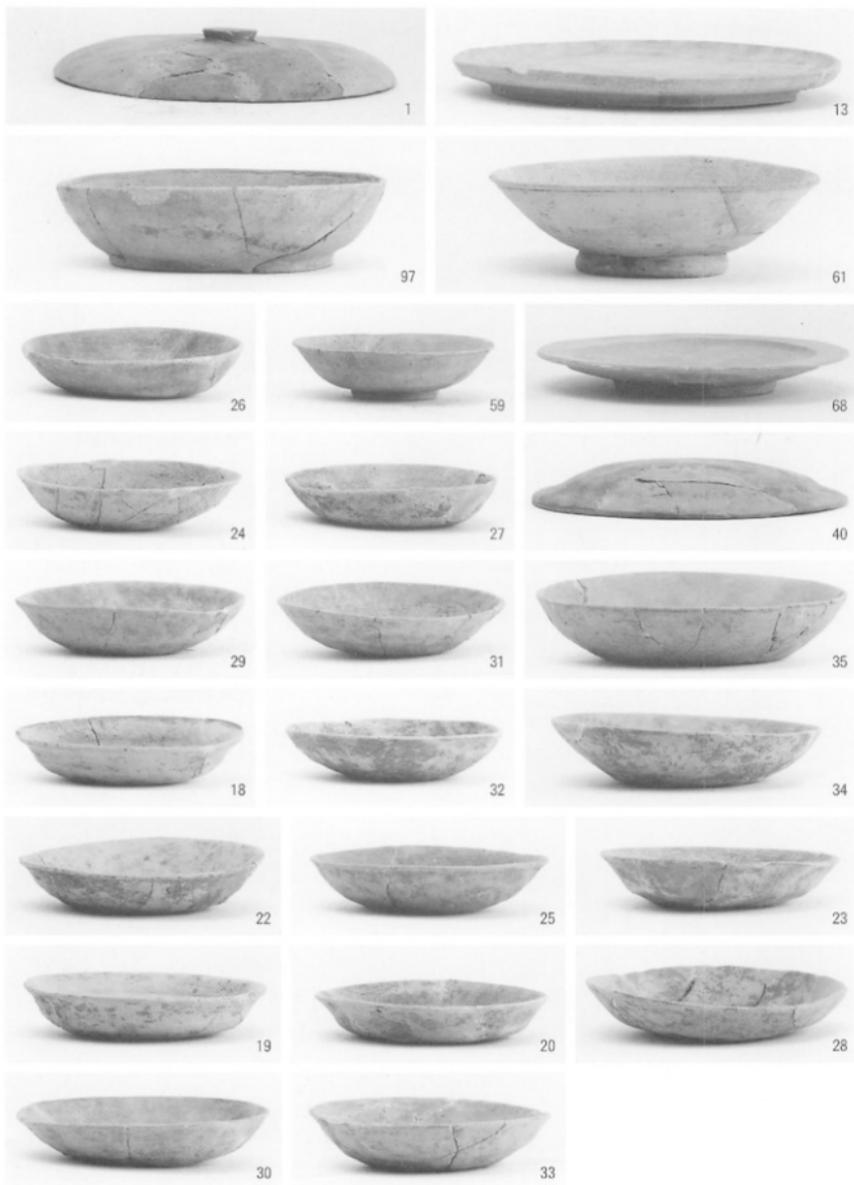
114



121

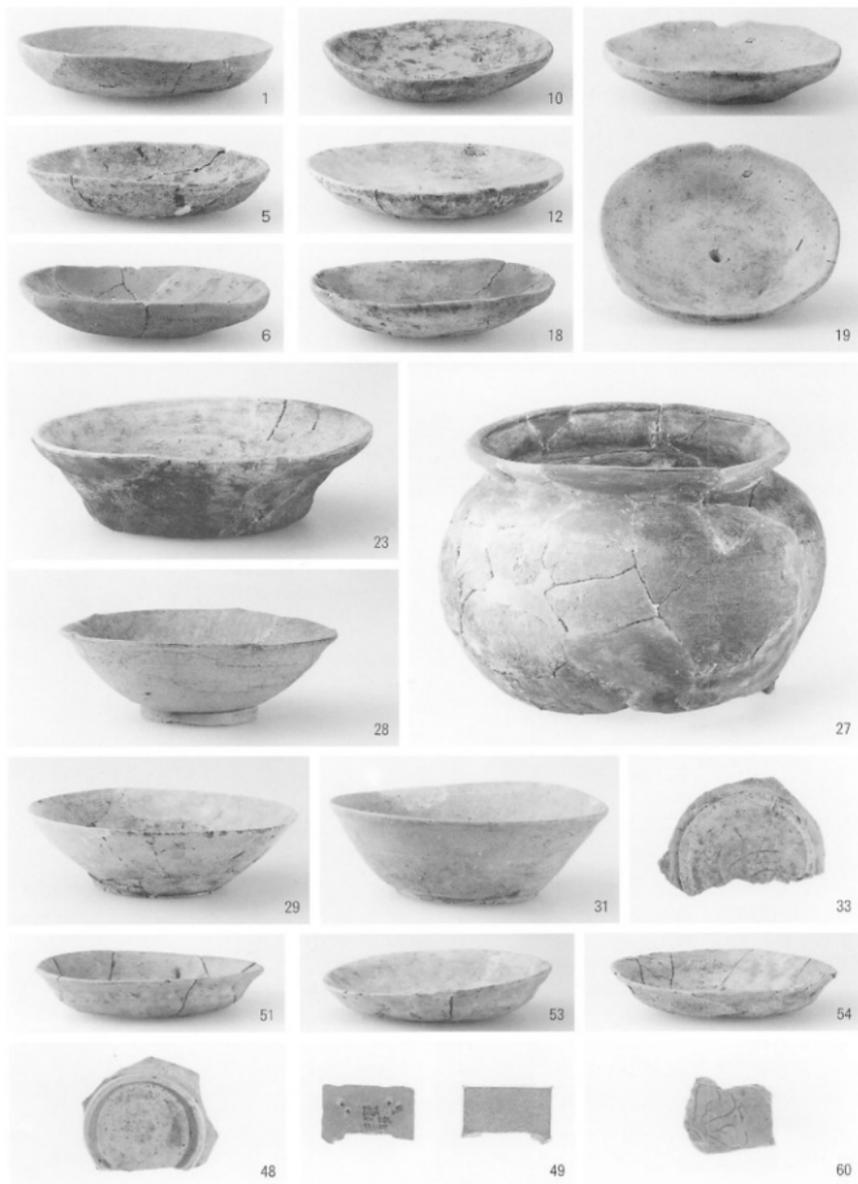






出土遺物





---

史跡 齋宮跡

平成9年度

発掘調査概報

平成11年3月31日

編集発行 齋宮歴史博物館

印刷 光出版印刷株式会社

---